
魔法使いと七番目の弟子

仄夜唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと七番目の弟子

【Nコード】

N3109R

【作者名】

仄夜唄

【あらすじ】

偏屈な若い魔法使いと、頑固な少女のお話。

一登場人物紹介一（前書き）

10月14日現在、第二章までの登場人物を紹介しております。物語の参考までに。ネタバレに関することは、基本的に書いていないはずです。紹介されていない人物については、こっそり言っただけたらお答えいたします。

―登場人物紹介―

主な登場人物。

リリアンヌ

（フルネームは不明）

愛称はリリア。

北の国レイヘルトン出身。銀色の髪に赤い目を持つ。貧乏施設から独りで生きようと思っていた矢先、ルビウスの落としたとんがり帽子を拾い、そのままカインド家所有の別荘へと誘拐（本人曰わく）された。ルビウスの七番弟子となる。自身の魔力、相手の魔力を言葉により眠らせる、また相手の魔力を奪い、自身に取り込む能力を持つ。

性格は、勝ち気で頑固者。年の割に大人っぽい一面もある。食べることが好き。ルビウスとお化けが苦手の様子。

3

ルビウス・カインド

（ルビウスⅡレオ・カインド）

愛称はルビン。元の名はルシウス・ロウ。

カインド家現当主。元はロウ伯爵の嫡男。爵位は公爵。毛先に癖のある黒髪に、漆黒の目を持った珍しい容姿。11の時に両親を亡くし、父方の祖父であり師でもあるシリウスに姉弟揃って育てられた。現国王の甥に当たる人物。一見穏和で優しいそうだが、いつも何を考えているのかは謎。シリウスの妹、マリエダが苦手である。

カインド家の弟子達

第一弟子

フレドリッヒ・カインド

(フレドリッヒエル・ラービン)

愛称はフレッド。金髪のストレートに水晶のような水色の瞳。王都近くに住む財務大臣ジム・ラービン男爵の嫡男。第一弟子にして大変よくできた長兄である。年はルビウスの一つ下。アレックスと同じ年。性格は、非常に真面目。仕事一直線。反対に女性は大の苦手。

第二弟子

オリヴィア・カインド

(オリヴィア・ガアナード)

愛称はヴィア。墨色の長い髪に琥珀色の瞳を持つ。カインド家が代々保護している静寂の森に住む、狼族オリヴィエ・ガアナード一族の長女。王都一の駿足の持ち主。さばり癖がありマーサに頻繁に怒れているが、年下の弟子達の世話を進んでする世話好きな一面がある。休日にごろごろするのが大好き。勉強は大嫌い。

第三弟子

ジョナサン・カインド

(ジョナサン・ハイデリア)

愛称はジョーン。艶やかな栗色の髪と濃い灰色の目を持つ。ウルーエッド近くで農家を営むハイデリア家の次男坊。リアンの兄。空中浮遊の能力を持つ。ジュリアンを引き連れ、近所のガキ大将をし

ていて、大変口が悪い。実家の小川でする水遊びが好き。実兄、エイドリアンとは大変仲が悪い。

第四弟子

エリック・カインド

（エリック・シェネディ）

愛称はリック。柔らかく癖のある赤毛に深緑の瞳をもつ。小人族の末裔。体を自由に変形出来る曲形の能力がある。弟子の中では一番最年少であるが、仕事に対する情熱はフレドリッヒよりも熱い。仕事を任されることは好きだが、身長測定は大嫌い。

第五弟子

ジュリアン・カインド

（ジュリアン・ハイディア）

愛称はリアン。淡い栗色に濃い灰色の瞳を持つ。植話術の能力を持つ。ハイディア家の三男。ジョナサンの弟。何時もジョナサンの後についてまわっている。根は優しい男の子。好きな事は、散歩。嫌いなものは、兄エイドリアン。

第六弟子

レイチエル・カインド

（レイチエル・ディオム。）

愛称はレイル。水神の連水を操る能力を持つ。乳白色の髪に黄金色の瞳をもつ。南の国にあるブレハ湖に住む、人魚族の五人姉妹の末

っ子。寂しがりで人見知り。基本無表情だが、他に笑うか泣くかの表情しか出来ない。好きなことは読書。嫌いことは、人前にでること。

第一章までの登場人物。

レム（レムトン）

黒い瞳に鬣、大きな黒い翼を持つ。魔法師の象徴でもある。
カインド家が保護する静寂の森に住む魔物で、種族はファールスという珍しい生き物。今は絶滅危惧種に指定されているが、走る（飛ぶ）ことが大好きなこの種族は、時折人間達の前に現れる。
色は違うが、アルとティアというファールスもいる。

アレックス（アレックス・ロイ・シエルダ）

緩い巻き毛の焦茶色の髪に、漆黒の瞳。爵位は侯爵。ルビウスの弟。

マーサ小母さん（マリンサ・ジドル）

蜜柑色の髪と瞳を持つ。大柄な体格。
カインド家所有の別荘の家政婦。ロベルトの二番目の娘。弟子達を我が子のように気をかけている。

ローベル爺さん（ロベルト・ジドル）

少ない白髪頭に淡い蜜柑色の瞳を持つ。マリンサの父。森と別荘の管理を任されている。

マリエダ・コウリース

体は少女のままだが、体は腐敗が進み眼球が無い姿。ルビウスの祖父、シリウスの妹。

風蘭

神隠しの神。小さな子供は悪さをすれば、神隠しの風蘭に連れられて二度と家に戻って来れないと、親に言い聞かされて育つ程有名な神様。リリアンヌと契約した神様でもある。ルビウスと仲が悪い。世界の東端にある国出身のようで、珍しい服装をしている。

第二章からの登場人物

爺様（シリウスⅡジウ・カインド）

少し癖のある黒髪と紫の瞳を持つ。ルビウスの祖父と同時に彼の師でもあった。元老の一人で、現役魔法使いの中では最年長。王に並ぶ権限を持つほどの人物。

ジョルジオ（ジョルジオ・ターナー）

向日葵色の髪に藍色の瞳を持つ。カインド本邸の執事長。

キャサリン

新緑の目と金髪の髪を持つ、背の高い女性。

カインド本邸に住み込み、働いている優秀な料理人だが、怒るとすぐに手が出る困った所がある。

レミとソラ

深紅の色の髪に金色の瞳を持つ双子。カインド本邸の侍女。

第37代国王陛下

黄金色の髪に立派な顎髭を持つ。

頑固者で傲慢だと言われるどうしようもない国王様。末弟のセドウ

イグ殿下とルビウスを大層可愛がっている。

リカ・ベクトル

董色の髪に空色の瞳を持つ。幹部理事を務める青年。人の良さそうな笑顔をしているが、ルビウス、宰相には嫌われている。何やらマリエダと繋がっている様子。

ルノ・ルーベント

空色の少し長い髪と灰色の瞳を持つ。完璧に整った顔つきに、銀色の縁をした眼鏡をかけると冷たい印象を受ける。リヴェンデルで宰相を務める青年。ルビウスとは幼なじみ。

シャロン伯母上

(シャロン・カインド)

ルビウスの父の姉に当たる人物。一度結婚してカインド家を出たが、未亡人となったために国王と再婚。物静かな女性。ルビウスの従兄弟チャーリーの母。

クロムウエル・ロウ侯爵

癖付いた黒髪に蒼い瞳を持つ。

飾り名は不明。ルビウスの父。ガルディ病という難病を生まれながらにして持つ。ウル・エッド戦にて戦死。物腰柔らかな男性だった。

メアリー・ロウ

飾り名は不明。ルビウスの母。藍色の髪に漆黒の瞳を持つ。クロムウエルと共にウル・エッド戦にて戦死。生前は、風蘭さえ頭があらないほど気が強くて有名だった。

ローズマリー

リリアンヌの実母。西の国出身。銀色の髪に真っ赤な瞳を持つ古代

魔女。リリアンヌが生まれてすぐに死亡。

リド

（アーサーⅡリド・シエルダ）

爵位は公爵。少し癖付いた黄金色の髪と鳶色の瞳を持つ。背は割と低め。母メアリーの弟。ルビウスの叔父にあたる。

何事も機械的にこなす、機械人間。

マイク

（マイケルⅡアン・ローリング）

爵位は公爵。鼠色の髪に金色の瞳を持つ。ルビウスの義兄。先代の公爵から贈られた自身の飾り名が、大層嫌い。

セドウィグ殿下

（セドリックⅡファム・リヴェンデル）

黒髪に深紅の瞳。現国王の腹違いの末弟。古代魔女と駆け落ちしたが、現国王の策略によって捕まり、現在はどこかに幽閉されているとか。少し変わり者として有名。

エイドリアン・ハイディリア

ジョナサンとジュリアンの長兄。

第一章 冬過ぎれば春に

あの時 から、ずっと忘れられない人がいる。

昔、町中で会った少しばかり気が強くて、勝ち気な小さなお嬢さん。独りで強く生きようと、誰の手も求めずに真っ直ぐ前だけを見つめる彼女は、とても美しかった。

だから、長い間探し求めて。

見つけることが出来たなら、遠くからそっと、見守るだけのつもりだった。

けれど。

ずっとずっと、あの子がいる場所は灰色で。寒空の中、彼女に寄り添って優しく声をかける人は居なかった。

傍にすることが出来たなら、悲しい辛い思いなどさせないと誓うのに。今すぐ抱きしめてあげれるのに。

手元に置いておきたいと願って、手を伸ばしても届かなくて。

神はどうして、私の邪魔をするのか。

私の邪魔をする者、彼女を傷つける者、例えどんなものでも全て消し去ってやる。

だから、私の愛しい人。

どうか側に。

1. 孤独な紅い目の少女

ある冬の始め、煉瓦造りの冷たい街はすっかり灰色の雪雲に覆われ、空からはちらほらと薄汚い雪が舞い始めていた。

街は、これから更に寒くなる前に備え、買い置きをする綺麗な服を着込んだ親子ずれや、使いの者で溢れ、久しぶりの活気を取り戻している。そんな街もいつの間にかやら辺りはすっかり夕暮れ時となり、足早に帰る者が増え、店先や家から暖かいが漏れる中、小汚い身なりをした1人の少女が、そんな華やかな街を歩いていた。

少女は、道の隅を歩きながら、出来るだけ人に顔を見られないように下を向いて人とすれ違う。ボロボロの薄い布地で作られた黒のワンピースは、冬に着るにしては不似合いで、泥で汚れた手足を隠せてはいない。びっくりするような汚さにも関わず、すれ違う人は少女に目もくれずに楽しそうに去って行く。銀色の髪はボサボサで、小さな裸足の指は赤く腫れ上がり、爪は割れ、見るからに痛々しい。

しかし、誰一人としてそんな少女に声をかける者はいなかった。

行く所の当てもないであろう少女は、暗い路地の角に座り込むと、ぐっと膝を抱えてその上に顎を乗せ、すっかり夜に包まれた街並みを眺めた。

「そんなところでどうしたの？」

ふと、上から降ってきた声に反応して顔を上げれば、そこには金髪に金色の目をした、少女と同じ年ぐらいの男の子が目の前に立って

いた。

男の子は、暖かそうな白い服に揃いのベレー帽をかぶり、まるで天使のようだった。

何も応えない少女を怒るでもなく、男の子はそつとしゃがんで少女と目をあわせた。

「お母さん、お父さんとはぐれたの？」

少女は声を出さずに首をふるふると振ると、ふいと視線を男の子から外し、街並みをぼんやりと見つめた。

愛想のない少女を普通の人間が見れば、自然と離れていくものだが、男の子は、じつとその場から動かなかった。

「僕は、ジェイド・ウォルター。年は8つ。今日は、母上と買い物に来たんだ。ねえ、もしどこにも行くところがないなら、家に来ない？」

そう言って男の子は、優しく少女の手を取った。しかし――

パシン。

その手は、乾いた音と共に少女によって振り払われた。

びっくりした金色の瞳で、少女を見つめる男の子を真っ赤な薔薇のような瞳で少女は、きつと睨みつけた。

「ジェイド！」

はっとして振り返れば、男の子と同じ髪、同じ瞳を持った優しそうな女性が、付き添いの者を連れてこちらにやってくる場所だった。

相当走って来たのだろう、二人とも息が上がっていた。

「どこに行っていたの？もう、この子は。心配かけて！あれほど、一人で歩き回ったらダメだって言ってるのに。随分探したのよ。」

そう言ってぎゅっと抱きしめる母親に寄り添いながら、「ごめんなさい。」と、小さな声で呟いた。

「でも、女の子がっ。僕と同じぐらいの子が一人で…。」

振り返れば、すでに少女の姿はなかった。

「女の子？一人でいたの？でも、いないわね。」

「でも、薄着で取っても、寒そうだったから。」

「多分、孤児院から抜け出して来た子じゃないかしら。最近では、多いらしいから。」

優しく頭を撫でる母親を見上げれば、母親はにっこりと微笑み、歩き出した。

「さあ、お買い物も済んだし、お家に帰って、ご飯にしましょう。」
「うん。」

母親に手を繋がれ、名残惜しそうに少女が居た場所をしばらく見つめていたが、やがて、母親と共に人混みへと消えて行った。

その姿を近くの山積みになった木箱の陰から見つめていた少女は、路地裏に足向け、表通りを振り返った。

「変なヤツ。」

ポツリとこぼした少女の言葉は、表通りの雑音にかき消された。

自分には縁遠い、幸せそうな人々。

少女は逃げるように、暗い路地裏へと入り込んだ。

2. 落とし物（前書き）

やっと、物語が動き出せました。

2. 落とし物

路地を進む程人の気配は無く、寒さは一層増してくる。

「やっぱり、少しぐらい金目になるもん、貰って来るんだったなあ。うう、さーぶい。」

手のひらで、向き出しの両腕をさする。

今年の冬は特に寒い。とにかく、何か着るものを探さないとこのままでは凍死してしまう。

焦って辺りを見渡すが、当然都合良くそんな物が捨ててある訳もなく、ため息をついて更に奥に歩く。

すると、いきなり風に乗って、空からふんわりと黒い帽子が降ってきた。

目の前に落ちた帽子をひよいと拾って、持ち主を探す誰もいない。よくよく見て見ると、帽子の淵は広く、深さはだいぶある。

恐らく、王宮に仕える魔法使い達がかぶっているとんがり帽子だろう。王宮の魔法使いや魔女達は皆、黒いとんがり帽子に同じく黒のコートにブーツで、全身真っ黒だという。その地位は、貴族と並び、とんでもないくらい、金持ちだと噂で聞いたことがある。

もう一度辺りを見渡し、持ち主がない事を確認すると、初めて見る憧れの帽子に少女は、夢中になってしまった。

ぶかぶかの帽子を頭に乗せてはしゃいでいると、後ろからふいに声をかけられた。

パツと振り返るとそこには、今まさに考えていたところだった、高貴な魔法使いが、目の前に立っていた。

しばしの間、少女はそのままの体制で魔法使いを見つめると、失礼に値するとわかっていながら、自然とじつと相手を観察していた。まだ、二十歳にもなっていないさそうな若い青年で、噂通りすっぱりと黒いコートに包まれ、かろうじて見える靴も真っ黒だ。全身じろじろと眺めていた少女は、青年の顔を改めて見つめた。黒い短髪に白い肌、漆黒の瞳。

「まさか、髪や目まで黒だなんて…。」

「……、はっ？」

ぼそりと呟いた少女の言葉が、聞き取れなかったのだろう。返って来た間抜けな声を無視して、少女は考え込んでいた。

魔法使いが黒いトンがり帽子をかぶるのは、大抵髪や目が黒ではないからだと聞いたことがある。

逆に言えば、髪と目が黒で揃うのは大変珍しい。

魔法使いがどれだけ偉大であるか、小さい頃にどんなに貧乏な家の子でも聞かされるのだ。

その話を孤児院の年老いた院長に聞かされるたび、一度でいい、2つの黒を持った漆黒の魔法師と呼ばれる人に会ってみたいと何度思ったことか。

そんな夢見た頃をいつの間にか厳しい現実の中で忘れ、世界に絶望しかけた今、こんな場所で会うなどと誰が想像していただろう。

まだ夢心地な少女を現実に戻したのは、他でもない、目の前の若い魔法使いだった。

「あの、その帽子…。」

はっと若い魔法使いをみれば、少し困ったような顔で少女を見つめていた。

少女は急いで頭からとんがり帽子を脱ぐと、帽子を地面に置き、冷たい煉瓦造りの地面にひれ伏した。

「も、申し訳ありません。高貴な魔法使い様の帽子と知りながら、私のような貧民が触ってしまい、大変失礼をいたしました。勿論、覚悟はできております。」

一気に少女は、しゃべり終えると、手を前につきいて、額を紙面に擦り付けたまま、自分の体が小刻みに震えているのがわかった。

コツコツと、魔法使いがこちらに来る靴の音だけが、路地裏に響く。元々、魔法使いと少女の距離は離れていなかった為、あつという間に魔法使いは少女の前にたどり着き、帽子をひょいと拾い上ると、片膝を地面について少女の左肩に手をかけた。

ビクッと少女が震える。

「そんなに恐がらないで。何もしないから…。顔を上げてくれないか？」

その言葉に、おずおずと顔をあげると、漆黒の瞳と目が合った。すると、魔法使いの瞳が俄かに揺れた。

「帽子を拾ってくれて、ありがとう。いきなり初対面で失礼だけど、君はもしかして、西の国出身かい？」

「いいえ。」

少女を見れば、誰もがそう真っ先に思う事だろう。

銀色の髪に赤い目は、西にある古代魔女の国、アデイマデューサの象徴。どこに行っても厄介者とされるのは、コレのせいだ。あの忌々しい国出身の証拠など無くとも、誰も信じてはくれない。

少女は、悔しさでぎゅっと下唇を噛んだ。

顎にふと冷たい手が添えられたかと思うと、細く綺麗な指で噛んでいた下唇を外された。視線を合わせれば、魔法使いは少し寂しそうに笑って少女を見た。

「悪い事を聞いたね、すまない。それで…。」

魔法使いが言葉を続けようとした時、空から一羽のミミズクが舞い降りてきて、二人の直ぐ脇の壁に留まった。

こんな街中で、野生のミミズクを見たのは、初めてだった少女は首を傾げてミミズクを見た。

魔法使いは、立ち上がり厳しい顔つきで、ミミズクと向き合っている。

「こんな所にいらっしゃったのですか、捜すのに一苦労致しました。」

ミミズクが、喋った！

自分の名前さえ書けなくとも、動物は人語を喋らないことぐらい少

女でも知っている。

それでも先程喋ったのは、紛れもなく目の前のミミズクで、あまりの有り得なさに、少女は空いた口が塞がらなかった。

「アレックス、こんな場所まで追って来なくとも、ちゃんと明朝の円卓会議には戻るさ。」

「わかっております。しかし、あの糞頑固爺、おっと失礼、37代現国王様が今すぐ呼び戻せとの仰せで…。城にいる多数の大臣達が、現国王を抑えて居りますが、もう限界に近いのです。ですので、今すぐに、城にお戻り下さい。兄上。」

ミミズクが最後に言った言葉に少女は、驚愕した。

「ミミズクが兄弟だなんてっ！」

その声は、会話をしていた一人と一羽に丸聞こえで、揃って少女を見たのは言うまでもない。

「兄上。そのゴミの塊のような、失礼な小娘も連れて行くと、仰るではありませんな？」

「ゴミの塊って何よ。自分の方が、失礼きわまらないじゃない。」

ぶつぶつ小声で文句を呟いていた少女を、ミミズクは一睨みで黙らすと、兄と呼んだ魔法使いを見た。

「アレックス、口が悪いぞ。姉上が居らっしゃたら、吹っ飛んでいるところだぞ。まったく…。陛下に直ぐに城に戻ると伝えろ。それまで大臣に怪我がないように、お前が傍で陛下の相手をするんだ。それから、この子は別荘に連れて行く、マーサとあいつらに伝えろ。」

異論は聞かん、わかったら直ぐに行け。」

一瞬とてつもなく嫌そうな顔を魔法使いに向けると、「仰せのままに。」と頭を下げて飛び立って行った。

ミミズクが飛び立ったのを確認すると、魔法使いは少女に向き直り、ふわっと自分が着ているマントを掛けると、そのまま少女を抱き上げ路地奥へと進んで行く。

「えっ、あのっ。」

「今聞いていたと思うけど、早急に、城に帰らなければならなくなつてね。説明は後日って事で。」

「後日って、あの！降ろして下さい。」

「そうそう、アレックス、ああ見えて元々根は良い奴なんだよ。少し変に毒舌だけど。君も意外に言う子なんだね。びっくりしたよ。まあ、気が強い子は嫌いじゃ無いけどね。」

「降ろして下さい！」

ふふっと笑う魔法使いは、全く少女を相手にせず、スタスタと歩く。逃げようにも幼い少女にはすり抜けられるはずもなかった。

やがて、路地の突き当たりに、奇妙な黒い生き物が、居ることに気がついた。

よくよく見て見れば馬だが、肩甲骨あたりに立派な黒い翼が、2つ

生えている。

魔法使いは、馬と呼べるのかわからない生き物の前で立ち止まると、にっこりと微笑んだ。

「やあ、レム。良い子で待っていてくれたんだね。ありがとう。この子も一緒に乗るけど、いいだろう？」

レムと呼ばれた黒く、凜々しい生き物は、チラッと少女を見て目を細めると、さあ、早く乗れと言わんばかりに、背中を差し出した。

「全く、レムは本当に走るのが好きだね。」

魔法使いは、ふふと笑い、少女を軽々と先に乗せ、自分ひよいとまたがった。レムは、普通の馬と比べると少しだけ大きく、引き締まった体を揺らした。

「しっかりと掴まってるんだよ。レム、急ぎで頼む。さあ、行こう！」

魔法使いのかけ声と共に、レムは一気に走り出し、3足目では既に足は宙に浮いていた。そして軽やかに空へと駆け上がったかと思うと、空を走るかのように優雅に体制を立て直した。強い風が、少女の短い銀髪を吹き上げる。

少女は驚きを隠せず、足下を見やると、既に小さくなった灰色の街並みの灯りが転々と見える。

レムは、ぐらりと街並みの上空を一周、大きな翼で力強く羽ばたいて、困惑する少女と若い魔法使いを乗せ、東の方へとスピードを上げて駆け出した。

3. 魔法使いの別荘（前書き）

やっと名前が出せました。登場人物が一気に増えるので、ややこしいかもしれませんが。弟子が三人登場です。後の三人はまた今度。ちなみに幽霊って、皆さん信じます？

3. 魔法使いの別荘

一体、何処に連れて行かれるのか。

黒い翼の生えた馬の上で、一人、少女は考えていた。

走っている間も、レムの背中の上は思っていたよりも快適で、魔法使いが掛けてくれたマントは暖かく、申し分ないが。

口の悪い喋るミミズクに、翼の生えた馬、それに憧れていた魔法使いは、何だか変わった人だし。まあ、喋るミミズクが兄弟だったら、普通には育たなさそうだが。厄介な人物に関わってしまった。

少女は考えるのをやめると、丈夫な手綱を握り、ずっと前を向いたままの魔法使いの顔を見上げた。視線に気がついたのだろう、魔法使いは少女を見ると、穏やかに微笑んだ。

「あの、寒くないですか？これ、お返しします。」

少女は先程からずっと借りているマントを脱ごうと体を動かした。

「大丈夫だよ。ありがとう。それに、君が暖かいから十分。」

ぎゅっと抱きしめられると、何故だか頬が火照る。やっと会話が成り立ったと思えば、こんな事の繰り返しで、少女は下を向いた。すると、くすつと上から魔法使いが笑う声が降ってきた。ますます、ムスツとする少女を魔法使いはお構いなしで、再び前を見つめた。しばし、風が横切る音と、レムが時折羽ばたく翼の音だけが響く。再び会話を始めたのは魔法使いで、さっきまでうるさく鳴っていた

風の音も聞こえ無くなっていた。

「もうすぐで着くよ。」

その言葉の間際、分厚い灰色の雲が薄く霧状になり、それを抜けると視界に蒼天の綺麗な空が広がっていた。先程まで雲の中に居ただと認識すると、少女は、ぐっと姿勢を伸ばしてあたりをみた。

ほんの少ししか、レムの上に乗って居たはずなのにも関わらず、今居る場所は、少女が居た場所とは、全く異なる場所だった。

少女が居た北の国レイヘルトンとは、一年の半分以上が冬で雪に覆われ、春と秋はあっても無いに等しく、夏は他の国に比べ、過ごしやすい。しかし、険しい山々に囲まれている為、太陽の日差しは、山に遮られて殆ど届かず、作物は育たないという難点があった。その代わり、鉄工や物作りが盛んで、レイヘルトンの物は丈夫で長持ちがする、と他の国では有名である。

そんな街で育った少女だから、目の前にある風景は、今まで見たことがない。

家々の間にある春先の草木は、鮮やかな緑色で、花は綺麗な色を見事に咲かせて町並みを華やかに彩っている。ちょうど小さな町を越えたあたりで、東から昇って来た朝日の日差しが、まだ静かな町に降り注いだ。

美しい。

そんな一言が似合う国だ、と思った。

「ここはリヴェンデル。東の国。近隣の国の中で唯一、四季折々の季節がある。そして、王都がある唯一の所でもあるよ。今世の中にいる魔法使いや魔女達は、この国の出身者が大半だから、リヴェンデルは魔法大国と呼ばれているらしいね。ああ、今越えた町は、ポーターリサ。家から一番近い町だよ。さて、森が見えて来た。あれを越えれば、僕の家だ。」

町外れに差し掛かると、目の前には大きな森林が見え、レムは一気にその上を走り、歩幅を合わせた。やがて、森林の終わりにさしかかった頃、魔法使いは手綱を締めて短く持つと、姿勢を前に倒してきた。その為、自然と少女は、レムの黒い鬘たてがみにしがみつく形になる。出来るだけ姿勢を下げた魔法使いは、レムに駆け足をさせた。黒い大きな翼を折り畳むと、森の切れ目をまるで、見えない柵を飛び越えるかのように越え、レムを減速させると、森の終わりの平らな、草が多い茂った地面へと向かわせた。

見えない柵を飛び越えた際、波紋が広がるように空気が揺れ、それをレムがくぐったかのように見えたのは、少女だけだろうか。

ゆっくりと地面が近くなって来るのを、まだ鬘にしがみついたままの少女は、ぼんやりと見つめていた。

やがて、穏やかな衝撃で現実に取り戻され、ゆっくりと姿勢を正した。

右側を向けば、鬱蒼うつそうと茂った森が目に入った。何年も、人が入った形跡がなさそうな森だ。そんな木々の隙間から吹いて来た、柔らかな春風が頬を撫で、誘われるがまま左を向けば、広い草原が目飛び込んで来た。踝程くるぶししかない丈の短い雑草が覆い茂り、春らしい色とりどりの花が咲き誇っている。お世辞にも綺麗とは言い難いその庭は、草花が春風に揺られて、何故か懐かしい雰囲気醸し出していた。

そんな草原から顔を正面に向けると、今度は後ろ右半分を森に囲まれた、立派な屋敷が目映る。どっしりと構えた煉瓦造りのチョコレート色の屋敷は、とても別荘とは思え無いほどの造りで、真っ黒な屋根は鋭い急斜面を描いている。屋敷を囲むクリーム色の塀が、チョコレートの屋敷と対照的で、塀がやけに目立ってみえる。そこから細く、くねくねと伸びている小道を魔法使いはレムに乗ったまま、屋敷に進み出した。

「この別荘はね、僕の爺様にあたるカインド公が直々に、僕に下さった物の一つで、今じゃ僕の家になってるんだ。まあ、夜に此処に訪ねて来た普通の人は、邸が闇に隠れて塀しか見えないから、気味悪がってめったに近付かないけどね。近所の子供達の間では、お化け屋敷って呼ばれてるらしいし。」

「お化け！？ ゆっ幽霊なんかは、出ないですよね。」

「おや、信じないの？ どうか、もしかしたらいるかも知れないよ。僕は実際、お会いした事無いけれど。」

少し意地悪い笑顔を向けて来た魔法使いに、引きつった笑顔を返すと、話題を変えた。

「その話はもういいです。ところで、カインド公ってもしかして……」

「おや、残念。そうだよ、カインド公爵は僕の爺様、シリウス・カインドって名前は、登録されている現役魔法使いの名前の中では最年長で、王と並ぶ権限を持つとして有名だろうね。今じゃ、僕に仕事を押し付けて、ぷらぷらと半分隠居生活してる、只の爺さんだけだ。」

少女も名前だけは、聞いた事がある。そんな人が、この人の祖父な
どと考えると、頭痛がしてきて、目頭を自然と押さえた。

そんな会話をしているうちに、クリーム色の塀に近付いていた。

レムのすぐ頭下ぐらいしかない低い塀の間を通ると、屋敷からバタ
バタと少女より年下の子供が一人、慌てて飛び出してきた。

「先生っ！！会議をほったらかして、何処に行ってらっしゃったの
ですかっ。ルーベント宰相殿が、かんかで屋敷に怒鳴り込んでい
らっしゃって大変だったんですから！」

レムの近くにやってきた少年は、幼い声で魔法使いをギャーギャー
と怒鳴ると、きつ、と少女を睨みつけた。

「お前は何者だ！レムの上に先生と同席するなんて、失礼だと思わ
ないのか！」

「えっと…」

「エリック、わかったからそうギャーギャー喚かないでくれ、耳に
響く。それに、初対面でその言い方は無いだろう、失礼だ。」

「すみません…。」

少年に訳も分からず怒られた少女が、何か返そうと迷っていたとき、
魔法使いが遮って、少年をたしなめた。

少年は、素直に謝ると年相応の表情を見せた。よく見れば、柔らか

そうな少し癖のついた赤毛と深緑の瞳を持っており、丸みを帯びた頬から見るに、五歳ぐらいだろう。襟のない少し大きめな長袖の白いカッターシャツに、ダボダボの土色の半ズボンを履いている。ぱっと見ただけでは、女の子と間違えそうだ。

「わかればよろしい。」

魔法使いはレムから降り、少女を抱き上げると、レムの手綱を少年に渡してそう言った。

「マーサ小母さんとフレッド兄さんは、中に居ます。後、先生のデスクの上にある書類は、人事部からです。至急お願いしますとの事です。」

「ああ、わかった。人事部の方には、ジョナサンにでも頼むさ。エリック、レムを森に帰したら、直ぐにジュリアンと一緒に国土省に飛べ。王都近くで、河川が溢れて洪水があったらしい。一体、あいつ等は何をやってるんだ。」

「オリヴィア姉さんには、なんと伝えましょう？」

「どうせ、屋敷に籠もってさぼってるんだろう。私から言うておく。」

「分かりました。」

年下とは思えないきはきとした口調で答え、頭をぺこりと下げてレムを連れて少年は森へと去っていった。

「今のは、四番弟子のエリック。仕事熱心なのは良いけれど、ああ口うるさいとたまらないよ。」

屋敷の玄関に向かう途中、そう説明してくれた魔法使いは、やれやれと肩をすくめた。

やがて玄関に着く、と上等な漆が塗^{うるし}つてある片方の扉を開けて、中に入って行った。少女も後続く。

中に入れば、吹き抜けの明るい玄関に、2人の男女が並び、魔法使いを見ると頭を下げた。

「お帰りなさいませ。」

「ただいま。」

顔を上げた2人の内、男の方は魔法使いと同年ぐらいだろうか、長いストレートの金髪を緑の紐で束ね、水晶のようなきれいな水色の瞳をした青年だった。ぴしりとした正装をしている為、ほっそりとした体系が強調されている。もう一人は、少し大柄な蜜柑色の髪と目をした、中年の小母さんだった。フワツと内側にカールした髪が、大柄な体系を更に強調させているように見える。

「先生、王都にいらっしゃるアレックス・シエルダ候から、山のような催促で、部屋に書類を置く場所がありません。それに、先生が昨夜の会議をすっぱかされた事で、今朝の円卓会議が、二時間早まったとのことです。ですので、早くお支度をなさらなければ、円卓会議に間に合いません。」

「ルビウス様、ヴィアがまた雲隠れの魔法を勝手に使って、かれこれ7日も経つのです！お忙しいのはわかりますが、先生からしつかり怒って頂けなければ、あの子はずっと学校にも行かないんですよ！進路を決めなければいけない、大事な時期だというのに。ああ、それから、ジョナサンとジュリアン。あの兄弟がまた、近所の子を泣かしたとかで、学校から…」

「わかった、わかった！マーサ、後で帰って来てからゆっくり聞きましょう。とにかく、彼女を…リリアンヌを頼むよ。」

ペラペラと喋り続けていた小母さんをうんざりした様子で遮ると、2人から見えなかったであろう、後ろから少女を前に優しく引っ張り出した。すると、喋り続けていた小母さんは、今度は目を見開き、悲鳴をあげながら、少女に突進して来た。

「何てこと！ルビウス様、またあなた様って人は、こんな小さな子を勝手に誘拐して来て！これで何人目だと思ってらっしゃるのですかっ！」

小母さんにぎゅうっと抱きしめられた少女は、私は誘拐されたのか！という風にびっくりと目を見開いた。

「ちょっと待った！僕は、誘拐なんてしたつもりないよ！ねえ、フレドリッヒ。」

慌てて、弁解する魔法使いは、啞然とする金髪の青年に助けを求めた。

「いや、充分誘拐と言えると思いますよ、先生。ところで、円卓会議はどうなさるのですか？」

「フレドリツヒ、お前って奴は、拾ってやった恩も忘れる、薄情な奴だったのか。それに、真面目なのは良いことだが、真面目過ぎるのはどうかと思うぞ。」

がっかりして肩を落とす魔法使いに「お褒め頂き、ありがとうございます。います。」と返すと、まだ小母さんの腕の中にいる、少女に声を掛けた。

「はじめまして、小さなお嬢さん。私、第一弟子のフレドリツヒ・カインド、元の名をフレドリツヒ・ラービンと申します。今はあまり時間が無いので、この辺で。さあ、先生！」

簡潔に少女に挨拶をしたかと思うと、まだぐずぐずとその場に居た魔法使いをせき立てて、その場を離れようとした。

「マーサ！夜には戻るから、リリアンヌの事頼んだよ！」

フレドリツヒに木の階段を急かされてあがっている際に、振り向いた魔法使いの顔は、とても見えない何かを、心配しているようだった。

「フレドリツヒ、そんなに急かさなくても、陛下にはちょっと待って頂ければ良いことじゃないか。」

上の階に上がっていった魔法使いのぶつぶつ言う声が、まだ聞こえる。

「あつ、私の名前なんで…。」

自分から名乗っていないのに、何故知っていたのか、不思議に思っている、上から声をかけられた。

「リリアンヌと言うんだね。長いからリリアと呼ぶよ。ああ、名前？ルビウス様は魔法使いだから、なんでもお見通しだ。ちなみにあたしの名前は、マリンサ・ジドル。マーサ小母さんってみんなから呼ばれてるから、そう呼んで。さて、リリアあんた凄い汚れた。食事の前に風呂だね。おいで。」

マーサ小母さんは、リリアンヌの手を引きながら、奥の扉を開け入っていった。そこは、広い客間で、マーサ小母さんは向かいの扉を開けて、客間を通り過ぎた。扉をぐぐれば、天窓と側面にある窓から降り注ぐ朝日で、リリアンヌは目を細めた。

そこは、変わった造りの部屋だった。

左側には、大きな丸いテーブルに、背もたれがない椅子がバラバラに置いてあり、片方は背の高い柵、反対側は壁といった場所で、恐らくここで食事をとるのだろうとわかる。背の高い柵から下を見れば、通路を一つ挟んで、一番下にある厨房が一望出来る。高い天井は硝子張りで、そこから朝日が降り注ぎ、灯りなど必要なくなるほど明るい。夢中になって眺めていれば、マーサ小母さんは、くすくすと笑いながらリリアンヌに声をかけた。

「珍しい造りだろう？なんでもルビウス様のお爺様、シリウス様が昔、奥様に作って頂いた大好物のオレンジパイを弟子に、厨房で勝手に摘み食いされて、カンカンになったらしくて、それからこんな作りに別荘を改造されたとか。物好きだね、全く。じっくりみたいなら、後で屋敷を見て回ればいいよ。」

マーサ小母さんは、トントンと目の前にあった木の階段を降りて振

り向くと、リリアンヌに降りておいでと手招きした。マーサ小母さんは、トントンと目の前にあった木の階段を降りて振り向くと、リリアンヌに降りておいでと手招きした。下の階に降りれば、右側に上の階と同じ柵があるが、左側は二つの扉が並んでいる。

「奥の扉を開けたら脱衣場と風呂場だよ。一人で風呂は入れるだろう？」

「はい。」

「じゃあ、あたしは着替えを持ってくるから。」

マーサ小母さんが、降りて来た階段をまたあがって行こうとしたとき、奥の扉が独りでに開き、黒髪の少女が1人出てきた。「オリヴィア！そんなところにいたのかい、学校から一週間も授業に出てないって、担任の先生から連絡があったよ。雲隠れの魔法なんかしてて、主席日数が足りなくなって卒業出来なくても、責任持てませんからね！」

「卒業は大丈夫よ、ちゃんと今まで、レポートなんかで点数 گرفتなもの。ねえ、それよりマーサ小母さん、変身術を教えて欲しいの。先生は仕事で忙しいって、全然教えてくれないんだもの。」

「そんな事より、先生の仕事の手伝いをなさいっ！それに、高度の魔法ばかりして。若い頃に、そんな体に負担ばかりかけると、ろくなことはありませんよ！」

「はいはい、分かりました。ねえ、その子もしかして新入り？」

「はい。は、一回。何度言わせれば気が済むの。そうよ、リリアンヌ

と言うの。」

言い合っていた黒髪の少女が、リリアンヌに顔を向けた。

「ふーん。変わった子ね。」

てくてくと、此方にやって来て、リリアンヌの顔を覗き込んだ。琥珀色のくりつとした瞳と、薔薇の瞳が絡み合った。

「珍しい目……。気に入ったわ！私、ルビウス・カインドが師、第二弟子のオリヴィア・カインドよ。元の名前は、オリヴィア・ガアナードって言うの、よろしくね。」

「リリアンヌと言います。よろしくお願いします。」

目を輝かせて、右手を差し出してきた少女の手をとり、握手を交わした。

「マーサ小母さん、先生が帰って来るまで、私がリリアの面倒を見るわ。それなら文句ないでしょう？」

1人はしゃいでいる、オリヴィアの申し出を渋々承諾したマーサ小母さんは、後は頼んだとオリヴィアに念を推すと、朝食の準備をしに厨房へ降りて行った。

「これで暫く、先生の仕事の手伝いをしなくて済むわ。」

そんな嬉しそうに喋るオリヴィアをリリアンヌは、こっそりと観察していた。

黒髪だと思った髪は青みかかった墨色で、腰まである長いストレートは、前髪と一緒にすっきりと右側に横くくりをしている。長身によく似合う胸元が開いた、水色の薄いシャツにピッタリとした、黒のズボンをはいている。

リリアンヌの視線に気づいたのか、オリヴィアがしゃがんでリリアンヌと目を合わせてきた。

「うふふ、リリアは私の救世主だわ。あつ、私のことはヴィア姉さんって呼んで頂戴。それよりお風呂ね、私が洗ってあげる。」

「いえ、結構ですっ。」

「遠慮しないで。」

暫くの間、ずるずると風呂場に連れて行かれたリリアンヌの叫び声が、屋敷中の外まで響いていた。

4. 小さな願ぎ（前書き）

一部暴言など入っておりますので、気分を害される方は、お気を付け下さい。

4. 小さな騒ぎ

オリヴィアに強引に洗われ、更には衣装部屋のような部屋に連れて行かれて、着せ替え人形にされたリリアンヌは、グツタリとして大きな卵型の鏡の前に腰掛けていた。

「その服、私の小さい頃に来てたお古だけど、とっても似合うわ。やっぱり妹はいいわねえ。レイルは嫌がって、ちつとも相手にしてくれないから。」

オリヴィアは、風呂に入って綺麗になった銀色の髪を櫛で梳きながら、鏡に映ったりリリアンヌを見つめた。

「ほんと、目元なんか、セドウィグ殿下譲りね。笑ったらそっくり何じゃないかしら。先生が会議をほっぽりだして、探し回った気持ちができるわ。」

「セドウィグ殿下？」

「知らないの？まあ、その内先生が話すだろうから、私は余計な事言わないことにするわ。さあ、出来た！お昼を食べに下に行きましょう。」

「あわわわっ。」

仕上げに頭の高い位置で、赤いリボンで髪を一つくりにしたオリヴィアは、鏡のリリアンヌに満足そうに頷いた。そしてまたまた強引にリリアンヌの手を引いて、部屋から連れ出した。リリアンヌは

白いブラウスに膝まである淡い若葉色のワンピースと、真新しい土色の靴に戸惑い、危うく躓きかけながら必死について行く。

廊下に出ると、脇からいきなり歩いてきていた人物とぶつかって、リリアンヌはべしやと床に顔面から叩きつけられてしまった。

「きゃー、リリア大丈夫！？ちょっとレイル、びっくりするじゃない。いきなり横から出てこないでよ。」

「ごつごめんなさい。」

ひりひりする鼻をさすりながら、上半身を起こして泣きそうな声で謝っている、人物に振り向いた。

リリアと同じぐらいの年だろうか、ふんわりとした乳白色の短い髪を持ち、前髪は右側に流して横に、花形の可愛らしいピンで留めている。黄金色こがねの目は、涙をいっぱいためて俯いている。

「レイル、私は怒ってるんじゃないの。だから、そんなにすぐ泣かないで。」

困ったなあと思いきやオリヴィアを無視して、リリアンヌはぱっと立ち上がって、ポロポロと檸檬色れもんスカートを握りしめて泣いている女の子の手を取った。

「私、リリアンヌって言うの。あなたの名前は？」

「レイ、チエル：レイチエル・カインド。」

ぐすんぐすんと詰まりながら、やっとのこさ自分の名前を言ったレイチエルに、リリアンヌはにっと笑いかけると手を握った。

「よろしくね。」

「う、うん。」

機嫌良く笑うリリアンヌと、手を繋がれ顔を真っ赤にした、レイチエルを交互に見ていたオリヴィアは、ちよつとムスツとした顔でレイチエルを紹介した。

「なーにい？ 私抜きで仲良くなるなんて、ちよつと妬けるわね。リリア、この子は六番目の弟子のレイチエル・ディオム。レイルって呼ばれてるから、そう呼んであげて。今度こそ昼ご飯だ。」

さつさと独りで降りてしまったオリヴィアを追って、リリアもレイルも2人仲良く笑い合いながら歩き出した。

リリアが連れて来られていた部屋は、レイルに聞けばオリヴィアの部屋だったらしく、あの服の量にびっくりした事を言うとお洒落はオリヴィアの趣味だと苦笑しながら教えてくれた。

そんな話を話している内に、3人がいた3階から、1階の客間を通り、丸いテーブルの場所まで戻って来ていた。テーブルの上には既に料理が並べられていて、2人の少年がご飯を食べていた。

「ちよつとお！ わんぱく兄弟共、ちゃんと自分の席で食べなさいよ！ マーサ小母さんがいないからって、何ずぼらな事してるの。」

「何だ、誰か来たと思ったらヴィア姉さんか。いつつもさぼってる姉さんに言われたく無いね。」

「いいじゃん、こんなに席空いてるんだし。」

各々に好きな事を喋る少年を見れば、少し違いはあれど、直ぐに兄弟だとわかる2人は揃って、不満の顔をオリヴィアに向けた。

「あら、さぼってなんかいないわよ、休憩してるだけよ。ジョーン。席が空いててもきちんと、守るよう先生に言われてたんじゃなかったけ？リアン？」

ジョーンと呼ばれた艶やかな栗毛を持った年上の少年は、嘘つけ、と鼻で笑って淡い灰色の目を、オリヴィアの後ろにいた2人に目を向けた。一方、年下の少年は少し固そうな淡い栗毛の巻き毛に、濃い灰色の瞳を自分の皿に向けて、一心不乱にご飯を食べている。

「また先生変なのを拾って来たな。」

くいつと顎をリアンヌに向け、物珍しそうに眺めた。リアンヌは、その淡い灰色の目に対抗するかのように、じっと目を離さず見つめた。

「あら、女性と初対面でその言い方？失礼きわわりないわね。先生は何してんだか。リアンヌと言うのよ。それに、拾われてきた変なのは、あんたじゃない。」

「俺は、狼族、古代魔女、人魚族の血なんか入ってないから。まっとうな人間です。」

「何？咬み殺されたいのか貴様っ。」

ガラリと雰囲気が変わったオリヴィアを見て、またまた泣きそうなレイチェルを横目にリリアンヌは、オリヴィアの袖をくいくいっと引き、注意をこちらに向けた。

「ご飯にしないのですか？」

「ああ、そうね。ご飯にしましょ。レイル、あなたを怒ってるんじゃないんだから、泣かないで。」

ポロポロと大粒の涙を流しているレイチェルに、溜め息をつきながらそう言葉をかけると、兄弟が占領している柵近くの奥の席を避けるかのように、オリヴィアは手前にあった椅子を寄せ、リリアンヌとレイチェルを席へと促した。

「好きなのを好きなだけ食べていいから。後、生意気な兄貴の方が三番目の弟子、ジョナサン・ハイデリアで、弟の方がジュリアン・ハイデリアよ。そう言えばリアン、あんた先生からリックと一緒に仕事、言いつけられてたんじゃなかった？もう終わったのー？」

やっと食事を始めたオリヴィアは少女2人に言い、リリアンヌに2人の少年の名前を教えた。そして、こんがり焼けた羊の肉をフォークに突き刺して、ジュリアンに問う。

対するジュリアンは、食事を終えて既に席を立った兄を追おうとしていた所で、オリヴィアに話掛けられて迷惑そうに顔をしかめた。

「とっくに終わってるよ。後は報告書だけだったから、リックがやつといってくれるって言ったから帰って来たんだよ。」

「あら、そう。ご苦労さん。ねえねえ、それよりこの前の実技試験、どうだったの？」

「別にどうって事ない。」

「花びらの舞をしたんでしょう？あれ、確かにインパクトは強いけど、今回は防御魔法が課題だったんだから、得点に繋がらないだろうってフレッド兄さん言ってたわよ。」

「…………。」

「あれ…？もしかして、その間は、ダメだったとか？まあ、帰ってきた先生もかなり険しい顔してたから、もしかしてとは思ったけど。まあ、あれだ。今回はちょっと披露する魔法の選択ミスって事で。次は大丈夫よ。」

自分で話を振っておきながら、気まずい雰囲気になってきた事に焦りだしたオリヴィアを横で見ていたリリアンヌだったが、固まったままだったジュリアンの肩が震えているのに気がつき、視線をジュリアンに向けた。

「わかってたなら、なんでいちいち言うんだよっ。そうだよ、実技魔法での課題だった魔法と関係ないのを披露したから、先生からも怒られて…。でも、防御魔法が課題だったなんて、知らなかったんだ。」

「あーっと、多分それ私かな？リリアンに来てた手紙、渡そうと思ってたらどっか行っちゃって。その時、魔法禁止期間だったし、面倒

くさかったから適当にでっち上げて渡しちゃった。」

「何してんだよっ！」

「ごめん。」

「ごめんって謝って済むと思ってるのかっ!？」

「まあまあ、私から先生に言っとくから。」

灰色の目に怒りを宿したジュリアンを落ち着けと言うように、人参が刺さったままのフォークで、制しているオリヴィアを反対側にいるレイチェルが、非難がましく見つめている。

すると突然、オリヴィアとリリアンヌの頭の間を抜けて、背後で硝子と硝子がぶつかった激しい物音がしたと思うと、窓ガスが派手な音を立てて崩れ落ちた。何が起こったのかと、オリヴィアを見やれば、平然と綺麗な紫色の硝子のコップで飲み物を飲んでいる。

「そんな物があたると思ってたの？ふん、笑わせないで。」

睨み合うオリヴィアとジュリアンを交互に見ていたリリアンヌは、ジュリアンの手元に先程まであった、深い海底色をした硝子のコップが無いことに気がついた。

「仮にも、姉弟子である私に物を投げつけるなんて、覚悟は出来るんでしょね。」

「それはこっちの台詞だ。いいさ、丁度暇だったんだ。ヴィア姉さん、相手してやるよ。」

「相手をして下さいの間違いじゃないの？」

そう言って立ち上がったオリヴィアの体は、見る見るうちに青みがかった墨色の毛をした、華奢な狼へと変わっていった。いつの間にかリリアン達の反対側にある窓辺に移動していたジュリアンは、飛びかかってきたオリヴィアをもろに受けて、2人共々外へと飛び出した。その際、窓硝子が派手な音を立てて崩れたのは言うまでもなく。

リリアンヌは、慌てて席を立つと硝子の破片をよけながら、窓に近付いた。窓から顔を出せば、暖かい春風が部屋へと吹き込んできて、外の景色が垣間見えた。草原にいる1人と一匹はまるで、端からみると追いかけてっことをしている様で、その姿はのどかな草原によく似合っていた。

「ねえ、レイル。あの2人って、何時もあぁなの？」

リリアンヌは、食事を終わらせて食器を片付けている、レイチェルを振り返って問いかけた。レイチェルは、首を傾げてせつせと食器を重ねながら、答えてくれた。

「ヴィア姉さんは、他の兄弟弟子達と仲余り良くない。と思う。」

何の感情も込めずに曖昧に答えたレイチェルに、そうなんだと小声で呟いたリリアンヌは、更に言葉が続けた。

「ヴィア姉さんって、狼だったの？」

ぴくっとレイチェルが反応したのを見たリリアンヌは、食器を片付けるのを手伝う為、無言でテーブルに近付いた。

「ヴィア姉さんは、狼族の長であるオリヴィエの娘だって。ガアナード一族は、他の狼より魔力が強くて、人の形を取れるって、先生が言ってた。狼は怖い？」

手を止めてレイチェルを見れば、日の光を浴びてキラキラと光る金色の目が、此方を見透かしているように感じた。自然と首を横に振ったリリアンヌは、目を伏せて慎重に言葉を選んだ。

「怖くないと言えば、嘘になるかも知れないけど、人型をとった狼は初めて見たから。なんて言うかな、びっくりした。」

目を開けてレイチェルを見れば、金色の目が穏やかになったのと同じく、表情も穏やかになっていた。

「それが、リリアの正直な感想？」

素直に頷いたリリアンヌをレイチェルは、穏やかな春の日差しのように微笑むと、重ねた食器を持って階段を降りていった。

リリアンヌもその後が続くと、レイチェルは静かに口を開いた。

「さっき、ジョーン兄さんが言った言葉覚えてる？」

「俺は、狼族、古代魔女、人魚族の血なんか入ってないから。まっとうな人間です――」

彼は確かそう言った。

狼族の血はオリヴィアの事だろう。古代魔女の血はリリアンヌ。では人魚族の血は……。

「私、人魚族の血をひいてるの。」

階下に降り、食器を流しに置いたレイチェルは振り返ってリリアンヌを見た。対するリリアンヌは、瞬きもせずにレイチェルを見つめた。

「そうなんだ。別に驚かないよ、私もこんな髪と目のせいで言われ続けてたし。それに魔族の血が入ってるからって、他の人と何にも変わらないよ。」

自分も流しに置いてにつこり笑ったリリアンヌだったが、金色の瞳から流れる雫に気づいてぎょっとした。

「えっ？　なんか私、酷いこと言った？　ごめん、泣かないでレイル。」

オロオロと慰めるリリアンヌを見て、少しだけ笑ったレイチェルは、手の甲で涙を拭って小さな声で違う、と言った。

「嬉しかったから。他の人と何も変わらないって、誰も言ってくれたこと無かったから。先生もマーサ小母さんもみんな普通の人とは、違うんだからって。人魚の血をひいたからには、強くなりなさいってお母さんも……。」

「そっか…。」

「好きで人魚の血をひいて生まれてきたんじゃないのに、周りは化け物を見るみたいに見てきて。」

リリアンヌにも同じ過去がある。貧乏施設で育った彼女を院長は、他の子と同じように愛情を注いで育ててくれた。今言った言葉も、院長が掛けてくれた言葉だ。しかし、そんな心優しい人など多くなく、手伝いで言った屋敷からは忌々しいと、叩き出され、施設の同じ子供達からはお前なんか何故生きてる、さっさと死んでしまえ等、言われた暴言は多々ある。そんな現状だったからこそ、あの場所から離れて独り強くないと、と思ったから、レイチェルの気持ちはよくわかった。

けれど…。

「ねえ、レイル。好きで生まれてきたんじゃないけども、そう思っても、お母さんにそんな事言ったら駄目だよ。多分、悲しむから。」

「でも…。」

「どれだけ周りに言われてもさ、お母さんが居てこそ自分達は今、此処に居られる。そんなお母さんにそう言ったら、駄目だって。何時かおっきくなったら、面と向かってお母さんに生んでくれてありがとうって、言えるように強くなりなさいって昔言われた。」

自分で言っておいて反吐がでたが、院長に言われた言葉を復唱しながら、レイチェルの髪に自分の手を置いて、ゆっくりと撫でた。

「そっか、そうだね。」

納得したようなレイチェルと顔を合わせて、お互い笑うとリリアンは気分を変えて、屋敷を見てみたい、とレイチェルに言った。しかし、マーサ小母さんが帰って来た際に、さっきの窓硝子の事とばかりを受けるからと、屋敷の探検は却下された。うなだれるリリアンをレイチェルは、自分の部屋でお話をしようと誘ってくれた。

洩々了解したりリリアンを連れて、レイチェルは最上階にある自分の部屋へと案内した。外からは、時たま人間の姿に戻っているオリヴィアと、ジュリアンの騒ぎ声が、静かな屋敷に聞こえて来ていた。

5. 昔話をしよう(前書き)

賑やかですが。

5. 昔話をしよう

リリアンヌとレイチェルが、部屋でお喋りを楽しんでいる昼過ぎ、マーサ小母さんの怒鳴り声が2人の元へと届いてきた。どうやら、窓硝子の事を怒っているようだ。

2人はにっと悪戯っぽく笑い合うと、お喋りを続けた。

レイチェルはリリアンヌのいた街、レイヘルトンが気になる様子で、仕切りに街はどんな所だったかと聞いてきた。

殆どが冬、煉瓦造りの街等々レイチェルに話してやると、金色の瞳を更に輝かせて聞き入っていた。彼女の母国は南の国、サンリーチにあるブレハ湖だそうで、レイヘルトンとは真反対の国だそうだ。ブレハ湖で殆ど占められ、人魚の生息地で有名だと言う。年中暖かく過ごしやすい為、観光客が多く、商売など活気に溢れているそうだ。

「いいなあ。私も行ってみたいな。」

ぼそりと呟いたリリアンヌの声に、二段ベッドの下の階と一緒に腰掛けていたレイチェルは、パッと何かを閃いた（ひらめいた）顔をリリアンヌに向けた。

「あのね、リリア。魔法使いの所に弟子入りしてる子達は、年に一回夏休みに家に帰るの。その時にリリアも家に来ればいい！」

「えっ。良いの？」

「大丈夫、先生に頼んでみる。家に手紙出しとくから、きっとみんな喜んでおいでって言う。」

にこにこ言うレイチェルが可愛くて、リリアンヌはうん。と頷いていた。

「ねえねえ、レイルは何時から弟子になったの？」

高貴な魔法使いの弟子は、弟子であれどそれなりの扱いを受ける。出身が何処であれ、貴族と同じ扱いになる。だから、リリアンヌはここぞとばかりに、レイチェルに質問した。

「一年前。」

あっさりと言ったレイチェルに少しばかり拍子抜けをした。

なんで、そんな事を聞くのかと首を傾げるレイチェルに、リリアンヌは自分の聞かされて来た事を伝えた。

「だって、素質のある子は生まれて直ぐに、修行に出されるんだって聞いてたから。」

更に首を傾げるレイチェルは、そんな事は聞いた事がないと答え、言葉を続けた。

「代々魔法使いの家系である貴族の跡取りなら、それもあるかも知

れないけれど、厳しい試験に合格した者だけが弟子になれる。元々平民は、人手が足りないから、わざわざ自分の子供を修行に出すのは少ないと思う。」

「そうなんだ。レイルは合格したからなれたんでしょ。凄いねー。」

「そんな事無い。リリアだって簡単に弟子になれる。先生だって、そのつもりで連れてきたんだと思う。」

「いやー、私には素質ないよ。」

「5年に一回夏になると、有名な魔法使いから弟子の募集がある。先生の所みたい不定期に募集したり、全く弟子を取らない珍しい家もあるけど。そう言う時にこぞって、能力も無い奴も応募する。」

「へえ。」

「対象者は、3歳から60歳まで。だから、一人前になった時、よぼよぼの年寄りな人もいる。審査基準は、能力とどれほどの魔力があるかだけ。」

「能力と魔力って、どう違うの？」

「魔力は魔法を発動させて操る為の力で、その者に莫大な疲労などを伴わせるが、能力は反対にその者に負担をかける事無く、ある一部の力が呼吸するかのように使える事だと聞いた。」

レイチエルは、難しいからよくわからないと言う風に、首を傾げて話した。

「レイチエルは、なんの能力があるの？」

「レンスイ（連水）を操れる。」

「レンスイ？」

レイチエルは黙って頷くと、言葉を探すかのように目を空中に巡らせた。

「レンスイは、生まれた時から一緒にいる。今も、これからもずっと一緒。兄妹じゃなくて…。」

「友達とか？」

「そう！」

リリアンヌが言った言葉に、嬉しそうに頷いたレイチエルは、リリアンヌと同じ8歳と思えない程、幼い印象を受ける。

「そのレンスイに紹介してくれる？」

「勿論。でも先生が居ない時に、レンスイを人前に出しては行けないって言うてるから、また後日に。」

「うん、約束ね。」

「約束。」

2人だけの秘密の約束をすると、リリアンヌは先程から気になっていた事を聞いた。

「先生って皆が呼んでる、カインド公爵って若そうに見えるけど、何歳なの？」

「確か、19だとか。」

「えっ、若いね。」

「そう言う、お前もな。」

ズバリと斬り返されたレイチェルにびっくりすると、リリアンヌはケラケラ笑いながら言葉を返した。

「そうだった！そう言う、お前もな。」

レイチェルも仕舞いに一緒に笑い出し、その後ひたすら笑った2人は、ベッドの上に転がり込んで、体をくの字に曲げ、ひーひーと呼吸を整えた。その時コツンと、リリアンヌの頭に堅い角が当たった。

何だろう、と体を起こして手に取って見てみると、それはずっしりと皮の厚い土色のカバーで覆われた、分厚い本だった。

「レイル、これ何の本？」

字が読めないリリアンヌは、まだごろんと横になったままのレイチェルに尋ねた。体を起こしたレイチェルは、いやな物を見たと言う風に顔をしかめると、

「学校の辞書。」

と短く答えた。

「学校の辞書が、何でレイルの部屋に？」

公共施設の物はどんな理由があっても、外に持ち出す事は禁じられている。

「今日から週末だから、授業担当の先生が家で宿題をやるように、1人一冊特別に貸し出した。この辞書を使って、レポート50枚書かないといけない。」

リリアンヌから辞書を受け取ったレイチエルは、辞書をベッドに置いて、嫌々パラパラとめくり始めた。よく見れば、所々小さく付箋ふせんが貼ってある。

「今使っている言葉はどうやって生まれたか、例えばおはようとか。同じ言語で何故異なる意味になったのか等。」

淡々と喋っていたレイチエルは、黙り込んでしまったリリアンヌに、どうしたのかと声を掛けた。

「ううん。やっぱり字が読めないのは、致命的だなと思って。」

レイチエルが捲って（めくって）いる辞書は、リリアンヌにとって只の模様にしか見えない。切なそうに笑ったリリアンヌを見ていたレイチエルは、ポツリと呟いた。

「学校に行って、習えばいい。」

「それは無理だよ。」

「どうして？」

「親が居ない子は、学校には行けない。」

「そんなの不公平だ。」

悔しそうに唇を噛み締めるレイチエルは、リリアンヌと同じ8歳の年になるとは思えない幼さがあった。

「仕方がないよ。」

親が居ない子供が学校に居て何か問題が起こったら、学校が責められる。お金も少なからず必要だし。」

この国では、昔から貴族から平民まで5歳から13歳になる子供は、近所の学校で授業を受ける義務がある。しかし、授業費が高く、子供が多い家庭、親を亡くした子供、授業費が払えない所は学校に行って授業を受けていないが多い。

最近では、国により授業費の減額・無料化などの取り組みがあり、学校に通う子供が増えたと言う。親の居ない子供には、ボランティアで勉強を教える者がちらほら居るようだが、教えて貰えるのは大勢いる一部の者だけで、完全な解決とは言えない。

そう、義務だと法律を創るのは簡単で、国は沢山法律を創るが、そこからでた問題はなかなか解決しようとはしないのだ。

リリアンヌのような貧民達は、発言の自由も貰えず、ただ泣き寝入りをするしかないのだ。

だから、リリアンヌはこの国にほとんど幻滅していた。

法律を創るだけ作り、何にも解決してくれない国。

低レベルな人々。

違う国はどんな所があるのか、見て回れる自由を得たら、どれだけ嬉しいか。未来に夢膨らませた時期もあった。しかし、現実はどうはいかない。

「仕方がないよ。此処で生まれてそこから逃げ出せないなら、その場所で精一杯足掻くしかないんだから。」

まるで、自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「でも、変えられるなら変えたいでしょ。」

何を？

と聞かなくても、レイチェルの瞳の奥は、煌り（きらり）と光っている。

「そうだね、変えられるなら。」

この忌々しい国を。

人を思いやれない人々の心を。

今の自分の心境を。

変えたい。

そうリリアンヌから言葉を聞いたレイチェルは、満足そうに頷き、少し笑った。

「やっぱり、リリアは面白い。」

「何処が？」

「全部。」

「いや、そう言う意味じゃなくて…。」

にっこり笑ったレイチェルを見つめると、天使みたいだと思った。

笑って泣いて、表情豊かだと思いそうだが、それはただ彼女にとって服を着替えるようにしかなく、その内側にある彼女自身は、本性を必死に隠している。

天使の姿をした小悪魔だな。とりリアンヌは思った。

「レイルは何を隠してるの？」

その不完全な仮面の中に。

すると、仮面の笑顔を外して素の笑顔をレイチェルはリリアンヌに見せた。

まるで、悪魔が人を惑わすように。

「知りたい？」

そう言うのとベッドから降り、リリアンヌの左側へと立った。

「でも、また今度。リリアを怪我させたら、先生に怒られる。」

にこっと笑うレイチェルは、何故か嬉しそうに笑っている。

暫くの間、静かに見つめ会うだけの空間は、しんと静まり返っていた。其処へマーサ小母さんの夕飯が出来たと言う声で、リリアンヌは視線を外すと、辺りを見渡した。昼過ぎの明るかった部屋は、すっかり夕日に包まれており、1日の終わりを告げている。

「夕飯食べに行こ。」

ぽけっと外を眺めていたリリアンヌに、右手を差し出して左手をとったレイチェルは、赤茶色の扉から廊下へと引っ張って行った。

食堂へ入ると、1人満足そうなオリヴィアと机に沢山の書類を広げているエリック、先程までなかった絆創膏ばんそうこうを額に貼ったジュリアンが、既に席についていた。レイチェルの右側の席へとオリヴィアに促され、リリアンヌは不満ながら席についた。

「さあさあ、夕食の時間ですよ。あら、フレッドとジョーンは？」

右手にこんがりとしたパンが山ほどはいたバスケットを持ち、左手に重ねた食器を持って階段を上がって来たマーサ小母さんは、席が空いているのを見つけると弟子達に問いかけた。リリアンヌとオリヴィアの間に2つ、オリヴィアとエリックの間に1つ席が空いている。

「さあ。フレッド兄さんは先生について行ってるから、遅くなると思う。ジョナサンはまだ部屋で、先生に押し付けられた仕事してるんじゃない？」

マーサ小母さんからバスケットを受け取りながら、オリヴィアがさりと答えた。

「全く、呼んだら直ぐに来なさいって、あれほど言ってるのに。リック！食事の席に仕事を持ち込まないでって言ってるでしょう！ヴィア、リアン、硝子を二枚も割ったんだから、あなた達のローストビーフはありませんからね！」

ぷりぷりと怒りながら左手の食器を魔法で浮かして配り、2人に留めを刺して、マーサ小母さんはジョナサンを呼びに去って行った。

「「えーっ！そんなのあんまりだよ、マーサ小母さん！」」

信じられないといった顔で、渋々書類を終うエリックを挟んで、2人は綺麗にマーサ小母さんに揃って抗議した。

「当然ですっ！！」

拍手をしそうな程揃った抗議の声に返って来たのは、マーサ小母さんのピシャリとした一声だった。オリヴィアとジュリアンがお互い睨みを効かせている間にも、人数分のサラダに飲み物、オリヴィアとジュリアンを抜いた4人分のステーキが勝手に並び、殺風景だった机を彩った。

「良いのかなあ。」

「何が？」

左側に座っているレイチェルが、リリアンヌの呟いた言葉に問いかけた。

「貧民の私みたいなのが、こんなの貰って。」

昼ご飯ではお腹すいていて、そんな事考える暇も無かったが、こんな豪華な夕飯を前に少なからず怯んで（ひるんで）しまっている。

「食べない方が怒られるよ。」

レイチェルは小さく笑ってそう言うのと、いただきますと食事を始めた。

そうかなと思いつつ、リリアンヌもいただきますと言って、有り難く食事を始めた。

「あー、良いなあ！」

声が聞こえて来た方向を見れば、オリヴィアがクンクンとこちらに

向かって、香りを嗅いでいた所だった。その視線に合うとリリアン
ヌは、口に含んだビーフをゴクリと飲み込んだ。

オリヴィアの前には、パンが2つとサラダ、スープに飲み物が置いてあるだけで、至ってヘルシーな食事が伺える。対するジュリアン
も同じで。

少し分けた方が良いのかと、周りを見やれば、黙々と皆食事をして
いる。

「ヴィア姉さん、最近太ったって言ってたじゃん。ダイエットにな
って、丁度いいんじゃない？」

「情けは無用だよ。」

口々にそんな事を言う弟子達。

「肉が食べたい！こうなったのも、リアンのせいよ！」

「よく言うよ。殆ど自分のせいだろ。」

いつの間にか席にっていたジョナサンが、オリヴィアにきっぱり
と返した。

「私1人のせいだって言うのね。もう良いわ。ジョーン、あんたの
肉を寄越しなさい！」

「わっ、俺の肉返せ！」

ぱっと横からかつさわれた肉を取り替えそうと、ジョナサンは持ってたフォークをオリヴィアの頭にぶつけた。

「いったい。そうやって直ぐに手を出すのは、あんたの悪い癖よ。」

「煩い（うるさい）、早く肉返せって。」

「嫌よー。」

肉の取り扱いで、取っ組み合いの騒動へ発展し、一番近くにいたエリックは、コップに入っていたミルクを倒され、机一面に真っ白の液体が広がったのを見ると、それが自分の服に被害がでない内に、ぱっと立ち上がって避難した。

「もう！ヴィア姉さんにジョーン兄さん、喧嘩なら他でやって。」

エリックの非難は、耳に届いていないようで、机に並んでいる食器のカチャカチャなる音が、大きくなってきた。自分達も避難した方が良いのではないかと考えていた時、まだ半分以上も残っていたレイチェルのお肉が、ぱっと一瞬にして消えた。

何で消えたのかとリリアンヌが、首を捻っているとレイチェルがわっと泣き出してしまった。

「私のお肉だったのに！酷い、リアン兄さん。」

ふっとレイチェルの右斜め後ろを見れば、肉を頬張っているジュリアンがいた。

「取られるって分かって、ゆっくり食べてる、レイルが悪いんだよ。」

いーっと笑ったジュリアンにリリアンヌは、カッとなって怒鳴った。

「ちょっと、人の物を勝手に盗むなんて、酷いじゃない！しかも、自分より年下の女の子のに対して。男の威厳はないの！？」

すると、

「今日、来たばかりの赤の他人に、説教されたくないね。それにその言葉、ヴィア姉さんに言っちゃってやって。」

くいつと顎を向かいの場所へ向けて、そう言った。リリアンヌが顔をそちらに戻すと、机にあった食器を床にひっくり返して、喧嘩をしている二人がいた。リリアンヌが居た施設より余りにひどい惨状に、言葉を失っている時、聞き覚えのある声が扉付近から聞こえて来た。

「随分と楽しそうな夕食じゃないか。」

ゆっくりと皆顔をそちらに向ければ、外出着に身を包んだまま、静かに皆を見つめているルビウスが立っていた。おまけに言えば、左後ろに同じく外出着に身を包み、呆れかえった顔のフレッドもいる。

先程まで喧しい（やかましい）ほど賑やかだった食堂は、水を打ったように静かになった。

「マーサ、折角美味しそうな料理を作ってくれてるところを悪いけど、全て下げてくれるかい？」

すると、一瞬にして机の上の料理と床に散らばった残骸は、跡形も無く消えた。

「さて、元気一杯の弟子の諸君。出来れば師である私が言う前に、速やかに席へ座ってくれと有り難いのだけれど。」

リリアンヌはストーンと席に座り、皆も音一つ立てずに、急いで自分の席へと座った。

「食事の席で説教をするのは、好きで無いけれど。まず、オリヴィア。」

静かな口調に怒りを混ぜた話し方は、その場にいる者全員を震えさせた。

「はい…。」

「マーサから、高度の魔法ばかりして、学校に行っていないと。何時から、私はそんな事を許可した？」

「許可して頂いた覚えはありません。」

「ならば、自分がしたことについてわかっているな。週明けから学

期末まで、毎日学校へ行け。サボったら厳しい罰を与える。その間、魔法は全面的に禁止。それから、チャーリー王子の遊び相手がなくて、困ってるそう。丁度いい、お前の就職先へと決まった。しばらく、1人前にはなれそうにないな。」

「次にジョナサン。また近所の子供を泣かしたとか。元気な事はいが、限度と言う物がある。罰として1ヶ月、ロベルトの手伝いだ。」

顔がひきつっている2人に目もくれず、ルビウスは言葉を続けた。

「ジュリアン。いい加減に、兄貴の後を馬鹿の一つ覚えみたいに、付け回すのは辞めなさい。来週から7日間、アレックス・シエルダの所に行きなさい。」

「エリック、レイチェルはちゃんとレポートの宿題をやるように。リリアンヌは話があるから、私の部屋に来なさい。以上。」

淡々と話を終えるたルビウスは、くると背を向けて立ち去った。その背を呆然と見ていたリリアンヌだったが、レイチェルにつつかれ慌てて後を追った。

彼について入っていった部屋は、階段を上って直ぐに右手にあるリビングのような場所だった。部屋は薄暗く、暖炉の火が灯っているだけで、辺りを伺う事は出来なかった。

ルビウスは簡単にマントととんがり帽子、コートを脱ぐと奥にある長椅子に腰掛け、リリアンヌを向かい側へと座るよう促した。

リリアンヌが、手前の長椅子に軽く腰掛けたのを見届けると、ルビウスはゆったりと口を開いた。

「さつきは、弟子達が失礼したね。どうも私の教育が足りないよう
で。」

「……………いえ。」

「さて、私に聞きたい事があるだろうか？ 答えられる範囲で、質問を
受け付けるよ。」

「えっと、まず何のために私は、ここへ連れてこられたんでしょう
か。」

「まあ、まず普通最初はその質問だろうね。けれど、それはまだ答
えられないね。ああ、そんな顔しないで。僕は答えられる範囲で、
と言ったよね。」

そんな顔とはどんな顔をしているのか、大体想像はつくが、敢えて
考えないようにしたりリアンヌは、質問を続けた。

「私、魔法使いの方に誘拐される覚えは無いのですが？」

少し喧嘩腰になってしまったが、そんな顔をしたままルビウスを見
た。

「ふむ、そうだな。君自身は覚えが無くて、当たり前かな。」

さらりと誘拐したことを肯定したルビウスに驚愕しながら、静かに言葉の続きを待った。

彼は、鮮やかな朱色の長椅子に深々と体を任せて、暖炉を見ている。

「昔話をしようか。」

斜め左に座っている漆黒の彼の目は、暖かい暖炉の火を映し出している。そして、静かに昔話を語り始めたのだった。

6. 遠くない昔に(前書き)

ルビウスいっぱい喋ってます。

6. 遠くない昔に

「もう8年前になる。そう遠くない昔、東と西の丁度境にあるウル・エッドと言う町でね、大きな大きな戦^{いくさ}があったんだ。事の始まりは、我が東の国リヴェンデル。

当時、北と南の王都を奪ったばかりだった第37代国王は、閉鎖的だった西の国アディマデューサに目を付け、戦を仕掛けた。国中から選りすぐりの魔法使い、魔女を呼び集めて。

古代魔女が住むあの国は、長年外と関係を持つとうとしていながら、どんな国なのかわからなかったにも関わらずね。

勿論、こちらが圧倒的に不利となった。

向こうは、防戦体制から一步も退かず、お互い疲労が限界だった。そんなとき、国王が言ったんだ。

『さっさと始末してしまえ。』

その言葉で、魔法使いになったばかりの1人の男が、西の国に呪いの魔法をかけた。

それは、呪い返し^{マジックリターン}の術としてこちらに返って来て、ウル・エッドに居た57人の魔法使い、魔女と近くに隣接していた、市町村を含んだ16の国民、5万102人という最悪の犠牲を出した。

生き残った者は20人にも満たなくて。

だけど、そんな多くの犠牲を出したにも関わらず、国王は気が済まなかったらしく、また戦を仕掛けようとしたんだ。それに偉く怒った魔女が居てね。

その魔女は、自分も生死をわける瀕死の状態だったにも関わらず、ウル・エッドに行って西の国に封印の魔法をかけ、国王にこう言っ

たんだ。

『私達は、あなたの駒ではありません。想いも考えも持てる1人の人間です。これは、私一個人の考えた結果です。もうこれ以上、無駄な犠牲を出さないで下さい。』

そう言って彼女は、事切れたんだという。

今でもこの言葉は、王の命に逆らっていると否を唱える者。純粹に彼女のやったことは、素晴らしいと誉める者。敵国の肩をもつていると非難する者と、賛否両論分かれる内容だけど。君はどう思う？」

「その魔女についてですか？」

「そう。」

いきなり意見を求められたにも関わらず、リリアンは至って冷静に自分の意見を述べた。

「私は、彼女がしたことは最終的に正しいと思います。けれど、魔法について偉そうに言えませんが、沢山の被害が出る前に食い止めるべきだったのではないかと。」

「私も同感だね。被害が出てから食い止めた。それならば何故最初からそうしなかったのか、聞きたくても今は亡き母上に聞ける訳もないからね。」

「こ、公爵様のお母様でらっしゃいましたか。これは、失礼致しました。」

「私が意見を聞いたんだ。謝らなくてもいい。」

ルビウスは小さく笑って一旦言葉を切り、リリアンヌの方向に姿勢を直して話しかけた。

「この戦、実は全く違う理由で始まったと言うんだ。これは、あくまで噂に過ぎない。それを約束出来るかい？」

「はい、約束します。」

きっぱりと答えたりリアンヌに、安堵したルビウスは話を続けた。

「このウルーエッド戦は表面上、37代国王が気紛れで起こした無理益な戦となっっているけど、実際は違うという。現37代国王には、3人の弟君がいらっしやた。一回り年下のラタウ殿下とその5つ下のダーウィズ殿下。そして、当時21だった末のセドウィグ殿下。37代国王には今も御子が居らず、ラタウ殿下、ダーウィズ殿下はウルーエッド戦の二年前にあった戦で死亡。結果的に跡を継ぐのは、セドウィグ殿下だ。あの方は、私の兄弟子にあたる方で、魔法も武術も文学も何一つ申し分ない方だった。」

どこか遠くを見つめて、ルビウスは話を続けた。

「私も良く相手をして頂いた。心根の優しい方だったけれど、たまに考えていらっしやる事がわからなくて。不思議な方だと思った事がある。だけど、言葉を交わす内にわかったんだ。あの方は、誰かを待ってるんだって。」

「ある年から、セドウィグ殿下はふらりと姿を消された。城は大騒ぎになったそうだけれど、直ぐに帰って来られたから、事なきを終えたらしかった。それが頻繁に起こるようになると、王は殿下を心配して魔法使いに跡をつけさせた。大事な跡取りだからね。そうした

ら、西の国にいる古代魔女の娘と逢瀬を重ねていたらしい。まあ、殿下も男だから、女の1人やいるのが当たり前だけれど、何せ相手が悪かった。魔力が強い殿下と魔力の源の古代魔女、そんな2人の結婚はまず無理だった。血が濃すぎるから。王は、セドウィグ殿下にきっぱり別れるよう言ったが、それを拒否した殿下は娘と、西の国に駆け落ちしたそうだ。それを許さなかった王は、西の国ごと潰してしまおうと考えた。」

「酷い。」

思わずリリアンヌは呟いた。ルビウスは、そんなリリアンヌに微笑んだ。

「そうだね。だけど、末の弟君を思うが故だったんだ。セドウィグ殿下を連れ戻した後、城に幽閉しているとか、していないとか。僕も2年前に殿下にお会いしたけど、至って元気でらしゃってあれを幽閉と言うのかわからなかったな。その時に殿下に頼まれたんだ。娘を探して欲しいって。」

「娘…?」

首を傾げて、オウム返しのように問い質した。

それでも、オリヴィアの言った言葉が頭を過ぎる（よぎる）。

《セドウィグ殿下にそっくり》

彼女はそう言ったのだ。

「うん。セドウィグ殿下の相手の娘の名は、ローズマリー。ウルー

エッド戦で僕の知り合いの魔女が彼女を逃がした時、殿下にこう伝言を預かったんだ。」

『子を授かった。いつか、この子に会ってやって欲しい。』

「殿下はそれを聞いて、直ぐにでも探しに行きたかったけど、何せ自分は城から出られない。そこで、一番会う確率が高い僕に託した。お陰で八年も探す羽目になったよ。」

「それが私だと？」

「うーん、断言は出来ないけどね。彼女は、子供を女兒か男児か言っ
てなかったから。でも、殿下は絶対娘だと言い切ってるね。父親
の感だつてさ。」

ルビウスは、先程リリアンヌを誘拐した理由を言えないと言ったが、
結果的にそれが理由ではないかと考えた。

「それが理由で、君を連れてきた訳ではないよ。何にも確証が無い
んだから。」

リリアンヌの考えていた事をあっさり否定され、内心むくれている
と、ルビウスは穏やかに笑って、その内思い出してくれればいいの
だけれど、と呟いた。

「はい？何か仰いましたか？」

「いいや、何も。少し話が長くなってしまったね。もうお休み。」
呟いた言葉はリリアンヌに届かず、ルビウスはさっさと話を切り上
げてリリアンヌを部屋から追い出した。

「部屋は、レイチエルと相部屋だよ。では良い夢を。」

パタンと閉まった扉を呆然と見ていたりリアンは、はっと我に返って叫んだ。

「質問に答えて貰ってません！それにまだ聞きたいことがあるんです、扉を開けて下さい！」

しかし、扉は閉まったまま。

無礼に値するとわかっていながら、扉をガチャガチャと言わせた。どうやら、内側から鍵をかけているらしい。

ムツとして、更にどでかい声で扉に声をかけた。

「鍵をかけるなんて卑怯です！それに、話は終わってません！北の国に帰して下さい。」

扉を思いつ切り叩いてみる。

無理やり開けようと、押してみる。

けれど、静かに扉は閉まったまま。

もっと大きな声をあげようと、息を吸った時、階段から上がってきたオリヴィアと目があった。

「何。そんな大きな声出して。」

「話の途中だったのに、公爵が勝手に切り上げて。部屋から追い出されたんです。」

拗ねてオリヴィアに訴えてみたが、軽く笑って済まされた。

「また今度にしたら？先生に意見しようなんて、今のあんたじゃ無理よ。それに先生、もう部屋に居ないみたいだし。」

なんだと！という風に目を剥いたリリアンヌを見て、オリヴィアは更に愉快に笑った。

「さあさあ、もう寝る時間よ。部屋まで送ってあげるから。」

ずるずると引っ張られながら、リリアンヌは扉に向かって最後に精一杯声を張り上げた。

「卑怯者——っ。覚えてろよお！」

静かな夜に包まれた屋敷に、決して可愛いと言えない、リリアンヌの怒声が響き渡った。

7. 七番目の弟子（前書き）

一章の折り返し地点です。

7. 七番目の弟子

翌日、レイチェルに起こされたリリアンヌは、仲良くそろって顔を洗いに下に降りた。3日連なる連休の内、2日目の為か食卓にはエリックだけがついて、朝食をとっている。

「昨日は偉くうるさかったな。あの怒鳴り声あんただろ。」

「そうよ。悪い？」

ふんと鼻を鳴らして睨みつけると、さっさとその場を通り過ぎた。その後を苦笑したレイチェルが続く。

リリアンヌは昨日、ルビウスに勝手に話を切り上げられた事に、大変腹を立てていた。

今日会ったら、徹底的吐かしてやると朝起きた時から考えていた事だ。

「リリア、機嫌悪い。」

「うん、ちよっとね。ごめんねレイル。」

「大丈夫、リリアの機嫌治るまで待ってるから。」

「そう？もう、敬語なんて使わないんだから！そして絶対、あの自己中心的公爵を、ぎゃふんと言わせてやるんだ！」

「誰が自己中心的だって？」

「「わあー！出たあっ！！」」

慌ててレイチェルと共に洗面所に入ると、扉を閉めて防戦体制にはいった。

「私は幽霊か何かか。」

寂しく溜め息をつくるルビウスを扉越しに聞きながら、いきなり背後に現れるからだと悪態をついた。

その後、顔を洗い、廊下に出たら既にルビウスの姿はなく、食堂に戻ってエリックの代わりに食事をしていた、ハイデイリア兄弟にどこに行ったのか知らないかと聞けば、フレッド兄さん連れてどこかへ行つたと返ってきた。

「逃げやがったな、卑怯者め。」

帰ってきたらひっつかまえて、問いただしてやるとぶつぶつ小声で悪態をついているリリアンを、とんでもない物を見たど兄弟は驚きを隠そうとしなかった。

「意外と猫被りだったんだな…。」

「女は誰でも。私だけじゃない。」

ジュリアンの言葉に簡潔に答えると、席に着き食事を始めた。

「女は怖いね。ジョーン兄さん。」

「全くだな、弟よ。」

2人の静かな会話は幸か不幸か、リリアンヌには届かなかった。

やがて、食事を終えたリリアンヌ、レイチェルの2人は昨日出来なかった屋敷の探索を始めた。

「リリア、こっちこっち。」

「待つてよ、レイル。」

一番上の階はリリアンヌとレイチェルの部屋、オリヴィアの部屋しかないため、2人は二階廊下の突き当たりに来ていた。

硝子張りの扉を開けると、洗濯を干しているマーサ小母さんが見え、レイチェルはさっさと外に出て、リリアンヌを手招きしている。

屋根がない屋上に出れば、気持ちのよい青空が広がっていて、絶好の洗濯日和である。そんな蒼空を見上げて外に出た。屋根のど真ん中にある、大きな硝子の天窓を覗いているレイチェルの隣に座り込んで、リリアンヌも覗き込んでみた。

透明な硝子は、2人の顔と青空を綺麗に映し出していて、向こう側に見える下の様子は別世界のようなだった。

「あつ、ヴィア姉さんだ。」

食卓についてるオリヴィアの姿を見つけたレイチェルは、嬉しそうに声をあげる。オリヴィアは、天窓から差し込む動く影に気付いたようで、2人に手を振ってくれた。2人も手を振り返し、立ち上がると屋敷に戻って、探索を再開した。

書物がある書籍室、客室、談話室（ルビウスとリリアンヌが話していた部屋）二階にある全ての部屋を見てまわり、（ルビウスの寝室に仕事部屋は鍵が掛かって中を見れなかったが。）地下は兄弟子の部屋しかないから、面白くないとレイチェルが話していた時、二階の踊場から屋敷の裏に当たる森の手前にジョナサンが1人、スコップで大きな穴を掘ってるのが見えた。

「レイル、ジョーン兄さん？がいるよ。」

「本当だ。何してるんだろ。」

「行って聞いてみようか。」

「うん。」

2人は正面玄関から外に出て裏に回ると、ジョナサンの後ろへと立った。

「ジョーン兄さん、何してるの？」

「あ？なんだお前らか、邪魔だからあっち行け。」

「何してるんですか？」

「何でも良いだろ。」

「「何してるの？」」

「あーもう、うっせーな。穴掘ってんだよ。見てわかるだろ！さあさ、気が済んだら向こう行け。」

2人のしつこい質問に、適当に答えたジョナサン。どうやら、機嫌が宜しくないようだ。

そんなジョナサンから離れて、リリアンヌはレイチエルに話しかけた。

「あんなに怒んなくてもね。」

レイチエルは、ジョーン兄さんは何時もあだと答えた。

その後、2人で特に何をするでもなく、ぼんやりと屋敷の壁にもたれてジョナサンを観察していると、角を曲がってきた小柄なお爺さんに声を掛けられた。

「おや、珍しい。レイルがこちら側に来るとは。お隣にいる見かけない顔のお嬢さんは、一体どちらからいらっしゃのかな。」

白い眉を蓄えて、短い髪の上に藍色の帽子を被ったその老人は、右手に大きな麻袋を提げていた。

「リリアンヌって言うの。昨日、先生と来た。さっきまで、一緒に屋敷の探索してた。」

「えーっと、初めまして。リリアンヌです。北の国から来ました。」

「ほお、北からですか。それはまた遠い所から。私はここの管理を任されてる、ロベルト・ジドルと言う者で。ローベルおじさんと呼

ばれてるかの。お嬢さんがリリアだったとは。マーサから聞いてはいましたよ。」

「マーサ小母さんが？」

「ええ、また1人ルビウス様が誘拐してきた、可愛らしい子がいると。」

帽子を取って自己紹介してくれたロベルトは、少ない髪を撫でつけながら愉快に笑った。そう言えば、淡いオレンジの瞳は誰かに似てると思ったら、マーサ小母さんにそっくりだ。

「マリンサは、私の二番の娘ですよ。」

リリアンヌの考えていた疑問に答えると、彼は帽子をかぶり直して最後に言った。

「私の家はこの別荘の向かいにあるので、良かったらお茶でも飲みに行らして下さい。美味しいハーブティをご馳走しますから。と言っても殆ど森と庭なんかに居ますがね。それでは。」

小さく笑いながら、会釈をすると何か思い出したように立ち止まった。

「そうそう、ここにいたら砂埃が起ちますからお嬢さん方、避難された方がいいですよ。」

そう言って、ジョナサンが掘っている場所へ歩いて行った。助言を貰った2人は、ロベルトの言った通り避難する事にし、屋敷

の中へと引き返した。

「公爵が言ってたロベルトさんの手伝いって、もしかしてあれ？」

レイチェルに聞けば、ああと思い出したように答えた。

「そうかも知れない。でも、あんなの先生の罰の内に入らないよ。」
あっさり言うレイチェルに静かに驚きながら、2人は屋敷に入った。

その後、ゆったりとした1日を過ごした2人だったが。

「何だ、その力のない堀方は。もっと腰をいれて掘らんかっ！まだまだ若いんだから、そんなぐらいで、へばっててどうする！」

夕方、日が暮れるまでロベルトの怒鳴り声が屋敷の裏まで響いて来ていて、少なからずジョナサンに同情したのは秘密である。

その後結局、夜になってもルビウスとは会わずじまいで、リリアンヌの焦りと怒りはそろそろ限界に来ていた。

「これからどうしよう…。」

「ここに住めばいい。」

ぼそりと呟いた言葉に、まだ灯りを点けてレポートを書いていたレイチェルは、二段ベッドの上の階に寝そべっているリリアンヌに、当たり前のように助言した。

「それはちよつと。私、人に頼らずに、独りで生きていこうって決

めてるから。」

「そう。じゃあ、明日先生が帰って来たら、どうするのか話すの？」

「うん、ずるずるとここにいたくないし。今日話そう（問いただそう）と思ってたのに、公爵朝に一回しかみなかったし。」

「先生、いつも忙しいばかり言ってる。」

「ふーん。」

「もしかしたら、明日も帰って来ないかも。」

「それは困るね。」

「そうならないように祈ってる。」

「そうだね。じゃあ、そろそろ寝ようかな。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

リリアンヌとルビウスの戦いは、まだ始まったばかりである。

次の日レイチェルと2人、ルビウスが帰って来るのを待っていたリリアンヌは、草原にふらふらと疲れ切ったジョナサンが歩いているのを見つけた。王都に行っているというオリヴィア、ルビウスにつ

いて行ってるフレドリッヒ。ジュリアンは昨日からルビウスの弟、アレックス・シエルダ侯爵の所に行っていて居らず（あのミミズクの弟だ）、エリックは部屋でレポートを書いているとかで、屋敷はひっそりと静まり返っている。

「何してるのか、見に行こうか？」

暇を持て余していた2人は、さっさと屋敷から出てジョナサンの元へと向かった。

彼は草原の端、崖がある手前の場所にいた。

「ジョーン兄さん。」

レイチエルが声を掛ければ、めんどくさそうに振り向いた。

「今日は何してるの？」

「またお前ら2人か。爺じいから薬草を摘めって言われてんだよ。ああ腰痛てえ。」

「良かったら、手伝ってあげようか？」

どうせ暇だし、ね。とりリアンヌがレイチエルに同意を求めると、こくりと頷いた。ジョナサンは、目をまん丸とさせて驚いた。

「まじかよ！じゃあ、これと同じ薬草を摘んでくれ。崖があるから気をつけろよ。」

言葉は悪いけれど、さり気なく注意を促す親切さを見たリリアンヌ

は、根は悪い人ではないと悟った。

ジョナサンが持っている薬草は、万能薬として使われるパールン・ハリウと言いうらしい。小さいそれは、人差し指と親指で摘み、薄黄緑色の花卉だけを使う。

その花を手の平大の籠一杯に摘、まなくてはならないらしい。

「大変だね。」

「爺の罰は地味にキツイんだ。まあ、俺やリアンは慣れたもんだけど。」

今年12になるジョナサンは、ウルエッド近くで農家を営む、ハイディリア家の次男坊だと自己紹介をしてくれた。

「土掘ったりとかは弟子になる前散々やらされてたし、慣れてたはずなんだけどな。久しぶりにするとやっぱ体に来るな。」

そう言って笑いながら話すジョナサンは、何故だか嬉しそうだ。

「俺は、空中浮遊の能力を持ってるんだ。」

能力があるのかと聞けば、そう答えてくれた。

「くうちゅうふゆう？」

「そっ。物を浮かせたり空を歩いたり。雲の傍まで行ける。」

「いいな―。」

「なんなら今度、連れてってやろうか？」

「えっ、いいの？」

「ああ。」

喜びリリアンヌ、ニコニコとその様子を見つめるレイチエル。周りには、暖かな日差しが降り注いでいた。

お昼を食べ終えた途中辺りから、シエルダ侯爵の所から帰って来たジュリアンも加わり、賑やかにせつせと薬草を摘みながら話を咲かせた。

「で、昨日から先生を掴まえようとしてたわけだ。」

「そう。」

「無理に決まってんじゃない。ねえ、ジョーン兄さん。」

話題はリリアンヌが、ルビウスに話を切り上げられた事。

「うーん。弟子になれば、先生と話合える時間は増えるだろうけどな。今のまんまじゃ、只のお客さん扱いだ。」

「弟子？」

「ああ、確かそろそろ七番目の弟子をとったらどうだって、話が来てたんじゃないか？なあ、リアン。」

「うん、シエルダ侯の所でも弟子の志願者が沢山いるのに、なかなか

か七番目の弟子を取ろうとしないってさ。」

「そう言や先生、七番の弟子に関してはなかなか取ろうとしないよな。何でだ？」

「さあ。偉い人程、弟子をとるのにね。」

「七番目の弟子については、やけに拘ってるな（こだわって）。」

「弟子かあ。」

そうだね。と答えるジュリアンの声を聞きながら、リリアンヌがポツリと呟いた。

「どうやったら、弟子にしてもらえる？」

「手っ取り早いのは、直談判とか？」

「自分を売り込むとかね。」

「それに金貰えるしな。」

「えっ！お金が？」

「そっ。ちゃんと仕事が出来たら、給料として貰えるんだ。」

お金が貰えると聞いて、リリアンヌは目を輝かせた。

「よし、決めたッ！私、七番目の弟子になる。」

8. 弟子にしてください！(前書き)

本来ある言葉が、違う意味として使われていたり、適当な造語が出てきます。ご了承ください読み下さい。

8. 弟子にして下さい！

とっても良い事を聞いたと飛び跳ねて、屋敷に向かうリリアンヌとその後を追うレイチェルを兄弟は黙って見送った。

「ジョーン兄さん、勝手に教えて良かったの？」

「さあな。後で先生に怒鳴られるだろうけど。」

「僕、怒鳴られるの嫌だよ。先生怒ると本当に怖いし。」

「俺だって、嫌だ。」

「……………」

「……………」

暫し、気まずい空気が2人を包んでいたのだった。

屋敷に戻ったりリアンヌは、勿論そんな事を知る由もなく、マーサ小母さんにルビウスは帰っているかと聞いた。まだだと返事を聞くと、正面玄関の前に陣取ってルビウスの帰りを待った。

「えっ、なにになに？ マーサ小母さん、あの子達何してるわけ？」

上から降りて来たオリヴィアは、玄関のど真ん中でレイチェルと共にどんと立っている、リリアンヌを見て言った。

「ルビウス様の帰るのを、玄関で待つんだと。弟子にして貰うんだ

とか。」

近くに居たマーサ小母さんが、呆れながら2人を見て答えた。

「物好きと暇人。」

「全くだよ。」

物好きリリアンヌ。

暇人レイチェル。

決して嬉しくもないあだ名をつけて貰った2人は、全く気にもせず、ひたすら忠実な犬のようにルビウスの帰りを待っている。

ルビウスとフレドリッヒが帰って来たのは、そろそろお腹の中にいる虫が、五月蠅く（うるさく）なる頃で、辺りは真っ暗な闇へと姿を変えていた。

「今、帰っ…」

「公爵、私を弟子にして下さい！」

ルビウスが玄関の扉を開けて屋敷に入った途端、勢いある言葉でおっかなびっくり気味の2人を無視して、リリアンヌは続けた。

「弟子にして下さい。」

「えーっと…」

「私を七番目の弟子にして下さい。」

「もしもし、お嬢さん。ちょっと落ち着きなさい。」

「ちゃんと話をしてくれないんだし、私が弟子になるならそれは別の話しよね。」

「君を弟子にするつもりは無いよ。」

きっぱりと否定されたリリアンは、むくれて眉間に眉を寄せて叫んだ。

「弟子にしろーッ！」

「そんな言葉使いをする子は、余計弟子にしくなくなるね。」

「すいませんでした。弟子にして下さい、お願いします。」

「言い方を変えても無駄。」

じゃあ、どうしろと！

そう一人叫んでいるリリアンの脇を通り抜けたルビウスは、マーサ小母さんにお帰りなさいませと言われて、嬉しそうに微笑んだ。

「マーサただだよ。疲れて仕事から帰ってきた僕に、おかえりと言つて迎えてくれるのは。」

「おかえりなさい、公爵。弟子にして下さい。」

「そういう事ではなくて…。」

マーサにフード付きのマントを手渡すと、手前にある食堂へと続く

廊下に立ってルビウスは振り向いた。

「とりあえず食事だ。お腹がペコペコだよ。君達もだろうか？」

その言葉を聞いて、リリアンヌ、レイチェルの腹も空腹を盛大に訴えた。

「ほらね。」

笑いながら言うルビウスは、さっさと食堂へと向かった。渋々リリアンヌはルビウスについて食卓についた。何故か、上手く丸め込まれていると思うのは、きっと気のせいだ。丸い机には既に食事が並び、リリアンヌ、レイチェル、フレドリック以外の4人は席に着いていた。

「お待たせ。頂こうか。」

初めて椅子が全て埋まり、八人は各々（おのおの）にお喋りを楽しみながら、食事を始めた。やがて、皆の食器から料理が消えた頃、ルビウスが口を開いた。

「リリアンヌは、まだ全員と自己紹介を終わらせて無かったね。」

そうかも知れない。

リリアンヌが何も言わないでいると、ルビウスがさっさと弟子に自己紹介するよう伝えた。

「先生、皆の自己紹介が終われば、改革書に目を通して下さりますか。」

「勿論。」

嬉々として答えたルビウスに溜め息をつくと、フレドリッヒはリリアンヌに目を向けてきた。

「初めての時に、簡単に自己紹介しただけでしたね。一番目の弟子、フレドリッヒ・カインドです。元の名はフレドリッヒ・ラービン。財務大臣ジム・ラービン男爵の嫡男です。フレッドと皆からは呼ばれていますので、どうぞその様に。11の頃から先生の元で学ばせて頂いているので、弟子歴はかれこれ今年で7年目になりますかね。能力は、遠くの出来事を見ることが出来る遠目です。」

フレドリッヒが自己紹介を終えて、彼は隣に目を向けてオリヴィアに自己紹介するよう促した。

「私、リリアにはもう自己紹介終えてるんです。」

不満そうにルビウスに抗議したオリヴィアだが、フレドリッヒに無言で睨まれ、大人しく自己紹介をした。

「二番目の弟子、オリヴィア・カインドよ。元の名は、オリヴィア・ガアナード。ヴィアって呼ばれてるわ。人語を話す狼族出身で、直ぐそこの森に住む、ガアナード一族長オリヴィエおやの長女。能力は駿足。」

「オリヴィアの脚は、王都一速いんだよ。」

リリアンヌの右側に座っていたルビウスが、補足説明をしてくれた。

「俺は、ジョナサン・カインド。元の名は、ジョナサン・ハイディア。三番目の弟子。まわりからはジョーンって呼ばれてる。出身はウルエッド。家は農家やってる、その次男。リアンは俺の弟。後、能力は空中浮遊。」

「四番目の弟子、エリック・カインドです。元の名前は、エリック・シェネディ、リックと呼ばれてます。小人族の末裔なので、背が伸びません。だから、僕に向かつて、背の話はしないで下さい。能力は、体を自由に変形出来る曲形きょくけいがあります。」

背に関してはやたら強調した彼は、背を気にしているというのがひしひしと伝わってきて、ルビウスが小さく笑ったのをリリアンヌは聞き逃さなかった。

「五番目の弟子、ジュリアン・カインド。元の名は、ジュリアン・ハイディア。リアンって呼ばれてる。ハイディア家の三男。能力は、植物と話すことができる、植話術。」

ジュリアンは簡潔に自己紹介をして、さっさとレイチェルへと回した。

「レイチェル・カインドです。元の名前は、レイチェル・ディオム。みんなから、レイルって呼ばれてます。出身は南にあるブレハ湖ブレハ湖。ディオム家の5人姉妹の末っ子です。えっと、能力は水神すいじんの連水レンスイを操る事です。」

「最後に僕かな。カインド家現当主、ルビウス・カインド。元は、ロウ伯爵の嫡男だったけど。王宮で、魔法大臣を務めさせてもらっ

てる。能力は、一樣闇を操る夕闇かな。」

一樣？リリアンヌが不思議に思っているのもお構い無しに、彼はさっさと話を続けた。

「みんなもう知ってると思うけど、彼女はリリアンヌ。仲良くしてあげてね。さて、そろそろ仕事に戻ろうか。明日から皆、学校だろう？夜更かしせずに、早く寝るんだよ。」

弟子から就寝の挨拶を貰って、ルビウスはフレドリツヒを連れて部屋へと戻ってしまった。

「また逃げられた…。」

「明日から暇なんだろ？丁度、暇潰しになって良いじゃねえか。」

呆然とするリリアンヌに、憎まれ口を叩いてジョナサンは通り過ぎ、ジュリアンはポンポンと肩を叩いて、その後に続いていった。

「悔しー。」

机に顔を埋めるリリアンヌと、よしよしと慰めるレイチェルだけが、皆が去った寂しい食堂に残っていた。

次の日から、リリアンヌは金魚の糞のようにルビウスを付け回した。ルビウスは魔法を使って逃げようしないが、それは魔法を使えないリリアンヌに対する優しさではなく、彼女との追いかっこを楽しんでいるのではないかと目を疑うようだった。

「先生、書類にサインをお願いします。期限が迫っているんです！」

「うん、後でするから。」

逃げるルビウスをリリアンヌが追い、その2人を彼方から目で追うフレッドは、ルビウスが掴まらなく、途方に暮れていた。

「疲れた。」

「こっちもだよ。」

「すみません。」

「全然、仕事が片付かない。」

「言っときますけど、私だけのせいじゃありませんから。」

ひねくれて、フレッドにいちゃもんをつけたリリアンヌを彼は、わかってるよと小さく答えた。

「君が諦めるか、先生が折れるしかない。」

「絶対に諦めません。」

弟子達が学校に行って、屋敷の中が静かなある日の午後、リリアンヌとフレドリッヒは、マーサ小母さんが煎れてくれたレモンティーを飲みながら、食堂で話していた。

「じゃあ、誰かを味方につけるかだね。君一人では絶対に勝てない。」

「フレッド兄さん、味方になって。」

「それは無理。」

「どうして？」

「君に先生がかまっている間、仕事が溜まる。」

素晴らしいぐらい、完璧な仕事人間だな。

呆れたリリアンヌは、辺り前のように茶を飲んでいるフレドリッヒを見つめた。

けれど、裏を返せば仕事がどうにかなれば、協力してくれると言うことではないか。

リリアンヌは、フレドリッヒと交渉する事にした。

「じゃあさ、仕事を私が手伝う。ヴィア姉さんがしない分私がするから、フレッド兄さん味方になってくれない？」

「字も読めないのに？」

「これからするもの。」

「君が、どんな働きようか、わからないのにも関わらず？」

「沢山働く！誓うわ。」

「……………」

「お願い。味方が居た方がいいって言ったの、フレッド兄さんよね？」

「お願い――。」

リリアンヌしつこいおねだりに負けたフレドリッヒは、仕方ないと言う風に腰をあげた。

「わかったわかった。仕方ないね。強い味方に話をつけとく。2日後には、先生が折れるよ。」

「やった！ありがとうございます、フレッド兄さん。」

その2日後、フレドリッヒの言うとおり、折れたのはルビウスだった。

天気の良い朝方。リリアンヌはルビウスに呼ばれて、彼の仕事部屋にいた。

「君を弟子にするには、条件がある。」

顰めっ面でリリアンヌに向き合うルビウスは、山積みの書類がある仕事机に埋もれながら、こう切り出したのだった。

「何ですか？」

「一つ、僕の事は爵位または先生、名字で呼ばない。」

「そんな失礼な事、無理です！」

「無理なら、この話は無かったことになるよ。」

うっと言葉に詰まったりリアンを無視して、ルビウスは更に言葉を続けた。

「一つ。許可なく独りで街にでないこと。」

「最後は、僕のことになること。」

肝心の所をうっかり聞き逃してしまった。

「はい、わかりました。」

聞き逃した所には触れず、リアンは二言返事で返していた。

「本当に？」

「本当です。話終わったなら、失礼します。」

まだ寝ているレイチェルに、弟子にしてもらった事を教えてあげようというリアンは、早々に部屋を辞した。ルビウスがしてやったりと先程とは、間逆の顔をしていたにも気付かず、リアンはパタパタと走って行ってしまった。この何でもないような条件が、後々リアンを大層苦しめることになるかも知らずに。

9. 六人の弟子（前書き）

一部に流血、残酷な描写があります。苦手な方は、ご注意ください。

9. 六人の弟子

その後、愛でたく弟子となれたリリアンヌだったが、どうも納得がいかないと、師であるルビウスに食ってかかっていた。

「どうして、勉強ばかりなの！」

これから出掛けようというルビウスは、困ったなあとしりリアンヌを見つめている。

リリアンヌはここ数ヶ月、マーサ小母さんに勉強を教えて貰いながら、屋敷の手伝いやらに精を出していた。しかし、何時までたってもルビウスは、リリアンヌに魔法を教える気配を見せないのである。

「だから、リリアンヌは学校に行けてなかったから、まず勉強から……」

「それは、何度も聞いてわかってるわ！」

字が読み書き出来ないリリアンヌは、まず勉強するようにルビウスに言われた。だから、せっせと勉強して、同い年のレイチェルと並ぶ学問をマーサ小母さんも驚く速さで、身に付けたのだ。

「何時までたっても、魔法教えてくれないじゃない！」

「いや、だからその……」

「何をしてらっしゃるんです、兄上？」

リリアンヌは、はっとルビウスの背後より声を掛けてきた青年を見た。ルビウスと同じぐらいの年のその青年は、緩く巻かれた艶やか

な焦茶色の毛を短く切りそろえており、ルビウスと揃いの漆黒の瞳が鋭くリリアンヌを見ている。どこかルビウスに似ていて、どこか違う人物だ。

「あー、直ぐに行くよ。アレックス。」

「本当に祖父様じいちゃんの言うとおり、この娘を弟子になさったのですね。」どこか侮辱したような態度で、リリアンヌを見下すと、何に氣にくわないのかふんと鼻を鳴らした彼は、まだリリアンヌを見ている。

「そんな態度をするな。リリアンヌ、彼は私の弟でアレックス・シエルダ候。」

紹介されたアレックスは、形だけ優雅に紳士の礼を取った。リリアンヌも遅れて礼を返して、ふと思った。

「もしかして、あなた…。」

「ああ、ミミズクの姿で一度会ってる。」

ぶすつと応えるアレックスは、眉間に皺がよっている。

「あの時は、失礼致しました。」

「こちらこそ。」

頬を引きつってお互い微笑むと、リリアンヌとアレックスは火花を散らした。どうやら、2人は相性が悪いようだ。

「アレックス、そろそろ行こうか。わざわざ迎えに来てくれたんだ

ろ。フレドリッヒも待たさせているし。」

そこへ仲裁に入ったのはルビウスで、アレックスは渋々フレドリッヒが待っている馬車へと向かった。

「リリアンヌ、帰ったら魔法教えてあげよう。」

「本当!？」

「ああ。だから、良い子で屋敷で待っているんだよ。」

「ええ、勿論。」

馬車へ向かう間際、ルビウスはこっそりリリアンヌに囁いて頭を撫でた。そして、馬車の手前で待っていたアレックスにも何か囁くと、馬車に乗り込んだ。何を囁かれたのかリリアンヌはわからなかったが、こちらを見たアレックスの顔が真っ青だったのはしつかりとわかった。

遠くなる馬車を見送くると、入れ違いにティアという焦茶色の馬に乗った、オリヴィアが屋敷へと帰ってきた。

リリアンヌは、走って馬小屋へと向かう。

「お帰りなさい。」

馬小屋でティアから降りたオリヴィアに、リリアンヌは声を掛けた。

「ああ、リリア。ただいま。」

「今日は早かったね。」

オリヴィアは王都近くにある、16から通える二年制の大学部に通っている。だから、何時も帰って来るのは、一番最後である。

「うん、ちよっと。」

ローベルおじさんの家の脇を2人仲良く通り過ぎながら、オリヴィアは天を仰いだ。

「なんか、嫌な予感がするのよね。森もざわめきたってるし。」

先程まで暖かい昼間の天気だった大空^{そら}は、今にも雨が降り出しそうな天気となり、幾分暖かくなったにも関わらず、急に気温がぐっと寒くなった。

「嫌な天気だわ。フレッド兄さんは？家にいるの？」

ぶるっと体を縮こませたオリヴィアは、呑気に未だ天を仰いでいるリリアンヌに聞いた。

「居ないよ。先生と一緒に出掛けた。」

「そうなの？フレッド兄さんまで連れて行くなんて。先生、どこに行くって言ってたか知らない？」

「確か…、リップなんとか侯爵がどうか、話してたかな。」

「リップーシア侯？あの魔法嫌いの説教魔か。じゃあ、先生とフレッド兄さん、今日遅くなるわね。道理で私に、早く帰れて連絡が

来たわけだ。」

ぶつぶつと独り言を呟いていたオリヴィアは、ふっと鼻をひくつかせて辺りを見た。

「どうしたの？」

「何か来る。リリア、早く屋敷に入りなさい。しばらく、屋敷から出ては駄目よ。良いわね？」

どうしても聞くリリアンヌの質問には答えずに、オリヴィアはリリアンヌを屋敷へと追い立てた。そして、あの子達を迎えに行つてくると言つて、慌てて出て行つてしまった。あの子達とは、すぐ近くのパータリサにある学校に行つているジョナサン達の事だ。わざわざ迎えになど行かなくても、直ぐに帰つてくるのにと、リリアンヌは談話室の長椅子でごろりと横になった。ちょっと横になっただけのつもりが、いつの間にか寝入ってしまったようで、リリアンヌが起きたのは、オリヴィアが迎えに行つて二時間が経とうとした頃だった。

「みんな、帰ってるのかな？」

廊下に出て、皆を探してみるが、誰もいる気配がしない。何時もなら、長椅子で横になるなど行儀の悪い事をする、怒りに来るマーサ小母さんも居ない。屋敷は、気味が悪い程静かだ。その事に危機感を募りながら、リリアンヌは食堂に降りて、窓から外の気配を伺つてみた。外はリリアンヌが屋敷に入った時と対して変わりはなく、時折窓に強い風邪が打ち付けるだけだった。屋敷から出るなど言われたリリアンヌは、大きな窓の鍵を外して両窓を解き放った。

「外見るぐらいならいいよね。」

勢い良く冷たい風に刃向かって、窓から身を乗り出すと皆が帰ってくる森を見つめた。もう直ぐ夏はそこまで来ていると言うのに、寒さは冬に逆戻りしたようで、この異常な寒さにリリアンヌは身震いした。やがて、森から黒い人影が出てきて、それが兄弟弟子だとわかるやいなや、リリアンヌは屋敷から飛び出していた。

「お帰り…」

「リリア、伏せなさい!!」

後ちよつとで皆の所に行けるという場所で、オリヴィアからの厳しい声でリリアンヌはびくりと立ち止まった。そんなリリアンヌを短い草花が、まるで意思を持ったかのようにリリアンヌを覆い隠して、地面に無理矢理伏せさせた。

「うえ。」

いきなりの事に受け身が出来なかったリリアンヌは、思いっ切り地面に顔面と体を打ち付け、痛みに変な声を出した。オリヴィアは、そんなリリアンヌを狼の姿で軽々と飛び越えて、いつの間にかリリアンヌの背後に居た、黒い影に噛み付いた。

「うわあああ。」

男性の悲痛な声が聞こえなくなると、変わりにジョナサンの怒った声が直ぐ側で聞こえた。

「ヴィア姉さんに、屋敷から出るなって言われてだろっ!このバカ

！」

草を払いのけて体を起こすと、非常に怒った顔のジョナサンが、上から見下ろして居た。

「つい忘れたの。」

膨れっ面でジョナサンを見て、そのまま顔を後ろに向ければ、黒服を着た人間が、真っ赤な敷物の上で事切れていた。その人間の首もとに食らいついていたオリヴィアは、口元を赤く染めて2人を見た。

「ジョーン、皆を連れて屋敷に入りなさい。」

何時ものオリヴィアの声より幾分低いその声は、リリアンヌを震えさせるのに十分だった。ジョナサンは、そんなリリアンヌを無理矢理立たせ、こちらに向かっていた三人の弟妹弟子に、屋敷に走るよう指示した。

「後ろを向かずに、屋敷まで走れ。」

ジョナサンはそう言うと、弟子達が通り過ぎた時に、とんとリリアンヌを押して走らせた。よろよろと走り出したリリアンヌに、レイチェルは手をさしのべて引っ張ってくれた。その時、リリアンヌとジョナサンがいた場所から、派手な爆音と砂埃が四方に飛び散った。リリアンヌの頭には、散った草や泥が空から降ってくる。

「何!?! なんで空からこんなの降ってくるの? って、そうじゃなくて! ジョーン兄さん大丈夫なのかな。」

ぜいぜいと息をしながらリリアンヌは、レイチェルに声を張り上げ

て聞いた。

「ジョーン兄さん、空間移動魔法使えるから多分、大丈夫だと思う。」

レイチェルは振り向きもせずに応えたが、リリアンヌは気になって振り向いた。2人が居た場所とはや、人間が立ってられないような場所となっており、その少し離れた場所にジョナサンが空中に浮いている。俄かに確かめると、リリアンヌは再び速度をあげて走り出した。

「レイル、ジョーン兄さん大丈夫だっ」

言葉を言い終わらない内に、いきなり立ち止まったレイチェルの背中にぶち当たって、リリアンヌはその痛さに顔をしかめた。しかし、今日は災難だなあとも呑気に思った。

「なんで、あんたがここに居るんだ！」

怒り狂ったジュリアンの声に、リリアンヌは鼻をさすりさすり、レイチェルの背中から顔を出した。

「おや、ご挨拶だ事。儂は、お前達に会いに来たんじゃないんだよ。」

屋敷に続く道を塀の前で、2人の大柄な黒づくめ男を従えた老女が、立ちふさがっている。

「別に、あんたなんか会いたい奴なんていない！早く帰れ。」

「お引き取りを。マリエダ様。」

ドスの利いたエリックの言葉で、小柄な老女は、ははっと乾いた笑い声を上げた。

「この儂に、帰れだど？ そんな事は、もう少しマシな人間になってから言うもんだ。」

その言葉が合図だったように、大柄な男とは別の黒ずくめの男が二人、宙からジュリアンとエリック目掛けて落ちてきた。二人とも手には、鋭く磨き抜かれた短剣を持っている。

「あぶなっ」

リリアンヌが叫ぶよりも早く、エリックとジュリアンはとっさに反対へと跳び、刃から逃れた。

「お嬢ちゃん方、呑気に観戦してる場合じゃないんじゃないかい？」

はっと振り返れば、大きな鎌を振りかざした2人の大男が、リリアンヌとレイチェルに留めをさそうとしていた所だった。しかし、鎌が振り下ろされるより早く、リリアンヌとレイチェルの足元に魔法陣が浮かび、瞬時に2人は屋敷とは反対の場所へと移動していた。

「ちっ、フレドリッヒか。間の悪い。」

老女が呟いた声を辛うじて聞いた時には、2人は痩せた背中に庇われていた。

「お久しぶりですね。マリエダ・コウリース様。」

何時も通りの淡々としたフレドリッヒの声に、宙に浮いてこちらを伺っている老女は、ふんと不服そうに答えた。

「儂は、お主だけには会いたくなかったわ。遠隔魔法の使い手で、ルビウスの一弟子、フレドリッヒ・ラービン。やはり、あやつは真っ先にお主を返して来たか。」

「お褒めいただき光栄です。」

さらりと言ったのけるフレドリッヒの背中を見つめていたリリアンヌは、顔を出して周りをこっそり伺った。左手の崖っぷちでは、オリヴィアが狼姿のまま、三人の顔が見えない違う敵と戦っていて、時折炎の魔法使っているし、その反対側では、ジョナサンが空間移動魔法とやらを繰り返して、顔が見えない相手から逃げ回っているのが見える。エリックとジュリアンは、それぞれ先程の相手と塀の近くで、悪戦苦闘している。つまり、今は呑気に話などしている場合ではないのだ。

「今日は何が目的で？わざわざ先生やアレックス様が居らず、私までも居ない時を見計らっていらっしゃったのなら、弟子達の内、誰かだと見て良いでしょうかね。」

「察しが良いな。儂は、その古代魔女の屍が欲しくて参った。さあ、その娘をこちらに渡すのだ。大人しく渡すと言うならば、今回はお前達の命は見逃してやる。」

老女にしてはか細い、しわしわの右手をこちらに出したマリエダは、嬉しいそうにそう言った。

「そんな事を私がするとでも？そんな馬鹿な事をした時には、先生に酷い目にあわされます。それに、この子は七番目の弟子です。つまり、私の妹弟子。私は先生に代わって、この子を守る義務があるんですよ。」

「ほお。儂とやり合うと？お主は良くても、他の弟子達はもうボロボロでないのか。」

ふわふわと宙を漂う彼女は、面白そうに辺りを見渡した。

「大丈夫ですよ。先生が選んだ子達ですから。簡単にはやられません。」

言葉が言い終わると、マリエダの真下に金色の光を放つ、魔法陣が浮かび上がった。

「世間話は、この辺にしておきましょうか。」

「遠隔魔法で来るのか。残念だがフレドリッヒ、遠隔魔法は対象物の一部が地に着いていなければ、何の意味も示さない。知っていると思ったが。」

残念そうに話す彼女にお構いなく、フレドリッヒは陣を発動させた。

「ええ、勿論知ってますよ。でも、それはあくまで基本。それを応用させれば、便利になるんです。」

【列鎖^{れっさ}、縛り縄】

フレドリッヒが呟いた声に反応するかのように、魔法陣が光り、そこから沢山の銀色の鎖が出てきたかと思えば、一気にマリエダの体に巻きついて、地面に叩きつけた。

「うわー、凄い！」

舞い上がる砂埃り顔をしかめながら、フレドリッヒの背中から眺めていたリリアンヌは、ぐいっと引っ張られて後ろを見た。

「何？ レイル。」

「あんまり乗り出すと、フレッド兄さんの防衛壁術が崩れる。」

「防衛壁術？」

こくつと頷くレイチェルは、空を指差した。

「これなに？」 先程までなかったそれは、まるで薄い膜のようで三人を包み込んでいる。

「これが防衛壁？」

「そう。」

【壊^{かい}】

そんな悠長な2人の会話は、マリエダの呪文により、打ち切りとなった。

「面白い事をするじゃないか。だが、遠隔魔法ばかりに頼ってはいけないのお。」

さらさらと砂と化した鎖の残骸から、むくりと起き上がったマリエダは、右手の人差し指でマッチ並みの火を灯すと、ふうと森に向け

て火を放った。マリエダの小さな火は、強風に煽られて見る見るうちに、巨大な炎の大蛇となり森に向かう。

「フレッド兄さん！」

レイチェルの切羽詰まった声と同時に、森は瞬く間に火の海と化していく。

「ああああああ！」

その森と連動するかのように、オリヴィアが火に包まれ、声にならない絶叫が辺りに響いている。

「ほれほれ。森の火を早くしなければ、あの子が丸焼けになってしまうぞ？まあ、狼の丸焼きという旨そうなのが、出来上がるが。」

「ヴィア！」

「火を消すには、お主が使えぬ自然魔法を使わねばならんな。実に見ものだ。」

けたけたと笑うマリエダを一瞥すると、フレドリッヒは2人にそこを動かないように言って、森へと向かった。

「ヴィア姉さん！」

しかし、オリヴィアの痛々しさに見ていられなくなったレイチェルは、あっさりと言い付けを忘れて外に飛び出した。

「レイル！」

それを追ったリリアンヌも、フレドリツヒの防衛壁を潜ると、外に飛び出した。

【氷結】

黒ずくめの相手を凍らして、息の根を止めたレイチエルの元に駆けつけようとしていたリリアンヌは、ふと後ろに気配を感じて振り返った。

「本当に馬鹿な子達だ。」

その言葉を発した口元は、弧を描いている。静かに佇む人物にリリアンヌは悲鳴も上げず、その場に立ち尽くした。先程はフードを被っていて顔が見えなかったが、黒のフードを取った彼女の顔は、確かに年老いた老女の顔だった。しかし、それは、リリアンヌよりも若い少女が腐蝕した、何とも見るも無惨な姿である。

「お前さんの命は、どんな味がするのか。楽しみだ。」

そう言いながら、袖口から少し大きめな短剣を取り出して、リリアンヌの足元へと突き刺した。

「簡単には、死なせられないがね。あの子が怒り狂う様さまが見たいから。さあ、剣を取りな。自分で死を選ぶのだよ。」

頭の中は嫌だと叫ぶのに、言葉に逆らえなくて、勝手に体は剣手を伸ばす。剣など手に取ったことの無いリリアンヌには、ずっしりと重く、それが人の命を奪う物だと伝わってくる。ひんやりとした首もとの感触に意識を取り戻せば、自分で刃を首に押し当てていると理解した。

「残念だねえ、ルビウス。儂の勝ちだ。」

くつくつと笑う本来なら人間にあるはずの目がない、顔を見つめて
リリアンヌは、ぐっと自身の手に力を込めた。

まだ、死ねない。

まだ、死んではいけない。

やり遂げないと

いけない事

が、あるから。

目を閉じて、短剣を握りしめた右手をその想いと共に、首元を強く
切り裂いた。生暖かい血が顔に降り注ぎ、目を開けた。丁度、マリ
エダの首の右側から色鮮やかな紅色の血が、吹き出していた。

「何故だ。何故、鏡映しが使える。まさか…」

ドサツと力無く仰向きに倒れた老女を冷たく見やると、リリアンヌ
はそっと近付いていく。

ああ、そうだ。留めを刺さないと。

ぼんやりと考えて、彼女の上に馬乗りになったリリアンヌは、ぴた
りと左胸に短剣を押し当て、留めを刺そうとしたが。

「駄目だよ、リリアンヌ。君の手は、人を殺める為にあるのではな

いのだから。」

ふわっと暖かい体温に抱きしめられたと思ったら、マリエダから引き離され、ルビウスの腕の中へと収まっていた。

「マリエダ様、随分と弟子達を可愛がって頂いたようで。御礼を申し上げます。」

冷たく笑うルビウスをぼんやりと見つめて、リリアンヌは体を託した。

「何、大した事は無い。」

「そうですか。」

「しかし、出遅れたな。」

むくりと、傷口を右手で押さえながら起きあがったマリエダは、ルビウスにニヤリと笑った。手からは、まだ血が溢れている。

「いいえ。計算通りですよ。まあ、リリアンヌが魔力を解放する事は読み違えました。」

リリアンヌから優しく短剣を取り上げると、血の付いた刃をマリエダに向けた。

「儂を殺すか？」

「守る為には、何かを犠牲にしなければいけませんからね。それが、守ると言うことですよ。」

「親切に、魔法を教えてやった恩を、仇で返すか。」

寂しそうに溜め息を付いたマリエダを冷たく見つめるルビウスは、全く気にもとめなかった。

「破壊の魔法だけね。」

「教えてやったのには、変わりないだろう。それに儂は、カインド家の者だ。儂を殺せば、幹部が黙っては居らん。」

「あなたはもう、カインド家の者では無いのでしょうか。それに、爺様からは許可を頂いてます。」

顔が引きつるマリエダをにっこりと微笑んで、言葉を続ける。

「あなたが好きな、破壊の魔法で死なせてあげますよ。」

ひゅんと風邪を切る音と共に、マリエダの首には、きらりと光る短剣が深く刺さっていた。そこで、リリアンヌの視界はルビウスの手平によって、遮られた。

「君が見るような事ではないよ。」

ぎゃああと叫ぶマリエダの声と、ボンと何かが破裂する音が耳に届いたが、何があったのかリリアンヌには確かめようもない。

ルビウスが手をのけた際には、マリエダの姿は無く、どす黒く染ま

った地面だけがあった。

「先生。」

いつの間にか側に来ているジョナサンが、控えめにルビウスに声を掛けてきた。

「ジュリアンが先生の指示通り、1人生かして捕らえています。」

「分かった。ありがとう。他は？」

「俺とエリックの相手も、自害しました。すみません。」

「ふむ、まあいいさ。ジョナサン、エリック。リリアンヌを連れて、先に屋敷に戻ってなさい。」

ジョナサンにリリアンヌを引き渡して、するりとオリヴィアとレイチェルのいる場所へ向かった。その後、少し離れた場所にいたエリックも合流して、屋敷へと戻った三人は、談話室でのんびりと茶を飲んでくつろいでいる、アレックスを見つけて驚いた。

「シエルダ郷、何故こちらに？」

驚いたエリックが声を上げると同時に、長椅子から腰を上げてコツコツとこちらにやってきた。

「兄上からの指示だ。先程の対戦、なかなか見事な物だった。流石、兄上の自慢の六人の弟子達だ。しかし、まだ生きて捕らえるのは、難しかったようだ。」

くつくつと笑うアレックスは、ずいっとジョナサンに背中に背負われた、リリアンヌを眺めている。

「ふーん、なる程ね。ああ、彼女はこちらに。」

ジョナサンの視線に気付いたアレックスは、近くにあった長椅子を指差した。

「兄上は後始末に？」

「ええ、でも直ぐにお戻りになられると思います。」

ボロボロのエリックが、丁寧に答えたのに納得したアレックスは、静かに長椅子に横になっているリリアンヌに近くいていく。

「これから王都から、幹部や保安員なんか来て、ここも騒がしくなるだろう。兄上のご機嫌が損なわれるな。」

ふうと溜め息をついて、リリアンヌを覗き込んだ。

「兄上が戻られるまで、その姿を戻してみるか。」

「アレックス様？一体、何を。」

ポツリと呟いた言葉に一番近くにいた、ジョナサンが反応した。

「ちょっと、試してみるだけだ。」

懐から手の平大の手鏡を取り出すと、リリアンヌに見せた。

「これが、今のあなたの姿だ。」

手鏡を覗き込めば、そこには肩につかない短い真っ黒の髪と、真っ赤な目をしたリリアンヌの姿があった。

「…私じゃない。これは、私なんかじゃない！嫌っ。」

自身の姿を見てわなわなと震え、アレックスの手鏡を振り払うと、それは壁にぶつかって粉々に砕け散った。

「リリア、落ち着け！」

ばたばたと暴れだしたりリアンヌを鎮めようと、ジョナサンとエリックは、オロオロと周りに群がるが、一向にリリアンヌは落ち着かない。

「アレックス、何をしている？」

その時、フレドリッヒを従えたルビウスが、戸口に立っていた。

「あ、兄上。」

つかつかと、アレックスに歩み寄ったルビウスは、ぱしんと乾いた音でアレックスの左頬思いつ切りぶった。

「私はリリアンヌの魔力が暴走しないように、お前をつけたんだ。余計な事はするな。」

「申し訳ありません。出過ぎた真似を致しました。」

冷たい言葉で、アレックスを叱りつけ、詫びの言葉を受け取ると、しゃがみ込んでリリアンヌを抱きしめた。

「大丈夫だよ、リリアンヌ。ゆっくり息をして。」

リリアンヌは、ルビウスの言葉通り、ゆっくりと息を吸ったり吐いたりして、気持ちを落ち着かせようとする。

「自分の姿を思い出してごらん。髪はどんなだった？」

「銀色の髪…。」

「そうだね。じゃあ、目は？その色だったかな。」

ふるふると首を横に振って、リリアンヌは否定した。

「もう少し暗い色。」

「うん、そうだね。見てごらん。ほら、元通りだろう？」

ぼやっと柔らかい光に包まれて現れた、丸い鏡を恐る恐る覗き込む。そこには元通りの銀色の少女が、同じように向こうの世界から覗き込んでいる。

「うん。」

やんわりとルビウスに微笑むと、腕の中に閉じ込められて、ほんとと小さな子供をあやすように、背中を優しく叩かれた。

「アレックス、爺様がここが片付き次第、王都のカインド本邸に戻るようにと。私も弟子達の学期末までには皆を連れて戻る。」

「承知しました。」

恭しく頭を下げて、部屋を出て行った。

「フレドリッヒ、ジョナサン、エリック、聞いていた通りだ。学年が上がる秋には、王都についていなくてはいけないから、学期が終わる夏までに、全て荷造りを終わらせて、何時でも出立出来るようにしておきなさい。」

「分かりました。オリヴィアとジュリアン、レイチエルにもそのように伝えます。」

フレドリッヒが部屋を辞すると、ジョナサン、エリックも後に続き、部屋は静かな静寂に包まれた。大きな時計の針の音だけが、部屋に響く。

「と言うわけで、リリアンヌが学校に行く頃には、王都に着いているから、王都の学校に通う事になるよ。」

「一つ聞いてもいいですか？」

「いいよ。」

リリアンヌは、疑問に思っ居た事を聞いてみた。

「さっきのマリエダとか言う人、誰ですか？私の事、狙ってたんでしょう？」

「答えるのは一つだけ。あの人、マリエダ・コウリースは爺様の妹にあたる人だよ。もう、カインド家とは、繋がりがいい人だけだよ。」

「そうなんだ…。じゃあ。」

「うん？」

嬉しそうに聞くルビウスを無理やり腕で遠ざけ、彼の腕から脱出したりリアンは、長椅子の上に仁王立ちとなって言い放った。

「魔法、教えてもらいますから！」

ああ、覚えてたの。と溜め息をつくるルビウスに、勝ち誇ったように微笑むリアンは何というか、8歳の少女にしては女性の色気を醸し出している。

「仕方がないね、約束していたから。」

取りあえず、座りなさいと言葉を続けるルビウスに大人しく従い、長椅子へと座った。

「魔法はね、決して万能ではないんだ。」

少し悲しそうに言うルビウスは、視線を窓へと移した。外はすっかり日が暮れている。

「例えば、人が怪我をしたとする。それを治すのに、治療魔法を使う。けれど、それはその人自身の治る力を助けるだけ。治す力が無い者は、どれだけ治療魔法を使っても意味が無い。魔法と言うのは、時に無力だ。」

一息ついて、更に言葉を続ける。

「攻撃魔法・防衛術は、どんな人を殺める道具よりも簡単に、人を殺せる。また、どんな頑丈な盾よりも対象物者を守る。けれどね、その分使う者の心、精神を壊すんだ。」

ルビウスは、窓から目を離してリリアンヌを見つめた。

「いいかい、リリアンヌ。どんな小さな魔法を使う時も、自分の心を見失ってはいけないよ。」

「大丈夫よ!」

あっさりと返したりリアンヌに困惑しながら、ルビウスは続きの言葉を探した。

「だから…」

「だから、私に魔法を教えて。」

言葉を被せるようにリリアンヌが言った言葉が、沈黙を破った。

「そうだね、君はどんな時も前だけを見つめてる。」

ルビウスは、くつりと自嘲した笑みを浮かべて呟いた。

「え?」

聞き返したりリアンヌに、何でもないよと言うと、話を変えた。

「リリアンヌ、君の能力は言霊ことだまだね。言霊によって自分の魔力を封印し、眠らせる。また、相手の魔力を奪って自分に取り込む。さっき、君の髪や目が変わったのは、魔力が目覚めたから。もしかして、気づいてなかった？」

あんぐりと口を開けたリリアンヌは、こくりと頷いた。

「まあ、能力はなかなか自分では、気付きにくいからね。後、魔法は使い手の性格と比例するんだ。リリアンヌは、攻撃魔法が得意分野となるだろうね。」

どういう意味だと皮肉気に呟くりリアンヌを、ルビウスは楽しそうに笑う。右手を一振りすれば、家具がわらわらと窓辺に集まってくる。そして、ルビウスはよいしょと立ち上がった。

10. 神隠しの風蘭（前書き）

風蘭ふうらんと読みます。

10. 神隠しの風蘭

リリアンヌの目の前、床一面には古い洋紙が広がっている。その中央に立っているのが、ルビウス。

家具が隅に移動された後、見計らったように古びた洋紙が現れ、一面に広がったのだ。

「これはね、面倒くさがり屋の爺様が作ったものなんだ。この文字で描かれた魔法陣に乗ると、その者に合った魔法、魔術を自動的に探し出してくれる。本来なら、一つずつ魔法が合うかどうか試して行くんだけど。」

肩を竦めながら、リリアンヌを中央まで案内する顔は、かなりあきれ気味だ。

「爺様は、それが面倒だったみたいだ。」

リリアンヌが中央に辿り着くと、銀色の細かい文字で書かれた魔法陣が浮かび上がってきた。

「うわっ。」

体が少し重力に逆らって浮き上がると、リリアンヌはびっくりした声を上げた。

しいーと目の前に居たルビウスが、人差し指を口に当てて静かにと合図する。

すると、

《お呼びかね。》

ぶわっとリリアンヌ後ろより、いきなり現れた魔法陣から、顔中もじゃもじゃの男が現れた。

《眠い…》

さらには、目をこすりこすり左手の魔法陣から出てきたのは、大きな真っ白な熊で、なんとも可愛らしく前足を前に出して座っている。

《久しぶりの外だわ！》

そう言って近くの小さな魔法陣から飛び出てきた、愛らしい人間の赤子のような妖精は、洋紙の切れ目で見えない壁に派手にぶつかり気絶した。

《おやおや、まだこんなに小さな子なのかい？》

次々と出てくる者達に、目を白黒させていたリリアンヌは、上から降ってきた声に顔を上げて叫んだ。

「うわああー。」

天井の魔法陣から上半身だけ飛び出た美しい真っ白の女性は、普通に見れば美しいのだろうが、何せ天井から白く長い髪をダラリと垂らした姿は、幽霊としか見えない。

《何だい。失礼だね。その辺の魂と一緒にしないでくれ。》

気に障ったのか、ふんと言って引っ込んでしまった。それを見てリリアンは、少しばかり申し訳なく思った。次々と溢れてくる、奇妙な者達をどうしたらいいのかと途方に暮れていたリリアンに、ルビウスが笑いながら声を掛けてきた。

「これは皆、神だったり精霊だったり、はたまた妖精だったり。悪魔も稀にいるんだけど。全員リリアンと契約したいとか、力を貸したいと願う者達なんだ。爺様は、面倒くさがりで大ざっぱで。作ったは良いけれど、微調整を怠ってね。一遍に沢山の精霊達を招く事になった。」

やれやれと、まだまだ出てきそうな個性豊かな精霊達にピシャリと言いつ放った。

「リリアンとの契約希望者は、上位5名までとする。それ以外の者は、速やかに退出しなさい。」

《えー！》

魔法陣から出てきたばかりの魔神達とその他達は、一斉にブーイングを浴びせた。

《そんなのずるいぞ！》

《勝手に決めるな。》

《私達にも選ばれる権利があるわ！》

そうだと猛抗議する声がうるさくて、思わずリリアンは叫んだ。

「うるさーいっ！黙って言うこと聞きなさい！大人しく帰らないと…」

《か、帰らないと…？》

ピタリと静かになった部屋で、小さな鬼の角を頭に一つ持った薄汚いコウモリが聞き返した。そんなコウモリを見ながら、あれが妖精だったら、小さな子の夢、がた落ちだなとリリアンヌは心の隅で思った。

「マーサ小母さんに頼んで、お前たちみんな晩ご飯の材料にしてやるー！」

くわっと口を開けて、リリアンヌは妖精達に突進した。

《わあー！！！》

そんなリリアンヌを見た沢山の精霊や妖精達は、我先にと魔法陣の中に入り込んで姿を消した。

ふん、と自身満々にルビウスを振り返れば、腹を抱えて笑っている。何が面白いんだと睨んでやると、ひいひいと息を整えて姿勢を直した。

「まさか、あんな風に追い払うなんてね。リリアンヌが初めてだよ。」

「だって、うるさかったんだもの。」

そんな会話をする2人の間を、ずいっと割り込んで来たのは、北風の精霊だという無表情の男。

《私と契約しろ。》

その言葉で静かだった部屋が、またうるさくなった。いや、私とだ！何を言う、あたいよ！と言い争いを始めた精霊に妖精、神々。ルビウスは、面白そうに眺めているだけである。

「待ってよ！あなた達を私が選ぶでしょう？ちよつとは静かにして！」

シュンとした精霊達におかまないなく、リリアンヌは続ける。

「このままじゃ埒が空かない。でも、私は魔法とかよくわからない。だから、一つだけ条件をつける。」

びっしと残った5人に指差して、リリアンヌは告げた。

「私の事を、一番に思ってくれてる者と契約する。」

すると、我こそが一番だとまたもや、口論が始まってしまった。うーん、と首を捻るリリアンヌに、ほとんど両足で跳びながら、軽やかに近づいて来たのは、一風風変わりな服装をした小柄な少年だった。

《リリアンヌ様、私めが一番にあなた様を思っております。》

「ふーん。」

切れ目の灰色の目を見ながら、リリアンヌは適当に相槌を打つ。

《その証拠に、私めはこの場を辞退させて頂きます。あなた様は、只今、大層お困りの様子。私め一人が辞退し、あなた様の負担が少しでも楽になればと、思った次第で御座います。》

「なかなか、面白いわね。じゃあ、貴方にする。」

《ありがとうございます。これで、契約成立ですね》

勝手にリリアンヌは、契約をしてしまった。

「ちょっと待ちなさい！リリアンヌ。こっちへ…」 《私めの主に軽々しく触らないで頂きたい。》

手を伸ばしたルビウスは、風蘭にパシりと弾き返された。リリアンヌは面白そうに笑っている。

「さっきのお返しよ。」

べーっと舌を出すと、小柄な少年にこっそり頼んで、外に移動した。

「ざまあ、見ろ。さっきのルビウスさんの顔、見物だったなあ。」

《リリアンヌ様が満足していただいて、私めも嬉ゅうございます。》

少年の力を借りて、屋敷から森の出口へとリリアンヌは来ていた。

「そう言えば、自己紹介まだだった。私、リリアンヌ。よろしく。」

《これは、失礼致しました。私、^{わたくし}神隠しの風蘭^{ふうらん}と申します。》

両手を真っ赤な着物の袖に互い違いに入れて、ぺこりと風蘭は頭を下げた。

「フウラン？神隠し？」

《いえいえ、風蘭でございます。神隠しとは、まあ子供を隠したりする事でしょうか。》

ニュアンスが違うのか、何度も風蘭はリリアンヌの言葉を直した。神隠しの事には触れず、リリアンヌは思案した。

「さて、どうしよか。」

軽はずみで屋敷を出たが、ルビウスは怒っているだろう。

《宜しければ、少し遠出をなさったら如何です？》

瞳と揃いの灰色の髪をてっぺんで一つのお団子にしており、それを手櫛で直しながら、風蘭は提案した。

《あのカインド邸には、少しばかり迷宮の術と後消しを使いました故、暫くはルビウスも追って来れないかと。》

「迷宮の術と後消し？」

《迷宮の術と言うのは、文字通り建物を迷宮にしたり、対象者を迷い込ます術で御座います。後消しはまあ、言わば足跡を消して無か

った事にするものです。これで、あのルビウスも追っては来れますまい。》

ふふんと胸を張る風蘭を、ほおと尊敬の眼差しで見ていたリリアンヌは、ふと疑問に思った事を聞いた。

「呼び捨てなんだ。」

《ルビウスの事で御座いますか？あれとは長い付き合いで…》

「そうだな。随分長い付き合いだ。」

はたと2人は止まって恐る恐る、ポータリサの町へと続く道のりを見つめる。道のだ真ん中、そこには、眉間にこれでもかと、皺をよせて怒った顔のルビウスが、片手を腰に当てて突っ立て居る。

「ひいー。」

《リリアンヌ様、だだ大丈夫で御座います！私めが必ずや、》
「とにかく、逃げよう。」

すっかり怯えた風蘭の言葉に聞く耳持たずで、リリアンヌはくるりと森へと向かった。

「どこに行くんだい？リリアンヌ。」

先程まで、誰もいなかった森へと続く道に、ぬっとルビウスが立ちふさがった。

「うわっ、何で!？」

後ろを見れば同じようにルビウス、左右にもルビウス。

「分身の魔法だよ。すっかり油断したよ、風蘭。君は随分、僕をコケにしてくれたね。暫く向こうで反省してなさい。」

ひゅんと風を切った音と共に、後ろに居た筈の風蘭の姿が、消えていた。

「リリアヌ、屋敷に戻るよ。何時までも、君の遊び相手をしてられる程、暇でもないからね。」

その後、瞬時に屋敷に戻ったリリアヌは、ルビウスに散々怒られ、外出禁止令を貰ってしまった。

「ルビウスさんの馬鹿！嫌いよ。」

唯一の反撃にとルビウスに浴びせた暴言は、あっさりと交わされてしまい、さらには、

「そんな事言う子には、きつい罰が必要だね。」

部屋から一步も、出して貰えなくなった。

そして、王都に移る日が刻々と近づき、いつの間にか暑い暑い夏が来ていた。

第二章 新しい土地で（前書き）

さあ、王都に。

第二章 新しい土地で

学校に行っていないリリアンヌ以外の弟子達は、長い夏休みへと入り、荷造りも粗方片付いた頃、皆が朝食を取ってる食堂にツカツカとやって来たルビウスは、おはようの挨拶もそこに皆にこう告げた。

「今日から王都に移るよ。」

そんないきなり！と怒るのは、リリアンヌだけだ。

「みんな、荷物は玄関に持ってくるように。男の子達は、女の子達の荷物を運ぶのと、マーサ小母さんを手伝ってあげて。」

それだけ言うと、さっさと部屋を去って行った。いつもこうだから、そんな事で怒ってたら身が持たないわよとオリヴィアに言われ、リリアンヌはやれやれと席を立った。部屋に戻ったりリリアンヌとレイチェルの2人。

「前の日に言っというて欲しいよ。」

レイチェルの荷物を手伝いながら、リリアンヌは呟いた。リリアンヌの荷物はほとんど無く、オリヴィアから貰った服を鞆に詰めただけで、至ってコンパクトである。

「先生、ギリギリで何時も言う。」

少し苦笑しながら、レイチェルは教材を扉へと持って行く。

「おーい、重いものあったら持つぞ。」

そこへ、こんこんと扉を叩いて入ってきたのは、藍色の半袖のシャツに白いズボンを履いたジョナサン。

「みんな魔法使えるんでしょ。なら、何で使わないわけ？」

重そうな教材をレイチェルから受け取ったジョナサンは、リリアンヌの質問に面倒くさそうに答えた。

「魔法ばっか使ってたら、体持たねえよ。」

そんなもののなの？とレイチェルを見やれば、そうだよと答えた。

片付いた部屋から、軽い手提げの鞆を持って下に降りれば、何やら玄関が騒がしい。

「こんなに一杯要らないよ！」

「マーサ小母さん、そんなに荷物を積んだら、リアンが潰れてしまいます！」

半分起こったような声のジュリアンと、焦ったエリックの声。一階に降り立つと、山積みになった袋の山。その荷物に埋もれた、ジュリアンの頭が辛うじて見える。

「ああ。リリア、レイル！お前たちには、これをあげるよ。」

男の子なんだから、これくらい大丈夫よ。と自身満々に答えるマーサ小母さんは、リリアンヌとレイチェルに目を付けた。今度は、リリアンヌとレイチェルの腕に山ほど荷物が渡される。

「「あ、ありがとう、マーサ小母さん。」」

何が入っているのか検討もつかないが、リリアンヌとレイチェルは取りあえず、お礼を言っておいた。にこにこと笑うマーサ小母さんは、はっと2人の後ろに居る人物に思い出したように、声を張り上げた。

「ジョーン！こら、逃げないでこっちにいらっしゃい。」

客間から出てきたジョナサンは、マーサ小母さんを見るや、ぎよつとして来た道に戻って行った。その後をこれまた山積みの荷物を持って、マーサ小母さんが追っかけて行く。

「これ、何入ってるんだろ。」

隣に、重そうな荷物を持ったジュリアンが、よろよろと並んだので、リリアンヌは聞いてみる。

「えっ？何が入ってるかって？人それぞれ違うよ。おれのは、多分薬品だな、これ。」

よっこいせと紙袋を床に置いて、ガサガサと中を探るジュリアンの背後から、リリアンヌとレイチェルはこっそり伺う。

「風邪薬に、解熱剤、胃薬に頭痛薬。眼薬、粉薬、液体薬、これは、固形の薬か。あれ、何で二日酔いの薬まで??? うえー、まだあるじゃないか。」

ぶつぶつと呟きながら中身を出すと、瓶に入った薬品やガーゼ、包帯など無限ポケットのように出てくる。

「リアン兄さん、そんなに怪我とか病気になるんだ。」

「何でか、弟子の中では頻繁に病気になるし、一番怪我するから、王都に行く時は、こうやって山ほどくれるんだ。」

王都には、薬剤師や医者なんか沢山居るのにな。と迷惑そうに言うが、どこか嬉しそうだ。

「リリアとレイルのは?」

ジュリアンが、顔だけ振り返って聞いてきた。その返事に、どさどさと中身が無造作にひっくり返しすと、リリアンヌの荷物からは、真っ赤な林檎やオレンジなどの果物に、料理で使う粉末の調味料などが出てきた。

「果物は大好物だけど、調味料を私にどうしろと?」

料理はマーサ小母さんを手伝って、少し作れるぐらいにはなったが、目の前には半年分の量の調味料がある。

「作れってことじゃねえ?」

同情するぜといった顔をリリアンヌに向けながら、ジュリアンはレイチェルの中身を探っている。

「おい、リリア。レイルの方がもっと凄いぞ。」

くすくす笑いながら、リリアンヌに差し出したのは、一冊の本。

「なにになに？ 『これで貴方も一気に人気者！ 友達100人作ろう偏』」

一冊は割と分厚く、表紙にはそう書かれている。他には、人見知りを直します、人との上手な付き合い方など。似たような本が、ざっと50冊はありそうだ。恐らく、人見知りのレイチェルが、王都で新しい友達を作れるか心配した、マーサ小母さんの親切心だろう。贈られた当人は、さも迷惑そうだが。

「気持ちだけで有り難いね。」

そうだよなあと3人揃って、はあと溜め息をついた。

「なんだいなんだい、若者達が溜め息なんかついて。」

そんなどんよりした場に、にこやかに登場したのは、ルビウスである。

「いえ、小さな親切大きなお世話って事だけっす。」

ぶすつと返したジュリアンに何かを察したのか、ルビウスは静かに三人を見つめた。

「食べ物、山の山、本の山、全部君達を思った気持ちだろう。今はわからない思いが、その内身にしみてわかるようになる。今は黙って、有り難く頂きいておきなさい。フレドリッヒは、山程お見合い写真を貰ったよ。」

おと三人はフレドリッヒに同情し、それと同時に自分達の荷物を集めながら、それぞれに自分の方がまだマシだと思ったのだった。

「さて、荷物だけ先に本邸に転送するから、一カ所に集めて。」

全員が揃った所で、ルビウスはそう声をかけた。

「ヴァア姉さん、火傷もう大丈夫？」

さり気なく、オリヴィアに声をかけたリリアンヌは、そろりそろりと顔をあげた。あの謎の黒服達の奇襲で、オリヴィアは酷い火傷を負ったと聞かされていた。だからてっきり、顔に火傷の跡が残っているのだと思ったのだ。けれど、見つめた顔は何も変わらない綺麗な、オリヴィアの顔があった。

「あんなの、すぐ直っちゃったわ。」

ケロツと答えたオリヴィアに、拍子抜けした。魔法の力だろうかどうかは知らないが、取りあえず良かったとリリアンヌは安堵した。

「リリアンヌ、そこに居たら一緒に転送されてしまうよ。」

苦笑しながらひよいとルビウスに引っ張られて、リリアンヌは自分

が荷物の場所に1人、立ち尽くしていた事に気づいた。

「そのまま、転送してもらったらいいいじゃん。」

にやにやと憎まれ口を叩いて居るのは、ジョナサン。そんなジョナサンに、いーっと顔をしかめてやると、リリアンヌは凄い量になった荷物を見つめた。ほとんどは、マーサ小母さんからの贈り物だろうが。

「一仕事頼むよ、ロン。」

その言葉で、銀色の魔法陣が現れ、左右からくりくりとした二つのドングリ目がこちらをキョロリと見ると、荷物を魔法陣で包み込んで消えた。

「今のなに？」

「さあ、なんだろうね。」

荷物が在った場所を指差すリリアンヌの質問に、ルビウスはさらりとしらを切った。

「何って、聞いているんだけど。」

もう一度聞けども、ルビウスは答えず、玄関入って右側、階段の手前に一つだけある扉に近づいていった。

「無視された。」

ぷくーと、頬を膨らませて怒るリリアンヌの隣にレイチェルがやって来て、言った。

「あれ、ロンだよ。」

「名前を聞いてるんじゃないくて…。」

ガクツと肩を落として、もう良いと諦め、ルビウスの背後へと近づいた。ルビウスはチャリンチャリンといわせて、沢山ある様々な鍵から、扉の鍵を選んでいる所だった。

「沢山鍵あるー！ちょっとだけ見せて。ねっ、お願い。」

ルビウスの腕の下から、レイチェルと覗き込んで居たリリアンヌは、右手を伸ばして鍵を取ろうとした。

「駄目だよ。」

さっとリリアンヌが伸ばすより早く、ルビウスは一つだけ鍵を取って、沢山の鍵束を反対側の右ポケットにしまってしまった。

「うー、見るぐらい良いじゃん。けちっ！」

「そう言う悪い言葉遣いは、一体誰から習ったのかな？」

ちらりとルビウスがジョナサンを見たが、当人は素知らぬ顔をしている。

「けちな人には、教えてあげません！」

ぷいっと顔を逸らしたりリアンヌに苦笑して、ルビウスは扉をコンコンと軽く三回ノックした。

「みんな、順番にマーサとロベルトに挨拶しておいで。」

がちやと扉を開けたその体制で、ルビウスは弟子達に指示した。すると、我先にとジョナサンとジュリアンが、玄関先に突っ立っていた2人の元に駆けていった。

「じゃっ。マーサ小母さん、ローベル爺さん、元気だな。」

「ばいばーい。」

それだけ言うと、ジョナサンに続きジュリアンも回れ右をして、ルビウスが開けている扉の向こうへと、飛び込んでいった。

「ジョーン、少しは大人なさいよ！リアン、体には十分気をつけるんですよ。」

「へーい。」

「はーい。」

扉の向こうからは、2人の気の抜けた返事だけが返ってきた。

「お二人とも、大変お世話になりました。お元気で。」

そう挨拶するのは、エリック。

「リック、仕事ばかりで、ちょっとは遊びなさいな。」

心配そうに言うマーサ小母さんに、大丈夫ですときっぱり答え、律儀に頭を下げた。どう見ても、5歳児とは見えない礼儀正しさだ。するりと扉の向こうに消えたエリックと入れ替わりに、今度は入り口にオリヴィアが立った。

「お世話になりました。じゃあね。」

「こら、オリヴィア。ちゃんと挨拶しなさい！」

怒るルビウスを交わして、さっさと扉の向こうへと消えた。

「何時までも、サボってたらいけませんよ！」

キツク言うマーサ小母さんにわかってるわくと口だけのオリヴィアの声が返ってきた。

「マーサ小母さん、ローベルお爺さん、大変お世話になりました。あんな弟子達を許してやってください。また顔を出しますので。それまでお元気で。」

2人と握手を交わしているのは、フレドリッヒ。

「私達の事はいいから、早く良いお嫁さんを見つけてなさい。」

そうだそうだと言うロベルトと、マーサ小母さんを交互に困った顔で見で、ではと言って扉に入って行った。

「リリアンヌ、レイチェル挨拶してきなさい。」

兄弟弟子の挨拶を只見つめていたリリアンヌは、トボトボと2人に歩み寄った。

「ああ、リリア。」

近くに來たりリアンヌを、レイチエルと別れを惜しんでいたマーサ小母さんが、抱きしめてくれた。

「お前は、弟子達の中で一番良い子だったよ。元気でね、いつでも遊びにおいで。」

「王都では、楽しい事が沢山ありますよ。」

涙を拭くマーサ小母さんの隣から、ロベルトはにっこり微笑んだ。

こういう時は、なんと言えば良いのか。見送られた事が無いリリアンヌは、少し考えて2人にこう言った。

「ありがとう。またね、マーサ小母さん、ローベルお爺さん。」

にっと笑ったりリアンヌに、驚いた顔をした2人だったが、

「何時でも待ってるさ。」

と優しく送り出してくれた。

「さあさあ、ルビウス様とレイルが待ってますよ。早く追いき。」

扉の前では、2人がこちらを伺っていた。

「うん。」

扉の近くにやってきたリリアンヌは、レイチェルと手を繋いで潜ろうとしたが、名残惜しくなって後ろを振り返った。

「ルビウス様…。」

「仕方がないよ、国王からの命令だから。」

「けれど…。」

「マーサ、ルビウス様はちゃんと説明して下さいただらう？」

わっと泣くマーサと、それを慰めるロベルト。

どうしたんだと戻ろうとしたが、レイチェルに引き留められてしまった。

「マーサ、泣かないで。向こうの方がきちんと防壁も張れるし。知人達も力をかしてくれる。爺様もいるし。だから心配ない。リリアンヌはちゃんと守るから。」

えっと思った時には、ぐいっとな誰に引っ張られ、リリアンヌは扉の向こうへと来ていた。

1. 王様の住まう場所

「ようこそ、王都へ！」

先程扉からは、貴族が住まうであろう屋敷の廊下が見えていたが、こんなおじさんは居なかったぞとリリアンヌは怪訝そうに見つめた。目の前には、そろそろ初老を迎えるであろう、やたら元気なおじさん。後ろには、レイチェルとマーサ小母さん達とまだ話しているルビウスが、扉の向こうに見える。

「もし、そこのお嬢さん。そんなに警戒せずに、私と一緒に街に行きませんか。今、街は十年に一度しかない、〴〵シャルルのお祭り〴〵がやっていますし……」

嬉々としてペラペラと語るおじさんに、ばしーんと銀色の甲冑かっちゅうがリリアンヌの後方より飛んで来て、おじさんの顔面にぶち当たった。

「爺様、うちの愛弟子に何をしてらっしゃるんでしょうかね？」

冷ややかに片手で扉を閉めながら、ルビウスはおじさんを見ている。

「失礼なっ。私は、可愛い孫と、その愛弟子に直々に挨拶をと。」

床に大の字に仰向けになったままのおじさんは、どうやらルビウスのお祖父さんのようだ。

「何を仰います。ちゃっかり手を、出そうとしていたではありませんか！」

「これしきの事、手を出したことはない。入らん。」

爽やかに微笑みながら起き上がったお祖父さんは、座り込んだままルビウスを見ている。

「反省してないんですね。あつ、こんな所に良さそうな槍が。」

「まま待ちなさい！」

ルビウスのすぐ脇に在った、頭の部分だけがない、鎧兜が持つ槍をルビウスは手に取ってお祖父さんに向けた。向けられたお祖父さんは、慌てて止めている。

「冗談に決まってるだろう。槍をしまいなさい。危ないだろう。全く、何を怒っているんだ？お前らしくない。」

「貴方には関係ありません。」

ぶすつと愛想悪く返すと、槍を元の場所にしまい、リリアンヌとレイチエルを見た。

「紹介するよ。彼は、私の爺様。シリウス・カインド。」

少し癖のある黒髪に、紫色の瞳をした彼は、はじめましてと微笑んでいる。到底ルビウスの祖父とは思えない、外見の若さである。

「爺様、後ろに隠れているのが、六番弟子のレイチエル・ディオムです。手前が七番弟子のリリアンヌ。」

紹介された2人は、おずおずと頭を下げた。

「なる程、ディオム家の末娘殿と、あの噂のリリアンヌ殿だったとは。」

ふむふむと1人納得するシリウスを無視して、ルビウスは2人に外で遊んでくるようにと言った。

「私と爺様は、話があるから。ジョルジオ、案内してやってくれ。」

ルビウスがそう言うと、ふっと年配の執事の服を来た男性が、シリウスの後ろに静かに姿を現した。

「お任せください、若旦那様。」

「爺様、少し良いですか。」

頭を下げる執事の脇を通って、ルビウスはシリウスと去っていった。しまった。

「お嬢様方、お初にお目にかかります。私、本邸で執事長を任されております、ジョルジオ・ターナーと申します。わからぬ事が御座いましたら、何なりと私に申し付け下さい。」

「はじめまして。私はリリアンヌ。こっちは、レイチェルよ。」

柔らかな笑顔をジョルジオに向けると、冷たい藍色の目が穏やかに細められた。

「ほら、レイルも挨拶しないと。」

後ろに隠れたままのレイチェルを、つんつんと肘でつつく。

「：こんにちは。」

しかし、レイチェルはリリアンヌに隠れたまま、小さくそう言っただけだった。

「すみません。」

「ようございますよ。お気になさらず、人見知りなのでございますね。では、リリアンヌ様、レイチェル様、お庭に案内致しましょう。」

レイチェルの愛想のない挨拶にも顔色一つ変えずに、ジョルジオはさつと身を翻して2人を案内する。

「みんな、どこ行っただらう？」

きよろきよろと辺りを見渡しながら、リリアンヌは独り言のように呟いた。

「ハイデイリアご兄弟は、先程中庭におられました。他のお弟子の方々は、お出掛けにらっしゃいました。」

機械的に答えるジョルジオに、そうですかとリリアンヌは返して、ふと視線を感じて振り返った。

「リリア、どうかした？」

右斜め後ろにいたレイチェルが、不思議そうに聞く。

「誰かに見られてたような気がして……。気のせいかな。」

振り返った廊下には、ルビウスが閉めた突き当たりの扉と、その両脇に銀色の鎧。右側にずらりと規則正しく窓が並び、反対には扉が数えるほど在るだけで、人の隠れる場所は無い。

「いかなされました？」

先を歩いていたジョルジオが、2人が付いてこない事に気が付いて、後ろより声をかけてきた。

「誰かに見られてた気がしたんですけど、気のせいみたいです。」

再び歩き出そうとするリリアンを、ジョルジオは反対に引き止めた。

「どの辺りから視線を？」

キラリと藍色の目を光らすジョルジオに肩を竦めて、リリアンは一番右側の遠い窓を指差した。ジョルジオは、カツカツとシリウスよりも年を取ってると見えるその体格で、窓に近くと勢いよく窓を開け放した。

「どうやら、リリアン様のおり、気のせいようです。人が居たとしても、ここは三階です。」

暫く外を伺っていたジョルジオは、窓を閉めながらそう言った。

「さあ、気を取り直して中庭に参りましょうか。」

短い向日葵色の髪を靡かせて、ジョルジオは戻ってくると、2人を少しせき立てて、その場を離れた。

中庭に下りた2人は、四面を邸で囲われてるとは思えない程広く明るい綺麗な庭に、言葉を失った。

「凄く綺麗で、暖かい庭だね。」

近くに在った白い薔薇の花壇を見ながら、リリアンヌはそう表現した。

「リリアンヌ様はこの庭を見て、そのように思われましたか。昔、この庭を見てそう表現された方が、一人だけおられましたのを思い出します。」

「へえ、誰？」

リリアンヌの興味津々の間^{とい}に、ジョルジオは首を傾げて答えた。

「もう…、忘れました。私も年ですね。」

そんな筈無いだろうと、口を開こうとしたが、賑やかなハイデイリア兄弟の登場で打ち切りとなった。

「リアン、お前ちょっと食い過ぎじゃねえ？」

「ジョーン兄さんの方が、食い過ぎだよ。」

「いいや、違うね。おっ、そのチョコクッキー美味そう。もうらい。」

「あー！それ最後に食べようと思ったのに。」

片手一杯にお菓子を持つ2人は、何やら楽しそうだ。

「ジョナサン様、ジュリアン様、また厨房に忍び込んで、キャサリンのお菓子を摘み食いなさったんですね。」

小さく溜め息をつくジョルジオには気付かず、2人仲良く言い合いをしている。

「キャサリンて？」

隣にいたレイチェルに聞いてみる。

「さあ？こっちの本邸には、私も来たことないから、よく知らない。」

顔を向けて問いかけたが、反応が薄く帰ってきた。リアンヌは首を回して、兄弟を見た。ジョルジオが間に入って、2人を叱っている。

「私は、キャサリンのお菓子に手を出さないよう、申し上げたはずですが。一体、どちらが言い出したんですか。」

呆れてジョルジオが兄弟に聞くと、お互いを指差して答えた。

「「こっち。」」

「何だよ、ジョーン兄さんが言い出したじゃないか！何、人に罪を被せてるんだよ！」

「はあ！？リアンが、挨拶代わりにキャサリンのお菓子盗もうって、言っただろうが。」

「言っていない。」

「言ったね。」

「2人とも、いい加減にしろ。」

永遠に続きそうな言い合いは、向かいの大きな両扉から現れた、ルビウスの言葉でぴたりと終わった。彼は、右脇に背の高い新緑の目と美しい金髪の髪をした、華奢な女性を連れている。「何を言い合ってるかと思えば、またキャサリンのお菓子を盗んだのか。」

やれやれと肩をすくめたルビウスは、向かい側にいたリリアンヌとレイチェルを見た。

「リリアンヌ、レイチェル。これから、国王に会いに行くよ。レミとソラという侍女がいるから、着替えさせて貰ってから玄関に来るように。ジョナサン、ジュリアンはキャサリンに怒られていなさい。」

ルビウスが言い終わるや否や、隣にいた女性が、腰に手を充てて前に出てきて大きな声で、ジョナサンとジュリアンを怒鳴った。

「私の丹誠込めて作ったお菓子を、盗み食いするなんて！覚悟は出来てるんでしょうね、2人とも。」

綺麗な容姿には不似合いな、どす黒いオーラを纏った（まとった）

彼女は、口々に言い訳する2人を無視して首筋を掴むと、ズルズルと2人を連れて右脇に在った小さな扉の向こうへと、連れて行ってしまった。扉が閉まった後でも、2人の喚き声がリリアンヌの元まで届いていたが。取り残されたリリアンヌとレイチェルに、ジョルジオは今のがキャサリンだと丁寧に教えてくれた。

「彼女は、大変優秀な料理人なんですよ。怒ると手が先に出てしまう、少々困った所が御座います。」

少々ではない気がするが、そこにはあえてふれずに、小さく無言でリリアンヌは頷いた。その後直ぐに現れた、赤毛を持つ双子のレミとソラにリリアンヌとレイチェルは部屋へと連れて行かれ、魔法使い・魔女の正装である黒服に着替えさせられた。真っ黒なワンピースは膝上にあり、襠が広いのでくると回れば、ふんわりとスカートが広がり、危うく下着が見えるのではないかと心配になる。指定の黒いブーツは、歩きたびカポカポと鳴るし、頭を通して着るだけのフード付きマントは大きめで、スカートがすっぽりと隠れ、まるで何も履いていないかのように錯覚する。

この国では、男女共に16で成人となる。女性は成人前であるなら、膝上のスカートを着ると決まっている。反対に成人した女性は踝くるぶしまである丈の長いスカートを履く。因みに、男性は成人になると、半ズボンを履いてはいけない決まりとなっている。

「大変お似合いです。」

深紅の赤毛に金色目をした双子の片割れが、リリアンヌを見て誇らしげに笑った。

「このマント、何とかならない？」

袖口が広く、ひらひらと舞う袖を掴んで、リリアンヌは困ったように聞いた。

「お気に召されませんでしたか？」

少し悲しそうに聞く片割れに、慌てて違うと両手を振る。

「それはようございました。もう直ぐ、レイチエル様も準備が整う頃でございましょう。」

その言葉を合図に、目の前の扉が開いたと思ったら、揃いの黒い服装で身を包んだレイチエルが、目に涙を沢山溜めて入ってきた。その表情を見れば、余程人に触られるのが嫌だったのだらうと伺える。

「リリアっ。」

ててっとリリアンヌに近づくレイチエルを横目に、双子の片割れ（リリアンヌについていたほう）は、静かにそっくりな片割れに聞いた。

「レミ、何でレイチエル様は泣いてらっしゃるの？」

「わからない。着替えをお手伝いさせて頂こうと思ったら、いきなり泣き出されてしまったよ。ソラ。」

「それは、貴方の手伝い方が雑だったからでは？レミ。」

「そうなのかしら、ソラ。」

「どうなのかしら、レミ。」

全く同じ容姿で、機械的に同じ声、口調で会話をする2人を見ていたりリアンヌだったが、仕舞いに気分が悪くなり、気にしないでと2人に言って、レイチェルを連れてルビウスが待つ玄関へと急いだ。玄関の両扉を勢いよく開け放って邸の外に出たリアンヌは、ふと後ろにそびえ立つ大きなカインド邸を見上げた。

鮮やかな蘇芳すおうの建物に鳶色とびいろの扉が規則正しく並び、山鳩色の屋根は穏やかな斜面を描いている。何とも風変わりな邸である。

「リアンヌ、何を見てるの？」

優しくかけられた言葉に振り向けば、にっこり微笑んだルビウスがいた。

「変わった邸だなんて。」

素直に思った感想を述べると、面白そうにルビウスは笑い、リアンヌの手を取って、門の目の前に止まっている二頭立ての馬車へと歩き出した。

「リアンヌの言ってる事は、当たってる。それに邸は、住む者を表すからね。私の祖父母はかなりの変わり者だから。」

クスクスと笑っていたルビウスは、はたりと立ち止まってリアンヌとレイチェルに振り返った。

「リアンヌ、レイチェル。これから城に向かうけれど、一番大事なことを言い忘れるところだったよ。」

馬車の手前でルビウスは、左膝を着いて2人に目線を合わせた。

「いいかい、城には国王がいらったしゃる。あの人の前では、絶対に私語は禁止だ。いいね。」

訳が分からずも静かに頷く2人を確認したルビウスは、声を潜めて話を続けた。

「それから…」

「カインド魔法大臣。」

きつい咎めるような声に、ルビウスは顔を陰しくしかめて、声の主を振り返った。

「ルーベント宰相。」

「お弟子さん方に、余計な事を吹き込まないで頂きたい。」

馬車の後ろ側から現れたルーベント宰相は、冷たい灰色の瞳を細め、銀色の細長い眼鏡を右手の人差し指で押し上げた。きっちりとネクタイと襟をしめた彼は、見てるこっちが肩が懲りそうな程、完璧なスタイルで立っている。

「色々な知識、世の中の事を教える事が、私の師としての仕事です。」

「貴方のようなまだ年若い方が、師と呼ばれるとは。」

ふんと空色の少し長い髪をかき上げると、ルーベント宰相は物珍し

そうにリリアンヌとレイチエルを見た。その失礼な態度にリリアンヌは、言い返してやろうと口を開いたが、ルビウスに遮られてしまった。

「そのお言葉、そっくりそのままルーベント宰相あなたにお返ししますよ。」

「どういう意味です？」

「そのままの意味ですが。」

「…まあ、いいでしょう。お迎えにあがりました。どうぞ馬車へ。」

「わざわざ宰相殿直々にお迎えとは、よっぽど私は陛下に信用されていないですね。」

苦笑しつつ、後ろにいるリリアンヌとレイチエルに、マントについているフードをすっぽりと被せた。

「フードを取らないようにね。さあ、行こうか。王が住まう城しろへ。」

こっそり囁いて、ルビウスは2人を馬車へと導いた。全員が、馬車乗り込むと、馬車はゆっくりと走り出した。

「そう言えば、まだ名を名乗っておりませんでしたね。私わたくし、リヴェンデル国の宰相を務めております、ルノ・ルーベントと申します。陛下に謁見する際に諸注意がございますので、よくよくお聞きくださいますようお願い致します。

これからお会いする国王は、誇り高き現第37代国王陛下です。くれぐれも粗相のないように。次に、城内じょうないではどんな偉大な魔法使い

でも、魔法魔術は禁止です。特にルビウス・カインド公。」

レイチェルの向かいに座るルーベント宰相は、睨みを効かせた顔で、隣に座るルビウスを見て言った。

「貴方は、計108回もの城内違反を犯してらっしゃる。このままでは、大臣として下の者に示しが尽きません。もっと自覚を持って行動していただかないと。」

厳しく咎められたにも関わらず、ルビウスはまったく反省を見せず、わかってますと答えリリアンヌとレイチェルに向かって「二方とも法衣が似合いつてるね。」と微笑んだ。

そんなルビウスを見て、ルーベント宰相は、溜め息をついて話を続けた。

「今日の披露式の流れですが、国王の始まりの言葉をまず頂き、その後チャーリー第一王子のお披露目、カインド公の六番弟子と七番弟子の紹介、各大臣達の報告等、そのあと休憩を挟み、夕刻より夜会となります。」

さらさらと喋るルーベント宰相の意味が分からず、首を傾げてルビウスをリリアンヌは見た。

「今日は、第37代国王の婚礼式なんだ。僕の伯母にあたるシャロン伯母上は、従兄弟のチャーリーを産んで直ぐに夫を亡くされたんだ。国王は結婚されていないし、跡取りも必ず必要だ。それで、血筋も一樣王家に入るからと、結婚が決まったらしいね。実は僕も、お二人の婚礼式の事を今朝知ったところなんだ。そのため、今日集まるのは身内のものと、ごく少数の大臣、幹部だけ。だから、今日

の事はしばらく内密と言うことらしい。その収集で、君達を国王に謁見しろと。魔法使い・魔女は、新しい弟子をとったら、国王に見せる事になってるから。」

難しい顔をしたルビウスを眺めて、リリアンヌはふーんと納得した。

「まあ、カインド家は現国王の姉君、今は亡き第一王女の嫁ぎ先です。血は薄れど、チャーリー王子は、立派な王家の血を引く方です。何の問題も在りません。」

自信満々に答えるルーベント宰相を、ちらりと横目で見たルビウスは、小さく呟いた。

「叔父と姪にあたると言う問題だよ。」

そんな話をしてる間も、リリアンヌ達を乗せた馬車の車輪は不気味な程、軽快にリズムを刻んで城へと向かっている。

2. リヴェンデルの国王（前書き）

長くなりました。

2. リヴェンデルの国王

大きくゆったりとした馬車の中は大変快適で、背にある朱色のクッションに凭れながら（もたれながら）、リリアンヌは2つある窓の内、手前の窓から外を眺めていた。すると、城の一番外にある外門がいもんへと馬車は着いた。沢山の衛兵がいるの眺めていると、馬を操っている御者が、カインド公爵の馬車と国王から城に収集された事を伝えて。衛兵から通って良しと言われると、静かに馬車を走らせた。ちよつと走っては、城の門を守る衛兵に止められ、また走り出すを繰り返し、中門内門なかもんうちもんを通ってやっと城の入り口へと着いたのだった。馬車をルビウスに促されて、レイチェルと共に外へ出ると、目の前には、見上げる程大きな真っ白な城がそびえ立っていた。鋭く尖った城一高い円端には、真っ白な旗が風ではためき、紫色で描かれたイヌワシの模様が凛々しくリリアンヌ達を見下ろしている。

「リリアンヌ、レイチェル行くよ。」

既に、開け放たれた城の大きな大きな両扉の前にいるルビウスを、2人は慌てて追いかけた。

ルビウスの後ろについて、慣れないブーツをかぽかぽと音立て、リリアンヌは歩く。城内部は天井の屋根は遙か高く、塵一つ落ちていない、よく磨かれ抜いた綺麗な真白い床があるだけで、全く辺りには何もない。先頭を歩いていたルーベント宰相は、真っ直ぐ正面にある扉へと近づく。その後習って3人が続き、扉の両脇に居た衛兵にルーベント宰相がカインド公爵だと認識させた。

「ルーベント宰相殿帰還。カインド公爵と二名の弟子殿のご来城で

す。」

扉が勝手に開くのと同時に、2人の衛兵は、そう声を張り上げた。扉が開け放たれると、ずらりと何十人もの兵が敬礼の姿勢で、両脇に列をつくって並んでいた。その異常な光景に、リリアンヌは内心大丈夫かこの人達と思った。

「ルーベント宰相殿、カインド魔法大臣、お久しゅうございます。2人のお弟子殿、ようこそリヴェンデル城へ。私、幹部理事のリカ・ベクトルと申します。」

その列の最後尾に、菫色の髪に、空色の目をした若い男性が立っていて、彼はそうリリアンヌに名乗った。

「ここから先は、私が案内致します。」

人の良さそうな顔を4人に向け、さっと案内する彼は余程人の相手をするのに長けていると見える。

「どうしました？ルーベント宰相。」

完璧な顔の表情をベクトルに見えぬよう、歪ませていたルーベント宰相にルビウスは声を掛けた。

「私は、どうもあの男がどうも好きに慣れないのです。あの顔でこちらを見られると、虫ずが走ります。」

「お気持ち察します。」

ルビウスも、リリアンヌ達に見えぬよう、顔をしかめて同感した。

ベクトルに案内され、沢山の階段を上り、廊下をくねくねと長い道のりを歩き、ようやく式が執り行われると言う儀式の間に着いたの頃には、太陽はすっかり傾きかけていた。

「一体何をしてらっしゃるんですか、ベクトル殿。」

場所は、儀式の間の扉前。

口元をひきつらせながら、ルーベント宰相はへらへらと笑っているベクトルを見た。

「いやあー私としたことが。すっかり道に迷ってしまって、皆様をつれ回してしまいました。これは失礼。」

そのバカにしたような態度で、ルーベント宰相の限界を超えた。

「貴方は、自分が何をしたのか分かってるんですか！」

ガミガミと出来の悪い息子を叱る母のように、ルーベント宰相はベクトルを怒鳴った。

とんがり帽子を押さえながら、やれやれと首を振って呆れているルビウスに、リリアンヌはこっそりと聞いた。

「何でルーベント宰相は怒ってるの？」

「ベクトル殿が道を迷って、式に遅れたんだ。婚礼式は特別でね。無断欠席、遅刻は絶対許さない。だから、僕達が入ることが出来ないんだ。」

壁に腕を組んで寄りかかって、彼はリリアンヌに説明した。

「さて、どうするかな。」

陛下に合わせる顔がないと、怒鳴るルーベント宰相と怒られているのに、へらへらと謝っている2人をどこか面白そうに眺めてルビウスはそう呟いた。その時、ガチャリと重い扉が開いて、きっちりとした正装に身を包んだシリウスが出てきた。

「何をしてるんだ？式はもう始まってるぞ。早く入りなさい。」

あれ？とリリアンヌが首を傾げると、横からルビウスが説明してくれた。

「多分、爺様が国王を説得してくれたんだよ。爺様はリヴェンデル国幹部、元老の1人だから。」

くすくすと笑って、ルビウスは祖父の元へと近づく。

「特別だぞ。晴れの姿、まあ、二回目だが、甥であるお前にも見て貰いたいとシャロンも言っていたから。」

ぽんぽんとルビウスの肩を叩いたシリウスは、ベクトルに以後気を付けるよう咎めて、部屋へと戻った。

その後、ルビウス、リリアンヌ達も続く。部屋へと足を踏み入れると、そこには煌びやかな世界が広がっていた。

眩い（まばゆい）程、綺麗な明るい部屋は無駄な飾りはなく、床には赤い絨毯が敷かれ、白い壁面には細やかな模様が描かれている。

正面には一際高い位置にある黄金色に輝く椅子に座る、貫禄ある王らしき人物と、その向かって左に、真っ白なドレスに身を包んだ女性性が座っている。ルビウスは、脇に控える大臣らしき人物達に会釈

して、真っ直ぐに進んでいく。リリアンヌ達は、ルーベント宰相に入り口付近で待機するよう言われ、大人しくその言葉に従った。

「国王陛下、遅くなり誠に申し訳ございません。」

王座に近づいたルビウスは、左膝について頭を下げ、詫びた。それを見ていた、黄金色の髪をもつ、まるで百獣の王のような国王は、立派に蓄えた髭を撫でながら、地響きする声でこう答えた。

「良い、許す。しかし、二度はないと思え。さあ、面を上げよ、我が国が誇る漆黒の魔法師よ。」

「はっ、ありがとうございます。」

「堅苦しい言葉は辞めよ。今日を以て、伯父と甥と言う関係になったのだから。」

愉快そうに微笑む王を見つめていたルビウスは、伯母に祝いの言葉を送りたいと言った。王に促されて、近くに下りてきた純白のドレスの女性は、穏やかに微笑んだ。それを見ていた王は、扉近くに居たりリアンヌ達に近づいてきた。

「其方が、ルビウスの言っていた弟子達か。」

近衛兵を後ろに従えて、リリアンヌ達の目の前でピタリと立ち止まった王は、がっしりとした体格でリリアンヌ達を見下ろした。

「しっかりと勉学に育むよう。」

優しくリリアンヌとレイチェルに置かれた手からは、温かさが伝わって来た。私語は禁止だと言われていたため、リリアンヌは何も言わず、頭を下げた。

「あつ、陛下へ。」

すると突然、リリアンヌの後方からベクトルの声が聞こえてきて、どんとリリアンヌは突き飛ばされた。

「陛下、この度は誠に…」

ベクトルがつらつらと喋るのを王は無視して、リリアンヌを凝視していた。

「そなた…。」

「古代魔女だー！」

王が言葉を言い終わらない内に、1人の大臣らしき人物が叫んだ。

「陛下、お下がりで下さい。」

後ろに従えていた2人の近衛兵が、王を守るように鋭い剣を前に掲げてリリアンヌに向けている。瞬く間に、リリアンヌは重々しい鎧に身を包んだ兵に囲まれ、槍と銃口を向けられた。

「待つのだ、お前たち！」

王の一声で、引き金を引こうとしていた青色の服を着た兵達は、一斉に止まった。リリアンヌは、被っていた筈のフードが頭から落ち

ているのに気づき、慌てて被り直した。すると、ふんわりと体が浮き、誰かに抱きかかえられていると分かった。

「ルビウス。」

王が忌々しいそうに睨む先には、リリアンヌを抱えたルビウスがいつの間にか立っていた。

「私の弟子に銃口を向けるなど、いい度胸ではありませんか。」

顔は笑っていても、ルビウスからは殺気が漂っている。

「狼族に人魚の娘などと、魔族を弟子にとったかと思えば、今度は古代魔女か。」

怒りにふるふると震えながら、年老いた金色の目をルビウスに向けて王は叫んだ。

「古代魔女など絶対に許さん！今すぐ抹殺せよ！」

「私の弟子です。貴方に、とやかく言われる筋合いはありません。」

「何だと!？」

王たる人にさりとそう言うと、ルビウスは兵の円の外にいるレイチェルに声を掛けた。

「レイチェル、そろそろ帰るよ。」

レイチェルが頷いたのを確認すると、ルビウスは優雅に微笑んだ。

「国王陛下、シャロン伯母上。本日はお招きありがとうございます。チャーリー王子にお会いできなかったのは残念ですが、お二人のこれからの門でを甥として、心よりお祝い申し上げます。このような祝の言葉で大変恐縮ですが、私はこれにて失礼致します。」

「待ちなさい、ルビウス！」

王の言葉に一切耳を傾けず、レイチェルが近くに来たのを確認して、黒いマントを翻した。

「カインド公、これで城内違反、109回目ですぞ！」

「ルビウスに当たらぬよう、あの古代魔女を抹殺せよ！」

怒ったルーベント宰相の声と怒り狂った王の声が、視界が消えるのと同時にパタリと途切れた。煌びやかな部屋がぐにやりと歪んだと思ったら、いつの間にか城の外上空をリリアンヌ達は浮いてのだった。

「そ、空に浮いてるっ。」

びっくりしてリリアンヌは、ルビウスにキツくしがみついた。右腕にリリアンヌ、左腕にレイチェルを抱きかかえてふわふわとルビウスは、空中に漂っている。

「そうだね。浮いてるね。」

はたと笑うルビウスは、近くにあった城の縁にトンと着地して、2人を抱え直した。

「城の敷地内では、魔法規制が敷かれてるから、雑な魔法しか使えない。その所、理解して欲しい。」

その言葉が言い終わらない内に、ルビウスは何もない空中へと足を踏み入れた。

「え。」

気付いた時には、リリアンヌ達はまたまた空中の中に居た。先程と違うのは、安定感。ふわっと浮いたと思えば、一気に重力に従って落ちていく。

「いやあゝ、落ちているっ。死ねゝ、まだ死にたくないー。」

そう叫んびながら、リリアンヌは必死にルビウスにしがみつく。

反対側にいるレイチエルを見やれば、至って平気そうな顔で、どんな神経をしているのかと疑う程だった。城の壁面は凄い勢いで過ぎ去っていくし、マントがはためく音がうるさい。息が苦しくなった頃、追い風に押されて、前に進む。

びゅんと風に押されて、吹き上げられたと思ったら、またもや凄い勢いで落下していく。そんな繰り返しで、リリアンヌの気が遠くなりそうになった時、あの不思議な館の屋根が階下に見えた。その屋根と上階を魔法で突き破って（建物には全く支障が無かったようだが）最下の部屋にどすっと鈍い音を立てて、立派な造りの長椅子へと着地した。

「うっ。」

「けほけほ。」

遙か空から着地したにも関わらず、長椅子はびくともせず変わりに白い埃が辺りに舞って、リリアンヌは咳き込んだ。ルビウスも、着地の衝撃には思わず声が出たほどである。

「これだから、城から帰ってくるのは嫌なんだよ。」

文句を1人言っている所で、リリアンヌは目を瞬かせて、聞いた。

「何で馬車で帰らないんですか？」

すると、ルビウスは2人を離し、とんがり帽子を取った。

「さっき言ったように、城には魔法規制が敷かれてる。国王陛下が住まうのだから、安易に刺客者が侵入出来ないよう、リヴェンデル国の魔法師でも魔法規制に引っかかるようになってるんだ。国王を先程怒らしてしまったからね。簡単には帰してはくれないと思って、低魔術を使ったけれど。ジョルジオ！」

右手でとんがり帽子を持ちながら、辺りに舞う埃を払っていたが、もう我慢の限界だというように、ジョルジオの名を呼んだ。ルビウスの声に呼ばれたジョルジオは、音一つ立てず右側にある戸口付近に姿を表した。

「お呼びでしょうか、若旦那様。」

「ジョルジオ、これで掃除したというのか？名家であるカインド公爵家がこのような、手抜きなどと陛下に知られたら！」

珍しく焦っているルビウスは、長椅子からがばりと立ち上がり、リリアンヌとレイチェルについてくるように促した。

「掃除係に厳しく言っておいてくれ。」

「はい、申し訳ありません。若旦那様、どちらに？」

ジョルジオの背後にある扉を開けながら、ルビウスは振り向きもせずに応えた。

「リリアンヌに魔法を教えてあげなければいけないから、部屋に戻る。陛下が来ても絶対に部屋に通すな。」

そう言って、不機嫌そうに綺麗に掃除された廊下を歩いていく。

「承知しました。」

まだ長椅子から舞い立った埃が舞う中、ジョルジオは静かに頭を下げた。そんなジョルジオを後ろに見ながら、リリアンヌはレイチェルと共に、歩く速度が速いルビウスに、精一杯ついて行った。

無言でルビウスの後をついて行く事数分、邸の最上階の西館という西の外れにある邸の一角へと、リリアンヌ達は来ていた。

ある扉の前に立ったルビウスは、扉を開いてリリアンヌ達に部屋の中に入るように言った。

部屋の中に足を踏み入れれば、少し薄暗く、暖炉が弱々しく灯っているだけである。後から入ってきたルビウスがつけた灯りに目を細めて、リリアンヌは部屋を見渡した。そこは、大人が10人座って

もゆったりと勉強出来るであろう、立派な机と多少子供が飛び跳ねてもびくともしないだろう上質な椅子が一つ。壁という壁にびっしりと収まっている難しそうな本の数々。

ルビウスは、辺りに魅入っているリリアンヌ達に目もくれず、マント、とんがり帽子に上着を洋服掛けに吊した。

「凄い本の数。」

自分の背よりも遥かに高い本棚を、首が痛くなるまで見上げていたリリアンヌは、ぽつりと呟いた。

「リリアンヌが読めるような本はまだ無いかな。」

いつの間にか、背後に立っていたルビウスにびっくりして、リリアンヌはぱつと振り向いた。振り向いた先には、いつものように笑うルビウス。

「機嫌直ったの…?」

怪訝そうにルビウスを見て聞けば、彼は首を傾げてリリアンヌを見た。

「機嫌？ 僕が怒っていたのは、陛下に対してだよ。さて、リリアンヌのお楽しみだった魔法を教えてあげようか。」

どういった心境の変化なのかと疑う程の心変わりだが、教えてくれると言うことに、リリアンヌは素直に喜ぶ事にした。

「何から教えようか。そうだな、うん。レイチェルもいることだし、2人とも風蘭と連水を呼び出しなさい。」

「どうやって？」

「出てきて欲しいとお願いするも良し、出てこいと命令しても良し。呼び出し方は、その人好き好きの呼び方で。」

寝室に繋がるであろう扉を閉めながら、リリアンヌの問いにルビウスは軽く答えてくれた。

そんないい加減な顔をしかめたリリアンヌの隣では、レイチェルが既に連水を呼び出す準備をしている。

《連水出てきて。》

リリアンヌにはわからない言葉で小さく呟いたレイチェルは、とんと地面を叩いた。
すると、地面がまるで水面のように波打ったかと思えば、次々とレイチェルの目の前に集まり、レイチェルとそっくりの形をとったのだった。

「連水、その姿なんとかならないかい？」

窓という窓を閉めたルビウスは、上等な椅子に座ってレイチェルの姿をとっている連水を見ていた。

《この姿の方が楽。》

「そうかい、それなら仕方ないね。」

はあとため息をついて、ルビウスはリリアンヌを見た。

「リリアンヌも風蘭を呼び出してごらん。」

「風蘭どこにいるの…？」

リリアンヌは、訳がわからないまま、心の中で風蘭に問いかけた。
すると。

《お呼びで御座いますか、リリアンヌ様。》

ふんわりとリリアンヌの目の前に、風蘭が舞い降りて来たのだった。

《リリアンヌ様から、お呼び頂けるなど、私め大変嬉しゅう御座います。》

ウキウキと両腕を互い違いに袖に突っ込んで、体を左右に揺らす風蘭は少しばかり可愛く見える。

「リリアンヌが呼びたくて、風蘭を呼び出したんじゃないよ。それに、そんな嬉しそうにするんじゃない。反吐が出る。」

《なんですか、ルビウス。いたのですか。》

とてつもなく嫌そうな顔をするルビウスを一瞥して、風蘭は言葉を

続けた。

《そう言いながら、私めの力が必要だったのでしょう？》

風蘭が話を終えると同時に、廊下から慌ただしい声が聞こえて来たのだった。

「陛下、お待ち下さい！」

「ここから先は、国王様でもお通し出来ません。」

容姿に似合わず慌てた声で制するのは、ルーベント宰相。対して、相変わらずの仕事口調のフレドリッヒ。

慌ただしい声は、段々と近付いてきている。

「まあ、今回ばかりは君の力を借りるしかないからね。僕は陛下を追い返すから、リリアンヌとレイチエルを連れて隠れてなさい。戻っていいと言うまでだよ。」

《仕方ありませんね。リリアンヌ様、レイチエル殿此方に。》

さつとリリアンヌとレイチエルは、

《当主。私もレイチエルと一緒に行くぞ。》

「止めても無駄なんだろう？ いいよ、行っておいで。」

半ばあきれ気味に許可を出したルビウスは、ゆつたりと椅子に腰掛けた。

「風蘭、くれぐれもよろしく頼むよ。」

扉が勢い良く開き、国王の怒声が耳に聞こえた時には、リリアンヌ達は既に風蘭によって姿を消していた。

「あれ―？」

リリアンヌの周りには見渡す限り、深い木々ばかり。隣にいるレイチェルは、どうってこと無さそうな顔をしている。

「ここは？」

リリアンヌの真後ろにいた風蘭に、取りあえず聞いてみる。

《ここは、カインド家が保護しております、静寂の森で御座います。
》

「静寂の森…。」

どっこいしょと近くの岩場に腰を下ろす風蘭を見ながら、そう言えば聞いた事があるなと考えた。

《しばらく森^{こゝ}で、様子を見ることに致しましょう。》

風蘭は、そう言って辺りに耳を澄ませた。

のどかな風に吹かれて、まるで別世界のような感覚に包まれる。聞こえてくるのは、風に揺れる木々の音、小鳥のさえずり。リリアン

又は、嬉しくなって隣にいるレイチェルに話し掛けた。

「レイチェル、こんなに木ばかりの森、私初めて見た！」

しかし、笑顔でレイチェルを見れば、無表情で遠くを見つめていた。

「レイチェル…？」

どうしたんだと話しかけようとした時、反対側の右袖を誰かに引っ張られた。振り向けば笑顔のレイチェル。

「あ、れ？」

二人のレイチェルを見比べているリリアンヌを見て、レイチェルは連水を紹介してくれた。

「それは連水。連水、リリアだよ。」

レイチェルの言葉に、ちらりとリリアンヌに視線を寄越しただけで、連水は何も言わなかった。

「連水、殆ど喋らない。でも、リリアのこと嫌ってない。」

あの表情の無い顔で、よくそんなことがわかるなとリリアンヌは感心した。

《風蘭、嫌な奴ら来る。》

《分かっています。では、連水。此方を頼みます。リリアンヌ様、レイチェル殿参りましょう。》

ピリピリとした殺気を出しながら、ぽつりと言った連水に少し不機嫌そうに答えた風蘭は、二人を誘導して森の奥だと思われる、少し薄暗い方向へと足を向けた。

「どうしたの？どこ行くの。連水は？」

思いつく限り風蘭に問いかければ、風蘭は一つ一つ丁寧に答えてくれた。

《ポータリサの方向より、リヴェンデルの国軍が来ております。数はざっと千。忌々しい現国王が命令したのでしょう。この速さは恐らく、精霊・悪魔の知識が豊富な幹部の中の誰かが、手を貸していると思われます。でなければ、神隠しの神であるこの私めが、居場所を突き止められる事など有り得ません。ですので、とりあえず森の住民達に手を貸して頂こうと思うのです。その間、連水が足止めをしてくれるので。》

ぴょんぴょんとはねるように進む風蘭を、レイチェルと共に必死に追うリリアンヌは、疑問に思った事を聞いた。

「なんで、国軍なんかがこんな所に？」

《其れは、リリアンヌ様。あなた様を殺すためでしょう。》

ぎょつとして足が止まったリリアンヌを、風蘭は促して先に進む。

「私、何もしてないんだけど。」

《リリアンヌ様が何をされても、されなくともルビウスの弟子で居

る限りは、あの忌々しい現国王は、見つけ次第殺そうとしてくるでしょう。》

「なんで？」

《恐れながら、その理由は私めには分かりかねます。》

リリアンヌの体の何十倍もある大きさの岩を登りながら、あの優しそうな人が何故と考えた。肩に手を置いてくれたあの暖かさ、それに…。

そこまで考えていた時、リリアンヌ達の後方からどんっと水が地面から吹き出て、リリアンヌはぼんやりとそれを眺めて思った。

私がこんな髪と目（姿）だから。

《連水ですね。リリアンヌ様、お気になさらず先に進みましょう。》

よろよろと岩に登りきって、先に登っていたレイチェルの手をとって、風蘭の後に続く。

少し気分が沈んだりリリアンヌに関係なく、三人は森の奥へとついていた。

《さて、手始めに門番に挨拶をしなければなりませんね。》

アリッサム

近くにあった太い枝を拾って、風蘭は左手前の木を軽く叩いた。普通なら、軽く叩いただけで響かないが、まるで木々が木霊するかのようにあちこちに響いていく。

しんと静まった森に変わりに、木々がこすれる音と、重そうな動物が動く音が近付いてくる。

直ぐ近くに來た頃に、ぴたりとその音は止まって、リリアンヌは痺れを切らしてきた。

「ねえ、風蘭……」

そう話しかけようとしたリリアンヌは、風蘭の目の前にある背の高い茂みからいきなり出てきた者に、言葉を失った。

活きよい良く茂みから出てきたのは、よくお伽話に出てくる上半身が人間で、下半身が馬の姿をしたケンタロウスだった。1人の大柄なケンタロウスを先頭に、次々と後から少し小さめのケンタロウスが続いてくる。どれも、自分の倍ある長く鋭くどがった槍を片手に持っている。リリアンヌ達は瞬く間に、ケンタロウスの群れに囲われた。一斉に槍を向けられ、リリアンヌ、レイチェル共に放心状態である。

そんな2人におかまないなしに、先頭をきって出てきた大柄で色黒のケンタロウスが口を開いた。

「誰かと思えば、風蘭。貴様か。」

半ばあきれたように槍を縦にした彼が、風蘭の名を呼んだ。

《久しゅう御座いますな、アリッサム。》

少し嬉しそうに、風蘭はアリッサムに声をかけた。

「何故いきなり森に來た？事前に連絡を寄越せと、あれほど言っているだろうが。」

《私めも急な事だったのですよ。》

周りのケンタロウスの群れに槍を向けるのを止めるよう指示して、彼は風蘭の後ろにいるリリアンヌ達に目を向けた。茶色い瞳と目が合った。

「その者達は？」

《此方、リリアンヌ様で在らせられます。私めの契約者で御座います。お隣は、レイチエル・ディオム殿。連水の契約者で在らせられます。》

「東の魔女と連水のお氣に入りか。」

納得したように頷き、波打ったの黒い髪を後ろで一つに束ねた長い髪を揺らして、辺りにいるケンタロウスに何やら指示した。その指示に従って囲んでいたケンタロウスは、アリッサムを残して森に帰っていった。

「して、我に何ようだ？」

《ルビウスより、リリアンヌ様を安全な場所へと隠すのが私めの仕事で御座いましたが、向こうにその様な知識に長けた者が絡んでいるようで、既に居場所を突き止められてしまった次第です。つきましては、静寂に森の住民方のお力をお貸し頂きたい、門番^{アリッサム}を呼んだので御座います。》

一気につらつらと喋った風蘭を黙って見つめていたアリッサムは、その地響きある声で聞いてきた。

「確かに、貴様にはその様に当主は申したかも知れぬが、我には関

係無いこと。それを手伝い、我等森の住民に得な事があると申すか。」

《勿論で御座います。ルビウスがどのような褒美を貴方方に差し上げるかは存じませんが、あのルビウスのこと。相手がどのようなものを欲するか、承知のことでしょうな。》

その言葉で、黙り込んだアリッサムは、しばらく思索しているようだったが、背を向け付いて来るよう三人に言った。

「^{おさ}長の所に案内しよう。だが、手を貸すと決まった訳ではない。決めるのは長だ。」

《存じております。》

黙って見ていたリリアンヌ達に、風蘭はにっこり笑って頷いた。

風蘭に付いて、奥に向かう程、木々は更に生い茂りリリアンヌ達の向かうのを止めようとして来る。

レイチェルの手を引き、木々の枝を掻き分け、地面から生える草や弦に躓きながら、やっとの事で広く洞が開いた洞窟の前で立ち止まった。既に日は落ち、辺りは真っ暗な闇に包まれている。背後から吹いてきた肌寒い追い風に身震いして、リリアンヌは口を開いた。

「ここに長って言う人がいるの？」

《作用で御座います。》

洞窟からは、先程から吹いている風に連動して風の音が、人の叫び

声のように不気味に響いているだけだ。

「長を呼んでくる。ここで待て。」

そう言って躊躇無く、洞窟へとアリッサムは入っていった。

どれくらい待っただろう。実際には、ほんの少しの間だったかもしれないが、リリアンヌには長い時を待ったように思えた。洞窟から、蹄ひづめの音と獣の吐く息が聞こえてきたと思ったら、闇からギラリと光る琥珀色の瞳が姿を現した。

「風蘭か。」

少しかすれた眠そうな声が、風蘭の名を呼んだ。

《オリヴィエ殿、このような無礼をお許し下さいませ。》

「まあ、いいさ。わざわざこんな所まで来るとはな。」

ゆっくりとした足取りで、洞窟からこちらにやってきた。先程から雲に隠れていた月が顔を出し、その者を照らし出した。豊かな真っ黒の髪、鋭い琥珀色の瞳、体はリリアンヌ達が見上げる程大きな狼だ。オリヴィエと呼ばれた狼は、少しダルそうに風蘭を見た。

「その者達が？」

《はい。リリアンヌ様とレイチエル殿です。リリアンヌ様、彼女はオリヴィエ殿の母上で御座います。》

「えっ、ヴィア姉さんの？」

なる程、琥珀色の瞳とダルそうな所はそっくりだ。

「はじめまして、七番弟子のリリアンヌと言います。ヴィア姉さんにはいつもお世話になってます。」

「ほお、オリヴィアの妹弟子だったか。当主からは、そう聞いて無かったが。」

「当主？」

「ルビウス・カインドの事だ。今は、代替わりしてこの森を守るのが代わったからな。」

へーと納得していると、オリヴィエはのしのしと歩いてきて、真っ黒い鼻でリリアンヌの体を嗅いだ。

「懐かしい匂いがすると思ったらそう言う事か。風蘭、当主は随分苦労しているみたいだな。」

《私めには、ルビウスの事など関係ありません。》

風蘭のつんとした態度に、にやりと笑ったオリヴィエに鳥肌を立てながら、リリアンヌは何のことかと思った。

「いいだろう、手を貸そう。あの国王の事だ、黙っていたらこの森を好き放題にしかねない。アリッサム、皆を集めろ。久しぶりに血が高鳴るな。」

「御意。」

くわっと大きな欠伸を一つして、アリッサムが去った方向にオリヴィエもひとつ飛びして続いた。

《余りやり過ぎないようお願い致しますよ。》

小さく呟いた風蘭の言葉に答えるかのように、辺りに野太い狼の遠吠えが響き渡った。

オリヴィエが去ったあと、おねむなレイチェルに肩を貸して、洞窟の入り口の脇で2人仲良く深い眠りに誘われた。
どこか遠くで、不機嫌そうな風蘭の声が聞こえる。

《…勝手なのはルビウス、貴男でしょう。私めには、リアンヌ様を守る義務があるのですよ。あの国王は？…そうですか、わかりました。》

相手の声が聞こえないが、どうやら風蘭が折れたらしい。ふんわりと誰かに抱き上げられた感覚に襲われ、心地よいリズムにリアンヌは意識を手放した。

暖かい毛布にくるまれて目を開けたリアンヌは、眩しい日の光に目を細め、毛布に顔をうずめて幸せな一時へと旅立とうとしていたが。

「リアアっ、いい加減に起きなさい！」

勢い良く扉を開け放ち、毛布を有無も言わずはがされた。

「今日から本格的に魔法の訓練だって、良かったじゃない。」

テキパキと窓を開け放ち、忙しそうに歩き回る人物を目をこすりこすり見れば、オリヴィアがいる。

「…あれ？私、森で寝てた筈なのに…。」

辺りを見渡すと、立派な造りの一人部屋がある。おかしいなと首を傾げていると、オリヴィアが近くに来て寝台から半ば強引に引きずられ、浴槽へと連れられて行った。

「ああ、なんか昨日凄かったらしいじゃない。国王が邸に来てすごい剣幕で。でも先生の方が上だったかな。あんなに怒ってた先生、久しぶりに見たわ。」

けたけたと笑いながら、リリアンヌの服を脱がせるのを手伝ってくれる。

「ヴィア姉さんのお母さんにも会って。」

まだ寝ぼけているリリアンヌは、されるがままで昨日の出来事を思い出していた。

「ああ、母さんに会ったてね。」

聞いた聞いたと誰に聞いたかは言わずに、オリヴィアはその話をさりと流した。

「さっ、さっさと湯浴びして着替えて朝食食べに下にいらっしやい。レミ、ソラ後は宜しく。私は先生に呼ばれてるから、もう行くわ。」

ざぶんと湯船に浸かったリリアンヌとは関係なく、オリヴィアの声と入れ替って風呂場に來たのは、袖と裾をめくりあげた双子だった。

「ひ、一人で大丈夫です。」

「お任せ下さい、リリアンヌ様。」

噛み合っていない会話で、リリアンヌは声にならない悲鳴をあげたのだった。

前にもこんな事確かあったなどと考えながら、朝食を終えたリリアンヌは西館の最上階、ルビウスの部屋へと来ていた。

軽く部屋の扉を叩けば、ルビウスの軽い返事が返ってきた。

「どうぞ。」

部屋に入ったりリアンヌをルビウスは、目で座るよう勧め、自分も何やら書いていた書類をしまって、リリアンヌの前にある長椅子に腰掛けた。

「昨夜は済まなかったね。あの国王が邸^{こし}まで来るとは、思わなかったから。」

やれやれと肩をすくめて、話を続けた。

「あの国王は、もの凄く頑固で傲慢なんだ。全く身内として恥ずかしいよ。」

「でも、伯父様にあたるんじゃないですか？」

よくわからないが、確かそんな話を言っていなかったか。

「そうなんだ。不覚にもあの人は、伯父にあたる。結婚したからね。しかも、どうも僕があの人の子の弟、セドウィグ殿下に似てるとかで気に入られてるんだ。全く忌々しい。」

綺麗な顔をしかめて顔をリリアンヌから背けると、気を取り直して話を変えた。

「まあ、こつてり怒っておいたから、暫くはこちらに干渉してこないと思う。さて、リリアンヌ。あの人の乱入で予定が狂ったけど、君の魔法練習を始めようと思う。」

その言葉で、リリアンヌはぱっと顔を輝かせて、笑顔を見せた。

「ありがとうございます。」

「その代わり、学校にもしっかり通って座学もするように。」

「学校…？」

「そう。9月から通えるよう、学校と担任には話を通してあるから。」

さりとて言ったルビウスに顔をしかめてみれば、彼は優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ。レイチェルと同じクラスだし、ジョナサン、ジュリアン、エリックも通う学校だから。更に言えば、オリヴィアの大学部と姉妹校なんだよ。」

のんびり言うルビウスとは反対にリリアンヌは、眉間の皺を更に深くした。

本来ならば、手放して喜んで良いことだろう。しかし、リリアンヌは何故か腑に落ちないまま、ルビウスに聞いた。

「私は、貧民の出です。血のつながりもないルビウスさんに、学校に行かせていただく事など出来ません。」

「そうかな？ 君は、私の七番目の弟子になっただろう。ならば、私には君を学校に行かせなければならない義務があるんだ。」

何でもないかのように答えたルビウスは、リリアンヌを見て更に続けた。

「これは決定事項だよ、リリアンヌ。さて、魔法練習を始めようか。」

長椅子から立ち上がったルビウスは、夏になって使われなくなっていた部屋の暖炉に近づいた。リリアンヌも渋々ルビウスの元に行く。

「魔法で火をおこしてごらん。」

彼は隣に立ったりリアンヌにそれだけ言うと、自分はさっさと机へ

と戻っていった。

「えっ？おこし方は教えてくれないの？」

戸惑うリリアンヌの顔を見ずに、ルビウスは引き出しから何やら書類を出しながら言った。

「一から順々に教えていくのは、あまり好きではないんだ。」

分厚い書類を取り出して、火がついたら言っでと彼は言っで、書類に目を通し始めた。リリアンヌは呆れて、目の前の難題に取りかかった。

暫く暖炉の前で考えていたリリアンヌだったが、埒があかないとなり、ルビウスに問いかけた。

「これって、誰かに聞いたり調べたりするのは駄目ですか？」

「別に構わないけれど、聞いても教えてくれないと思うよ。」

ルビウスの言葉にムスツとしたリリアンヌは、しゃがみ込んでどうしたら火がつくのか一人で考え出した。確かルビウスは、風蘭を呼ぶ際に頼む、命令するなど人それぞれだと言っていた。火にも精霊がいるのではないか。いるとしたら、どこに？キヨロキヨロと部屋を見渡したリリアンヌは、本棚の隙間、絨毯の裏など、あちこちを探し始めた。

「やっぱいないよねえ。」

そんな独り言を言っていた時、高い本棚の一番上にぼんやりと揺れ

る陽炎の塊を見つけた。

「もしかして…。」

ルビウスの右側にある本棚の隅に隠れるように揺れる陽炎に、ゆっくりと近づいて声を掛けた。

「ねえ。」

「ひゃあ!」

優しく声を掛けたつもりだったが、相手にはかなりおどろかせてしまったようだ。

「そんなに驚かなくても…。」

少し呆れつつ、リリアンヌは言葉を続けて話掛けた。

「火をおこして欲しいんだけど。あなた火の精霊でしょう?」

わたわたと急いで隠れた陽炎は、全く隠れていないその姿に気付かずリリアンヌの様子を疑った。リリアンヌはというと、苛々と陽炎の返事を待っている。

「ねえ、火をおこしてくれるの? くないの? どっちなの。」

苛々と聞くリリアンヌにすっかり怯えた陽炎は、小さな声で答えた。

「だって、あなた神隠しの風蘭と契約してるじゃないですか。」

「だから？」

「風蘭は怖いから嫌だ！」

「はあ？」

どこが怖いんだと呟きながら、幼い男の子のような声で、すっこんでしまった陽炎を引っ張り出すため、リリアンヌは本棚によじ登りだした。

「いいから、火をつけてよ。」

「嫌だ嫌だ。わーん、お母さん」。怖いよお。」

「うるさい！あんた男の子でしょ。いちいち泣くんじゃないっ。」

むんずと掴んで引っ張り出すと、ベソをかいている陽炎を暖炉に放り込んだ。

「僕はまだ、独り立ちしたばかりなのに。」

「ぐずぐずしてないで、さっさとつけなさいよ。」

ピシャリと言い放って、リリアンヌは火をつけるよう促した。結果的に火がついたのは、夜も遅くなった頃だったが。

シロという半人前の火の精霊は、怒るリリアンヌに恐れをなして、泣きながら帰って行った。後からそれを見ていたルビウスに、有り難くもないお説教を頂いた。

そんな様子を城の一室から望遠鏡を使い、眺めていた国王がいた事

に、
リアンは気づきはしなかった。

3. アンジュリーナの友達

9月の朝。

まだ、夏の暑さが残るこの時期は、リリアンヌにとって好きではない。そんな日に、夏用に作られた法衣を身に付け、ルビウス、レイチェルと共に年代を思わせる学校の正面玄関に、リリアンヌは来ていた。

シロと言う火の精霊に火をつけて貰ってから、ルビウスはリリアンヌにほぼ放置の課題を山ほど出してきた。課題を片付けても片付けても、次から次へと新しい課題を突きつけるルビウスに、リリアンヌは少々うんざりしていた。そんな日々を過ごし、9月になり、リリアンヌが学校へと通う日となった。

どうやら私立の学校のようなのだ。

「どうぞこちらに。」

厳しそうな女性の案内で、応接室へと連れられ、学院長らしき人に面会した。話はリリアンヌを無視して進められ、後から来た優しそうな若い女の教師に、リリアンヌ、レイチェルは教室へと連れられた。

「はじめまして。リリアンヌ・カインドさん。私、担任のエリー・ハーネットです。よろしくね。ここが、あなた達のクラス。」

ついたのは、21Aと書かれたクラスの前。

担任は、躊躇無く扉を開けて入って行く。リリアンヌ達も後に続いて入る。教室は、新学期を迎えた子供達の声で溢れて、担任が入っ

て来たのを誰も気が付かない。

「はい、皆さん。静かに！席に着いて下さい。」

その声で、慌てて席に戻るもの、ひそひそ話を止めないものがあるが、担任は気にせずリリアンヌを紹介した。

「今日からこの学校で一緒に学ぶ、リリアンヌ・カインドさんです。皆さん、仲良くしてあげて下さい。」

何か自己紹介する？と聞かれたが、首を振って拒否した。担任に促され、いつの間にか席に座っていたレイチェルの隣に座った。

「色々と書類や配布物がありますから、ちゃんとお家の方に見せて下さいね。」

そんな担任の言葉をぼんやり聞いていたリリアンヌは、後ろからついて来た人物に振り返った。リリアンヌの席は、窓側の後ろから二番目の所で、あまり周りと話さなくて済むと思っていたのだったが。

「あなた、カインド公爵のお弟子さんなの？」

話しかけて来た人物は、真っ赤な髪色に、澄み渡るほど綺麗な海色の目をした活発そうな女の子だった。どうやら服装などから見るからに、良いところのお嬢さんのようだ。

「そうよ。」

素っ気なく答えたりリリアンヌに気にする様子もなく、自分について、

ペラペラと話出した。

「私、アンジュリーナ・セシルよ。爵位は伯爵だけれど、お父様は劇場を貸しているの。あの有名なシャルル劇場よ。それが国王様の目に留まって、良く城に友人として招かれてるの。」

つまりは、自慢話。

適当に相槌を打ってながすりリアンヌには気づかないようで、喋り続けている。

「で？あなた、ご両親は何をしてらっしゃるの？」

不意にかけられた言葉に、はっと顔をあげた。

「親は…。」

いない。そう続けようとしたが、盛大になる鐘の音で遮られた。

「ではみなさん、明日から授業が始まりますから、頑張りましょうね。ごきげんよう。」

クラス全員、ごきげんようと優雅に返し、ガタガタと席を立つ音が教室に響く。

「ねえ見て！門にカインド公爵がいらっしゃるわ。」

1人の赤茶色の髪をした女の子が、そう言うのとわっと教室にいた子供達が、リリアンヌが座っている窓際に密集してきた。

「素敵〜。」

「カインド公爵も素敵だけど、一番弟子のフレドリッヒ様も素敵よね。」

きやつきやつと夢見る乙女話を話す彼女達の群れを抜け出して、レイチエルと共に教室を出た。

「あ、リリアンヌ、レイチエル。また明日ね。」

喋った事もない女の子達に名前を呼ばれ、びっくりするリリアンヌだったが、レイチエルは手を振って別れを告げた。

「流石、王都の学校。」

一人つぶやいたりリリアンヌの言葉は、隣にいたレイチエルに聞こえていたらしく、無表情でレイチエルは応えた。

「どの子も良いところの家系だから。」

差別なんかしないようにしつけられてるらしい。門まで来ると、待っていたらしいルビウスがこちらに微笑んだ。

「顔合わせはどうだった？」

「別に。」

公爵家の馬車に促されて乗り込むと、学校から女の子達のキャーキャー言う声が聞こえてくる。

「リリアンヌは随分と人気だね。」

あんただよ人気なのは。

白い目で目の前の彼を見れば、本人はいたって涼しい顔をしている。それから、リリアンヌの忙しい日々が始まった。平日は朝から学校に行き、たまに帰ってからルビウスに課題を出され、土日はフレドリッヒにこき使われる毎日。その分、リリアンヌの魔法の腕前はめきめきと上がり、ルビウスも唸る程になると、リリアンヌも毎日が楽しくなっていた。

学校が冬休みに入ったある日、クラスメイトのアンジュリーナに誘われ、レイチェルと共にリリアンヌは彼女の実家、セシル伯爵家へと来ていた。その日は1人娘であるアンジュリーナの誕生日パーティーで、クラス全員が呼ばれていた。

「ようこそ。本日は愛娘、アンジュリーナの為に忙しい中お集まり頂き、誠にありがとうございます。」

壇上で挨拶しているのは、アンジュリーナの父親、セシル伯爵である。カインド公爵よりも少し小さい屋敷だが、流石は貴族の屋敷。立派な飾りがあちこちに飾られ、おめかしした机は豪華な料理があちこちにある。リリアンヌは、パーティーごときに出席するほど暇では無かったが、アンジュリーナに気に入られたらしく、馬車で本人直々に迎えまで来たからには、行くしか無かった。

「早く帰りたいね。」

隣に、いつもとは違った華やかな衣装を身にまとったこれまたつまらなさそうな、レイチェルに声をかけた。リリアンヌも今日は、コスモス色のヒラヒラとしたドレスを着ている。双子の侍女、レミと

ソラにより2人とも飾られている。

嬉しくもない服装で、2人会話をしていると挨拶回りに来たアンジュリーナが視界に入った。

「リリアンヌ、レイチェル。紹介するわ。私の父、ルドルフ・セシルよ。」

2人の側に来たアンジュリーナは、隣にいた少し痩せた赤毛の男性を紹介してきた。

「はじめまして、お嬢さん方。今日はよく来て下さいました。」

にこやかに笑顔を向けてくる伯爵にリリアンヌとレイチェルは、淑女の礼をして挨拶した。

「お父様、こちらリリアンヌとレイチェルよ。ほら、話をしてた。」
嬉しそうに父親に擦りよるアンジュリーナからは、日頃の仲がよい親子関係が伺える。

「アンジュリーナから、話を聞いておりますよ。何でも、あの有名なカインド公爵のお弟子さんだとか。これからもアンジュリーナと仲良くしてやって下さい。では。」

仕事関係の人だろうか、伯爵はあちこちから名前を呼ばれ、慌ただしくその場を去っていった。

「もう、お父様ったら。」

もっと父親と一緒に居たかったのだろうか、去っていった父親の背中を見つめて、アンジュリーナは頬を膨らませた。

「まあ、いいわ。リリアンヌとレイチェルを、お父様に紹介出来たのだから。」

1人ブツブツと呟いていたアンジュリーナは、他のクラスメイトに会うため、リリアンヌとレイチェルにまた後でと言って、その場を去った。

彼女が去った後、親しい友人もない2人は、目の前の料理を食べながら時間を潰していた。すると、扉付近が騒がしくなり、口に運んでいた手を休めてそちらを見た。

そこには、今朝屋敷で伯爵家に向かうリリアンヌとレイチェルを送り出してくれたルビウスが、フレドリッヒを引き連れて立っていた。

「あれ、なんで？」

用事があるから、欠席すると言っていた彼が何故ここにいるのか。リリアンヌが首を傾げていると、彼女の視線に気が付いたルビウスが、婦人方を掻き分けて、2人の元へと来た。

「やあ、2人とも楽しんでるかい？」

顔を見れば、楽しんでいないとわかる筈なのに、あえて聞いてきた彼に、リリアンヌはとつても！と蔓延の笑顔で答えてやった。

「そうかい、それはよかった。」

苦笑しながら、話を終わらせようとしたルビウスを、皿を持っているのと反対の右手でひっつかまえると、何故ここにいるのかと問い詰めた。すると、彼は溜め息をついてリリアンヌ達に教えてくれた。

「いいかい？絶対に他に漏れないようにするんだよ。」

頷いた2人を確認して、ルビウスは声を潜めた。

「誰かかわからないけれど、僕宛てにセシル家に悪魔がとりついると手紙が来たんだ。」

その言葉に、自分が息を飲むのがリリアンヌはわかった。

悪魔。一般的には人間にちよつかいを出したり悪さをする神や精霊、妖精だと思われているが、実際はそんな生易しいものではない。禍々しい魔の塊で、人間の魂を吸い取ったり、人間に取り付きその者を魔に変化させる事もある。特に不健康な者、不幸な者、殺意を抱いている者やひねくれ者が好きで、どこからともなくその者の近くに現れるらしい。

そんな人間に干渉してくる悪魔や取り付かれた人間を始末するのは、王宮に仕える魔法使い、魔女の仕事である。が、しかし。大抵の場合は、下っ端の魔法使い、魔女の仕事である。何故魔法大臣の彼が直々に来たのか。

「ちょっと他にも気になった事があってね。」

ルビウスは、その訳を話してくれなかった。

「リリアンヌ、レイチェル。君達は、アンジュリーナ・セシルの近くで、彼女の様子を伺うように。どうやら、友達として認識されて

るようだし。」

ちらりと彼女の方に目をやれば、それに偶然気づいたアンジュリーナがこちらに手を振ってきた。リリアンヌはぎこちなく手を振り替えて、ルビウスに向き直った。彼女が、こちらにやってくる気配がする。

「彼女の近くにいて、悪魔の影響があるかどうか見てればいいんですね。」

「そう。僕とフレドリッヒは父親の方を。他の子達には邸に関わりがある者を調べるよう言っているから。」

じゃあと言って、アンジュリーナと入れ替わりにルビウスは、フレドリッヒと共に伯爵の元へと向かった。

「公爵と何話してたの？」

再びこちらにやってきたアンジュリーナは、ルビウスの背中を見ながらリリアンヌに聞いた。

「うん？ アンジュリーナと仲良くしなさいって。初めて出来た友達だし。」

本当の事ではないが、嘘でもない。

そんなリリアンヌの心の内など勿論知らないアンジュリーナは、リリアンヌに初めて名を呼んでもらえた嬉しさからか、頬をほんのり赤らめて嬉しそうにしている。

「リナでいいわ。私もリリアとレイルと呼ぶから。」

「わかった、そう呼ぶ。」

「これから仲良くしましょうね。」

「ええ、勿論。」

ルビウスから初めて弟子として、任された仕事の為に。

アンジュリーナの友達でいようではないか。

そう考えて、にっこりとリリアンヌは笑った。

4. 第一弟子（前書き）

ほんの少し、ホラー要素入っております。少しですが、苦手な方はご注意ください。フレドリッヒ、出番多しです。

4. 第一弟子

アンジュリーナの友達となつて、こまめに邸にレイチェルと共に呼ばれる事になり、段々とセシル家の内情がリリアンヌにもわかってきた。

彼女の家は、病気がちな母親と劇場の持ち主であり、中央役所に勤める父親、一人娘のアンジュリーナの3大家族だそうだ。その病気がちな母親は、今は別荘で療養中だそうで、仕事でよく家を空ける父親は殆ど家に居ない為、寂しい思いをしているらしい。そのせいか、リリアンヌ達はほぼアンジュリーナに邸に招かれ、彼女の様子を探るのは簡単だった。リリアンヌ達以外にも、クラスの女子の約半分は邸に遊びに来ている。大半は、お茶を飲み異性の話をしたり、お菓子を作ったり、宿題をしたりである。

リリアンヌ自身、そんな事には興味が無いが、ルビウスから様子を見ろと言われているので、仕方が無いがつきあっている。

そんな冬休みも半ばになった日、ルビウスから今日は早く帰って来るようにと言われたリリアンヌとレイチェルは、セシル家を早々に辞して、カインド邸へと帰って来た。

応接室に行けば、長椅子に優雅に腰掛けるルビウスと、珍しく不機嫌そうなフレドリッヒ、その他の弟子達が揃っている。

「ああ、2人共適当に好きな場所に座りなさい。」

帰った事を伝えると、ルビウスはそう返した。リリアンヌ達が腰を落ち着けた事を見届けて、会話を続けた。

「だから、フレドリッヒ。前から言っていただろう？ お前は長く私の弟子でありすぎた。そろそろ独り立ちを…。」

「私は独り立ちなどしません！ まだまだ先生の域に達してないのに、何故そんな事を仰るのですか。」

「一体どの口が、そんな事を言うのかな。お前のように、七年も弟子をやっているなんて、周りの者達もびっくりだよ。」

「弟子じゃなくて、助手の呼び名がぴったりね。」

溜め息をつきながら、喋り終えたルビウスに変わって、オリヴィアは、ケラケラと笑いながら話に加わった。

「いいかい、これは決定事項だ。昨年の魔法師認定試験をトップの成績で取ったお前を、何時までも下働きさせられないというのは、立场上無理なのはわかるだろう。来月を区切りに防衛省に行きなさい。向こうには、話をつけてあるから。」

きっぱりと言い切ったルビウスに、何やら言いたそうなフレドリッヒだったが、師の決定事項に大人しく従うようにしたようだ。

「と言うわけだから、諸君。フレドリッヒが独り立ちする。今まで以上に仕事が増えるだろうけど、よろしく頼むよ。フレドリッヒの後継には、エリック。お前に任せる。」

黙って成り行きを見守っていた弟子達の中の内、こっそりと隠れる

ように立っていたエリックは、名を呼ばれてさも嬉しそうに答えた。

「フレッド兄さんが、独り立ちするのはわかったけど、なんで私達まで呼ばれたの？」

これまた成り行きを見守っていたリリアンヌは、痺れを切らしてルビウスに聞いた。

「ああ、そうだった。」

本当に忘れていたようで、ルビウスはリリアンヌに向き直った。

「リリアンヌ、誕生日はいつだい？」

「さあ。そんなの知らない。でも、前に居た施設では、多分初夏の生まれだろうって。」

誕生日など今まで生きてくるのに、必要無い物の一つだと考えていたリリアンヌは、ルビウスの問いに安易に答えた。

「そうか。レイチェルは、冬の終わりだったね。」

少し何やら考えたルビウスは、一人結論が出たらしく、口を開いた。

「魔法を使う者は、初代魔法大臣が作った規則に、必ず試験を受けるようにと書いていてね。これがまた面倒でややこしいんだ。試験があるのは、2年に二回。春と秋。弟子になって初めての試験は、筆記と実技があってそれから実技だけになるけれど。実技って言うっても、いろんな試験に分かれるから面倒なんだ。1人前になる時には、師が立ち会いの元、卒業試験を受けて合格となれば、晴れて

1人前の魔法師になれる。それをフレドリッヒは全く……。受かれば受ける必要無いのに、計三回も受けるなんて……。信じられないよ。ああ、試験を受ける際に、生まれや出身地なんかを書かないといけないから、聞いたんだ。レイチエルは来年から試験があるから、頑張るんだよ。」

リリアンヌの隣にちょこんと座っていたレイチエルは、静かに頷いた。

「リリアンヌも、二年後の試験に向けて勉強しないとね。」

試験があるのかと渋い顔をしていたリリアンヌは、一応頑張ることにして頷いた。

その1ヶ月後、フレドリッヒは荷物をまとめ、邸から旅立った。後からオリヴィアから聞いたことだが、フレドリッヒの就職先は防衛省、第三部隊隊長だという。つまり、若手新人にしてかなりの出世なのだ。防衛省は基本、防衛大臣を筆頭に、副大臣、総隊長と続き、その下に第一部隊隊長、第二部隊隊長と続く。しかし、一部隊隊長が偉いが重要視されるのは、三部隊隊長だそうで、一番出世への近道なのだとか。

そのフレドリッヒの話で持ちきりなのはどこも一緒のようで、使いに行った店先の店主はどこも祝いだと言ってかなりのおまけをしてくれるし、アンジュリーナの友達などからも、流石一番弟子だと話を振られる。

「フレッド兄さん凄い人気。」

知らない人々から話しかけられ、精神をすり減らし、ぐったりと邸の書籍室で伸びていたリリアンヌはそう呟いた。あれから、どこに

行っても七番目の弟子であるリリアンヌには、様々な人々との関わりが嫌でも増えた。

「先生の一番弟子だから。」

同じく床に詰まれた本の山に、寄りかかっていたレイチェルは、疲れた様子で話に加わる。

「そんなもんなのか。」

はあとやってリリアンヌは、起き上がった。あれから、フレドリッヒは忙しいらしく、邸に一度も顔を出していない。ルビウスの祖父シリウスも、ちょっと出掛けてくると行ったり、随分と帰って来ていない。その変わり、ルビウスは慌ただしく仕事をこなしている。他の兄弟弟子達は、アンジュリーナの件で忙しいらしく、帰って来てはすぐに出掛けて行く。

リリアンヌ達は、今日は学校が休みで、アンジュリーナは家庭教師が来る日だからと言うことで、レイチェルと2人、うるさい周りから離れ、書庫でのんびりとくつろいでいる。

「静かだ。」

書籍室の奥にある書庫は、西館の一階にあり、本館にいる使用人があまり来る事はなく、たまにお茶やお菓子などを持って来るだけである。

またうとうと仕掛けているレイチェルを眺めて、リリアンヌは手元にあった本に手を伸ばした。すると、古い鐘を鳴らす音が聞こえて、リリアンヌは顔を上げた。この邸には、入り口が3つある。正面玄関と使用人が使う勝手口、本邸から渡り廊下でつながっている西館の裏口。正面玄関の鐘は先月替えたばかりだったはずだし、古い鐘の

音は裏口しかない。

しかし、殆ど使っていない裏口に誰が来るのか。不思議に思っけてリリアンヌは、レイチエルを揺り起こした。

「ねえ、レイチエル。起きて、裏口に誰か来たみたい。」

よだれを垂らして爆睡しているレイチエルは、一向に起きない。しかし、古い鐘はその間もなり続けている。余程執念深い客と見える。レイチエルを起こすことを諦めて、リリアンヌは一人部屋を出た。

ガラガラと古い鐘の音を揺らす速度からして、子供ではないだろう。あの鐘は随分と重く、子供がずっと鳴らすには無理がある。実際リリアンヌとレイチエルが、ガラガラと鐘を鳴らして遊んでいると数刻も立たない内に疲れ、さらにはジョルジオに古くなっているから触らないよう怒られた。そんなすっ飛んで来たジョルジオも、姿が見えない。一体どこに行ったのか。そんな事を考えていたら、裏口へとたどり着いていた。まだ鐘は鳴り続けている。

「ちょっと！ここは裏口よ。用があるなら、正面玄関に回りなさいよ！」

勢い良く扉を押し開いたリリアンヌは、相手を確認せずにそう怒鳴った。

「…。相変わらずのようで安心した。久しぶり、リリアンヌ。」

見上げれば、しばらく顔を出さなかったフレドリッヒが立っていた。噂をすればなんとやら。

「フレッド兄さん。」

「今、皆出払っているんだろう？ ちょっと気になって。」

「何が？」

手ぶらで邸に堂々と入るフレドリッヒを追って、リリアンヌも邸の中を歩く。

「セシル家は？」

アンジュリーナについての報告だろうか、リリアンヌはああと答えた。

「大した進展ないよ。最近は何っきりフレッド兄さんの話ばかりだし。」

「どこも似たようなものだ。ああ、私は先生から独立させられたから、名がフレドリッヒ・エルラービンになった。父から爵位は貰ってないけれど、公式の場ではちゃんとそう呼ぶように。」

どうでも良いことのように、付け加えたフレドリッヒは、書籍室に入っていく。

「エル？」

その後について行きながら、リリアンヌは不思議そうに尋ねた。

「師からの贈り名だよ。独立立ちすると、祝のかわりに師から貰えて、それを加えた名が正式な名前なんだ。」

リリアンヌもその内貰える。と言いながら、フレドリッヒは書庫へと入る。

書庫には、書籍室にはない古い書物、歴代のカインド家当主が調べた書類が眠っている。フレドリッヒは一体、何を調べたいのか。リリアンヌは、手短な書類から目を通しているフレドリッヒに聞いた。

「わざわざ仕事の合間に邸にくる程、何の資料を探してるの？」

「セシル家の事だ。20年程前、シリウス様が当主だった時期に、一度調べ上げた資料があったはずなんだ。これだ。」

黄ばんだ本をめくっていたフレドリッヒは、半分ほどめくってあるページで手を止めた。

「何を書いてあるの？」

背伸びをして、フレドリッヒが持つ本を見てみるが、身長差からして勿論見れるはずもなく。リリアンヌは断念して、フレドリッヒの言葉を待った。

「エリックから、先生が仕事をそっちのけだと悲痛な伝達が、山ほど届いていて。あの方は、本当に必要な事以外、自分が興味無いものはほったらかしだから。少し手伝おうと思ってね。」

「随分身勝手な人ね。」

リリアンヌの失礼な言い方に、フレドリッヒは眉を潜めて怒った。

「師の事をそんな風に言うもんじゃない。」

「はい。で、何なのそれ。」

適当に返事をしたリリアンヌをまだ怒ろうとしていたフレドリッヒだったが、リリアンヌの言葉で手元に開いていた書物を思い出した。

「セシル家は、どうやら代々呪われていたらしい。」

「どういうこと？」

「これは、シリウス様が当主だった頃の記録だけれど、一度セシル家のその当時の当主に頼まれて、悪魔払いをしたと書かれている。それも一度切りではなく、当主が変わるごとに。」

「うーん。じゃあ、ルビウスさんも悪魔払いをしなくちゃいけないかったんじゃない？」

「先生と呼びなさいってしてるだろう。先生が当主になった際に、今の当主が断って、それ以来悪魔の気配は無かったらしい。」

「じゃあ、なんで〈先生〉宛てに手紙が？」

フレドリッヒに注意され、リリアンヌは仕方なく、先生という言葉を使った。

「一度は、悪魔を追い払ったけれど、また何らかの事情で悪魔に取り憑かれるようになったとしか考えられない。それを誰が先生に教えた。」

「何の目的で？しかも、普通〈先生〉が気づくんじゃない？」

「言っただろう？先生は興味を失ったら、既にご自身の記憶から消されて、絶対にその事を思い出されない。」

「ふーん、随分と親切な人がいたのね。」

よっこいしょと床に腰を下ろしたりリアンヌは、フレドリッヒにそう言った。しかし、彼は違うと言ってそれを否定した。

「稀に代々悪魔に好かれる家系があるけれど、悪魔払いをされたのはシリウス様だ。また悪魔に好かれ、取り憑かれるなど無いはずだ。」

「つまり？」

「高度な魔法を使う者が、わざと悪魔払いをしたセシル家に悪魔を取り憑くよう仕向け、先生に教えた。かなりの愉快犯だろう。それに相手は、先生が一度興味を失ったものに二度と関心を示さないことを知り、しかも高度な魔術魔法を使う者と来た。」

ぎりと歯を食いしばるフレドリッヒは、グニヤリと持っていた書物を手に力を込めて曲げる。

「これは、名も高いシリウス様と先生に対する、侮辱以外の何ものでもない。」

「あー、フレンド兄さん？」

分厚かった筈の書物は、めきめきと悲鳴を上げながら歪な形へと変形し、それを見ていたリアンヌは、控えに声を掛けたが。

「ふん、大体検討はついている。今に見てなさい。」

一切、彼には聞こえていない。

「フレンド兄さん、本。本が…。」

この中の本は大切に扱うように、ルビウスから言われている。あとから小言を言われるのは勘弁と、さり気なくフレドリッヒから書物も取ろうと、リリアンヌは立ち上がり手を伸ばした。

「リリアンヌ！」

バシッと言う音共に、書物は床へと叩きつけられ、無惨にもぼらばらとなった。

「なにっ!？」

いきなり名前を呼ばれ、びっくりしたリリアンヌは書物から目を離してフレドリッヒを仰ぎ見た。

「先生はいつお戻りになる？」

「さあ？」

「その書物を元に戻すように。弟子なのだから、それぐらい出来るだろう？いくら独り立ちしたからといって、私も先生の一番弟子だったからには、する事がある。」

曖昧な返事を受け取ったフレドリッヒは、つかつかと出口に向かい、

リリアンヌにそう言って出て行った。

「んゝ、リリア？」

さっきの音で起きたらしい、眠そうなレイチェルが本棚の後ろから顔を出した。

「おはよう、レイル。よく眠れた？」

「うん、今フレッド兄さんいた？」

「さっきまでね。ところでレイル、これ元に戻せる？」

変形した書物を指差して、リリアンヌは困ったようにレイチェルに聞いた。

「元あった姿を見てないから、無理かな。リリアがこれやったの？」

静かに驚くレイチェルを否定して、リリアンヌは呟いた。

「私も見てないだなあ。フレッド兄さんがしたんだよ。元に戻す魔法教えて貰ったけど、元あった姿分かんないから無理だよ。全く、師が師なら弟子も弟子だよ。」

「どういう意味？」

「深い意味はない。」

「リリアがやってないなら、知らなかった事にしたら？」

「うん、そうする。」

書物もつかんで、元あった場所に突っ込むと、レイチェルと共に書庫を出た。

書籍室を出れば、フレドリッヒが帰って来た事で、本邸が慌ただしくなっていた。

「良いですか、先生。これはカインド家に対する侮辱です。」

机をバンと叩いて、訴えているのはフレドリッヒ。

本邸へと戻ったりリアンヌ達は、応接室へと足を向けた。そこには思った通り、先程帰ったばかりであろうルビウス。彼はリアンヌ達を見て、部屋に入るように言った。

「分かったから。フレドリッヒの言うとおり、僕もこのままでいいとは思ってないよ。だけど、お前はもう弟子ではないだろう。口を挟めるのはここまでだ。」

有無を言わせぬように話を打ち切ると、ルビウスはエリックを呼んで、フレドリッヒを玄関まで送るように言いつけた。

「先生。」

「慕ってくれるのは嬉しいけれど、いい加減に大人になりなさい、フレドリッヒ。僕もお前に、随分と頼っていたことは反省する。仕事もちゃんとするし、今ある自分の場所を大切にしなさい。今度会うときは、大臣と第3部隊隊長と言う立場だ。いいね。」

「…分かりました。お元気で、先生。」

「ああ。お前ならどの仕事でも、立派に成し遂げると信じてるさ。自慢の一番弟子だからね。」

ほんとフレドリッヒの肩に手を置いて、ルビウスは声を掛けた。

「ありがとうございます。そのご期待に応えられるよう、精一杯頑張ります。」

ルビウスに頭を下げると、フレドリッヒはリリアンヌ、レイチエルに顔を向けた。

「リリア、レイル。これから先生と居る時間が長くなるだろうけど、余り迷惑をかけないように。」

「はあい。」

気のない返事をしたリリアンヌを置いて、フレドリッヒはカインド邸を去った。

「さて、リリアンヌ、レイチエル話があるんだ座りなさい。」

ルビウスの目の前に腰掛け、リリアンヌは大した話なんか無いだろうにと、小言を言った。

「今王都で、気味の悪い噂が流れてると言うんだ。そこで、ジュリアンに調べて貰ってるんだけど、リリアンヌにもそっちに回って欲しい。」

「レイルは？」

隣に座るレイチェルに顔を向けながら、リリアンヌは聞いた。

「レイチェルは、アンジュリーナ・セシルについててもらう。」

嫌そうな顔をするレイチェルを無視して、ルビウスはリリアンヌを見る。

「エリックにも、そっちに回るよう言っておくから。いいね。」

念押しをしてルビウスは、その場を立ち去った。

「面倒ね。」

とにかく、仕事をすればお金が貰える。それを資金にして、この家を出ればいい。それまでの辛抱だと、リリアンヌは自分に言い聞かせた。

翌朝、まだ空が薄暗い中、ジュリアンに急かされて、リリアンヌはまだ住民達が眠る住宅街へと来ていた。

「眠すぎる。」

眠そうな目をこするリリアンヌは、随分と不機嫌だ。それもそのはず、普段ならまだぐっすりと夢の中にいる時間だから。

「しっかりしろよ。」

そう言うジュリアンも、今にも眠そうな顔をしている。

「で、何を調べるの？」

「うーんと、明け方と深夜に女の叫び声が聞こえるらしい。んで、叫び声があった日には必ず、惨殺体があがるらしい。」

「噂なんじゃなかったけ？」

「魔法師は、警察、保安官じゃないからよくわかんない。」

「じゃあ、死体を調べたら言い訳？」

そのリリアンヌの質問に、ぎょつとしたジュリアンは、ぶるつと身震いをして否定した。

「そんな恐ろしいこと！」

「じゃあ、どうするのよ。私、帰って寝るわ。」

「待って。」

はつきりしないジュリアンを置いて、邸に帰ろうとしたリリアンヌは、フードがついたマントを後ろからぐいっと引っ張られ、よろけた。

「ちょっと！」

ジュリアンに非難しようと振り向いたリリアンヌは、予想していた人物とは違って、啞然とした。

「リック。」

リリアンヌ、ジュリアンと揃いの黒いマントを身に着けたエリックは、不機嫌そうに路地に佇んでいる。

「どこ行くんだよ。」

「どこにつて。帰るんだけど。」

「3人でパトロールしろって、言われて来たんだぞ。ちゃんと、仕事をして貰わないと困る。」

偉そうに威張るエリックから自分のマントを奪い返すと、リリアンヌは深いため息をついた。

「パトロール？」

「そう。夜が明けるまで、この付近で、噂が本当かどうか確かめる。」

「わかった。私、向こう回ってみる。」

さっさとその場を去ろうとしたリリアンヌは、またまたエリックに止められた。今度は何だと不機嫌な顔を隠しもせず、エリックを見た。

「お前は一応、女なんだから1人行動は危険だ。」

かちんときたその言葉に、嫌みったらしく、そうでした!!と返してやった。

「リック、じゃあどう振り分けるつもり？」

ジュリアンが、おずおずと質問する。

「リアンが1人で回れば…」

「それは絶対に無理！」

エリックの言葉を勢いよく遮り、否定した。余程嫌のようだ。

「3人で回るしかないんじゃない？」

うーんと思索するエリックに声を掛けるリリアンヌは、少し明るくなった空を見上げた。

「もう直ぐ明け方だし、時間無いよ。」

みんな空を仰ぎ見た。

「仕方がない。急ぐぞ。」

フードを目深に被って、エリックは路地奥へと急ぐ。リリアンヌもジュリアンも、同じようにフードを被ると、後を急いで追った。

「パトロールの範囲は？」

エリックの後ろを追いながら、リリアンヌは彼に質問した。

「お前、そんなのも知らないのか。良くそんな無知で、パトロールに出たな。」

エリックの言葉は、一つ一つがリリアンヌの感に障る。

「悪かったわね、私はルビウスさんからこっちに回れて言われたから、こっちに來ただけよ。」

「先生の名を気安く、さん呼びで呼ぶんじゃない！」

「私はそう呼ぶようにって言われたもの。」

つーんとエリックを早足で抜かしながら、リリアンヌは言い返す。その後を張り合うように早足で並んだエリックは、リリアンヌを睨みつけながら言い返してくる。

「古代魔女のクセにっ。」

「何よ、このチビが。」

ピタリと立ち止まったエリックに、勝ち誇ったようなリリアンヌ。

「お前っっ。」

わなわなと震えながら、リリアンヌに對抗しようとしたエリックの言葉を、息を切らしたジュリアンが遮った。

「喧嘩、してる、場合、じゃ、なくて、さ、もう直ぐ、明け方だよ。リック、例の叫び声ってどんなの？」

あつ、とぼつの悪そうな二人は、取りあえず休戦し、目の前の課題を片付ける事にする。

「どう言えば良いのか。聞いた人は、殆ど惨殺体で見つかつてるとか。」

「？」

「だから、叫び声を聞いた奴は、その場で死んでるか、友人に言った数日後に惨殺体になって見つかつてるらしい。」

急に声を潜めたエリックに聞き入っていた二人は、ぞっと身を震わせた。そんな事はお構いなしに、エリックは話を続ける。

「その声は、まだ成人してない若い女の声で…」

きやああああああ

「そつ、こんな声らし…」

路地奥から聞こえて来た叫び声に、3人は耳を疑った。そして聞こえてくる、裸足で地面を歩く音。

「なんか、聞こえない？」

引きつった顔で、他の2人に聞くジュリアン。

「…聞こえる。」

それに答えたのは、これまた引きつったエリック。

「ねえ、遭遇した場合はどうすればいいの？」

「とにかく…、逃げろっ！」

リリアンヌの問いに、全速力で音とは反対の方向に駆け出したエリックを追って、リリアンヌ達も駆け出した。

「遭遇したら、捕獲しろって言われてる。」

走りながら答えるエリックを追うリリアンヌは、少しだけ後ろを振り返った。色白の足と手が見える。

「何とかしてよ！まだ追って来てる。」

ジュリアンが走るスピードを上げて、エリックの前に出ると、リリアンヌはエリックに並んでそう怒鳴った。

「お前が何とかしろよ！」

「何にも出来ないの、こんの、役立たずっ！」

「はあ！？お前に言われたくない！」

ガミガミ言い合uing中、不意にエリックが立ち上がって、背後を振り返った。

【閉じ込め、閉鎖】

壁に右手を付き、そう呟くと煉瓦造りの塀がグニヤリと曲がって、エリックの目の前を塞いだ。ふふん、と歪いびつに塞がれた塀の前で、自慢げにリリアンヌを見るエリックを睨みつけていたリリアンヌは、ぴきっという音で塀の異変に気が付いた。

「うっ、わ。」

後ろで小さく悲鳴をあげる、ジュリアンの声が聞こえる。

「リック、後ろ。」

震える指でエリックの後ろを指さすと、そこには白い手が鮮やかな紅色に染まった少女の手が、塀の間から手を覗かせている。

「う、うわあああああ。」

悲鳴を上げて駆け出すエリックの後を、少女の小さな声が追ってくる。

ヒドイ、ヒドイ。

「リリアっ！早くっ。」

ジュリアンの急かす声に、はっと意識を戻すと、リリアンヌも急いで2人の後を追う。

「何でっ。」

エリックの小さな呟きが、リリアンヌの耳に届く。ジュリアンが右側に角を曲がると、どんと誰かにぶつかって、その衝撃で冷たい路地に放り出された。リリアンヌ達は、辛うじて巻き込まれずにすんだが、さっきの仲間かと身構えた。

「何をやってる？」

角から出てきたのは、防衛省の藍鉄色の制服を来たフレドリッヒだった。

「フレッド兄さーん。」

へにゃへにゃと情けない声を出すジュリアンに、フレドリッヒはやれやれと手を差し出し、引っ張り上げてやった。

「パトロールの途中じゃなかったのか？」

「パトロールはしてたんです！で、その途中で出たんですっ。」

ジュリアンがフレドリッヒに必死に伝えるが、主語が無いと叱られた。

「例の連続殺人鬼だろう？で、どうしたんだ。見つけたんだろ。」

エリックに顔を向けたフレドリッヒは、申し訳無さそうに立つ彼を見て、深い溜め息をついた。

「…逃がしたか。」

「申し訳在りません。」

「私に謝る意味があるか？先生にきちんと報告しなさい。」

「はい。」

「フレッド兄さんは、どうしてここに？」

今存在に気づいたという顔で、フードをとったリリアンヌを見つめたフレドリツヒは、少し険しい顔を緩めて答えてくれた。

「これから、国境に向かう途中だったんだ。近くを通りかかったら、例の叫び声が聞こえてきて。遠目の能力を使って周辺を探って見たら、お前達が仲良く追いかけてっここをしてるのが見えたからな。」

その言葉にむっとして言い返そうとしたが、フレドリツヒに馬車に乗るよう促されてリリアンヌは、言葉を胸の内に留めた。どうやら、邸まで送ってくれるらしい。

フレドリツヒ様。

エリック達の後に続いて、馬車に向かおうとしたリリアンヌの耳に、小さな女の子の泣きが届いた。ぱっと明るくなった路地を振り返ったが、そこには誰もおらず、空耳だったかとリリアンヌは馬車に乗り込んだ。

その後、邸に戻った3人にオリヴィアから、先程3人がいた路地から、金髪をした若い青年の惨殺体が見つかったと報告されたのは、また次の話。

5. 気の毒な刑事（前書き）

残酷な描写と言えるかどうか分かりませんが、念の為クッションを置かせていただきます。

5. 気の毒な刑事

「嘘。」

「嘘なんか言わないわよ。ついさっき、報告があったんだもの。」

幸せな眠りから起きれば、現実には更に悪い方向へと進んでいた。あの後、フレドリッヒに送り届けられた3人は、ルビウスへの報告もそこそこに、自室に駆け込み昼過ぎまで幸せな夢に浸っていた。しかし、階下が騒がしくなるのと同時に目は覚め、何事かと下に降りれば、オリヴィアと出会った。そのオリヴィアに言われた言葉で、リリアンヌはその場に立ち尽くしていた。

『さっき、路地奥で金髪の若い青年の惨殺体が見つかったらしい。』と。

「今、警察が邸に来てて、あの場にいた弟子に話を聞きたいって。」

「もしかして、疑われてる？」

「かなり。」

真剣な顔でそう答えたオリヴィアは、リリアンヌにこう聞いた。

「リリア、あんた達ほんとに何もしてないわよね？」

「するわけ無いじゃないっ！」

「冗談よ。」

全く笑えない冗談をリリアンヌに掛けて、オリヴィアはその場を去っていった。リリアンヌの前には応接室の扉が。軽く叩けば、ルビウスの返事が返ってきた。扉を押して部屋に入れば、ルビウスとその後ろに立つエリックとジュリアンの向かい側に、見慣れない2人の男性が座っていた。

「リリアンヌ、こちら中央警察からいらした、ラングド警部とウォーリー刑事だ。」

険しい顔つきのルビウスは、向かいに座る蹴ったらどこまでも転がっていきそうなほど太った男性と、手帳を片手に必死に何やら書き込んでいる男性を紹介した。2人とも警察の象徴である赤紫の制服を着ている。最も、太っている男性は着ているとは言い難い状態だが。

「七番目の弟子のリリアンヌです。」

「どうも。」

紹介された事で、一応挨拶したが、向こうはちらりと目をリリアンヌに向けただけである。その非常識な態度に、ムカムカしながらも、リリアンヌは大人しくルビウスの背後に立った。

「失礼ながら、見るからに彼女は古代魔女のようですが。」

「ええ、それが何か。」

疑うように目を向けてくる太った男性は、どこか棘があるルビウスの言葉に何か言いたそうな顔を寄越した。

「ラングド警部。」

その顔にしかめっ面で、ルビウスは太った男性に声を掛けた。

「まさか、優秀な貴方方が彼女が古代魔女の風貌だからと言うくだらない事で、犯人などと仰るのではありませんよね？」

それは、かなりキツイ言い方のように取れ、ラングド警部は少し怯んだが、気を取り直してルビウスに噛みついてきた。

「勿論、そんな馬鹿な事は言いません。しかし、公爵のお弟子さんとはいえ、きっちり事情聴取させていただきますよ。」

警察というのは、何故こうも上からものを言うのかとうんざりしていたリリアンは、警察から質問攻めにされた。その度にルビウスが助けてくれ、少なからず容疑者から外されたと思えるようになったのは、お昼も過ぎた頃だった。

「つまり、カインド公爵直々に今回の事件を調べると仰った訳ですね。」

何度目かになるその言葉を、また口にした頭の回転の悪いラングド警部の部下ウォーリー刑事は、ふむふむと手帳に書き込んでいる。さっきまでの会話で一体何をその手帳に書き込んでいたのか、気になる所だがリリアンは平然と頷いた。

「公爵、こういう事は警察に任せて頂きたい。警察の許可無しに勝手な事をなさるから、お弟子さん方にも変な疑いが掛かるのですよ。」

遠巻きに素人は引っ込んでろと言う警部に、リリアンヌはつい口を出してしまう。

「そういう警察が一体何をしてるのかしら。」

「全くですね。犠牲者は9名になってるというではありませんか。」

リリアンヌの言葉に便乗して、エリックも警察に皮肉を浴びせる。

「なんだとっ、餓鬼が生意気に…。」

「ああ、失礼。どうも私の教育が悪いようで。」

全く反省していないルビウスが、形だけ2人を叱った。

「しかし、何故魔法大臣ともあろうカインド公爵が？いくら悪魔が絡んだ事件だからといって、大臣直々に調査されるなんて聞いた事ありませんよ。」

うーんとペンで、もじやもじやの栗色の頭を掻くウオーリー刑事に、ルビウスは少し渋ってから、セシル家の話を持ち出した。

「何者かがカインド公爵に、セシル家が悪魔に取り憑かれていると手紙を送り、そして今回の事件。カインド公爵はこの一連の事件にセシル家が繋がっていると推測されたんですねっ。さすがです！」

パチパチと拍手を送る部下に白い目を送り、ラングド警部は、ルビウスに疑惑の目を向けた。

「何故、そういう事になるんですかね。私は納得行きませんな。手紙を送って来たのはこの実際にある手紙から分かりますが、今回の事件が偶々悪魔絡みかもしれないってだけで、何故一連づけれるんです？」

先程エリックが持ってきた手紙が、机の上に置かれているのを見ていたリリアヌは、剥げたラングド警部の頭に注目した。見られている彼は、ポリポリと頭をかいて、ルビウスを見ている。

「つまり、あなたは私が手紙を偽装し、セシル家に悪魔を取り憑かせ、さらにはその調査だと言ってパトロールをさせている弟子達に、被害者を殺させたとも言いたいんですか？」

何故そうなるっ！と言いそうになったリリアヌは、すんでの所でその言葉を抑え、大人は回りくどい言い方ばかりだと溜め息をついた。

「そうとらえられても、おかしくない状態だと言うことですよ。」

リリアヌが見つめているせいか、ラングド警部はせわしなくてかっつた頭を撫でている。

「警部、もう少し頭を使って頂きたい。まず、私がそんな事をしてなんになります？警察も手が出せない、まか不思議な事件を大臣である僕が解決。人気度が上がる？くだらない。僕はそんなに暇ではありません。次に、弟子達にそんな事は絶対にさせません。思いやりのある立派な大人に育てる事が、師としての最大の仕事だと僕は

思っています。最後に、もし殺人を犯すなら、ああ、例えばの話ですよ。僕ならもっと上手くやと思いますよ。」

怪訝そうにみたラングド警部は、もっと上手くとは？と聞いてきた。

「弟子を使って、内密に情報を収集しました。凶器は家庭用の出刃包丁、まだ見つかっていませんが。全く話になりません。そんな証拠に残りやすい凶器を使うなど。惨殺した死体は、その場に放置？魔法で跡形もなく消しますよ。わざと残した？そんな事する前に、魔法で相手はいないでしょうね。」

さらりというルビウスに、声も出なくなった警察の2人は、呆然とルビウスを見るだけである。見つめられているルビウスは、平然と話を進めていく。

「さて、ラングド警部とウォーリー刑事。」

あからさまにビクついたウォーリー刑事を無視して、ルビウスは冷たい声で追い討ちを掛ける。

「貴方方警察は、僕、更には弟子達にあらぬ疑いをかけ、貴重な時間も潰してくれました。僕も、暇ではないと言ったでしょう？どう落とし前つけてくれるんです？」

ガタガタと震えだしたウォーリー刑事に、しっかりしろと叱って、ラングド警部はルビウスを睨み付けた。

「落とし前もなにも、警察は疑ってなんぼだ！そうやって、食ってきたんだ。それで名誉毀損だやれ、損害賠償だなんだ言われたら、仕事ねんて出来やしない。しつこく言うなら、公務執行妨害で逮捕

するぞ！魔法大臣だなんだか知らないが、警察に文句言えるなんてのは、100年早い！」

警部は言ってる内にヒートアップしたのか、徐々に頭がゆで卵からトマトに変わっていった。それをリリアンヌは面白そうに見つめ、エリックはしかめっ面で、ジュリアンは心配そうな顔で見つめている。ルビウスはといえば、組んだ足に右肘を寄せ、右手で口元を隠しているが、笑っているのはリリアンヌからも一目瞭然だった。

「何が可笑しい！この若僧がっ。」

「確かに、只の若い魔法大臣なら、貴方が言ってることは正しいでしょう。しかし、僕がどこの血筋か忘れていらっしやる。」

「血筋？ふん、魔法師の生家だとか言われるカインド家の血が、そんなに偉いか？」

「事情聴取に行く貴族の情報ぐらい、事前に調べておくべきですよ。」

クスクス笑うルビウスに、イライラとだからどうしたと警部は聞く。

「前の当主は誰だった、から教えなければいけないのかな？」

「シリウス・カインドだろう？」

「その奥さんは？」

はたっと考えた警部は、真っ青になって凍りついた。

「おばあ様は、現国王の姉君にあたる方。降嫁されて、〈只の公爵夫人〉だけれど、元は第62代女王だった頃もある。どういう事か分かりますよね。」

王族の血縁にあたると言うこと。彼は、只の親戚ではない。王家の血筋を引くからには、王族と同じ立場にある。ルビウスに王位継承権があり、あわよくば、彼が王になってもおかしくないのだ。

そんな王の甥、さらにはいくら降嫁されたとは言え、女王であった人の孫を疑うなど、死刑に値する。真っ青になる警部を、面白そうに見つめるルビウス。立場は既に逆転していた。

「さてと、貴方達では話になりません。」

そういつて、右手の中指でトントンと長椅子の縁を叩くと、白い綺麗な光を放つ魔法陣が姿を表した。

《召喚》

その言葉と同時に、魔法陣がうつすらと光り、光りが消えた時には中年の警部より年がいった男性が現れた。

「総監、お食事中失礼します。」

ルビウスが総監と呼んだ、錆色の髪に幾分白髪が増えた男性は、片手に新聞、片手にスプーンを持っていて、食事だった事が伺えるが、その食事の仕方は子供の手本になるものとは思えないと想像出来る。一方、当の本人はと言うと、恐らく座っていただろう椅子が消え、べっとと床に尻をついている。表情は彼に限らず、誰しも見知らぬ場所にいきなり魔法で瞬間移動されれば、しているであろうときも

ぬかれた顔をしている。

「えー、あなたはもしや。」

しかし、そこは警察の中でも一番偉い人物。冷静さを取り戻し、ルビウスに挨拶を求めた。

「ええ、祖父が大変お世話になりました。孫のルビウスです。」

「やはり！これはこれは、お会いできて光栄だ。しかし、私を召喚するなど一体どうしたのか。」

総監はスプーンを放り投げて、立ち上がったルビウスと笑顔で挨拶すると、次の瞬間には唾然となった。

「いや、どうやら私と弟子が例の事件の容疑者に入っているらしく、どうしたら話が速やかに進むかと考えた末、あなたに手を貸して頂くかと。まあ、仕事熱心なものには感心致しますがね。僕も暇では無いので。」

苦笑いしながら、チラリと警部と刑事に視線をやったルビウス。既に逃げ場が無い2人に、彼は更に追い討ちを掛けたのだ。その後、総監のお叱りを受け、ルビウスからの提示で、例の事件の資料を見せる事と、捜査に介入出来る事を条件にカインド公爵と警察は和解し、ルビウスはまんまと警察を手玉に取った。若い貴族にしてやられた二人の警察官は、大変お気の毒な形となった。

一部始終を見て、なんて性格のひねくれた人だと思ったリリアンヌ。その心を読んだかのように、ルビウスは振り返ってリリアンヌに、片目を瞑ってみせたのだった。

6. リカ・ベクトル（前書き）

脇役だと思っていたら、意外に重要人物だったんですね。

6. リカ・ベクトル

力無く総監に連れられていく刑事2人を見送った後、リリアンヌ達は今し方、警察から収集した情報に目を通していた。

「被害者は、16から20までの男。髪は金髪のストレートで水色の瞳。職業、住所はばらばら。被害者の数は計9名。」

ルビウスが資料を読み上げると、エリックが手帳に書き取る。リリアンヌは、手元にあった資料から顔を上げてその一連の動きを眺めた。

「しかし、何故夜中や夜明けに1人で、うろろしてたんでしょうか。沢山の被害者が出れば、街で噂が広がって1人で出歩く者も減ってるはずでは？」

ジュリアンの質問に、バサリと低い机に資料を投げたルビウスは、少し苦笑しながら答えてくれた。

「一つは、警察が必要な情報を公開していないこと。そのため噂としてしか街に広がらず、危機感が薄くなってしまう。もう一つは、このぐらいの歳になれば、夜遊びの一つや2つしたくなるだろうからね。酒場に行く途中だった者や、朝帰りの者、仕事帰りの者もいたらしいから。君達には、まだこの話は早いね。」

首を傾げるエリックとジュリアンを見て、リリアンヌは惚けた（とぼけた）顔で見ていたが、ルビウスが言わんとしている事は大体わかった。リリアンヌがいた貧乏施設は、寂れた町外れにあった。そういう輩が、うろろろしていたのは日常茶飯事だったからだ。

「失礼致します。」

そんな微妙な空気の中、躊躇ちゅうちゅうせずコンコンと扉を叩いて入ってきたのは、ジョルジオだった。

「若旦那様、城から使いが来ておりますが、いかがなされますか？」

その言葉で、嫌そうに顔をしかめたルビウスは、一言追いつ返せとだけ言った。

「国王陛下の命だと。」

「それが？」

なんだと言うように、ジョルジオを睨み付けたが、彼はなんて事は無いかのように、話を続ける。長年ルビウスを相手にしていたのだろう、さすがである。

「ルーベント宰相も来られています。もし、召集に応じない場合は……。」

「わかった。仕方ないな。少し出掛けてくる。今日中には帰れないだろうから、エリック、ジュリアン、リアアンヌ、今夜は悪魔が活発になる。気を引き締めてパトロールにあたるよう。」

大きな溜め息をついて、立ち上がったルビウスは、それからと言って付け足した。

「もし、また悪魔に遭遇した場合は、この悪魔封じの陣を使いなさ

い。」

エリックにポイと投げたのは、寂れた鎖の欠片。

「使い方は分かるな？」

はいと頷くエリックを見て、彼は部屋から出て行く間際こう言い残した。

「遭遇したら、封じ込めるのを優先しなさい。もしも術が上手く発動しなくて、身の危険が迫ったら、その時は自分の身の安全を優先するように。」

ボタンと閉まった扉に頭を下げたエリックは、大事そうに欠片を黒いズボンのポケットへと仕舞おうとしていたが、それを横に座っていたジュリアンがかっさらった。

「っ！おい、なに勝手に取ってるんだよ。」

「ちょっと見るだけだって。」

「返せよっ。」

「ケチケチするなよ、減るもんでもあるまいし。」

取り合う彼らを見ていたリリアンヌは、溜め息をついてまた書類に目を通した。リリアンヌが見ているのは、惨殺された死体を撮った写真達。黒ずんだ血に絡みついた金髪の髪を見て、リリアンヌははたと思った。

たまたま路地で会った彼も、金髪に水色の瞳ではなかったか。それ

に、馬車に乗る前に聞こえた声は、確かに彼の名を呼んでいた。まだ言い合いをしている目の前の2人を放って、リリアンヌは部屋を飛び出した。フレドリッヒは出来た兄弟子だ。しかし、リリアンヌは何故か嫌な予感がしたのだ。丁度邸の玄関を飛び出した時、左斜め後ろから誰かに呼び止められた。振り向けば、どこかで見たことがある美しい女性が、食料を買い込んだ紙袋を抱えて不思議そうに立っていた。

「そんなに慌てて、どこに行くつもり？ ルビウス様なら、ルーベント宰相に連れられて、城に行かれたわよ。」

ルビウスを探しているのでは無いと、彼女に答えるとリリアンヌはああと彼女の名前を思い出した。初めてこの邸に来た日、ジョナサンとジュリアンを叱った、金髪に新緑の瞳をしたキャサリンと言う女性だった。

「もう暗くなるから、出掛けるなら早く帰って来た方が良いわよ。」

彼女の忠告を有り難く頂き、少し出掛けてくると告げて、リリアンヌは日が傾いた表の道に出た。

「しまった。どうしよう…。」

邸から少し歩いた所で、リリアンヌはフレドリッヒが、どこにいるのか知らない事に気づいた。彼は国境に向かうと言っていたが、それが何処なのかリリアンヌは分からない。邸に戻って兄弟弟子達に協力してもらうか、風蘭に助けを求めるか思案にくれていた彼女の脇に、一台の馬車が音も立てずに止まった。

「おや、カインド魔法大臣の七番目のお弟子さん？」

馬車の中から声を掛けて来たのは、城で会った確かりカ・ベクトルと言って名乗った男だった。

「あ、こんばんわ。」

どう挨拶をしたらいいのか迷ったが、とりあえず当たり障りのない挨拶をしておいた。

「こんばんわ。お一人ですか？珍しい。いったいどちらまで？」

人の良さそうな微笑みは、城で会った時と少しもかわっていない。どちらまでと聞かれたリリアンヌは、少し困り気味の顔でフレッド兄さんに会いに行くのだと伝えた。

「ほほお、フレドリッヒ殿に？これは偶然ですね。私もフレドリッヒ殿に用事があって、国境に向かう所だったのです。よろしかったら、ご一緒にどうですか？」

思っても見ない幸運に感謝しながら、リリアンヌは彼の言葉に甘えて馬車に乗せて貰う事にした。リリアンヌが馬車に乗り込むと、上質な馬車はゆっくりと走り出した。

「しかし、びっくりしました。何気なく外を見ていたら、その銀色の髪を見つけたのですから。」

嬉しそうに語るベクトルは、戸惑うリリアンヌに気づかない。馬車に揺れる間、何が嬉しいのか彼はずっと喋ったまま。

「えーっと、ベクトル様？申し訳ないんですけど、どこに向かって

るのかお聞きしても？」

その言葉を聞いて驚いた顔で、リリアンヌを見た。それもそのはず、行き先を知らずに馬車に乗っているとは思っても知らなかったのだから。

「失礼、まさかフレドリッヒ殿の居場所を知らずに、会いに行こうとなさっていたなんてびっくりしたので。」

びっくりした顔を慌てて、通常の人良さそうな顔に戻すと、丁寧に今向かっている場所を教えてくれた。

「今向かっている場所は、東と西の国境境、こくけいウルーエッドと言います。」

どこかで聞いた地名だと思ったら、別荘でルビウスが話してくれた昔話に出てきた名だった。

「今、国境の守りがあちこち崩れて来ているらしく、防衛省は大変のようです。」

だから暫く、フレドリッヒの姿を見かけ無かったのかと1人納得したりリアンヌは、外を見た。馬車はガラガラと音を立てながら、都心を離れていく。

「上から、忙しいフレドリッヒ殿に、この書類の意見を聞いて来いと言われまして。ところで魔女殿は、フレドリッヒ殿にどういった用事で？」

やあと堇色の柔らかな短い髪を撫でながら、彼はさり気なくリリア

ンヌに聞いてきた。

「えーっと、私もベクトル様と同じようなものです。〈先生〉からの使いで。」

内心慌てたりリアンヌに、気づきはしなかったようで、ベクトルは「お弟子さんも大変なのですね。」と同情してきた。

これ以上話を振られれば、その内ボロが出ると思ったリアンヌは、話題を変えてベクトルに振った。

「そう言えば、最初の自己紹介の時、幹部理事って仰ってたような…。」

「ええ、私の仕事はそれです。もしか、幹部理事というのをご存知ない？」

「幹部というのも何の事だか…。」

申し訳無さそうに言うリアンヌに、ベクトルは気さくに説明してくれた。

「そうでしたか。いえいえ、お気になさらず。まず、幹部というものから説明いたしましょう。リヴェンデル、レイヘルトン、サンリイチには魔法師、魔術師がおります。まあ、殆どが魔術師で、魔術師は片手で足りる程しかいないんですけどね。その魔法師、魔術師の誰もが必ず属さなければいけないのが、魔法省です。魔法省の一番偉いのが、魔女殿の師匠、ルビウス・カインド魔法大臣。その下に、幹部と言うのがあるんです。幹部は、魔法大臣に提出する案件を議論したり、後はそうですね。魔法試験を担う事もあります。ですから、幹部の中でも役割分担がありまして、魔法試験担当官、3

人の元老、現地視察官など様々な仕事があります。私は、その中の理事（事務）を担当させて頂いています。」

なる程と納得するリリアンヌに、何か分からない所はありますかとベクトルは聞いてきた。

「元老って言うのは？」

その言葉に甘え、リリアンヌは一つ質問した。

「元老ですか。そうですね、何と説明したらいいのか。幹部の中で、一番発言力がある方達です。あわよくば、魔法大臣の決定を覆せるような。案件の最終段階には、3人の元老の許可が無ければ、魔法大臣まで通りませんし、魔法大臣が手を貸して欲しいと言えば、大臣がするような仕事もしてらっしゃいます。元老の1人、シリウス・カインド様は前魔法大臣でらっしゃいましたし、ロアウル・シエルダー様は元老の地位について一番長くらっしゃいます。」

へえーと関心するリリアンヌに、ニコニコと微笑み掛けていたベクトルは、馬車が止まって外に目を向けた。

「着いたようです。」

「えっ、もう？」

辺りはだいぶ暗くなっているとはいえ、早すぎる到着にリリアンヌは驚きを隠せない。

そんなに狭い国だったのか？と考えていると、ベクトルが少し苦笑しながら教えてくれた。

「馬車に少しばかり魔法をかけたので、普通の何倍も早く着いたのですよ。」

「ベクトル様も魔法使いだったの？」

全くそんな風に見えない彼は、また人の良さそうな笑みを浮かべている。

「実技の方は得意ではありませんが、少しぐらいなら。」

関心するリリアンを促して、外を2人で見た。そこには、暗くなつた顔色の悪い空の下に、魔法で明かりを灯した布で覆われた小屋が、幾つも並んでいる。地面はゴツゴツした石が多く、花や草は枯れ、沢山の藍鉄色の服を着た異様な雰囲気纏つた（まとつた）男性達が行き来している。

「ほら、あそこにフレドリツヒ殿が、いらっしゃいますよ。」

ベクトルの指指す先には、一際若い青年が年配の男性達と何やら話している。フレドリツヒである。

「私は、フレドリツヒ殿に渡す書類を少し確認してから行きますので、先に行つて下さい。直ぐに後を追いますので。」

「わかった。ありがとう、ベクトル様。」

馬車を降りて走り出したリリアンに手を振って、ベクトルはふうと溜め息をついた。やがて、見計らつたように一羽の小柄な鳥が、閉まつてる筈の窓を何の障害も無く通り越して、向かいの席に着地した。

「こんな所まで、使いを寄越して。心配性ですね、貴方は。」

『仕方がなからう？で、どうだ？計画の方は。』

「ええ、それはもう順調に。万事滞りなく。」

嗶れ声^{しゃがれこえ}で人語を話す烏に、平然とベクトルは答えた。

『それは楽しみじゃの。早く儂に、アノ若い体を土産に寄越すのだ。』

「せっかちな人ですね。言われなくても、お持ち致しますよ。良かったら、今から面白いものが見れますけど、ご一緒にどうです？」

くつくつ笑うベクトルは、烏にうつとりするほどの笑みを寄越した。

『見ていきたいのは山々なのだがな、他の輩もちゃんと仕事をしているか、見て回らなければいかぬのでな。』

「それは残念ですね。」

『全くよ。では、期待しておるぞ。リカ・ベクトルよ。』

「有り難きお言葉。貴方に頂いたこの身体、貴方様だけの為に使わせて頂きます。全ては我が主、マリエダ様の為に。」

右手を左胸に当てるベクトルを瞳に捉えていた烏は、目を細めて微笑むと、勢い良く窓から飛び立って行った。馬車の室内には、烏が

飛び立った時に落ちた羽が数枚散らばっており、その内の足元に落ちていた一枚の羽をベクトルは拾い上げて、馬車から外に出た。

先程まで顔色が悪かった空は、どす黒い雨雲に覆われ、ひと嵐来そうな天気になっている。

「もう、物語は動き始めましたよ。…さあ、どこまで彼女を守れるかな？ ルビウス・カインド。」

不気味な笑みを浮かべて呟いたベクトルの声は、肌寒い追い風が絡め取り消し去った。その時、唇に当てていた烏の羽根をベクトルの指から奪い取って、共に宙に舞い上げていった。

7. 悪夢の始まり（前書き）

少しだけ、暴力的シーンなどがあります。お気をつけ下さい。今回は、アンジュリーナとリリアンヌ中心です。

7. 悪夢の始まり

今にも嵐になりそうな大空を見上げて、リリアンヌは駆け出した。ベクトルよりも先に馬車を降り、フレドリッヒの元に向かったが、どうも長兄の元にはたどり着けない。組み立て式の小屋と小屋との間が狭く、さらにはむさ苦しい男たちが通るため、前に進めないのだ。

「ちょっと、すみせんっ。」

「おっと。」

無理やり男たちの間をすり抜け、必死に前に進もうとするが、まだ幼い少女は男にぶつかり、はね飛ばされる。

「痛い。」

図体のデカイ男に当たり、その反動ではね飛ばされた。無様に地面にぶつかるのと擦りむいたのだろう、右肘から血が流れている。唇を噛み締めて傷の具合を見ていると、ふと目の前に人の気配がして顔を上げた。見れば、年は中年ぐらいだろうか、ニヤニヤと下品な笑いを浮かべた騎士団の服を着た男性が立っている。

「よお、嬢ちゃん。一人でこんな所にいちゃ危ないぜ。もしかして、男にでも会いに来たのか？ うん？」

「ち、違うわ。フレッド兄さんに会いに……。」

「フレッド？ ああ、あのいけ好かないラービンか。残念だが、お前

さんのようなおチビさんに、エル・ラービン第三隊長は興味ないだろうよ。俺で良かったら、相手するぜ。」

そう言うと、筋肉で盛り上がった自身の右腕を伸ばしてきた。真っ青になってぎゅっと目を瞑ると、手は何時まで経ってもリリアンヌに触って来ない。

「いててててっ。」

痛さに声を上げる男の声を聞いて目を開けたリリアンヌは、ぽかんと見上げた。捻られてる右腕は、独りでにひねり上げられており、それは何とも奇妙な光景だった。

「うちの末の妹弟子に声を掛けるなら、先生の許可を取ってからにしていたきたい。」

そんな男の後ろから少し怒った様子で姿を現したのは、今から会いに行こうとしていたフレドリッヒだ。

「なに！妹弟子？」

「ええ、そうですよ。先生に殺されたくなければ、今すぐここから姿を消しなさい。今後、彼女に近づかないと誓ってね。」

男の耳元で囁いたフレドリッヒは、男の必死に誓うと叫ぶ声を聞き、ようやく身柄を自由にしてやった。

「フレッド兄さん、ありがとう。」

男の慌てて去る後ろ姿を見ていたフレドリッヒは、リリアンヌの言

葉で険しい顔のまま彼女と向き合った。

「リリア！君は、なんで1人でこんな所にいるんだ。」

怒りながらも立つのを手伝ってくれた兄弟子に、リリアンはふんと威張って言い返した。

「私、フレッド兄さんを助けに来たのよ。」

「くだらない冗談はよしなさい。外出許可を先生から貰っているのかい？」

「外出許可？そんなの、なんでルビウスさんに言わなきゃいけないの？」

意味が分からないと首をふるリリアンを見て、フレドリッヒははあーと長い溜め息をついて、右手で額を覆った。

「あいつらは仕事をほったらかして、一体何をしてるんだ。先生から大目玉を食らうぞ。で、ここまでは何で？誰かに飛ばして貰ったのかい？」

「いいえ。ベクトル様の馬車に、乗せて貰ったの。」

ベクトル？とフレドリッヒが眉を寄せて聞き返してきた所で、ヨロヨロと右側から歩いてくるベクトルが見えた。

「やはり、あいつか。リリア、あの男には今後関わらないように。」

「あら、どうして？いい人じゃない。」

「先生からの指示だよ。私もあの男はあまり好きではない。いいね。」

有無を言わせない圧倒さに負けて、リリアンヌは大人しく頷いた。

「おお、フレドリッヒ殿。ようやく辿り着けた。」

「これはこれは、ベクトル殿。こんな国境の果てまで来られて、どうされました？」

ひいひい言っているいつもの笑顔を向けてくるベクトルに、若干顔をひきつらせながら、フレドリッヒは何でもないように聞いた。

「上から、この案件の意見を聞いてくるよう言われました。」

「そうですか。しかし、ごらんの通り、呑気に書類に目を通せるような状況ではないですよ。」

「お忙しいのは、重々承知なのですが。うーん、しかし困りました。」

「申し訳ありません。幹部の方々に、そうお伝え願いますか？」

「いえ！それでは私の立場がありません。どうか、1時間、いえ、30分お時間を頂けませんか？簡単に質問に答えて頂くだけで構わないので。お願いします。」

なおも食い下がるベクトルに、迷惑そうに顔をしかめながらも、フレドリッヒは15分なら時間を開けましようと言った。

「ありがとうございます。おや、魔女殿、肘から血が出ておりますよ。手当てを致しましょう。」

「いえ、直ぐ側に医師がいますので、そちらで手当てをしてもらいます。あなたのお手をわずらわせる程でもありません。お気持ちだけで。ああ、そうだ。リリアンヌが大変お世話になったそうで、兄弟子としてお礼を申し上げます。」

ありがたいと思つてるとは到底思えない視線で、チラリとベクトルを見ると、半ば無理矢理にリリアンヌを歩かせた。

「お礼を言われるまでもありませんよ。」

背後から掛けられた言葉は、冷たく、殺気を帯びていた。後ろを振り返ってベクトルを見ようとしたが、フレドリッヒはそれさえも許さず、半ば無理やりに直ぐ側の小屋に入らされた。そこは簡易医局で、リリアンヌが医師に手当てをして貰っている間、フレドリッヒは不機嫌そうにまた外に出て行った。治療が終わり、暇つぶしに布の隙間から外の様子をこっそり伺うと、何やら慌ただしくなっていた。医師が違う患者を見てる隙を見計らい、するりと外に飛び出した。

「フレッド兄さん、どこ行つたんだろ。」

直ぐに戻ると言っていたが、大人しく待っているのは性に合わない。それにまだ伝えていない事がある。狙ったかのように金髪に水色の瞳の若い男性。金髪は多く街にいるが、水色の瞳を持つ者はなかない。馬車に乗る間際に聞こえた声も合わせると、この一連の犯人はフレドリッヒを狙っている。

早く伝えなければ。

キョロキョロと辺りを見渡していた時、背後からリリアンヌの手首を掴む手があった。その手は氷より冷たく、リリアンヌの体温を奪っていく。あまりの冷たさに、生身の人間ではないと悟ったリリアンヌは、掴まれている手首を力の限り振り払うと、背後にいる者を見るため振り返った。

「リナ……？ どうしてこんな所に。」

手首を掴んだ人物は、こんな場所に居るはずがないアンジュリーナだった。うつすらと微笑むアンジュリーナの肌の白さは蠟人形よりも白く、血の気が無いため青白く見える。彼女の赤い髪は艶がなくボサボサで、色あせ随分手入れがされていないようだ。海色の瞳は濁って灰色となっており、リリアンヌが知っている彼女と同一人物とは思えない。

「どうして？ リリアこそどうしたの。」

「私はフレッド兄さんに会いに。」

うろたえるリリアンヌの手をまた、アンジュリーナはそっと取って微笑んだ。

「私に隠し事するなんて。」

「リリアっ！」

困惑していると、遠くからフレドリッヒが呼ぶ声が聞こえ、顔をアンジュリーナから逸らした。

「あら、偶然。私もフレドリッヒ様に会いに来たのよ。フレドリッ

ヒ様にお近付きになりたくて。なのに、いつもリリアばかり。リリアと仲良くなったら、私も見て下さると思ったのに……。使えないなら、あなたはもういらない。」

殺意が籠もった声にはつと気付いた時には、リリアンヌを守るため彼女を包んだフレドリッヒの防衛壁をいとも簡単に突き破って、真っ黒な無数のコウモリがリリアンヌに群がった。目の前が闇に包まれ、息苦しさの中、ずるずると闇の奥深くへと引きずり込まれていく。

「ごめんなさい、リリア。でも、あなたが悪いのよ。」意識がもうろうとする中、高らかに笑うアンジュリーナの声が聞こえたのが最後、リリアンヌは意識を手放した。

ふと冷たい感触を頬に感じて目を覚ませば、リリアンヌは冷たい地面にうつ伏せに倒れていた。

「うつ。」

重い体を無理やり起こして、辺りを見渡す。

「はいどこ？」

先程までは、野外だったはずなのにいつの間にかどこかの屋敷内にいる。ひんやりとした広い廊下には人1人おらず、辺りはしんと静まっている。のろのろとリリアンヌは立ち上がって考えた。

「確か、リナに会ってそれから……。」

得体の知れないコウモリの群れに飲み込まれたんだった。思い出し

てぶるつと身を振るわせると、リリアンヌは腕をさすった。

「どうすればいいんだろう。」

とにかく、人を探そう。

そう決心して歩き出した。屋敷内の造りはしっかりとっていて、それなりに金持ちの貴族の家だと言うことが伺える。けれど、豪勢な割に屋敷に活気がなく、気味が悪い。誰にも会わない廊下を歩きながら、窓の外を見ると真っ暗の中、うっすらと雲が掛かった三日月がぼんやりと見える。月に気を取られていると、どこらか物音が聞こえてきた。すぐ近くにある部屋からのようで、そつと扉を開けて中をうかがった。

「この役立たずがっ！」

バシッという派手な音と共に床に投げ出されたのは、当の本人、アンジュリーナだった。

あつと声を掛けようとするが、それを遮って彼女の父が怒鳴りつけた。

「失敗しただど？」

「はい、でもまだチャンスはありますわ！七番目の弟子と友達になったのです。上手くいけば、フレドリッヒ様にお近づきに……」

そこまで言わすと、父親は思いつ切り右手でアンジュリーナを叩いた。パシンと乾いた音が部屋に響いた。

「上手くいけばだど？何を生ぬるい事を言っているっ。ラービン家の嫡男は、もうこちらに興味が無いと言ってるではないか。その七番目の弟子が来てから、その者に掛かりきりだと言うし。折角、ラービンの息子をお前を使ってこちら側に付けようと思っていたものをっ！」

せわしなく部屋を右往左往する父親を、アンジュリーナは悲しそうに見つめていたが、父親を説得しようとすがりついた。

「お願いです、お父様。七番目の弟子はなんとか致しますわ！ですから…」

「そうか…。邪魔ならば消してしまえば良いのだ。」

「え？」

にんまりと笑みを作った父親は、アンジュリーナの肩を掴んで顔を近づけた。

「アンジュリーナ、計画は変更だ。フレドリッヒではなく、師のルビウス・カインドにしなさい。幸いにもまだあいつは独身だ。七番目の弟子と仲良くなったなら、簡単に近づける。」

「でも、私はフレドリッヒ様をつ。」

「こちらに興味を失った奴などに、いつまでも和み惜しくしてられん。それに、お前の気持ちなど二の次だ。貴族の娘は只の道具なのだから。」

そう突き放す父親に、うなだれたアンジュリーナは、仕方なく黙っ

て頷いた。

「ルビウス・カインドを手玉に取り、権力を根こそぎ奪え。手段は選ぶな。邪魔な者は消せ。」

「消す？魔法も使えない私がどうやって…」

「なーに、安心しろ。あの方から必要ならばこれを使えと頂いたからな。」

ポケットから取り出したのは、透明な瓶に入った赤い液体。こっそり様子をうかがっていたリリアンは、一体何だろうと身を乗り出した。一方、赤い液体を見たアンジュリーナはわなわなと震えだし、身を縮めている。

「…お父様。それだけは、お願いです。どうか、お許し下さい。」

「何を恐れる？苦しいのは最初だけだ。さあ。」

娘の口に無理やり液体を流し込んだ父親は、満足そうに笑って部屋を出て行こうとする。アンジュリーナに目を奪われていたリリアンは、とっさに身を隠すタイミングを見失い、扉を開けた父親と出会ってしまった。

「えっと…。」

逃げるべきだが、とっさに言い訳を考えたりリアンは口を開いた。しかし、そんなリリアンには目もくれず、あたかも誰もいないかのように父親は脇をすり抜けて行った。

「あれ、もしかして私見えてない？」

しばらく呆然としていたリリアンヌだったが、はたと思い出してアンジュリーナに駆け寄った。

「うぐっ。げほ。」

部屋の隅でうずくまるアンジュリーナは、大量の血を吐きながら、苦しそうにしていた。

「リナ、大丈夫っ？」

先程のアンジュリーナの父親を見れば、恐らく聞こえないだろうと思いつつも彼女に手を伸ばし、声を掛けた。

「ふっふふふ、あはははは。」

突如、不気味に笑い出した彼女にビクッと手を引っ込めると、そろりと後に下がって距離をあけた。

「大丈夫？だって。誰のせいでこんなに苦しんでるとおもってるの！お前のせいだ。お前さえいなければ。」

口から血をだらだらと吐きながら立ち上がると、じりじりとリリアンヌに迫ってくる。目は血走り、血管は不自然な程浮き上がっている。アンジュリーナから、距離を保とうと後ろに下がって行ったりリアンヌは、どんと背中に衝撃を感じてそれが壁だと分かると、アンジュリーナと向き直った。

「私のせいって、私何もしないわ！どうしてそんな事言われなき

やいけないの。」

見に覚えのない事で自分のせいだと言われても、何のことかさっぱりわからない。

「わからない？はん、随分守られて来たのね。私はずっとあんたよりフレドリッヒ様を想っていたのに。孤児の分際で一体どうやって取り入ったの。やっぱり体？」

「何言ってるの？フレッド兄さんはただの兄弟子よ。」

「嘘よ。じゃあ、なんでお食事に誘っても末の妹弟子が心配だからって断られるのよっ。可笑いじゃないっ！しかも、なに？師でさえもたぶらかしたなんて、さすがよね。孤児は。」

そんなのフレッド兄さん本人に聞いて欲しいと口を開くより早く、アンジュリーナはリリアンヌの首に手を掛けて笑った。

「あんたが現れてからだわ。上手いかなかったのは。折角、友達として取り入ってから、捨てようと思ってたのに。もう我慢出来ない。」

「あ、アンジュリーナ…。」

ぐっと力を込めて来たアンジュリーナの手を解こうと、リリアンヌが彼女の腕に触れたが、更に力を込めてくる。

「ルビウス・カインドだったわよね。あなたの師匠。レイルと私を見張ってみたいだけけど、大した成果上げられなかったみたいよ。ふっ、せいぜいこの子が苦しむのを見ていたらいいわ。」

「うつ、苦し、い。リ、ナ、やめ、て。」

8歳の子供とは思えない力で首を締め付けるアンジュリーナは、どこか面白そうに苦しむリリアンヌを見ている。

「がはっ、た、すけ……て。」

酸素を求めて、口を大きく開くが、全く肺には入って来ない。開いた口からは、よだれが落ち、目からは涙がこぼれ落ちていく。

「うふふ。」

ぼんやりと霞む視界には、嬉しそうに微笑むアンジュリーナ。

先程まで力一杯暴れていた手足は力無く誰下がって、地面から体は浮き上がっているように感じる。

確かこんな事、いつだったかあったなどと、リリアンヌは遠い記憶と共に意識を手放した。

8. それはいつかの記憶（前書き）

一部に流血、残酷な描写がございます。お気をつけ下さい。今回は、
リリアンヌ目線となっています。

8. それはいつかの記憶

優しい声が耳届いて来て、リリアンヌは重い瞼を開けた。

どうやら自分はまだ生きてるようだ。

今度はどこだろうと起きあがろうと、体を動かすがどうも上手くいかない。手足が短く、頭が重い。まるで、赤ん坊のようだ。まさかと思い、思い通りにならない手足をばたつかせて、体を捻ってみる。白い天井が反転して、木で出来た柵が横に見える。ひんやりとする白い布を頬に感じて、自分は赤ん坊を寝かす寝台の中にいることを悟った。柵越しには若い女性と何かがいるように見えるが、はつきりとは何かわからない。もっとよく見ようと、体を捻って一回転して、更に体をひっくり返すと近くなった柵に顔面をぶつけてしまった。

「ふえ。」

余りの痛さに自然と泣き声が口から漏れて、次第にそれは大音量で部屋に響いていく。

「あらあら。起きたの？」

その声と共にふわりと体が浮き、ゆらゆらと揺れる心地良い腕の中で、涙で濡れた瞳を瞬くと、銀色の髪に鮮やかな赤色の女性が目に飛び込んできた。

「寝返りを打って柵に顔をぶつけたのね。ふふ、お馬鹿さんね、リリは。」

チュツと音を立てて額にキスされ、そのくすぐったさで自然と笑い

声が零れた。

「…マリー様。」

そんなのどかな雰囲気の中、もう一人どこからか控えめに掛けてくる声があった。誰だろうと身をよじって姿を探すが、見つかったのは開いたままの小さな窓と、真っ暗な闇だけだった。

「折角のお誘いだけれど、やっぱり、答えは変わらないわ。まだ王都も安全と言えないし、何よりこの子、リリと今は静かに暮らしたいの。ごめんなさい。」

すまなそうに言う女性は、窓の外に向かってリリアンヌをあやしなから答えた。

「そうですか。貴女がそう仰るなら仕方ありませんね。」

少し疲れたようなその声は、残念そうにその言葉を呟くと、もぞもぞと闇の中で身じろいだ。それを合図に取って、女性は姿が見えない相手を見送る為、リリアンヌを抱いたまま窓辺へと近づいた。

「では、師にそのように報告させていただきます。」

「ええ、シリウス様によろしく。あの人にも私達は元気だと伝えて。」

「また振られましたと伝えますよ。しかし本当に、お子様がお生まれになった事をお伝えしなくてよろしいのですか…?」

「だって、生まれたと知ったら会いたくなってしまおうでしょ?」

相手の軽い無駄口に笑いながら、女性は嵐になりそうな空を見上げた。

「ギルバート、ひと嵐来そうだわ。急いだ方がいいんじゃない？」

「そのようです。ローズマリー様、リリアンヌ様、また近い内に伺いに参りますので。」

「気をつけて。」

バサツと力強い羽音と共に、近くにあった木の枝から飛び立ったのは、大きな鳥の羽が背中から生えた、犬とも狼とも猫と言い難い四本足の獣だった。ゆっくりと羽ばたいて行った獣を見送っていた女性は、窓をきっちりと閉めて寝台の近くへと戻って来た。

「貴女のお父様に会えるのは、もう少し先のようね。」

少し寂しそうにリリアンヌを見つめてくる彼女は、ふっと切なそうに笑ってリリアンヌを寝台へと寝かせた。今まで側にあった温かみが離れていく寂しさからか、自然と両腕が女性に伸びた。しかし、手には何も捕まえられず、虚しく宙を切っただけだった。

「お手紙を書いてしまわないと。ちよつとの間、ここでいい子にしてて頂戴。ねっ。」

そう言つて、寝台から離れると、窓辺にある机に背を向けて座った。長い綺麗な銀色の髪を眺めながら、あの人が母親なのかと悟った。確か名前はローズマリーと呼ばれていた。初めて知った実の母の名と姿、声。今までぼっかりと穴が空いていた心の奥が、ゆっくりと

満たされて行くのがわかり、一人その何とも言えない嬉しさに顔が緩んでしまう。そんなふわふわとした中、バンッと窓に、勢い良く何かが打ちつけられた大きな音で、とっさに身を縮めた。

「大丈夫よ。今のはただの風だから。」

手紙を書き終えたのだろうか、母親がリリアンヌの所へと戻って来て、リリアンヌを抱き上げてあやした。

「だけど、嵐と一緒に嫌なモノが近くに来てるわ。」

眉間に皺を寄せて、母親は窓を睨んでいる。

「来るわね。リリ、少し寒いけれど外に非難しましょう。室内に居てはこちらが不利だわ。」

さっと柔らかな布に包まれ、リリアンヌはされるがままの状態で、大人しく母親の腕の中で揺られていた。やがて、冷たい風と激しい雨が頬に叩きつけ、外に出たのだと悟った。ミシリと建物が軋む音を聞いて、勢い良く走り出した母親に驚いて、彼女を見上げる。危うく下を噛みそうになったではないか。そう批判を兼ねて睨んだが、母親はぎゅっとリリアンヌを抱きしめたまま、前を向いて走っている。ドンっという地響きの衝撃でバランスを崩した彼女に、後ろから眩しい閃光が次々と放たれてくる。

「くっ。」

幼い子供を腕に抱え、背後を取られた彼女はリリアンヌから見ても完全に不利な状態だった。寂れた町中を後ろからの攻撃から逃れて、彼女は目の前に見えて来た森の中へと駆け込んだ。直ぐ左脇に飛ん

できた閃光を間一髪で避けると、それは木にぶち当たり、一瞬にして燃え上がって灰と化していった。その脇を物凄い速さで駆け抜けた彼女は、小声で呪文を呟くと、辺りの木々に淡い水色の光を放った。その光は、彼女が通り過ぎると同時に光の力を増し、それと同時に追っ手の悲痛な声が辺りに木霊した。その隙に、このあたりで一番大きいのだろうか、一つの樹木の根元の隙間にリリアンヌをすっぽりと隠した。

「ここにいなさい。静かにしてるのよ。大丈夫、いい子ね。」

今にも泣き出しそうな母親を慰めようと、また離れていく温もりを放さまいと、彼女の顔に縋るように両手を伸ばした。どこにも行つて欲しくなくて。

側に居て欲しかったから。

しかし、母親はその手を取ることは無かった。

「愛してるわ。可愛い私のリリ。あの人と私の大切な宝物。側に居れなくても、ずっと見守ってるから。」

チュツと頬にキスをして、母親はさっと木の影から光に飛び出して行った。

「待って！行かないで。嫌だ。置いてかないで、お願い…おかあさん！」

リリアンヌの精一杯の悲痛な声は、小さな赤子の声となって雨音にかき消された。

遠くで爆発音が響き、雷が怒りを露わにしている。あれからどれくらい泣いたのだろう。

辺りが静かになり、そつと目を開けて体を動かした。

木々の間から見える分厚い雲は移動しながら、名残惜しそうに小雨を降らし続けており、ぐずぐずとした天気はまだ続いていた。まわりにある木々は焦げ臭い異臭を放ちながら、黒々とした煙りが立ち上っている。そこまで周りを見渡して、ふとりリアンヌの目に飛び込んできたのは、まだ若い女性の手。その手はピクリとも動かず、リアンヌへと伸ばされていて、その先に雨に濡れる銀色の長い髪がだらりと広がっていた。嫌な胸騒ぎがして、女性の顔をよく見ようと身をよじる。母では無いことを祈りながら。

少しずつ角度を変えて女性の顔を見ようとしていた時、不意に喉に息苦しさを感じたと思ったら、重力に逆らって体が浮いた。どこからか現れた大柄の男が、リアンヌの首を右手で易々と掴み、空中にぶら下げられていたのだ。

「ちょっとちよつと、あまり体に傷をつけずに綺麗なままでつれて来るようにと言われてるんだから、手加減して下さいよ。」

どこか愉快そうな声が大柄な男の背後から聞こえ、フードを目深に被った人が姿を表した。

「それじゃ、首の骨粉々に碎けて、美しくないでしょ？あんたの力、波半端じゃないんだから。」

「…加減する。魔法面倒くさい。」

ぼそぼそと呟いた大柄の男の声が聞こえたのか、くるりと周りながら、灰色のマントをひらひらとなびかせて、後ろの人物は仕方がないとも言うように答えた。

「そうだね。ちゃっちゃんと片付けてあの方の下に帰ろう。ちゃんと

手加減してよ？怒られたくないしね。」

わかってる。

小さく呟いた大柄の男は、ぐっと手に力を入れて、赤ん坊の首を絞めていく。リリアンヌは、苦しさのあまり手足をばたつかせて、苦しきからのがれようとする。その手足のどちらかが、大柄の男の灰色のフードに当たったらしく、パサリとフードが頭から滑り落ちた。顔色の悪い茶褐色の髪の子。顔中返り血で汚れ、目は殺意に血走っている。その男を見ただけで、首を絞められている今とは違う恐怖が湧き上がってくる。そして、リリアンヌが恐怖に身を凍らせたのがわかったのか、表情一つしない男が嬉しそうに微笑んだのだ。

アンジュリーナのように。

狂ってる。

更に力を込めた男を見て、リリアンヌはそう思った。その時、ふと首の圧迫が緩み、ドスと鈍い音が聞こえた。支えを突如失った体は、急激に落ち、為すすべもなく、衝撃に備えてキツく目を閉じた。しかし、強い衝撃はやって来ず、変わりに柔らかいクッションのような場所に着地した。

「この子に穢れた手で触るな。」

静かに、けれど確かに殺意を含んだその声は、リリアンヌの真上から聞こえ、身を震わせた。

「くそっ、逃げるぞっ。」

少年の姿に見覚えがあるのか、姿を見た途端大柄の男を連れて、灰色のマントを着た人物は一目散に逃げ出した。

【我が身に仕えし闇の鬼神クロフォード、黒の神ヘクトル。罪深き者達に罰を与えたまえ。】

しかし、リリアンヌを腕に抱いた少年は逃がすまいと呪文を口にした。その言葉に連動して、影という陰から、隠れていた男達までも飲み込んでいく。うっすらと開けた目にそれを見ると、まわりに人の気配が増えていた事に気がついた。

「生き残っているのは、この赤ん坊だけか？」

まるで決まった台詞^{セリフ}を棒読みで読んだかのように、感情の無い言葉で聞いてきたのは、黒いマントを身につけた背が低い男性だった。髪は少し癖づいた黄金色の髪で、何の感情の宿らない透き通った鳶^{とび}色の瞳をリリアンヌへと向けていた。

「はい、他は全滅ですね。」

「全滅…ギルバートもか？」

「王都に戻る途中に攻撃されたようです。」

リリアンヌを抱いている少年のような人物に、淡々と聞く目の前の男はしばらく考えて、くるりと背を向けて歩き出した。少年も大人しく続く。

「アレックス。」

ほんの少し歩いた所で立ち止まって、前にいる男は聞いた事がある名を口にした。もしかと思ひ、恐る恐る男の脇から見やると、焦茶

色の髪に漆黒の瞳を持つ、幼きアレックスがいた。リリアンヌが一人驚いていると、動かぬ女性の脇に膝をついていたアレックスは、目の前の男に辛そうに首を左右に振った。

「そうか。」

男は短くそう言っただけで、その後は何も言わなかった。

嵐が去った後にもかかわらず、まだくずつく大空の中、静寂が辺りを包み、今この場にいる全員が彼女の死を惜しんでいた。黙禱を捧げた後、アレックスに側を離れるよう指示した男は、小さく呪文を口にして、パチンと指を鳴らした。すると、彼女の体が炎に包まれ、一気に燃え上がった。

「師匠！ いったい、何をっ!？」

非難に似たアレックスの声が耳に届く。

「古代魔女の亡骸は、聖火で焼き払うのがあの国にある習わしだ。それが、亡き者に対する敬意にあたる。」

感情がこもっていないその声は、無知である弟子を咎めるようにも聞こえた。辺りの木々が悲鳴を上げ、熱気と異臭が漂ってきて、赤ん坊であるリリアンヌは泣き声を上げた。その声にはっとしたように腕に力がこもり、熱気から守るように腕に抱き寄せられた。見上げる少年の顔はこちらに向くことはなく、真っ直ぐ前を向いたままだ。母とは違う抱き心地に落ち着かなく体を動かしたが、少年は更に力を込めてリリアンヌを抱きしめた。彼の腕の中が居心地よくなった頃には、母の亡骸は炎で灰一つなく燃え上がって消えていた。初めて見る事が出来た母親の死に、悲しいという感情よりも、おいて行かれたという寂しさを包んでいたリリアンヌの耳に、涙声で

叫ぶ少女の声が届いてきた。

「うっ、マリー様あ。」

母がいた場所は、どす黒い焦げ後が残るだけで、そこへばたばたと駆け寄っていった少女は、残った温もりに縋るように崩れ込んだ。

「…いつか、王都に戻ってあの子の父親に会わすんだと仰っていたっしかったのにつ。こんなに、早く。ひっく、うう。」

泣きじゃくる金髪の少女は、いっそう声を上げ、しばらく涙が止まる事は無いだろうと見えた。そんな少女に、誰も慰めの言葉をかけず、更には目の前の男は冷たい言葉を投げかけたのだ。

「いつまでも泣いているんじゃない。自分の感情を混同するな、そんな者はいらない。足手まといなだけだ。アレックス、邪魔だ。連れて行け。」

思いやりもない師の言葉に少しだけ躊躇したが、少女を立たせると、その場から離れさせようと声をかけた。

「キャサリン、師匠の邪魔になるから、少しここを離れるぞ。」

キャサリン？

もしやと思い、腕の隙間から顔を覗かせると涙で濡れた新緑の瞳とぶつかった。少女は、本邸の料理人だという、キャサリンだった。リリアンヌを見たキャサリンは、涙でくしゃくしゃになった顔を更に歪めて、背を向けて走り去ってしまった。幼いアレックスにキャサリン。思わぬ顔見知りに会い、おっかなびっくりしているリリア

ンヌを置いて、男と少年は話を進めていく。

「これからどうされるのですか？」

「ここでの判断は私に任されている。」

地面を踏みしめる音が聞こえて、鼠色の髪に金色の瞳をした青年が目の前に現れた。

「リド様、若い男はどうやら逃げたようです。」

「わかった。マイク、お前はその赤ん坊を連れて、レイヘルトンに行け。」

男と少年の間ぐらいの年の青年は、鋭い金色の瞳を細めて、男を見やった。

「北の国に、ですか。」

「ああ、あそこの北はずれにはお前の実家、ローリング公爵が管理している施設が会ったはずだ。」

「あんな場所にこの子をも？」

納得いかなくても言うように、更に青年は目を細める。

「少々問題はあるが、安易に王都で我々に守れるよりよっぽど安全だ。」

「わかりました。」

決定権がある男に異を唱える事もせず、リリアンヌを抱いている少年へと青年は近いて来た。

「私が預かるよ。」

優しく少年から奪おうとした青年は、離すまいと力を込めた少年に眉をしかめた。

「どうした？」

離さない少年に、何か問題でもあるのかと聞く青年に、はっきりとした口調で告げた。

「僕がこの子を守ります。どこにもやりません。」

その言葉にびっくりしたように目を開き、どうしたものかとリドと呼んだ男を見やった。彼は、無表情の顔をほんの少し崩して右側の眉を釣り上げた。

「何を言ってるんだ。」

男の機嫌が崩れたのを悟ったのか、少し焦ったように青年は少年に向き直って声をかけた。その姿が余りにも面白くて、リリアンヌはこっそり笑った。笑ったのがわかったのか、青年は少し不機嫌そうに顔を歪めた。笑いもすぐ引っ込み、なんて事は無いかのように明後日の方向を見つめた。青年は、また少年に視線を向けて問った。

「いったいどう言うことか、説明してくれないと。」

「そのままの意味です。この子の事はあの人から任されていますし、僕が守ります。この子と結婚しますから。」

「はあ？何を言ってるんだ。まだこの子は生まれたばかりじゃないかっ！」

「時が経てば、結婚出来る年になるでしょう？」

何を考えてるんだと大空を仰いだ青年に便乗して、リリアンヌもこの少年は頭が可笑しいのではないかと思った。

「とりあえず、その話しは今置いておいて、その子を渡してくれるか？」

「嫌です！僕の側に置きます。」

気を取り直した青年は、少年からリリアンヌを取り上げるのを先として、受け取ろうと腕を伸ばしたが、きっぱりとした拒否と共にその腕から遠ざけた。

「渡しなさい！」

「嫌です！」

しばし、その終わりが無い言い合いを打ち切ったのは、先ほどから黙っていたリドだった。

「あの人から任されているとは？」

「子供が産まれたら、顔を見せに来て欲しいと、守り通して欲しい

とも。」

「ならば、結婚がどうとは関係無いだろう。」

無表情に告げる彼は、真っ直ぐに少年を見つめている。先程の顔を幻だったのではないかと思うほど、何の感情を写していない。

「言った筈だ。私情を仕事に挟むなど。」

淡々というリドは、キツく口を結んだ少年を何も答えを求めず、話を繋げていく。

「仕事を抜きにして、結婚すると言うなれば好きにしたらいい。私はお前の親ではないのだから、そこまで面倒見切れん。だが、今何も地位も力もない子供が我が儘を言うならば、どれだけ周りに迷惑を掛けるのか分からないとは言えぬだろう。その子も必ず苦しむ事になる。言ってる事はわかるな。」

無言で頷く少年に、リドは静かに告げた。

「本当に守り抜きたいならば、まずは力をつけろ。使える者はすべて使え。それからだ。」

「それまで、僕らが守るから。」

唇を噛んだ少年に優しく声をかけた青年は、そろりそろりと腕を伸ばしてリリアンヌを受け取ろうとしている。

「渡しなさい。」

厳しいリドの声に、意を決した少年は、腕の中にいる小さな赤ん坊を見つめた。吸い込まれそうな漆黒の瞳に見つめられ、ドキリと心が疼いた。さらりと少年の頬を撫でた黒髪に触りたくなって、右腕を伸ばした。しかし、腕から腕へと移され、反対に少年に頬を撫でられた。心地よさに浸っていると、頭上から苦笑が漏れた。

「大丈夫さ。悪い虫がつかないように見張ってるから。」

リリアンヌを受け取った青年は、苦笑しながら少年から離して歩き出した。

「では。」

「ああ、頼む。」

リドの近くに歩いて行った青年は、笑いを噛み締めながら後ろを振り返って少年を見やった。

「まさか、あんな事言い出すとは。」

「人の心は案外簡単に変わるものだ。」

「そうですかね。」

立ち去ろうとした際、男の面白そうに呟いた声で、リリアンヌは目を見開いて驚いた。

「面白くなりそうだな。しっかりと、お前の实力を見せて貰おうか、ルビウス。」

あの瞳を、あの漆黒の瞳に見つめられた時、心が疼いたのは恋とも憧れとも言えないもので、正しい言葉を当てはめるならば、運命というものかもしれない。

「じゃあ、行ってきますね。」

くると反転した景色の先には、無表情のリドと言う男、更にその先に寂しそうに目を伏せているルビウス。幼い背丈に短い髪は、今の彼とは随分と違う印象を受ける。年相応の少年である。リリアンヌが視線を向けたのに気付いたのか、視線を上げてこちらを見た。

また、会えるから。

やんわりと微笑んだルビウスは寂しそうで、慰めようと自然と彼に手がのびる。

けれど、その手は届く筈もなく、彼の姿は霧になって消えた。

9. 彼女の心境

「リリアンヌ？」

その懐かしい声に、はっと視線を上げると、心配そうにリリアンヌを見つめるルビウスの顔があった。その冷えた頬にそっと添えてある手は、血の気が無い自らの手。その事に気づく否や、カッと頬が火照ってとっさに叫んだ。

「なななな、な、んで。あつつつ。」

何でここにいるのかと聞こうと身を起こそうとしたが、舌が上手く回らず、さらには首に痛みを感じて再び、横になることになった。

「まだ動かない方がいい。」

目を覚ましたリリアンヌにほっと息をついて、ルビウスは彼女を抱き上げた。その時に初めて、ルビウスの腕の中に居たことに気づいたリリアンヌは、顔を赤くさせて身じろいだ。

「お、降ろしてください。」

そんなリリアンヌの願いは無言で却下され、彼はスタスタと歩いて行く。降ろしてもらったとしても、1人で歩ける保証はないが、赤ん坊のように抱きかかえられているのは、なかなか恥ずかしいものがある。そんなことを思っていたら、ポタリとリリアンヌの頬に冷たい雫が降ってきた。どこから降ってきたのかと見上げれば、雨が降ったのか、真っ黒な少し毛先に癖がある彼の髪から、水滴が数滴

滴っていた。辺りを見渡してみると、随分と降ったのだろう、地面には所々大きな水溜まりの池が出来上がり、ぬかるんでいる。現在は、空は幾分明るくなっていて、霧雨のような雨が降るだけであるが。長らく雨に当たった彼のマントはひんやりと冷えていて、リリアンを抱えている手もかなり冷えている。一体何があったのか。口を開いて聞こうとしたとき、リリアンの声を遮って年配の男性が近くに駆け寄ってきた。

「カインド魔法大臣！お弟子殿もご無事でっ？」

茶褐色の髪から水滴を滴らせて来た彼もまた、雨にうたれたようで、衣服はずっしりと水分を含んでいた。

「ああ、モーリス防衛大臣。御陰様で無事ですよ。リリアンの方は、先程のドーリスの闇に巻き込まれたようですが。」

「それは大変！直ぐに医局にご案内致しましょう。」

「いえ、邸に戻って休ませます。お気遣い頂き、ありがとうございます。」

向こうの申し出をやんわりと断り、彼の右後方に向かって声を張り上げた。

「ジュリアン！」

その声と呼ばれ、もの凄い勢い良いで走って来たのは、当の本人である。彼もまた、ルビウスや防衛大臣に負けず劣らずの濡れ鼠だった。

「これからリリアンヌを連れて一旦邸に戻る。後から来るオリヴィアと共に後片付けをしてなさい。」

「はい。」

その指示を仰いで、くると背を向けたジュリアンに、ルビウスは思い出したように更に声を掛けた。

「ああ、ジュリアン。後片付けをし始める前に、その濡れた体をちゃんと乾かして起きなさい。そのままだと風邪を引いてしまう。」

弟子を思いやるその言葉に、振り返ったジュリアンはかなり驚いた顔でルビウスを凝視した。

「返事は？」

「あつ、はい！ありがとうございます。」

なかなか返事を返さないジュリアンに、少しイライラとした声で返事を促して、防衛大臣に向き直った。

「では、モーリス殿、一旦失礼させていただきます。」

そう言うや否や、相手の返事を待たずに転移魔法を発動させて、その場から去ってしまった。

一瞬鮮やかな白い光がリリアンヌ達を包んだかと思えば、次の瞬間にはただっ広い寝室に移動していた。ぱっと部屋を見る限り、リリアンヌの部屋でない事は確かである。彼女の部屋は終始勉強用具が散乱しているため、こんなに綺麗ではないし、まず、こんなに広くはない。この部屋の広さは、リリアンヌの部屋より一回りも広く、

寝台は大人が5人横になって寝れるぐらい大きい。カーテンは閉まっているため部屋は薄暗く、今は朝なのか夜なのか分からないのが少し残念であるが。そんな事を部屋を見て考えていたリリアンは、そっと寝台に下ろされて我に返った。

「ルビウスさん！ここ、どこですか？私の部屋じゃないですよね。あ、服がいつの間にか乾いてる。」

ルビウスと二人きりになるのは初めてではないが、漆黒の2つの瞳に見つめられてるとどうも落ち着かず、聞きたい質問とは違う言葉が口からこぼれ落ちていく。寝台の縁に腰掛けたリリアンは無言で見つめていたルビウスは、ふっと笑って自分も寝台へと腰掛けた。

「ここは本邸の西館にある僕の寝室だよ。君の部屋だと、こちらの都合が少し悪かったのね。服は、転移魔法と同時に乾かしたよ。」

「へえ。じゃあ、2つ同時に魔法使えるなら、5つとか10個とか同時に…。」

「リリアンヌ、それが君が今一番聞きたい事かい？」

ペラペラと喋るリリアンヌを遮って、ルビウスは真っ直ぐに尋ねた。

「…違うわ。」

はあと溜め息をついて、リリアンヌはルビウスを見つめて改めて聞いた。

「私、気を失ってたけど、あの場所で何があったんですか？」

「知りたい？」

「はい。」

すると、ルビウスはリリアンヌのマントを取り去り、露わになった首に左手をそっと添えた。

「えっと、あの…。」

そのいきなりのことに、どうしたものかと身じろぎして、視線を宙に彷徨わせた。

「キツく絞められたね。痛む？」

「いいえ。」

よっぽど跡がいつてるのか、ジッと首を見つめていたルビウスは、溜め息をついて手を放した。

その事に内心ホッとして、リリアンヌは話を促した。

「で、一体何が？あの闇は何だったんですか？あつ、アンジュリーナは？」

アンジュリーナの名がでるやいなや、途端にルビウスは不機嫌になった。

「君は、自分をあんな目に合わせた娘を気遣うのか？」

何とも言えないでいると、ルビウスはなんて事はないかのように言葉繋いだ。

「まあ、いい。彼女には今後、会うことはないだろうから。」

「どう言うことですか？ アンジュリーナは…」

「もう忘れなさい。どうやら、君を彼女に近づけたのは間違いだったみたいだ。」

リリアンヌが更に問い詰めようと口を開いた時、コンコンと目の前の扉が叩かれ、会話が打ち切られた。

「はい。」

「ルビウス様、モーリス防衛大臣から、早急にお戻り下さいとの伝言です。」

ルビウスの返事に返って来たのは、若い女性の声。それに溜め息をついて立ち上がると、扉へと歩き、扉を開いて廊下に出た。開いた扉の向こうにいたのは、心配そうな顔をしたレイチェルと複雑そうな顔をしているキャサリン。ルビウスは、キャサリンに何やら耳打ちすると、脇をすり抜けて部屋を出て行こうとした。

「あつ、待って！ まだ話がっ。」

「君が大人しく治療に専念するなら、私も逃げずにちゃんと話すよ。約束する。この意味、わかるね？」

とっさに引き止めたリリアンヌに、顔だけ振り向くとそれだけ告げた。

「大人しく、ここにいなさい。」

そう言い残して、彼は去っていった。それを追おうと立ち上がったが、脚に力が入らずその場に崩れ落ちてしまった。泣き顔で駆け寄ってきたレイチェルに手を貸して貰い、再び寝台の端に腰掛けた。

「リリア、痛い？」

「大丈夫、大丈夫。ありがとう。」

リリアの体調を気遣うレイチェルに、大丈夫だと伝えると、まだ入り口に突っ立ったままのキャサリンに聞いた。

「あの、アンジュリーナは無事ですか？」

「ごめんなさい、何も言うなって言われてるから。ルビウス様、怒ると怖いよ。」

申し訳なさそうにキャサリンは言うのと、薬と水を持ってくるといって部屋から辞した。

「ねえ、レイル。何があったの？お願い、教えて！」

扉が閉まると同時に、側にいるレイチェルに食い付いた。食い付かれたレイチェルは、困った顔さえせず、無表情に質問に答えてくれた。

「先生は何も言わないから。ついて行った訳じゃないから、詳しい事は知らない。」

「じゃあ、レイルが知ってる事だけでいいから。」

少し、口を噤んだレイチェルだったが、言葉を選びながら話してくれた。

「リリアが、フレッド兄さんの所に1人で向かったって連絡が入っていて…。」

「それで？」

「先生が、リアン兄さんとリックを連れて国境まで向かった。戻ってきたリックが、国境でリリアが巻き込まれたって。」

それぐらいしか知らないと言を区切ると、考え込んでいるリリアン又を見やった。

「リリア？」

「レイルは実際について行った訳じゃないからあんまり知らないって言ったけど、アンジュリーナがどうなったかは知ってるよね？」

咎めるような言い方になってしまったが、彼女は気にはいかなかった。そして、驚愕の真実を告げたのだった。

「多分、生きてないと思う。良くて封印されてるか。ドリースに取り憑かれたアンジュリーナ・セシルが、リリアを殺そうとしたから。」

当然とばかりに告げるレイチェルの言葉に、何も言えないでいると思いついたように言葉を付け足した。

「ああ、ジョーン兄さんが、セシル家が消されたって言ってた。」

「消された…?」

消されたと言うのは…。

「殺されたってこと?」

「うん。」

「ドリースって?」

混乱する頭を必死に回転させて、レイチェルに問い掛ける。

「人を乗っ取り、悪夢に引きずり込むレベル4の悪魔。光る刃物が好きで、それを使って人を殺すから厄介だって。」

「殺されたって、何それ…。」

「悪魔に取り憑かれた人間は、正気を無くす。それを野放しにしていたら、今回みたいに被害がでる。始末するのは当たり前。セシル家は、禁じられてる悪魔召喚に手を出したから。」

彼が、ルビウスが殺したのだろうか。

リリアンヌ自身も、ルビウスに言われアンジュリーナを友としてではなく、道具として見ていたということは否定しない。アンジュリーナがフレドリッヒに好意を寄せていたのは知らなかったし、何よりとんだ言いがかりだった。けれど、親しくしてくれたのは事実で

（思惑があつたのは別として）事実を知らされた後でも、彼女を失つた喪失感が何故かあつた。多分、彼女が悪魔に取り憑かれていなかったなら、きっとこの思いを味わわせる事になっていたはずだ。ぐるぐると回る負の感情と考えに、キャサリンが戻って来ていた事にも気づかず、リリアン又は頭を痛くたせていた。あのドリースという悪魔に見せられた悪夢も痛くさせてる原因の一つで、リリアン又はその後、十日間もの間、高熱にうなされ寝台と仲良くなることとなった。

小話：風蘭の独白

お久しゅう御座います。神隠しの神、風蘭で御座います。

あの忌々しいルビウスが居るために、久しく皆様の前に姿をお見せ出来ずに居りましたが、優柔不断な作者がお遊びでこの話を書き始めた事で、姿をお見せ出来ることに。

何より、我らが生みの母、仄夜より泣きつかれました故……。全く勝手な作者で御座います。行き詰まって話を休んだは良いけれど、いざ再開しようとすれば、話に入りづらいと申すのです。そこで、入りやすいよう私めに適当に話を繋げてくれと泣きついてきたのですよ？

優柔不断で、頭が悪い。自分が書いている物語なのに、設定をすっかり忘れる駄目な作者で……。しかし、まあ根は優しい、いい子ではあると思いますがね。

うぐっ、暑いですよっ！抱きついてこないで下されっ。……これは失礼致しました、変質者が1人居りまして……。

さて、サブタイトルが私めの独白と言うことですので、一人でペラペラと喋る事になりましょう。ご了承下され。

何に軸を置いたら良いかと思案をいたしました但、次話が忌々しいルビウス目線となつてるとのことですので、不覚にもルビウスと私めの出会いから現在までの物語をお話ししましょう。

えっ、私めが喋り過ぎて麺が伸びた？私めのせいではございませんぬぞっ！ああ、まだ大丈夫でしょう、まだ食べられる範囲で御座います。とにかく、麺は放っておいて私めの喋っている事を書き出しなさいっ。晩ご飯？一服した時にでも食べれば宜しいではないですか。ささっ、読者様がお待ちですぞっ。



私めがあゝのルビウスに会ったのは、彼が3つの時だったと記憶しております。ある日、使いで下界に降りた際、私めの兄弟、ルノと会っておりまして。ルノというのは現在宰相をしておりますルノ・ルーベントの事で御座います。何でも年が同じだからとかで、友達になれば。と双方の両親の思惑だったようでした。

見ていれば、ルビウスが一方的にルノを気に入ったようでしたが、直ぐにお互い仲良くなっていきました。

良かった良かったと私めが優しく見守っていたら、いきなり天と地がひっくり返りました。驚きはいたしましたでしたが、私めも神で御座います。そんなことで一々慌ては致しません。もみの木に逆さ吊した私めを眺めていたのは、あの憎たらしいルビウス。漆黒の瞳と髪という珍しい容姿を持っていたためか、人並み外れた力をその時から持っていたのでした。

「ふうらん。おまえ、そんなにわかくて、かみさまなんて言えるのか？」

なんて可愛げのない子供だろうと思ったものです。

敬意に値する神を逆さに吊して、おまけに私めを見て若いとっ！これでもあなたの何十倍も生きているのだと叫んでやりたかったものです。しかし、私めは大人ですので、何も言わずに黙って吊されていたわけです。そしたら、あやつは足の縄に封じの術をかけて、さっさと家に帰っていったのですよ！

神と名乗る私めも、封じの術をかけられたら簡単には抜け出せませぬ。日が暮れてからやっと抜け出せ、冥界に戻ったら母なるメイアに怒られ、仲間の神々達からは馬鹿にされ散々でした。

そんな最悪な出会いで御座いましたから、いつか仕返しをしてやろうとルビウスの周りをウロウロとうろついております。しかし、年が3つと言えど家系が家系だけに全く隙がありませんでして、仕方がなく私めは遠まわしにルビウスを懲らしめる事にいたしました。

王都にありますカインド本邸を訪れた私めは、まずあの両親に会いました。

カインド家の嫡男でありながら、弟子入りし、さらにはロウ侯爵を継いだ変わり者の父クロムウェルとシエルダ公爵の長女メアリーが彼の両親でした。まあ、なんと言いますか。彼の両親はなかなか個性豊かな方でした。カインド家の血を引く父君は、癖付いた黒髪に透き通る程の蒼い瞳を持つ、なんとも物腰の柔らかそうな男性でございました。彼の母君譲りなのでしょう。シリウスには全く容姿は似ておりませんでした。

私めの苦情をそうかそうかとニコニコと終始笑顔で聞いて下さり、魔法師と魔術師、さらには神までもその下に従えるというカインド家とは余りにもかけ離れておいででした。

「すまないね。彼の教育には、我々は干渉出来ないことになってるんだ。」

そんなゆつたりと話すクロムウェルに痺れを切らしまして、母君を呼んでいただけるようお願いしました。やはり、子の教育は母君に限ります。

そんなことを思っておりましたら、ルビウスの母君が居間に登場されました。

「何なの？クロム。アレックスで手がいっぱいなのにつ！おまけに、あの国王からのむちゃくちゃな仕事もあるって知ってて私を呼ぶのね？」

「ごめんよ、メアリー。なんでも風蘭が、ルビウスの事で一言あるみたいだね。」

ああ、流石ルビウスのご両親でした。藍色の髪に漆黒の瞳を持つメアリー殿は、私めが頭が上がらない一人となりました。何せ、女性なのに大層気がきつい方で。あの美しい容姿に睨まれたら、私めも縮こまるしかありません。容姿は母君譲りで、あの女性に向ける紳士の笑みは父君にそっくりですし、腹黒いところも恐らく父君譲り。人の上に立つという威厳とあの冷酷な性格からして、母君に似たのでしょうな。

「ふーん。で、用件は？見ての通り、忙しいの。さっさとして頂戴。」

益々睨みを効かせる魔女殿でしたが、私めは勇気を振り絞ってルビウスの苦情をぶつけようと思いました。その時、上の階からドドツと地震のような揺れがあり、天井からパラパラと破片が落ちてきました。それに顔をしかめて、メアリー殿は居間の扉を開けて上の階に向かって叫びました。

「アーサーー！！ちゃんとアレックスを見ていてって言ったでしょう！ああ、もうルクシア、二階に行つてなさい。」

開けた扉から滑りこんできた愛らしい娘は、クロムウェルそっくりのルビウスの姉、ルクシアでした。

ぐずる娘子を無理やり廊下に放り出し、メアリー殿はピシヤリと扉を閉めてしまいました。

「話、途中だったわね。ルビウスが何かしたって？」

またふりだしに戻ってしまいました…。

《お二方の息子殿の教育についてでございます。ルビウスは先月、神である私めを逆さ吊りにし、封じの術をかけて私めを侮辱致しました。一体ご両親はどんな教育をしてらっしゃるのか。》

そんなような事を私めが言いますと、メアリー殿はぐつと何かをこらえるように私めを見つめました。

「…私にどうしろと言うの。」

《ですから…》

「メアリー、風蘭も。少し落ち着いて話をしよう。」

終わりの無い話の間へと入ったクロムウェルが、メアリー殿を抱き寄せ、私めに近くの椅子に座るよう言いました。仕方がありませんから、椅子に座ってお二方の弁解を聞くことになったのです。

「神隠しの神、先程と言った通り、我々にはルビウスに一切干渉出来ないのだよ。」

《お二方の息子殿では？》

「うん、確かに彼は僕達二人の子だよ。けれど、カインド家を継ぐ唯一の息子でもある。ねえ、風蘭。生まれたばかりの息子を何の承諾もなく取り上げられた僕達の気持ち、わかる？」

そう言って父君は、ゆつたりと私めに話して下さった。

ルビウスの父、クロムウェル・カインドは生まれながらにして魔力は持っているが、それを使って魔法を使える事が出来ないという病気、ガルデイ病という名の難病を抱えておりました。その病気は、百年に1人持つか持たないかという難病で、完治する見込みは無い病気です。魔法使いであろうと長くは生きれないだろうというのが、医師からの見方でした。しかし、彼は由緒正しいカインド家の跡取り。残念ながら跡取りは彼しかおらず、ご両親は随分落ち込んだそう。そこへ手を差し伸べたのは王都の名医、ロウ公爵。シリウスはロウ公爵にクロムウェルを弟子入りさせ、なんとか息子が長く生きられるようにと頼み込みました。さすがは名医、クロムウェルが病気を克服できる方法を見つけられました。

その方法は、クロムウェルの血を受け継いだ子に魔力を移すというものでした。ガルデイ病は、使えない魔力が患者の体内に留まり続け、その魔力が患者の心臓、肺、血管、内蔵などを圧迫。最終的には魔力が暴走、死に至るというものです。そこに注目したロウ公爵の提案は、すぐさま魔法師達に伝達され、成人を迎えたばかりの彼にお嫁さんが捜し出されました。それがメアリー殿でした。政略結婚で結ばれた彼ら。幸いにもお互いに愛が芽生えたのは、偶然ではないでしょうが。

当時最年少同士の結婚だったためか、はたまた子を想う親の思いからかわかりませんが、子を預かった彼らはロウ公爵の提案を頑として受け入れなかったのです。子に背負わせたくない。たださえカインド家の血筋で苦勞するというのは、それ以上に親の力を背負わすなど反対だと。そうこうしているうちに、第一子ルクシアが生まれました。残念ながら彼女は魔法師には向かなかったようで、力を移すことはありませんでした。ほっとしたのもつかの間。クロムウェルの体は既に悲鳴をあげていたそう。

「風蘭、僕はね。あのまま死んで構わないと思ってたんだ。メアリ

「もそれを承知だったのに……。周りは放っておいてくれなかった。」

ルクシアが生まれた四年後、奇跡的にもルビウスが生まれました。彼の生まれた時の名は、ルシウス。産後、寝台にへばっていたメアリー殿の寝室にズカズカ入ってきた黒ずくめの者が、ルビウスを奪って言い放ったそうです。

「この子供は、シリウス・カインドの後継者として育てる。名は、ルビウス・カインド。これからは、そちらが親としてこの子供に会うことも禁ずる。」

有無も言わずに一方的に言い切って、去っていったそうなの。

「あの時、ルシウスを私から奪って行った奴の顔、あれから忘れたことないわっ。あの子は私の子なのに！忌々しいっ。」

「勝手に力をルシウスに移して。あの子が魔力を上手く使えけなせないような子だったらどうなったと思う？考えただけでぞっとするよ。」

ご両親揃って怒る様子を見て、私めはどうしたものかと思案しておりました。なにせお二方の話は長い。クロムウエルの抗議はまだ続きました。

「勿論メアリーと幹部に抗議したけど、全く相手にされなかった！信じられる？他人の子供かさらっておきながら、裁判にもかかれなかった。」

温和であろう父君も怒れば、流石に笑顔を消しました。

「仕方がないから、父上に抗議しにいったら諦めろとまで言われた。メアリーなんて怒りで城の古くからの呪いを殆ど壊してたのに。危うく命令した国王を暗殺しくて、やっと向こうがルビウスと普通に会えるようにしたんだ。」

《なんですと？国王が。》

「傲慢な奴だったけど、あそこまでするとは思わなかったよ。思い出ただけで腹が立つよ、全く！まあ、幸か不幸か父上の弟子になったから、普通に僕らルシウスと暮らせてるけど。」

「あの子の名前勝手に変えて！」

どうやら母君は相当根にもっておられるよう…。

「話がそれってしまったけど、そんなことがあって僕ら彼の事に口出せないんだ。書類上は親子だけど。おまけにロウ侯爵だしね。腹が立って名前変えたら、それが仇になるなんてなあ。苦情は父上に言っただけいい。ああ！僕だって、一緒に遊んだり、風呂に入れたりしたかったのに——っ！」

「私だって、抱きしめて一緒に布団で寝たかったわっ！忌々しい狸爺。反発魔法で精々困ればいいんだわ。」

そう言って、居間を出ていたメアリー殿の機嫌の悪さはしばらく続いていたようでした。

「だからね、僕らあの子に愛情を注いでやれない。あの子は賢い子だから、弱音なんて言わない。だけど、幼い時に親の愛情を受けられなかった子は、結構ひねくれて育つらしいから…」

《もう十分ひねくれてるようですが?》

皮肉を含んだ私めの言葉に少し苦笑いして、父君は言葉を繋いだ。

「すまなかったね。多分、ルビウスも悪気は無かったと思うから。父上に謝るよう言っておくし。だからさ、大目に見てやってくださいね。良き友人として側にいてやってくれれば、一安心なんだけど。ルノが出来るんだ。賢い君なら朝飯前だろう?」

そう言われたら、首を立つに振りたいくなるのが神の使命。案外神様はお世辞に弱い…。

ルビウスのご両親、親ばかのお二方にやられ、仕方なしに引き受けるとお二方は私めに硝子細工で作ってある、真っ白な装飾品であしらえた簪を私めに下さりました。なんでもメアリー殿のお手製だとかで。綺麗な簪でございました。私めの宝物の一つでございます。

そんな個性豊かなご両親の愛情を知らず知らずに受けて育ってきたルビウス。誠、忌々しい事に偉大なる魔法師の一人、シリウスを祖父にもつ事もあって、幼いながら僅か六つの時には大の大人が舌を巻くほど立派な魔法と魔術を自分のものとしておりました。私めもその事実を仲間のホーエン（鷲の姿とケンタロウスの尻尾を持つ知恵の神）と見た時には声も出ませんでした。

さて、そんなルビウスを語る上で、ご両親とシリウス以外に重要な方が一人いらっしゃいます。

セドウィグ殿下です。セドウィグ殿下とは、国王の末の弟君でシリウスの一番弟子、ルビウスの兄弟子にあたる方です。

《セドウィグ殿下、また城を抜け出されたのですか?》

ある日、小高い丘の上で横になっていたセドウィグ殿下を見つけました。

「やあ、風蘭。僕はそんなにだらしく思われてるの？残念ながら、今日は違うよ。ルビンの飛行練習を見てやれって、先生から言われたんだ。これも仕事の一つなんだから。」

少し拗ねたように、セドウィグ殿下は目の前に広がる大空を指差されました。雲が多い日でしたが、その空を優雅に駆けるレムがおりました。

《おや、レムではございませんか。ルビウスひとりで乗らせて、大丈夫なので？》

「さすがと言うべきかな。コツを覚えて一時間も経たないうちに、ご覧の通り。」

「セドゥ。」

空から手を振るルビウスに緩やかに手を振り替えたセドウィグ殿下は、上半身を起こして私めに向き直りました。

彼は末弟のせいか、周りの者と距離を取り、群れる事をせずに一人の世界をもっておられました。心を開くこともしないのですが、何故か人に好かれるのです。それは神や精霊達にも同じ事が言え、皆セドウィグ殿下が大好きでした。しかし、彼が何を考えているか、それをわかる者はおりません。

「何か僕に用？」

《いえいえ、何をしてらっしゃるかとお声を掛けただけです。》

「そう？ てつきりまた無能な国王様の使いから、伝言かと思つてたよ。」

《あんな無能な輩と一緒にするのは、神に対する侮辱ですぞ。》

「ごめんごめん。」

セドウィグ殿下は、小さく笑って謝られましたが、私めは大層不機嫌でございました。

そんな私めを無視して、両腕で体を支えるように空を見上げる彼は16歳と言うこともあって、幾分大人びて見えたものです。レムの羽ばたく風の音を聞きながら、彼は言いました。

「風蘭、僕はね。この国が嫌いだ。全てを偽りで飾り立て、この世の秩序さえも人間の都合のいいように作り替える。魔法をそんな風に使うのが当たり前になった。だけど、君たちがいてくれるおかげで、ほんの少し好きになったんだ。」

《それはようございました。》

そう言った殿下をこっそり盗み見ると、その面影は亡き先王そのものでした。セドウィグ殿下は、先王の生まれ変わりでございましたから。

それが彼の能力であり、それ故この国に縛られている身でもあったのです。

「ルビウスは、この国をどんな風に変えてくれるのかな。」

セドウィグ殿下を兄弟子として慕うルビウス。何を考えているのかわからないのは、彼から受け継いだのだと私めは思っております。それから五年後。ルビウスが11歳になった、ある日で御座いました。

あのウルエッド戦が始まったのです。勿論、ルビウスのご両親、親戚、知り合いから魔法師、魔術師が召集され、私めの友人達も戦場につくことを余儀なくされました。私めは、ご両親方が戦場につくというその日、クロムウェルとメアリー殿に挨拶をしようと本邸を訪れました。

残念ながら挨拶する事は叶いませんでしたが、遠目からみる限りではルビウスはご両親に何も挨拶しなかったようです。両親とも一定の距離を開けていた彼。姉や弟が挨拶に行っていた中、祖父であるシリウスだけがルビウスの側に居たのを覚えています。

あの時、挨拶をしていたらと私めは幾度となく後悔致しました。

戦から漸く帰って来たのは、物も言わぬ屍達。屍さえ無い者も勿論おりました。戦から帰って来た愛しい人に泣きながら縋る姿が目につく中、ルビウスは泣きもせず両親の側におりました。姉弟がわんわんと泣く中、彼は黙ってその姿を見ていたのです。

ご両親は実際に愛情を掛けてやれなくとも、ルビウスを気にかけていました。そんな事本人にはわかりませぬ。実の両親が屍となって帰って来ても、何の感情もわからないのも無理もないと言うものでしょう。

あの姿が時折、今でもふとした瞬間に浮かぶのです。そして、思い出す度私めは思うのです。彼が幾ら大人になろうが年を取ろうが、私めにとってはずっと生意気で可愛くない、寂しいような餓鬼なのは変わらないと。

ウルエッド戦で起こった呪い。あれは、その場にいた沢山の者達を狂わせました。死ななくてもよい者を冥界へと連れて行き、残っ

た者からも理不尽に大切なものを奪って行きました。しかし、同時に私めは仕方ないとも思います。魔法師、魔術師達にとって古代魔女は尊敬の念を抱く筈の方達。それを無情にも殺そうとしたのです。幾ら国王の命だからといって、悪い事だということも判らぬのかと、西の国に居る守護神が怒ったのも無理ありません。

ルビウスは、あんな馬鹿げたことはしないと分かっていますがね。

おや？ やっとこさ続きの物語が出来そうとの事なので、私めはこれにて失礼致しますよう。

また物語の中で…。

10. ある日の悪夢

あの日、邸に残したりリアンヌ達が少し心配ではあったものの、仕方がなくルーベント宰相が乗る馬車に乗り込んだ。

「遅いですよ。」

馬車の中で待っていたルーベント宰相は、口を開なりそう言って空いている目の前の席に座るよう促す。

「何故、君まで来る必要があるんだ？」

不機嫌そうに彼を見やって腰を下ろせば、陛下からの御命令だからと返してきた。

「だからと言って、毎度毎度のよう君付きで迎えに来られたんじや、たまったもんじゃないよ。」

「では、素直に召集に応じたらどうです？」

「それとこれは別だね。」

ぱつさりと却下して、ルビウスは話題を変えた。

「で？そっちはどうなんだい？」

向かいに座るルーベント宰相は小さく溜め息をついて、懷から少し大きめの手紙を取り出して手渡してきた。

「貴方に言われてた件ですけど、大層元気でしたよ。いつも言ってますが、私も暇ではないのですから。」

「勿論分かってるさ。そうか、彼が元気ならそれでいいんだ。」

手渡された手紙を慣れた手つきで封を開け、ざっと目を通して上着の内側に閉まった。

「けど、これも王家に仕えるルーベント家の仕事だろう？」

にやっと笑うと、疲れようにルーベント宰相は言葉を返してきた。

「そうやって仕事にしたのは、あなたでしょうが。」

「そうだったかな。」

彼には悪いが、仕事はまだまだ増えるだろう。

「さて、報告を受けよう。」

姿勢を正して促せば、宰相はいつもの整った顔で話を始めた。

「先日、チャーリー王子がいらっしゃる離宮に刺客が入り込んだのは言いましたよね。あなたが張った捕獲魔法ですか？あれが作動しまして、十八名を拘束しました。」

「十八人？偉く大人数じゃないか。」

「ええ、まあその内の殆どが自害しましたよ。残った者に口を割らしたら、面白い事が分かりました。」

「君が面白いと言うなんて珍しいね。で、何が分かった？」

「あなたの大好きな、マリエダ・コーリーウスが絡んでました。」

「…またか。」

その単語にうんざりだと言うように、ひらひらと左手を振るとふいと顔を背けた。

「何でまたチャーリーの所に行く？向こうに行ってもリリアンヌは一切関係無いだろうに。」

「まあ、彼らは年も同じですし、何か考えがあったんでしょう。」

「あの馬鹿正直なお坊っちゃんに？」

その言葉に俄かに眉を寄せて、宰相はルビウスをたしなめた。

「言い過ぎです。仮にも次期国王候補のお方。あなたの従兄弟でも、身分は高いのですよ。」

言ってる本人も随分失礼な事を言っているが、と思ったがそれには触れずに悪い悪いと謝った。

「ちなみに、そのあなたがご執心のお嬢さん、リリアンヌでしたか。あの娘、本当にあの方の御子で？見たところ随分と神に好かれているようですが。」

「なんだ、気になるのか？」

「母が報告しろと煩いのですよ。」

その言葉で、ああと納得した。

彼、ルノ・ルーベントとは長い付き合いだ。それこそ風蘭と良い勝負な程。分かりやすく言えば、幼なじみ。根っからの王族派のルーベント家養子の彼は、人間ではない。個々にいる神々の母、メイアから生まれた生粋の神であるが、生まれた当初から人間の姿だった。祖父曰わく、稀に神でも人間として生まれる事があるのだとか。

神の力は持つものの、人間として生まれたため、神が住む異界には居れず、祖父の計らいでルーベント家へと養子になったのだ。生まれたばかりなのに、大人と変わりなく喋る彼は異児として周りから恐れられ、毛嫌いされた。彼自身は全く気にしていなかったようだが、友達がいらないこと心配した彼の両親は、年が同じルビウスと引き合わせた。そのとき、彼の様子を見に来ていた風蘭ともおまけとして知り合いになったのだった。

昔は親しく呼び合っていたものだったが、彼の父親（前宰相）が亡くなり、後を継いだお互いの距離は遠くなってしまった。正直な所、こうしてまともに話すのもいつぶりか忘れてしまう程久しぶりだ。立场上自然な事だが、少し寂しく感じてしまう。そんなことを口にすれば、彼は気持ち悪いことを言うなと不機嫌になるだろうが。

「なんですか、一人で笑って。気持ち悪い。」

知らず知らずの内に、笑っていたのだろう。不機嫌なルーベントの顔がこちらを見つめていた。

「ああ、何の話だった？」

「リリアンヌという娘ですよ。」

「リリアンヌ？ ああ、あの子は確かにあの方の子供だよ。メイア様にそう伝えとけばいい。」

「わかりましたよ。それと念の為言っておきますけど、あの方の子でも私はあなたに手を貸しませんから。」

「君には思いやりという言葉が無いのかい？」

わかっていた言葉でも、面と向かって言われれば、やはり傷つくというものだ。

「君は君の仕事に専念すればいい。僕は勝手にさせてもらうから。」

「王家を支えるのが私の仕事です。もし、あなたが王家に刃向かうときには容赦しませんよ。」

国王の補佐と魔法使いという今の立場上、敵対となるのは自然の成り行きではあるが、計画を彼に妨害されるとなれば、厳しいものがある。

「僕も手抜きはしないさ。君が僕の側につかないのは分かっていたしね。ただ、あの馬鹿正直のチャーリーが心配だ。今は彼を守れていても、その内手薄になる。彼のことだけ、頼まれてくれるかい？」

「あなたに言われなくともお守りしますよ。」

今更何を言うとも言いたげにルーベントは言うど、懐から今度は王家の紋章が印された白い手紙を取り出した。

「陛下からです。」

「これで今年に入って何通目だ？ 邸が手紙で溢れかえってしまいそうだ。しかしなぜ、こんなにしつこいのかな。」

大きな溜め息をついて、封を開ければ何回も読んだ内容の文だった。こちらを見つめるルーベントに、手紙をひらひら振って火をつけると、手品のように一瞬にして燃やして言った。

「手紙をわざわざ寄越すなど言っておけ。」

「あなたがまともに陛下の話を聞かないからです。素直に陛下の養子になればどうです？」

「そんな気持ち悪いことできないね。そうだ、殿下にはいつ会える？ ずっと前に面会希望を出していたはずだけど。」

「陛下が許可されてません。」

その話はうんざりだとしても言うように話を変えてみたが、ばっさりとルーベントは言い放った。

「許可がおりない？」

そんなバカなと唸ると、もういいと苛立ち氣に言い放って、きつちりと姿勢を正して座るルーベントを見やった。

「とにかく、何の用事か知らないけれど、さっさと陛下に面会して帰る。邸に残してきた弟子達も心配だしね。」

彼がそう言うなら、今日の面会時間はまた短くなると、宰相はこっそり溜め息をついた。



「流石ルーベントだな！いや、見事見事。」

目がまぶしいほど煌びやかな食事が机に並ぶ。

「では、僕はこれで。」

くると回れ右をして、部屋から去ろうとした時、ご機嫌でいた国王が低い声で制止した。

「待て、ルビウス！」

「言ったとおり、顔は出したでしょう？」

これ以上こんなところに居てたまるかと口には出さなかったが、不機嫌を隠さず振り返った。そんな事には構わず、国王は自分の向かいに座るよう命令してきた。その言葉にますます苛立つ。

「座れ。」

椅子を指し示して命令する国王に従わず、ギリツと歯を食いしばって睨んだ。

「座れと言っているんだ。聞こえなかったのか？」

そのしゃくに障る言葉に、ツカツカと国王が座る机に歩み寄って、バンツと盛大に手をついた。

机に並んだ食器が、カチャカチャとうるさい音を立てた。

「僕はあなたの飼い犬なんかじゃない！ 勿論、セドウィグもっ。」

「益々、アレに似てきたな。ルビウスよ。」

怒りをぶつけて臆することもなく国王はうつすらと笑うと、透明な硝子に入った琥珀色の酒を一気に飲み干した。

「人間ではない、あの弟子どもをまだ側に置いているそうだな。」

「：人間ではないとはなんですか。陛下、国の頂点に立つあなたが、そんな差別をしているなど…。世の中には、様々な人種がいます。血筋が違えど、意志を持つ彼ら彼女は、立派な人間でしょう？ それこそ、気が合う相手もいれば、お互いどうしても馬が合わない者がいるように。それを認めて、皆が安心して住まえるよう努めるのが、あなたの仕事の一つではないのですか？」

その言葉に、国王は盛大に腹を抱えて笑い出した。

「ふはははっは。あいつら化け物が人間だと？ 面白いことを言う。シリウスからの受け売りか、それともセドウィグの入れ知恵か。まあ、どちらでも良いがな。そうやって、生ぬるいことを言っておると、本当に守らなければいけないものを守れなくなるぞ？ セドウィグのようにな。アレはなかなか良くできた駒だった。だが、自分の意志を持ってしまったからの。可愛い弟だったのに、あの魔女がセドウィグをたぶらかしたのだ。全くけしからん。ルビウス、お前に

はあのようになって欲しくないのだ。悪いことは言わん。七番弟子とやらを農に寄越すのだ。」

怒りが爆発しそうになるのをグッと抑え、静かに口を開いた。

「セドウィグは、心の底から愛せる人を見つけたのですよ。それがわからないあなたには、共に歩いてくれる女性など一生現れないでしょうね。」

兄弟子であり、ルビウスが最も尊敬する彼は、心を持たない人形という仮面を外し、兄弟を捨てて、愛する人と過ごす日々を選んだ。愛しい人を守りたい気持ちはよくわかる。周りからなんと言われようが、きつと自分は彼と同じ道を選ぶだろう。彼と自分は可笑しなぐらい似ている。

ふっと自嘲気味に笑ってから、出口に向かった。

「ルビウスっ！」

自分の名を呼ぶ声で、扉近くから年老いた国王を振り返った。

「例え自分の力でその座を掴み取っても、周りの者が従うのはその血がたまたまあなたに流れていたから。セドウィグ殿下のご意向だったから。ただそれだけですよ。」

そう言い残して、部屋を後にした。

「…あんなやつが国王でよくやって来れたものだ。」

むしゃくしゃする気持ちを小声で呟き、カツカツと乱暴に階段を降

りていると、頭上から自分の名を呼ぶ声が降ってきた。見上げれば、ルーベントが険しい顔でルビウスを呼んでいる。

「まだ何か？」

「国王陛下が呼びです。」

「あんな奴と話すことなど、もう無いさ。」

「国王陛下はあるのでしょうか。部屋にお戻り下さい。」

宰相のきつく咎める声を見捨て、また階段を降り始める。

「カインド魔法大臣！」

早足で降りてくる宰相に追いつかれないよう、速度を上げる。

「つたく、しつこい。」

「退室を国王は許してらっしゃいません。」

「僕だって忙しいんだっ！」

踊場で話し込んでいた文官達が、宰相と珍しく大声で言い合っているところを奇妙な目で見ってくる。その視線を気にしながら、ひとつ上の階にいる宰相に声を張り上げた。

「君はあの頑固者の元に戻って、僕はさっさと帰ったと言うんだ。」

「そんな無責任ことは出来ません。」

背後で聞こえた声にはっと振り向くと、不機嫌な宰相が一糸乱れぬ姿で佇んでいた。

「手間を掛けさせないで下さい。この城の中では魔法が使えない。そんなあなたは私に取って、ただの青臭い青年なんですよ。さあ、戻りますよ。」

そんなことはわかっているが、そう言われて素直に首を縦になど振らない。

「仕事がある。僕はもう帰るよ。」

やれやれと呆れる宰相から逃げるように、真っ白な階段を駆け下りる。玄關脇にある移動用城内魔法陣の所にいけば、さすがの彼も追ってはこない。

会議を控えた道を塞ぐ文官達の群を掻き分け、真っ直ぐに突き進む。

「だから、師匠に用があるんだって、何度言ったらわかって下さるんですか。」その途中の雑音の中に、衛兵と口論する小さな男の子の声が耳に届き、その知っている声に自然と足が止まった。

「カインド魔法大臣、陛下の御命令ですので、失礼いたします。」

その隙を見逃さず、周りを国王の腹心であろう衛兵が囲んだ。

「僕を殿下みたいに幽閉するのかな？」

ちらりとまわりの衛兵達を見やって、にっこり微笑みながら突き進む。

「お戻り下さい、ルビウス殿。」

じりじりと周りを囲う衛兵の内、一人の衛兵が勇気を振り絞って輪の中に進み出た。

「邪魔だよ。」

そんな衛兵に、顔目掛けて煙幕を放つ。

「うわああ、目がっ。見えない…。」

赤紫の煙幕が衛兵を包み、冷静を失った衛兵は仲間の群列に突っ込んでいった。

「おい、どうした？」

「なんだっこれ。こっちに来るぞっつ。」

「落ち着けて。おい、列を乱すな！持ち場に戻れ。こらっ、どこに行く！」

隊長らしき人物が慌てて周りに指示するが、衛兵にの顔をじわじわと覆う煙幕で、辺りは混乱状態となり収集がつかなくなっていた。その騒ぎの隙を見て、衛兵の群をすり抜け、少年の背後へと近付く。

「僕の弟子が何か。」

「こっこれは、カインド魔法大臣！」

「この子は僕の四番弟子だ。疑うなら幹部に言って、名簿を調べてもらえばいい。」

「しっ失礼いたしましたっ。」

予期していなかった人物の登場で、慌てて敬礼をした衛兵に手でその場を去るように合図すると、弟子を見やった。

「どうした。エリック。わざわざ城まで来るなんて。」

「あ、先生！それがっ、すいません。リリアを見失いました…。」

「なに？」

真っ青になって弁解するエリックを見て、とっさに眉間に皺を寄せたが、宰相がこちらにやって来ようとして居るのを背後に見つけると、ちっと小さく舌打ちをしてエリックの耳元に囁いた。

「弁解は邸に戻りながら聞く。移動用魔法陣までとりあえず走れっ。」

「はっはい。」

いきなり走り出した師の背中を追い、エリックも駆け出す。

「レオ・カインドっ！」

背後から自分を呼ぶ宰相の声が聞こえたが、既に地面に書かれた魔法陣の上に到着していたため、彼に向かって叫び返した。

「急ぎの用事が出来た。小言ならまた今度聞кус！」

宰相の姿がはっきりと見える前に魔法陣を発動させると、カインド本邸の屋敷内へと向かった。

「先生！」

玄関へと戻って早々駆け寄って来たのは、ジュリアンとレイチェル。二人とも真っ青な顔をしている。

「待ちなさい、二人とも。まずはエリックの話を聞く。」

神妙な顔つきで早足に廊下を行くと、小走りでエリックは必死でついて行く。その後には、同じく小走りのジュリアンとレイチェルの姿が続いてくる。

「すいません、リアンに気を取られてリリアが屋敷を出たことに気がつきませんでした。」

「僕のせいなわけ？」不満げに声を上げたジュリアンを無視して、エリックはさらに報告してくる。

「キャサリンさんが、屋敷を出たリリアを見た。」

カツンと歩みを止めて、言葉少なげにエリックに聞く。

「で？」

「：リカ・ベクトルの馬車に乗ったのを近所に住む、エリーゼさんが見たという報告がありました。」

静かに告げたエリックの言葉に、ギリリと奥歯を噛み締めて唸るように弟子らに告げた。

「揃いも揃って、お前達は何をしていたんだ。」

「申し訳ありません！」

「謝罪はいい。ジュリアン、オリヴィアとジョナサンは何をしている？」

「ヴィア姉さんは、少し足を延ばして王都周辺を探しています。ジョーン兄さんは空から捜索中です。」

「直ぐに邸に戻るよう、伝えろ。」

「はい。」

「レイチェル、アンジュリーナ・セシルはどうだ？」

「動きがあった。ウルーエッドに向かうみたい。」

「そうか。エリックはジュリアンと共にウルーエッドへ。レイチェルはオリヴィアとここに居なさい。」

「私も行く。」

さっさと弟子達に指示をして踵を返そうとした所に、レイチェルは毅然と立ち向かった。「レイルっ。」控えめにエリックが促すものの、首を横に振って拒否している。

「駄目だ。レイチエル、君は連れていけない。」

ボロボロと泣くレイチエルを放って、踵を返す。

苛立ちを隠すように向かったのは、先程リリアヌを置いていった応接室。後悔と焦りが募る中、1つ大きく深呼吸をすると四番弟子と五番弟子に向き直った。

「セシル家が動いたなら、これから行く場所は命の危険が伴う。本当は君達を連れて行きたくないのだけれど……。仕方がない。君達の仕事はリリアヌを見つけ出すこと。だけど、身の危険を感じたら、直ぐに戻りなさい。いいね？」

念を押すと二人は神妙な顔付きで頷き、さっと黒いフードを被った。それを見届け、魔法陣を足元に表すと、複雑な呪文を唱えて発動させた。

【ウルーエッドへ】

その言葉を唱えた瞬間、3人は嵐が吹き荒れる荒野に立ち尽くしていた。怒り狂う真っ暗な空からは大粒の雨が降り注ぎ、視界を更に悪くさせている。

そこから吹く風は、向かう先を拒むかのように狂風が吹き荒れる。その狂風に刃向かいながら、重い足を一歩ずつ進めてゆく。辺りにはところ狭しと並べてあったであろう組み立て式の小屋が、どれも跡形もなく潰されており、沢山の死体が転がる。まるで悪い夢を見ているようだった――。

死体の山から目をそらして、嵐を鎮めようと呪文を口にするが、吹き荒れる風の音でかき消されてしまう。

「くそっ！リリアンヌ…。」

自分らしくないとわかっていながら、腕で豪雨から顔を守り、効率悪く漆黒の瞳は愛しい人を自然と探す。しかし、目に飛び込んでくるのは、混乱状態にある泥沼の地。嵐を好む悪魔達が集まって来ているようで、あちこちから風が悲鳴を運んでくる。目の隅では防衛省の者達が必死に防御の呪文を唱えているが、全く役に立っていない。その姿に、これが鉄壁と言われた防衛省の者達かと呆れて唇を噛んだ。

「ルビウス。何をボケツととしている。」

耳に届いた声に、ハッと側を見れば黒いマントをはためかせたリドが立っていた。

「叔父上。」

「この指揮官は既に使えない。今から私が指揮をする。お前は悪魔封印に専念しろ。」

「しかし！」

こんな事態でさえ、相変わらずの機械的な声に思わず反論したが、鋭い鳶色の瞳に睨まれ、口を噤んだ。

「ぐずぐずするな。犠牲者が増えるぞ。お前も判っているだろう。」

「…わかりました。直ぐに終わらせます。」

「10分だ。それ以上は無理だろう。」

そう言ったリドは、地面から浮き出た蔓で魔法陣を描き消えた。

【雷雨の神レイガル、北風の神オールナス。我が名において、その命に従え。】

リドが消えた時から瞬時に二人の神を召喚すると、黒豹の姿をした猫又の神には豪雨を、顔中もじゃもじゃの大男には狂風をおさめるように命じて、悪魔が高らかに笑う場所へと飛び込んだ。

向かってくる悪魔に聖火を放った時、遠くからジュリアンの切羽詰まった声が聞こえてきた。封印の術を使いその場を抑えると、声の元へ向かう。

「先生っ！フレッド兄さんがっ。」

ジュリアンは弱々しく血だらけのフレドリッヒを支えて、潰れた小屋の前で狼狽えていた。

【浄化。】

そのフレドリッヒを見た途端、ジュリアンに当たらぬよう鋭い衝撃波を放った。

「何をするんですかっ！」

「あれはフレドリッヒじゃないっ！惑わされるな！上級悪魔特有のまやかしだ。本物のフレドリッヒはこっちだ。」

怒り狂うジュリアンに構わず、浮遊の魔法で小屋の残骸を退かすと、

血だらけのフレドリッヒが横たわっていた。

「フレドリッヒ、大丈夫か？」

起き上がる気力もないフレドリッヒを抱き起こしてやると、弱々しくフレドリッヒは言った。

「だ、大丈夫です。すみません……。リリアを守り、きれませんでした。ドリースの、闇、にっ」

「喋るんじゃない、傷が開く。ドリースの毒牙にやられたか……。エリックに言って、フレドリッヒを医局に連れて帰えるよう。」

ジュリアンに任せて足早にその場を去ると、残骸が退かされた広い場所で立ち止まった。

空を見上げれば、風は止んで雨雲がゆっくりと去ってゆく所である。

「流石、北風オールナスだな。仕事が早い。」

ぼそりと呟いて、まだ止まない雨を止めさせるため、雷雨の神に指令を飛ばす。

【レイガル、まともに仕事も出来ないのか。すぐさまこの雨を止める。出なければ一緒に封印してしまうぞ！】

《わかった、わかったよ。それが終わったら帰るよ！これ以上こんなところにいたくないしっ。》

指令と共に送られた怒りにぶるりと身震いしたレイガルは、慌てて答えるとあたふたと雨を弱くしていった。二人の神が去ったのを見計らい、神経を集中させて長々とした呪文を口にしていく。唇から

流れ出た呪文は連なって、足元で渦を作る。次第に大きな竜巻になったその呪文を確認すると、そっと後ろに下がって間を取った。

【発動】

金色の魔法陣が現れた時、遠くにいた悪魔までもその竜巻は吸い取っていった。上級魔法に入るこの封印魔法はプラッツの封印術といい、プラッツと言う魔法使いが発明した魔法である。一度に沢山の悪魔を封印出来ることから、魔術師には好まれて使われることが多い。しかし、長々とした呪文を使うため、命の危険が最も高い。かつて、ルビウスの母親が頻繁に使っていたこともある魔法だが、複雑な術式を用いた魔法なこともあって、今では魔術師以外は余り使わなくなってしまった。

「流石は、姉上の血を引くだけある。」

そんな封印魔法を使った所に、リドが再び現れ、声をかけてきた。

「買い被り過ぎですよ、叔父上。これで、この辺にいる悪魔は封印されるでしょう。もう行っても？リリアンヌを探さないで。」

きちんと発動しているか確かめ、さらりとリドの言葉を受け止めると、さっさとその場を去ろうとした。

「お前はあの娘を探しに来たのだったな。ドリースの闇に吞まれたようだぞ。」

珍しく親切に向かう先を指し示したリドに、血相を変えて走り出した。

「カインド魔法大臣！」

その後ろから追いかけてきたのは、茶褐色の髪をしたモーリス防衛大臣。年配の彼はゼイゼイ言いながら追ってきた。

「何か用ですか？弟子が巻き込まれたのです。話は後にしてください。」

「それは大変…。」

「失礼します。」

瞬間移動魔法を発動させようとした時に、足止めを食らった事で適当に防衛大臣の言葉をあしらった。目の前には、不気味に群がる大量のコウモリ。

【クリフィンの魔神よ、そのすばらしきそなたの力を我が身に委ねたまえ。】

移動魔法でドリースの闇の側に移動し、並列して最高魔神の一人、クリフィンの魔神を召喚した。レベル4と呼ばれるランクに入るドリースは、その獰猛さは有名である。封印するにはドリースよりも勝る悪魔を使う必要がある。

ルビウスが召喚したのは、闇を伴って現れた山猫の姿をした魔神。それが、クリフィンの魔神と呼ばれている、ラグドネアスである。魔神の中でも気品高くて有名で、ラグドネアスⅡシフ・クリフィンという魔術師が神となった姿である。絶対に本来の姿を見せはしないため、少々厄介な人物だと言う噂だが。

【クリフィンの魔神よ…】

《我に命令するな、小僧。》

【恐れながら、命令するのが私の仕事です。】

《ふん、小生意気な。お主はそこで大人しくしておれ。》

【言われなくとも。】

あまり刺激しないようにクリフィンの魔神から距離をとると、いつでも封じ込められるよう、封印の魔法を準備する。

刹那、蜷局を巻くコウモリの群れを作るドリースに、クリフィンの魔神が襲いかかった。その隙に、隙間が出来たドリースの背後からリリアンヌを助け出すために身を滑り込ませる。

あの時、血の気のないリリアンヌを見つけたときほど、何も考えられなくなったときは無いだろう。

ぐったりするリリアンヌを抱え、ドリースの闇から抜け出すとちようどんクリフィンの魔神が一際大きなコウモリの首元に食らいつき、ドリースを押さえ込んでいる所だった。耳障りな女の声が辺りに響き渡り、クリフィンの魔神の闇とドリースの闇が広がっていく。

その状況に、少しばかり顔をしかめたものの、すかさず封印の魔法を唱えて封じ込んだ。

《小僧の割に手際は良いな。》

高らかに笑った魔神はそういい残して、用は済んだとばかりに派手な雷の音を立てて姿を消したのだった。

その後、リリアンヌが気がついた事に安堵して邸に戻ると、キャサリンとレイチェルにリリアンヌの世話を頼んだ。

後片付け等でリリアンヌに会いに行けなかったが、やっとゆっくり彼女に会いに自分の寝室にやってこれた。

熱が出てうなされていたと聞いたが、今はすっかり熱も下がって穏やかな寝顔を見せている。その姿に幾らか安心して寝台の縁に腰を下ろすと、リリアンヌの顔にかかった髪を優しく払ってやった。少しくすぐったかったのか、彼女はもぞもぞと寝返りを打ったが、まだ穏やかな夢から出てくる気配はない。その寝顔を見ながら一人呟く。

「…向こうも本格的に仕掛けて来たか。」

こんな事なら、もう少し策を練っておくんだった。

自分の甘さに苦笑して、明後日の方向を眺めた。

「…どう話すかな。」

いつまでも蚊帳の外、と言うわけにもいかない。彼女はいつかは、自分の置かれている状況を知らねばならない。それが少し早まっただけ。そう思えば幾らか、気が楽になったような気がした。

11. 戦渦の火種

うなされては起き、また寝る。

そんな日々を暫く送っていたリリアンヌが自力で起きられるようになったのは、アンジュリーナに襲われてからだいぶ経ってからだった。締められた首の痕も治りかけてきて、看病をしてくれていたキヤサリンはホッと胸を撫で下ろした。

「これなら、来週から学校へ行けそうね。」

寝込んでいた間に冬休みはどうに終わり、学校では二学期が始まっている。他の弟子達は学校に行ってる為、邸内は随分静かとなっていた。

「勉強遅れてる分を取り戻すの大変そう…。あ、そうだ。ルビウスさんは、いつ帰って来ますか？」

「…寝てたものね。」

おや？と首を傾げたキヤサリンは、少し考えて納得したように独り言を呟く。

「貴方が寝てた間、毎日顔を見にいらしてたわよ。」

なんてことはないように言って部屋を出て行くキヤサリンとは反対に、知らぬ間に寝顔を見られていたリリアンヌは赤面してうろたえた。

「…最低。」

「ん？なんか言った―？」

「なんでもありません！お風呂入って来ますっ。」

あたふたと風呂場に向かったリリアンヌを眺めていたキャサリンが、慌てて声を掛ける。

「着替え、後から持って行くわね。」

「ありがとうございます、キャサリンさん。」

既に階下に降りたりリリアンヌは、声を張り上げて礼を言った。

まだ体が本調子ではないものの、着替えてさっぱりとしたリリアンヌは、ルビウスが帰ってくる夕刻まで邸にある庭を探索する許可を貰い、ぶらぶらと一人花を見ながら散歩を楽しんだ。

今、季節は冬である。あまり雪が積もらないと聞く王都でも、この日は珍しくうっすらと雪が積もっている。そんなひんやりとした外を歩きながら、リリアンヌは一つ一つ丁寧に花壇を見ていく。

来客を迎える玄関先の花壇には、色とりどりの華やかな花。邸の者や、来客がゆっくりとした時間を過ごす中庭には、優しい色合いと心落ち着く花の香りを。ひっそりとした裏庭には、控えめな可愛い花を。

場所、用途によって植えられる場所が分かれる花達であるが、それによってその花の個性が生かされていると思える。

北のレイヘルトンでは、花を愛でるなどなかった為、ここでの生活はリリアンヌの心を穏やかにしてくれている。

裏庭の小さな花壇に咲く真っ白な小さな花を眺めていた時、不意に背後に人の気配を感じた。

「カインドの本邸となれば、周りを囲う結界も並みじゃないな。」

振り返る前に、首筋にひんやりとした感触がある。

「誰？」

「ほお、成る程な。びっくりするぐらい噂通り古代魔女の風貌だ。で、あの火種なわけだ。」

背後に立つ少年は、リリアンヌの質問には答えず、淡々と言葉を繋いでいく。

「火種って何よ。」

「悪いが、付き合って貰う。」

恐らく魔力を込めた短剣なのだろう、冷気を放つ短剣をリリアンヌの首筋から離さず、少年はリリアンヌを縛ろうと手首に縄をかけようと俄かに動いた。その隙について、火の精霊を呼び寄せた。

「シロ！」

ポツとリリアンヌと少年の間に灯った火種に驚いき、とっさに離れた少年に振り向いた。

「あちっ！くそ、陽炎か。」

先程の火種で火傷をしたのか、短剣を持つ手首を冷まししながら、灰色の髪に茶褐色の瞳を持つどこにでもいそうな少年と向き合った。

「ほんの威嚇のつもりだけだったのに…。」

そう、殺意が無く、魔法も使わないようだったので下位である火の精霊、シロを喚んで威嚇で火を。と頼んだだけだったのだ。しかし、まだ自身の力を扱えていない精霊は力量を間違えたようで、危うく召喚者のリリアンヌも背中に火傷をしそうになった。

「もう、シロ！この下手くそ。もう良いわっ。」

使え物にならないと判断したリリアンヌは、オロオロと空を漂っていたシロに還るよう言って、少年に目を移した。火傷を負ってからこちらに襲ってくる様子はない。

年は少年と言うよりは青年と言えるような年頃だ。少年と思ったのは、声変わりがまだ始まっていなかったからだろう。

「どっかで…。」

じつと見つめていたら、どこかで見た顔付きであることに気づいた。普段よく見る…。

「ジョーン兄さんと、リアン兄さんにそっくり！」

思わず声に出して指差せば、火傷の傷で顔をしかめていた相手は、更にしかめていて言った。

「あいつらと一緒にするな。僕は、ハイディリア家の次期当主のエイドリアンだぞ！農業だけしか能がないあの家に生まれた稀に見る秀才だって言われてるんだ。」

背後から襲ってきた彼は当初名乗り出なかったものの、自分から身分をあかした。自分で秀才だと言う割に、まだ魔法を習い始めたばかりのリリアンヌにやられ、身分を証した彼は相当な間抜けと見える。

たまにいるのよね、周りにちやほやされて育った馬鹿な奴が。

特に何を言うでもなく、冷めた視線を送る先には、自分を力説するエイドリアン。ジョナサンが次男であるから、これが長男、彼らの兄であろう。やはり兄弟、何となく似ていると言ったらあの二人は怒るだろうか。

「おやおや、ハイディリアのご子息ではないですか。」

ぼんやりそんなことを思い、彼を眺めていたら、邸の方から冷ややかな言葉が投げてよこされた。言葉の方へ視線をやれば、壁に寄りかかって退屈そうにエイドリアンを見やるルビウスの姿が。

「…カインド公。」

「招待もしていない農民が、邸うちに何の用で？」

「あんたが匿かくっている古代魔女を貰もらいに来た。」

火傷をした手首を庇いながら、リリアンヌの方に顎をしゃくった彼は、ルビウスから目を離さず言った。

「マリエダ様からかな？あの人もよく懲りずに……。あの手この手としてくるものだ。残念だけど君にリリアンヌは連れて行けないよ。」

「なら、無理に連れて行くだけだ！」

そう言ってリリアンヌに一步足を踏みだそうとした彼は、意思とは反対に足が地に縫いつけられたように動かないことに気づいた。

「くそっ！卑怯だぞ、ルビウス・カインド。」

喚くエイドリアンをよそに、素知らぬ顔のルビウスは塀の外を何やら伺っていたが、やれやれと面倒臭そうにエイドリアンに答えてやった。

「何のことかな？よく辺りに張ってある結界に当てられなかったものだね。ああ、魔法が使えない生身の姿で入ってきたからか。マリエダ様には、また出直して来て下さいと言っても言っておいてくれたまえ。さあ、お帰りはあちらだよ。」

すっと指差した方向には、壁の一部分が不自然にぼっかり空いており、エイドリアンはそちらに向かってぎくしゃくと何やら喚きながら歩いていった。

「おいで、リリアンヌ。」

面白そうにエイドリアンを見ていたリリアンヌだったが、ルビウスが邸に入って行ったため、大人しく彼について行った。

彼が向かった先は、自身の自室。リリアンヌが部屋へと入ったのを確かめ、後ろ手に扉を閉めた彼はそのまま扉にもたれかかった。ど

うやら相当お疲れのようだ。

「もう具合はいいのかい？」

そう聞くルビウスの言葉を背にして、部屋の中央に進んだりリアンははくると振り向いてすっかり良くなった事を主張した。

「おかげ様で。すっかり良くなったわ。だから庭を散歩してたの。雪が積もってるのね。」

窓辺に歩み寄り、そっとそこにある白い景色を見た。ここの雪は白い。レイヘルトンの雪は灰色で工場から上がる灰を交えているため、薄汚く時たま黒に近い雪が降り積もっても綺麗とは言えなかった。

「キャサリンさんが、夕方に帰って来るって言ってたのに、随分帰ってくるのが早くてびっくりした。」

暫く眺めていた景色から目を離して振り返ると、いつの間にか長椅子に沈み込んでいるルビウスがいた。

リアンヌが口を開く前に、身動き一つせず彼が先に口を開いて聞いてきた。

「…あのハイディリアの愚息は、いつからいた？」

「うーん？ エイドリアンって人？ 裏庭に来て少し経ってからだったと思う。」

「結界を強めないとな。」

ポツリと呟いてから、ルビウスは一層深く長椅子に沈み込んだ。

お疲れのルビウスに悪いと思いながら、先程のエイドリアンが言った言葉を彼に聞いてみる。

「あの人、私の事火種って言ってた。ねえ、何のこと？私が古代魔女の風貌だから？」

疲れているからか、質問に答えるのが面倒くさいだけなのか、ルビウスはリリアンヌにチラリと視線を寄越しただけで、特に言ってはこない。それに気を良くしたのか、リリアンヌはべらべらと口から言葉が出てくる。

「それに、ドーリスっていう悪魔に見せられた夢で、母親を見たわ。あの人が私の母親何でしょう？」

―あなたはどこまで私の事を知っているの？

直ぐそこまで出掛かった言葉を飲み込み、変わりに違う言葉で問いかけた。

「他人が私の事知ってるみたいなのに、自分が自分の事を知らないって可笑いと思わない？」

そこまで言い切ったりリリアンヌに、ルビウスは漸く口を開いた。

「そうだね、君の言うとおりだ。約束でもあるしね。君の質問にはちゃんと答える。まずはこっちにお座り。」

まだ立ったままだったリリアンヌに自身の側に座らせると、ルビウスは姿勢を正して長椅子へと寄りかかった。

「順序を立てて話そう。まずは、アンジュリーナ・セシルだけど。」

「殺したのでしょう…？」

少し攻めた口調になってしまったが、ルビウスは特に気にした様子もなくゆるゆると首を横に振った。

「いいや、ドーリスの闇と共に封印しただけだよ。セシル家の人間に会った時、悪魔の気配がしたから、娘のアンジュリーナが悪魔に乗っ取られるのも時間の問題だと分かった。けれど安易に手出しは出来なくて、君をその…囿にして誘き出そうと。危なくなった所で君をあの子から引き離すつもりだったんだ。まさか君がフレドリッヒに会いに、のこのこ一人で出歩くとは思わなかったからね。…ああ、悪かった。僕の考えが甘かったんだ。」

「あんなひどい目にあったのはお前のせいか！」とにらむ勢いでルビウスを見れば、彼は少ししよげて俯いた。

「だけど、一人で外を出歩いてはいけないと言ったはずだったけど？」

ちろりと横目で見つめられると、ふいと視線を外してリリアンは謝った。

いつもならば、誰か兄弟弟子が居て、一人になったことはなかったから。少し悪いことをしたと自覚しているリリアンは、気まずくなって話を先に促した。

「ああ、ハイディリアの愚息か。」

渋い顔つきになりながら、ルビウスは渋々口を開いた。

「あのエイドリアンという愚息は、ジョナサンとジュリアンの兄だ。自分が優れていると抜かすところでもない奴だ。まあ、確かに卑怯な手を使うのは優れていると思うけどね。火種と言ったのか。」

「そうよ、なんことなの？」

「リリアンヌ、君はドーリスの闇で母君を見たのだろうか？」

確かに見た。愛しそうに赤子の自分を抱いていた母。

「会ったけど。」

生まれから家族と呼べる人はなく、一人で育ったようなものだ。今更死んだ母親の事を言われてもあまり情はわからない。

「ウルーエッドであった戦は現国王のせいだけど、その元凶になったのはその末弟のセドウィグ殿下とローズマリー様だ。ウルーエッド戦を良いように思わない人達は、セドウィグ殿下を陥れたと銀の魔女を火種と呼ぶんだ。」

「戦渦の火種」と悪意を込めて。

「エイドリアンには、ご両親がそのように教えて育てたんだろうね。ハイディリア家はウルーエッド戦で被害を被ったのだから。」

「ルビウスさん、それじゃ、私の事をまるでセドウィグ殿下の子供だと断言してるみたいじゃない！」

確かに母親がローズマリーならば、話の内容からして父親がセドウ

イグ殿下となる。

彼はリリアンヌが別荘へ来た時、のらりくらりとその話題をかわしていた。

「うん、あの時は断言出来なくて。だけど、君があゝの悪夢でローズマリー様の姿を見たのは真実なのだから、君はセドウィグ殿下の子供なんだよ。」

「でも、母親はそうかも知れないけど、父親はどうか分からないじゃない。」

「それは、アレックスが確認済みだよ。別荘でマリエダ様に襲われた時、アレックスが隙を見て君の呪いを少し解いたみたいだから。その時、髪と瞳の色が変わったろう？」

銀色の髪は黒へ、深紅の瞳は真っ赤な瞳となったあの時。

ぶるりと身震いをして、身をすくませる。

「君の本能か、ご両親の呪いかはわからないけどね。セドウィグ殿下に会えばはっきりする。」

そんなリリアンヌを見ながら、ルビウスは言葉を繋げる。

「来週、セドウィグ殿下との面会が叶う事になったんだ。彼と会えば幾らかすすきりすると思うよ。」

なんで急にと抗議するリリアンヌを余所に、週末は空けとくんだよ？と念を押してルビウスは朗らかに立ち上がった。

「会ったら、なんで私が狙われてるかわかる？」

ぼそりと呟いた所を机に向かって歩いていったルビウスは、少し笑って振り向いた。

「少しは関係あるかな。君を狙っているのは、前にも言ったように、爺様の妹にあたるマリエダ・コウリースだ。あの人は、ウルーエツド戦での呪い返しの術を諸に身体で受けてしまって、身体が腐敗するという呪いが死ぬまでついて回ることになったんだ。君も見たことあるだろう？あの人の腐敗した身体を。普通ならば、身体が根をあげるとともに死が訪れる筈だけど、あの人は性格がねじ曲がっているからねー。」

投げやりに言った彼は、机までやってくると何やら机の引き出しやら机の上を漁り始めた。何かを探しているみたいであるが。

「じゃあ、マリエダとか言う人の都合で私は命を狙われてるの？」

「んー、まあそうかな。あの人は腐敗して身体が保たなくなったら、目星をつけていた新しい身体に魂を移すんだ。あの体は確か何人目だから知らないけれど。」

キョロキョロと辺りを見渡すルビウスは、まだ探し物が見つからないのかせわしく辺りを掻き探していく。

「ころころ身体を変えるから、腐敗は次の身体に変える事に早くなってるみたいだし。で、次の新しい身体がリリアヌ、君って訳だ。セドウィグ殿下とローズマリー様の血を引くなら、魔力は相当なものだ。あの人は、魔力が強くて若い少女の身体が好みみたいだから。」

「ふーん。で、どういう風の吹き回しですか。前に聞いた時は、何も教えてくれなかったのに。」

「君が何も知らない方が、守るこつちにとっては都合が良かったんだ。それに約束したしね。質問には答えるって。」

「それはそっちの都合でしょう。そんなものに私まで付き合わされたら、たまったもんじゃないわ。」

「手厳しいな。」

苦笑いをして肩をすくめた彼は、ふと本棚に収納されている本と本の間にはさまっていた紙の束を見つけ出した。

「ああ、こんな所に。ところでリリアンヌ、今学期は丸々休むように学校には届けを出してあるから、ゆっくり療養するんだよ。」

革で縛ってあるその束を引っ張り出し、黄ばんだその頁をめくっていたルビウスは、そう言って顔を上げ、ふとリリアンヌを見やった。

「って言っても聞かないか…。」

リリアンヌは固い決意を胸に、天井を見上げて拳を握りしめていた。

「理不尽だわ。いいえ、望む所よ！国王だろうが、根がひん曲がった魔女だろうが、来るなら来い。こてんぱにやつつけてやる！」

そんなリリアンヌに小さく溜め息をついたルビウスは、まだ幼い少女に言い聞かせるように話しかけた。

「いいかい？まだ半人前の魔女一人が立ち向かえるほど相手は少ないし、弱くない。」

「ご心配なく。自分の身は自分で守るから！私が何にも知らずにぶらぶらしてたから、ルビウスさんが苦労してたのよね？これからは自分の事は自分でするから、ルビウスさんはどうぞ自分の仕事に専念してください。」

「いや、だから…。」

「会議やら何やらで忙しいものね。魔法は自分で勉強するから大事よ！そうとなったら勉強しないと。私、部屋に戻るわ。」

「こら、リリアンヌ。ちょっと待ちなさい！」

ルビウスの呼び止める声を見殺して部屋から駆け出したその背後から、投げやりなルビウスの声が追ってきた。

「ああ、もう。リリアンヌ、邸から出るんじゃないよ！来週末まで僕は身体が空かないから、それまで大人しくしといてくれ。」

「はい。」

了解、了解と繰り返すリリアンヌの背後を部屋から顔を出して見送っていたルビウスは、ため息をついて部屋の外にいたジョルジオに声をかけた。

「リリアンヌから目を離さないように。彼女は何をしでかすか分かったもんじゃないから。くれぐれも頼んだよ。」

念を押されたジョルジオは、静かに頭を下げて了解した。

「ところで、若様。先程チェスター公爵様から、使いが参りました。」

そう言って懷から差し出された上質な手紙を受け取ると、早速封を開けて目を通した。その口元が緩んだのを目ざとく見つけたジョルジオは、機嫌が良くなった若主に優しく問いた。

「色好いお返事を頂けたようですね。」

「ああ、彼女はあの短気な母上の友人とは思えないほど気さくな方だからね。戻ったら直ぐに返事を書くよ。チェスター公爵には返事が遅くなると、ジョルジオ、君から伝えといて。」

手紙を直し、いそいそと部屋に戻って出掛ける支度をする若主に、今度は少し不安げなジョルジオの声が掛かった。

「今度はどれほど邸をお離れに？」

「研究にしか興味が無い堅物が相手だからね。いくらこの古記があると説言つても、得するのに時間がかかるだろう。それに魔法省の仕事も色々あるから、かろうじて週末に戻るぐらいかな。」

「お忙しいのは重々承知ですが、まともにお休みになられていないのでは？それにお弟子さん方の事もほったらかしのようですし…。」

ジョルジオの言葉に耳を傾けながら、全く外出する支度を止めずに、真っ暗なマントを羽織った。

「僕は大丈夫だよ。あの子達には悪いけど、今は手が放せない。折りをみて指導するよ。レイチェルは試験があったっけ？ 予定を空けとくよ。ほんとにジョルジオは、心配性だな。」

とんがり帽子を被ったのを合図に、ジョルジオは脇に退き、その隙間を通して廊下に出た。

「留守を頼む。くれぐれもリリアンヌのことよろしく。」

「：お気をつけて。」

念を押す若主の背を見送る老執事は、小さくため息をついて頭を下げた。

「行ってくる。」

その言葉を最後に、廊下には誰一人としていないこざっぱりとした廊下だけとなった。だが、間を開けることなく、本館から喧しい声が彼の耳に届いてきた。時計を取り出して見れば、もう直ぐ夕刻。恐らく、授業が早く終わった弟子達が帰って来たのだろう。

留守にしている若主に代わって、またやんちゃ坊主達を叱らなければならぬのかと、年よりには見えない老執事は憂鬱気に歩き出した。

12. 図書室の男

一方、本館の二階、西端にある自分の部屋へと戻って来たリリアンヌは、その暫く見ない内にまるつきり変わっている部屋に驚愕していた。見る先から溢れるゴミの山、山、山。いくら元の部屋が散らかって汚いからといっても、流石にゴミを溜めた事はない。

ゴミの大半は、お菓子の包み紙や飲料が入っている空き瓶、雑誌、さらには蝋燭を灯した名残もある。そのせいか、換気をされていないリリアンヌの部屋は悪臭が籠もり、食べ物のカスを嗅ぎ分けた小汚い鼠の軍団と、お決まりの黒い物体がカサカサと音を立てて動き回っている。さらには、五月蠅い虫まで飛び回っているのだ。

その部屋の姿を見れば、全うな女子なら悲鳴を上げてひっくり返るほどだ。しかし、ご存知の通り、そのような可愛らしい性格ではない彼女。あまりの変わりように驚愕するだけだった。

そんな部屋の様子を見る限り、完全に宴会をしていたであろうと伺えるが、あいにく部屋の主のリリアンヌではない。公爵家の使用人達がそんな馬鹿な訳がないし、忙しい主でもない。従って、一番容疑者として怪しいのは、後ろでニヤニヤ笑っている栗毛の兄弟だろう。

「おい、リリア。悲鳴ぐらいあげたらどうだ？男から見たら、可愛くもないぞ。」

流石、農家の息子だけあって、リリアンヌの部屋の惨状を見て悲鳴など上げず、ただ面白そうに見ているだけだ。

「ジョーン兄さん、リリアに可愛さを言っただて無理だよ。」

ジョナサンの左斜め後ろにいる弟、ジュリアンは腹を抱えて笑い出

した。そんな彼らを見て、リリアンヌは怒りが爆発しそうになった。

「ちょっと、二人ともいい加減にしてよ。私の部屋をゴミだらけにして！宴会するなら自分の部屋でしたらどうなのよ。」

「俺達の部屋じゃジョルジオに直ぐ見つかるんだよ。まっ、リリアの部屋なら元々汚ねえし？」

「やれやれ、困った人達ですね。」

全く悪びれもしない二人に、さらに言い募ろうとしたとき、呆れ気味のジョルジオが現れた。

「げっ！ジョルジオ？」

「暫く大人しくしてたと思ってたんですが。キャサリンのお菓子をこんな所で食べてたんですね。全く、お二人共逃げられると思わないで下さい。」

ジョルジオの姿が現れた途端、ばたばたと逃げだそうと思った兄弟は、先手を打たれた老執事に兄弟もろとも首根っこを掴まれ、リリアンヌの部屋へと投げ込まれた。

「女性の部屋に許可無く入り、しかもゴミだらけにするなどもってのほか。魔法を使わず部屋を綺麗にするまで、部屋から出てはいけませんよ。リリアンヌ様、掃除が済み次第お呼び致しますので、暫くオリヴィア様のお部屋でお待ち頂けますか？」

喜々として返事をしたリリアンヌに、にっこりと微笑んだジョルジオは、部屋へと入って入り口に陣取った。

そんなわけだから、帰っているのかわからないオリヴィアの部屋へと向かう。彼女の部屋はリリアンヌの斜め向かいで、すぐについてしまった。

扉を叩いて部屋の主からの反応を待つが、一向に反応は帰って来ない。もう一度叩いてみるが、返事はなかった。仕方がないので、時間潰しに本館三階にある図書室へと向かう。

「リリア、どこに行く？」

途中、学校から帰って来たらしいレイチエルに会い、オリヴィアがいない事を伝えると、彼女の部屋へと誘われたが、試験が確か近かったようであったから礼を言ってそれを断った。

リリアンヌの部屋と反対に位置する図書室は、西館にある書籍室とは異なり、リリアンヌでも読めそうな本が置かれているという。実際に入った事は無かったから、好奇心でいっぱいだ。

少し分厚い古びた両扉の内、一つを押し開いた先には、夕日が差し込んだ煙突のような広い図書室が姿を現した。

目の前には、広い机と規則正しく並んだ椅子。奥には、これまたびつちりと並んだ多くの本棚がある。光に誘われ、頭上を見上げると天井は遙か高く、円形に習って壁の側面には本棚が埋め込まれ、辺りには螺旋状の階段と橋渡しの階段が幾つも掛かっている。

そんな部屋を目のあたりにしたリリアンヌは、思わず駆け出していた。

「素敵っ！素敵っ、こんなに本があるなんて。」

孤児院ではこんなに綺麗な本や、分厚い本など目にする事など不可能に近かった。綺麗な本が何人もの子供達に盥回しに読まれ、元の絵の色まで分からなくなっていたし、少しでも厚さがあれば、破られ、ページがいつの間にか減っていた。

そんな本が当たり前だったから、綺麗な本が並ぶのを目のあたりにして、誰がじっとしてられよう。

近くの螺旋状の階段を駆け上がったリリアンは、壁紙のように並ぶ本を眺めながら、そしてその本棚の間から時折顔を出す、大きな窓硝子を覗き込んだりと大忙しだ。

流石は魔法使いの屋敷と言うべきか、邸には魔法がかかっており、天井にたどり着く事はほぼ不可能に思える。永遠に続くかと思われる、濃緑の絨毯を敷き詰めた階段に、少し疲れてきたそんな頃、リリアンは右脇に現れた穴熊の巣のような個室を見つけた。

「何だろ、ここ。」

暖炉は無くても図書室は暖かいのに、その部屋には中くらいの暖炉が一つに、人ひとりがやつの淡い灰色の長椅子と小さな机が置かれていた。思わず足を踏み入れると、個室全体がおかしなことに気がついた。まるで、歪んだ鏡の中にいるような錯覚になるのだ。少し気分が悪くなったリリアンは、部屋を出ようと入り口に顔を向けた。そのとき、キラリと視線の先に何かが光ったように見え、思わず部屋へと再び顔を戻した。しかし、光った正体は見つからず、ふらりとリリアンは真正面にある本棚へと近付いて行った。

リリアンの背丈より少し高い位置にあったのは、薄っぺらい銀色の表紙に包まれた絵本のようだった。辺りには、分厚く高そうな本が並ぶのに、一冊だけやけに目立っているそれが気になって、リリアンは背伸びをして無理やり引きだそうとした。

台も使わずに本を引きだそうとしたからか。勢いに任せて引っ張ったため、絵本の左右にあった分厚い本までも引っ張り出すことになってしまった。

「うわっわ、あ！」

しまったと思った時には、既に時遅し。高そうな本たちは絨毯が引かれていたのにも関わらず、鈍い音を立てて着地した。

「あー。」

怒られるかなあと思いながら、本を拾おうとしやがみこんだリリアンヌの目に飛び込んで来た文字は、【全集…人名事典】という名の分厚い事典。それが、リリアンヌが触れた途端、風も無いのに独りでパラパラと一面を捲り、ある一面でその勢いが止まった。ズキズキと痛む頭を支えて、ゆっくりとその言葉を口に出して読み上げる。

「セド：リック、ファム：リ、ヴェン、デル。」

―セドリックⅡファム・リヴェンデル

その一面にはそう記されていた。

「セドリック？」どこかで聞いたことがあるような名前だと思いがら、先を読み進める。

「セドリックⅡファム・リヴェンデル。元の名をセドウィグ・キングリー。36代国王の第二正妃の嫡男。」

そこまで読み進めた時、カタンと後ろから物音が聞こえ、パツと振り返った。

すると歪んだ部屋の入り口には、見慣れない男性が一人突っ立って

た。黒髪に深紅の瞳のその男性は、まるで悪戯が見つかった少年のような顔をしている。

「…やあ。」

「どちら様？」

やや間があってから、やっと口を開いた男性は、軽やかに挨拶をしてきた。それには返事を返さず、何者かと尋ねたりリアンヌに男性は首を疎めると、なんてことはないかのように話し出した。

「ここの主である彼、ルビウスとは彼が小さい頃からの付き合いなんだ。だから、よくここの図書室に入り浸ってるんだけど。君は？どこかで見た顔だけど？」

ルビウスが年を取ればこんな感じになるのかもしれないなどと、呑気に考えていたりリアンヌは、問いかけられてはっと中年にしては若く見える男性を見上げた。

「私、ルビウスさんの七番弟子よ。ちなみに、私はあなたとなんか会ったことないわ。」

「ああ、弟子か。ルビンもとうとう七番目をとったのか。そうなら僕に一言、言ってくれてもいいのにな。しかしまあ、気が強いお嬢さんだね。あの人を思い出すよ。」

知り合いだと言う男性は、一人呟いていたので、リアンヌは手元の事典に目を戻した。

「用が無いなら出て行ってもらっても？」

本というのは、静かな場所でないで頭に入ってこない。服装からして、どこかのお偉い貴族の方だというのはわかるが、用もないのに近くでベラベラ喋られると、気が散ってしまうではないか。そんな風に言っただけなのに、男性はピクリとも動かず、リリアンヌを見つめている。半ばイラつきながら、まだ喋り足りないのかと男性を睨んでやると、リリアンヌの睨みなど気にしないように彼は口を開いた。

「これはほんの助言だけど、本を読むなら、この部屋を出て読むことをお勧めするよ。ずっとこの部屋に居ては、気分が悪くなってしまうよ。」

そういえば、先程からガンガンと頭は鳴るし、吐きそうな気分ではある。そう思ったなら、さらに気分が悪くなったリリアンヌは、男性の助言を有り難く受け取ることにした。読みかけの事典を部屋に移動させるにはあまりに重いので、少し気が引けたが読んでいた一面を破りつつ服のポケットへと突っ込んだ。取りあえず、重い事典を閉じるだけ閉じ、リリアンヌは颯爽と男性の脇から部屋を出た。

「ご親切に助言をどうもありがとうございます。」

勿論、お礼を言うことも忘れずに。

「…本は大切にするように、誰からか教わらなかった？」

振り返って見た男性は、腕を組み入り口に寄りかかって、片眉を釣り上げていた。いかにも怒っているという体勢だが、リリアンヌは何故か彼が本気で怒っているのではないとわかった。だから。

「確か聞いたことがあったような、無かったような…。」

惚けたように言葉を濁せば、男性は、今回だけだぞと言うように口元を緩ませた。

「ねえ、ルビウスさんの親戚の人？どこから入って来たの？」

親近感が湧いた彼に、自然と質問が口を飛び出していた。

「親戚…ではないかな？いや、厳密に言えば、親戚になるのか。どこから入ってきたかって？僕も魔法使いだから…。」

「リリアー？」

「誰か呼んでるよ。」

親切にも答えてくれそうだったところに割って入ってきたのは、己を呼ぶオリヴィアの声。

「ヴィア姉さんだ。なんだろ。」

「それじゃ、僕もそろそろお暇しないといけないね。」

階下に気を向けていたリリアンヌを置いて、さっと階段を上がり始めた男性を思わず引き止めた。

「待って！」

「うん？」

「また会える？」

次の段に右足を乗せたまま、振り向いた彼にリリアンヌは、思わずそう聞いていた。

彼は、しばらく黙っていたが、やがてにっこり微笑むと、「君が僕に会ったことを秘密にしてくれるなら。」と言ってまた階段を上がり始めた。

「リイリーアー？」

やがて、近くなってきたオリヴィアの声に返事を返して階段を降り始めた時、名前を聞き忘れたと振り返ったときには、男性の姿は無く、ひたすら続く階段があるだけだった。

「ちょっと、リリア！どれだけ探したと思ってるのよ。」

やがて上がってきたオリヴィアの小言を耳の隅で聞きながら、リリアンヌは名残惜しそうに男性がいた場所をしばし見入っていた。

「ちょっと、リリア。聞いている？」

「え？あつ、うん。ごめんなさい。」

うっかり聞き逃したりリリアンヌは、素直に謝ってオリヴィアに向かい合った。彼女は、小さくため息をつく、と、階下を差しながら言葉を続けた。

「そろそろ晩御飯にしようって。私もう、お腹ペコペコ。」

「私も！」

慌てて、階段を降り始めたリリアンヌをオリヴィアが、さっと引き止めた。

「リリア、その紙は何？」

「うん？ ああ、これ？ さっき読んでる途中だったから、後で読もうと思ったけど…。もういいや。ヴィア姉さん、戻しといってくれる？」

ポケットからグシャグシャになった紙切れを取り出し、オリヴィアに手渡すと、気を取り直して階段を降り始めた。

「戻しって…。」

カサカサと紙を広げたオリヴィアは、その一面を見るやいなや、まるで犬が尾を踏まれたような叫び声を上げた。随分と階段を降りていたリリアンヌは、何事だろうと振り向くと、顔を真っ青にさせたオリヴィアと目があった。

「ヴィア姉さん、どしたの？」

「どしたのじゃない！ リリア、あんたなんて物を破ってるの！？」

少し声を張り上げないと届かない距離になってしまった分、オリヴィアの声は図書室に随分と響く。

「なんて物って事典？」

「これ、ただの事典じゃないのよ！ あたしたちが、一生働いても返せないような高価な本^{もの}なんだから！？ ああ、ジョルジオに怒られる

っ！」

悲痛な声を上げるオリヴィアに聞こえない小さな声で、悪態をついた。

「そんな高価な本^{もの}を目につくところなんか、置いてたのが悪いのよ。」

「なんですって！？リリア、どうするの、これ！」

聞こえないほど小さな声のはずが、ばっちりオリヴィアには聞こえていたようで、慌ててリリアンヌは階段を降りきった。こういう場合は、逃げるが勝ちだ。

「こら！どこに行くのっ！」

「ごめんなさいーい！」

「ごめんなさいじゃないっ！」というオリヴィアの怒鳴り声を背に聞きながら、リリアンヌはそそくさと図書室を逃げ出し、食堂へと向かった。

13. 父子の関係

食堂に逃げ込んだリリアンヌは、オリヴィアとは鉢合わせしないよう、さっと食事を済ませ、しばしの間レイチェルの部屋で厄介になっていた。

春に弟子歴三年になる彼女は、何度かあった試験に落ちてしまったらしく、来年にある再試験を受けるのだという。しかし、二度あるその試験も、私情で受けられなくなったという。なので、二回目の春にリリアンヌが受ける試験と一緒に受けるのだそうだ。

「ブレハ湖にいるお母さんが、具合が悪くて。帰って来いって。一年、学校も休学する。」

「そっか、寂しくなるね。」

こくつと頷くレイチェルは、さらに心配ごとがあるらしい。

「リリアと受ける試験に落ちたら、弟子辞めて帰って来いって。」

「ええっ！だ、大丈夫！レイル、受かるよ。…たぶん。」

かなりいい加減に慰めたが、レイチェルにはいい気休めになったようだった。気分をよくした彼女は、その後部屋で丁寧に勉強を教えしてくれた。

そしてむかえた週末。久しぶりに姿を見せたルビウスに連れられ、リリアンヌは王城の奥へと足を踏み入れていた。

「ルビウスさん、本当に私なんかが、こんなところに来て大丈夫

なの？」

先程から、数えるのも面倒くさくなるぐらい何度も同じ質問を口にするリリアンヌに、ルビウスは平然とリリアンヌの前を歩いている。

「さっきから言ってるだろう？大丈夫だって。おまけにレイチエルの容姿だって借りてるしね。僕の腕を信じなさい。」

「……………」

「…何かな、今の間は。そんなに僕は信用ならない？」

歩みを緩めたルビウスと並んで歩きながら、小さくため息をついて呟いた。

「よく言うよ。全く。」

「何か？」

「いいえ？なににも。」

しらっとルビウスの問いに答えて、自分の容姿を見してみる。彼が邸に戻ってきて最初にしたことは、リリアンヌをレイチエルの姿へと変えたことだった。ふんわりと綿菓子のような乳白色の髪に黄金色の瞳。愛らしいその姿が何故か、自らの姿になっている。

「ぎゃーあっ！なんじゃ、これ。」

「…リリアンヌ、君は女の子なんだから、もっと可愛い悲鳴をあげてもらいたいね。」

到底、年頃の女の子の叫び声ではない声をあげたりリアンヌに、ルビウスはやれやれとため息をこぼした。

「ご希望に添えなくて申し訳ありませんね、先生。」

「…城にいたら、その言葉使いやめるんだよ？」

リアンヌの言葉にそう言うだけに留めたルビウスは、レイチェルの姿を借りているだけの借り姿の魔法というのだと教えてくれた。

「リアンヌの姿ごと城に入るのは、流石に危険だからね。あまり姿を晒さない、レイチェルの姿が一番最適だと思って。年も同じだし、外ではあまり喋らないから。乗り移りの魔法や、変身術はお互いの身体に負担が大きいし、高度な魔法なんかをかけて城に入ったら、すぐに怪しまれてしまうしね。」

「借り姿って、私がレイルの姿を借りてる間、レイルはどうなるの？」

ルビウスに急かされながら、あのふわふわとする真っ黒な外套マントを着て、準備を整えた。

「ギリギリ魔法規制に引っかからない古い魔法だから、レイチェルも君も負担は無いはずだよ。レイチェルには、しばらく邸の中にいるように言っている。さあ、行こうか。」

と言う具合で、フードを目深に被っているリアンヌは、易々と六番目の弟子、レイチェルとして城に入り込めたのだ。しかし、不安なものは不安で。何度目かになる、お決まりの質問を繰り返していた。

「さあ、ついたよ。」

城の奥、森と言えるほどのだだっ広い庭を抜けてたどり着いたのは、こじんまりとした屋敷だった。がっちりとした煉瓦造りのその屋敷は、レイヘルトンの街中にあつた建物を思い浮かべ、随分冷たい印象を受ける。

「ルビウスⅡレオ・カインドです。セドウィグ殿下にお取り次ぎ願います。」

リリアンヌがぼけっと屋敷に見とれている間、ルビウスは屋敷の鐘を鳴らし、出てきた使用人に伝え、しばらくたって玄関戻ってきた使用人屋敷に従って、中に入ろうとしていた。

「レイチェル、ぼけっとしていたら、置いていってしまうよ。」

いつもと違う名前にはっと視線を戻せば、にこやかに微笑むルビウス。リリアンヌは、静かにルビウスの元にへばりついて屋敷の中へと足を踏み入れた。本当は、ルビウスなどにへばりつかず、屋敷を観察したいところだが、本来のレイチェルならば、恐らくこのような行動をしたはずだから、しばらく我慢しようと思ったのだった。客室へと通された二人は、家主であるセドウィグ殿下ではなく、リヴェンデル国の宰相を務めるルーベントを見つけて驚いた。

「ルーベント宰相、一体どうしてここに？」

「私も宰相という立場ですからね…。」

「お決まりの国王陛下からのご命令かい？」

「：そんなところです。」

トゲトゲしい二人の挨拶を聞くリリアンヌは、ルビウスが小さく「国王の犬が。」と忌々しそうに呟いたのも聞こえたが、至って落着いていた。レイチエルの姿を借りているのを見破られれば、国王の元にひっぱだされるだろうが、フードを深く被っているし、ルビウスの背後にいるためわかりはしないだろう。

「レイチエル、セドウィグ殿下はまだいらしていないみたいだし、僕は宰相と少し話があるから好きにしておいで。余り遠くには行かないようにね。」

席を外すように言われたリリアンヌは、静かに頷いてさっと部屋を出た。あのルーベント宰相は、あまり好きになれない。ただ者ではない雰囲気、あの身体からだだ漏れているから。

喜々として廊下を歩いていると、その廊下の突き当たりにひっそりとある一つの扉を見つけた。真っ黒なその扉は、少しだけ隙間が出ていて、鍵がかかっていることがわかる。そこから部屋を覗きこめば、吹き抜けの天井にある窓からまだ明るい日の光が差し込んでおり、書斎であろうその部屋の住人は留守であることが伺えた。来た廊下を振り返ってみると、客室は少し離れているが、ルビウスの目が届かない範囲ではなさそうなので、少しの間お邪魔することにした。部屋へと足を踏み入れると、柔らかな深紅の絨毯が出迎えてくれ、足音も立てずに部屋の中を歩ける。吹き抜けの部屋であるが、天井までの距離はさほど遠くはなく、少し形、硝子色が風変わりな窓が並んでいる。その天井から目の前にある机へと視線をやると、この部屋の主は余程慌てて出たのだろうとわかった。書類はぐちゃぐちゃで、黒い墨壺は中身が全て机の上に広げてあった、紙へと吸い取られている。

「悲惨ね。」

まさしくその一言が相応しい惨状だった。ルビウスの机や椅子よりも高級であると思われる家具だが、あちこちに墨がつき、変わった模様には見えない。机の背後に並ぶ本棚をしばし眺めていたリリアヌは、脇にある階段に気がつき、ゆっくりと登っていった。上の階はあまり広いとはいえない難しいスペースに、本棚と揺り椅子が一つ、あとは床一面に本があるぐらいだ。リリアヌも、ここぞとばかりに揺り椅子に座り、揺らしてみる。ちょうど日があたるその場所は日向ぼっこに最適で、帰りたくなるぐらいだった。

「この揺り椅子、頂戴っていったらくれるかな。」

セドウィグ殿下に会いに来て、ここはその殿下の屋敷ということも忘れて、思わずそんなことを口にしていた。そんなことをあの宰相の耳にでも入れば、怒られるだろうなと思っていた時、ふと一つの窓硝子から何かが動いているのが目に入った。

「人影……？」

すぐに消えてしまったその人影は、確かに人間のようだった。

「えらくふらふらしてたような。」

心配になったリリアヌは、急いで書斎を出ると少し考えて、屋上へと繋がる階段を駆け上がった。あの場所から見えるのは、恐らく屋上であろうから。

「ひい、ひい、はあー。」

まだまだ若いリリアンヌでも、一気に階段を駆け上がれば息もきれ、呼吸を落ち着けなければいけない。

「えっと…!？」

折り曲げていた上半身を上げて辺りを見渡すと、目の前に飛び込んできたのは、柵もない屋根の上から上半身を乗り出している男性の姿。

「わぁー！ー！」

ちよつと待ったと口にするよりも、真っ先に駆け寄り慌てて男性をこちら側へと引っ張りこんだ。勿論、服をむんずと掴んで引っ張ったのだから、男性は「ぐえっ！」とアヒルのような声を出すことになり、二人共々屋根の上に転がり込んだ。

「ちよつと、なに考えてるの！あんなに身を乗り出したら、落ちて死んじゃうでしょ。馬鹿じゃないのっ。」

まるで、投身自殺のような景色を目のあたりにしたりリリアンヌは、気も動転したように相手へと怒鳴りつけた。

「…何って、君こそ、けほっ。何だい。」

相手といえど、襟元を締められたために苦しそうに目尻に涙を浮かべて、言葉をだそうと苦戦している。

「なんだいって…。」

まだ言うのか、この男はと男性の顔を見たたん、怒りもどこかへ吹っ飛んでしまった。なにせ、カインドの図書室で現れたあの男だったから。

「あなた…。」

図書室では少しぼやけてわかりにくかったが、明るい外で見る男性は見たことがある姿だった。真っ黒な髪は肩より下で、真後ろに一括りに束ねて風になびいている。真っ赤な深緋色の瞳は、美しくリリアンをうつしていた。

別荘でアレックスに鏡を見せられた時、そこに映っていたあの姿が。

「君は…。」

向こうもリリアンに気づいたようで、深緋の瞳を見開いてリリアンへと腕を伸ばしてきた。肩に手が乗せられた時、ビクツと体を震わせたリリアンに構わず、男性はそつと顔を覗き込んで来た。

「マリー…?」

震えるその声に顔を上げれば、瞳を潤ませた深緋とぶつかった。そこに移るリリアンは、いつの間にか古代魔女の姿であるリリアンヌが移っている。

「マリーにそっくりだ。けれど、君は違うのだろうか?」

切なそうに声を絞り出す男性は、そつと手を離すとじつとリリアンヌを見つめてきた。

「図書室で一度あったね。」

「ルビウスさんの七番弟子のリリアンヌ・カインドです。マリーは…、ローズマリーは、私の母だそうです。あなたがセドウィグ殿下ですか？」

「…そうだよ。正式な名は、セドリックⅡファム・リヴェンデル。母がつけたセドウィグという名が好きだから、みんなにはそう呼んで貰ってる。そうか、マリーの。やっぱり、僕の父親の感は当たってたって言うわけだ。」

少し、嬉しそうに笑うセドウィグ殿下はリリアンヌの頭を優しく撫でて、しばらく口を噤んでしまった。天氣の良い空が広がる中、二人の間には気まずい雰囲気包んでいる。

「あのっ。」

「えっと。」

気まずい雰囲気から脱しようと、口を開いたのは同時で、またまた気まずい雰囲気となってしまった。

「ローズマリーは…。」

父だと言われても、話したいこともないリリアンヌは、その言葉を口にしたら殿下を見上げてしばらく黙っていた。

「死にました。私の目の前で。」

「うん、知っている。けれど、それを実の娘に教えられるなんてね。」

欲していた答えを口にしても、殿下は静かに瞼を閉じて空を見上げた。涙を見せなくとも、泣いていることはリリアンヌにもわかっている。

「最低だね。そう思わないかい？愛する妻を守れず、未だ眠る場所さえも知らない。自分の娘さえも探し出して守ってもやれない。それなのに、自分はのうのうと楽に暮らしている。」

目を開けて空を見つめる父を見つけていたリリアンヌだが、自分も同じ空を見上げて話しかけた。

「でも、仕方ないんでしょう？それに、私のことルビウスさんに頼んで探して貰ってたって。」

「人頼りじゃないか。君に父親などと名乗りでるなど。」

静かに首を振る父に、リリアンヌは静かに語った。

「私は、別にいいの。父親がいなくなたって、母親が生きていなくても。生まれてから、両親がいないのが当たり前だったから。」

それを聞いて、悲しそうに目を伏せた父に、聞いて欲しいと話を続ける。

「でもね、お母さんには一度会った。夢の中で。とっても優しくそんな人だった。そんなところが好きだったんでしょう？だから、私を見て最初にそう言った。まだ、お母さんのこと愛してるんでしょう？」

「優しくそうに見えて、マリーは結構自分の意見は言う女性だった。」

僕にとって、彼女以外に想う女などいないから。君は本当にマリーにそっくりだね。」

愛しい人を語るその顔を見つめたリリアヌは、にっと笑って父の腕を叩いて言った。

「それならいいの。その想いがあれば、お母さんも何も言わないと思うから。私が、両親がいないのが普通だと思うのは、簡単には考えは変えられない。だから、殿下がお母さんの話をして、私にも母親がいるって。父親が生きてて良かったって思えるように話を聞かせてよ。」

にこやかに笑うリリアヌをびっくりした顔を見つめていたセドウィグは、くしゃつと顔を歪めると、リリアヌの頭に手を置き呟いた。

「遅しいな、私の娘は。」

「リリアヌ！」

そこへかけられたのは、切羽詰まったルビウスの声。

「あ、ルビウスさんだ。」

慌ててやってきた彼は、相当探していたのか、リリアヌを見るやいなやあれほど遠くにいつては駄目だと言っていたのにと怒り出した。

そして、素直に詫びるリリアヌの隣に立つセドウィグを見て、おやという顔をした。

「あれ、殿下。こんなところでどうしたんですか。」

「いや、ルビンが来るまで飼い猫を探してたんだけど、うっかり落ちそうになって。」

リリアンヌに助けられた。と苦笑する彼は、穏やかな表情を浮かべている。その表情から何かを察したルビウスは、小さく微笑みを漏らして、リリアンヌへと向き直った。

「さて、帰ろうか。」

「え、もう帰るの？」

まだ父と話足りないと言っても言うリリアンヌに、彼は駄目だよとたしなめた。

「あんまり長居をしてると、ルーベントにバレるからね。お互い、話が出来たのなら今日の目的は達成されたし。」

「もしかして、謀ったの？」

「…策士だな。」

平然と言うルビウスに対して、初めて対面した父子は、おやこなんとも息の合った言葉を投げかけた。

「どうとでも仰って下さい。」

全く悪びれもなく言うルビウスに苦笑したりリアンヌに、セドウィグは控えめに聞いてきた。

「リリ…と呼んでも？」

「ええ、ご自由にどうぞ。」

にっこりそう許可したところで、間に割って入ってきたのはルビウスである。

「セドウィグ殿下が、リリアンヌのことをなんと呼ぼうか勝手ですが、彼女は殿下のことは父と呼べませんよ。」

「あら、どうして？ 殿下がそう呼んで欲しいなら、私、そう呼んでもいいのに。」

呼び名は対して気にしない。そう言うリリアンヌだが、ルビウスは首を振って否定した。

「セドウィグ殿下は、結婚していないことになってる。書類上ね。そんな人が、子供がいるとしかもその子が、古代魔女とあたりに知られれば、大混乱だ。リリアンヌの身を守る為にも、公にしないほうがいい。」

仕方がないねと言うセドウィグの言葉もあつて、納得するしかなかった。

「また会いに来て？」

ルビウスについて行きながら、ふとそんなことを聞きたくなったりリアンヌは、振り向きながら、まだその場に立つセドウィグに聞いた。

「そっちに会いに行くよ。内緒でね。」

にこやかに笑う彼を見て、リリアンヌも悪戯っぽく微笑み返した。

「まさか、またうちの図書室に無断で来てたんじゃないですよね。」

その会話を聞いて、怪訝そうに振り返ったルビウスに、セドウィグは「何のことだろう？」ととぼけたのだった。

「ルーベントが来るからそろそろ行こうか。」

はあとため息をつき、セドウィグに会釈をすると、颯爽と階段を降りていった。そんなルビウスをリリアンヌも慌てて追う。

「セドウィグ殿下って変わってるね。」

思わず口をでた言葉に、ルビウスはすこし苦笑しながら肯定した。

「そうだね。先王の生まれ変わりだから。」

「先王の生まれ変わり？」

「36代国王殿下。代々リヴェンデルを継ぐ国王の中で、魔術を使えた珍しい人だよ。セドウィグ殿下の父にあたるその人は、蘇りの能力を持つ人だったんだ。蘇りは、本人は死んでいるけれど、その魔力と精神を器に合う者に輪廻させることだから。セドウィグ殿下に、先王の精神が寄生してるってとこだね。」

一階へと降り立ったところに、前方からルーベント宰相がやってき

た。

「セドウィグ殿下は、上に？」

「屋上にいらっしやったよ。僕達はもう用事が済んだから、お暇させてもらうけどね。」

怪しむルーベント宰相を置いて、どこかご機嫌が良いルビウスは既に玄関へと向かっている。

「あ、さっき借り姿が解けてたけど、大丈夫なの？」

玄関を出る間際に思い出したりリアンは、慌ててルビウスに伝えた。

「ああ、君を見つけた時に関直しておいたよ。」

なんてことはない、ルビウスは話し、ところで繋げた。

「セドウィグ殿下は、邸に離幽の術で来ていたのかな？」

「理由？」

「離幽だよ。生きている人間が、全く別の場所に魂を飛ばすことの出来る術なんだけど、分身の術よりかなり危険な術だから、殿下にはやめて下さいと言っていたのだけれど、図書室にまた無断で来ていたのだろう？」

「…さあ？私は知らない。」

図書室に来ていたことが見つければ、もう会いに来てはくれなくなる。約束したし。とリリアンヌはまるで悪戯を隠す共犯者の気分で、素知らぬ顔を貫いた。

「君達は、たちが悪いね。」

そんなリリアンヌに苦笑して、ルビウスは一言そう言って、それ以上は何も言わなかった。

城に向かって歩いている際に、ふと後ろの屋根を振り仰ぐと、屋根に腰掛けたセドウィグが空を見上げているのが目に入った。

父子おやこという関係にすぐになれはしないけれど、友達にはなれそうだとリリアンヌは、小さく微笑んだ。

14. 試練の時

時というのは、早く過ぎて行ってしまうものだと思う。

積もった雪も、春の訪れを告げと共に消え去り、リリアンヌが弟子となって二度目の春を迎えた。穏やかな春晴れに恵まれたこの日は、リリアンヌとレイチェル、2人の試験の日である。

「リリア、レイル準備出来た？先生はもう玄関で待ってらっしゃるわよ。」

早くしなさいと急かすオリヴィアに手伝わってもらいながら、2人は全身を黒へと染めあげる。

「あ、こら、レイル。靴を履きなさい！」

「心配だ…。」

靴下で廊下を歩いて行ってしまったレイチェルを追って、オリヴィアが駆けて行くのを見て、リリアンヌは小さく呟いた。今年10歳になるにも関わらず、どこか抜けているレイチェルを見ると、己のことよりも彼女のことが心配だ。

「レイルのやつ、今年も駄目かもな。」

「ええっ!？」

いきなり背後から現れたハイディリア兄弟に、おっかなびっくりしつつも、呑気に会話することになった。

「試験になると大抵駄目だよね。」

「でも、まあ、ヴィア姉さんも毎定期試験、酷かったのに卒業試験受かったし、大丈夫だったりしてな。」

「ヴィア姉さんは別にいいけど、レイルは今回試験に落ちたら弟子やめろって言われてるんだよ？」

「大丈夫じゃねえ？」

「先生がなんとかするよ。」

「ちょっと何よ、3人揃って。確かに、真面目じゃなかったけど立派に私は卒業しました！」

3人の会話に憤慨する彼女は、去年、卒業試験を無事合格し、それ以来ポータリサにある静寂の森に帰っているが、時たまこうして兄弟達やリリアンヌの世話をやきにやってきている。

「ヴィア姉さんが、卒業試験受かったの偶然を越えて奇跡だな。」

「先生、ヴィア姉さんの試験、ヒヤヒヤしたってこぼしてたね。」

「ちょっと、なんなの？2人揃って！」

あながち嘘ではないが、憎まれ愚痴を叩く兄弟にオリヴィアは拳を振り上げて怒り出してしまった。

「お喋りをお楽しみのところ悪いけれど、そろそろ出発しないと試

験事態受けられなくなってしまうよ?」

そこへ現れたのは、いつまで経っても弟子が降りてこないの、様子を見に上がってきたルビウス。彼も魔法大臣という役職ながら、今日の非公開となる実技試験に立ち会うらしく、正式な魔法使いの服を着用している。

「あ、ごめんなさい。レイル、準備出来た?じゃっ、行こか。」

慌てて、ルビウスの側へレイチェルを引っ張って行き、見送ってくれる兄弟弟子に手を振った。

「行ってきます。」

その日、波乱の幕開けとなることなど知らずに。

「時間がないから、瞬間移動魔法で行くよ。」

おいでと呼ばれて素直に従う二人の手を引き、ルビウスは瞬間に会場へと移動した。

「靴が脱げたっ!」

「もう、レイチェル!」

移動した反動でふらついていたレイチェルは、靴の片方をどこかへ吹っ飛ばしてしまったと、ルビウスに靴を呼び寄せてもらい、履くのを待っていてもらっていた。大丈夫かと零すものの、会場は似たような黒服を着た沢山の人で溢れかえ、ガヤガヤと雑音でいっぱいである。

「手続きを済ましておいで。会場まではわかるね。レイチェル、リリアンは初めてだから途中まで頼むよ。僕はもう行かないと…。じゃあ、2人共幸運を祈る。」

さっと姿を消したルビウスから、レイチェルに視線を戻して眉を寄せた。

「会場ここじゃないの？」

「うん、多分。えーっと、どこだ？」

「…大丈夫かなあ。ほんと心配。」

「誰が？」

あんたの事だよ！！

「まだ手続きを済ませてらっしゃらない方おられましたら、お早めにこちらにいらしてください！」

そう叫びそうになった言葉を一段と大きなスピーカーのような声が、会場に響き渡りリリアンの言葉を遮った。

「とにかく、手続きを済ませ。試験受けられなくなっちゃう！早く！」

「リリアは、せっかちだね。」

急かすリリアンだが、レイチェルはいたってマイペースに歩みを

進めている。年齢も体型もバラバラな人の波を掻き分けて進むのは、一苦労だ。

「レイル、早く！」

レイチェルの手を引き、最終的に引きずるようにまわりの床より一段落上がった手続き用の場所へつくと、息はすっかり上がってしまった。

「試験受ける前にどうにかなりそうっ！」

「そんな神経質にならなくても。」

そんな掛け合いの間に、年配の受付の女性は声を張り上げて、2人を促した。

「お名前を！」

「リリアンヌ・カインドとレイチェル・カインドよ！」

「番号札をどうぞ？ 四二番の扉へ進んで。」

リリアンヌも辺りの騒音に負けじと叫び返して、レイチェルと二人分の木札を貰い、脇に退いた。

「四二番の扉って、どこ！」

「東の塔だと思う。」

後ろからまだ受付を済ませていない人達が、押し合いへし合いをす

る中、リリアンヌはレイチェルが指す方へ目を向けた。先ほどまで、受付まで行くので必死だったために、あまり辺りの様子を見れていなかったが、レイチェルが指す窓の先には古びた塔がどっしりとそびえ立っていた。

「遠いね。とにかく、行こか。」

ちらほらと先を急ぐ人達に続き、二人も会場を後にした。

駆け足で行き着いた東の塔の中には、黒い服に身を包んだ若者達が溢れていた。筒状の建物であるために、吹き抜けとなっている塔は、側面に数字がうたれた扉が無数にあり、まるで蟻の巣のようだった。

「どうやって上まで上がってんだ？」

あちこちから戸惑いの声が上がりがわめく中、ちらほらと魔法を使って、扉に向かう者が出てきた。

「ふーん、魔法使って上に行かなくちゃ行けないんだ。レイルはどうやって上に行く？」

「連水に乗っていく。リリアは？」

「いいなあ、私は風蘭に頼めないし。どうしようかな。」

そう言って辺りを見れば、今ではめったに使われなくなった箒を使う者もいた。

「何も持って来てないしな。」

そう考えていると、ふと汚い布が床に落ちているのが目についた。

「汚いけど、これでも使うか。」

「リリア、もう行く?」

「うん、レイルは四十八番だっけ?」

「そう。」

「先に行っていいよ。これに魔法かけて後から行くから。」

わかったと答えた彼女は、呼び出した白竜姿の連水に乗って、扉に向かって行った。

「さて。」

その姿を見送って、手元の布に神経を集中させる。すると、布はくねくねと意志を持ったかのように、形を変形させ始めた。頭の中で、鳥の形を思い浮かべ、布は歪な羽が生えた物体へと姿を変えた。

「うえ、なんか気持ち悪っ。」

少し修正して、かろうじて鳥と言える姿にすると、今度は大ききさせる。何度がぎこちなく羽ばたいた鳥は、羽ばたく度に大きくなっていき、瞬く間にリリアンヌの顔より大きくなった。

「あら、ごめんなさい。こんなもんなかな。」

右手にのった汚らしい鳥は、羽の大きさに辺りにいる人に多大なる迷惑をかけていた。リリアンヌは一言周りの人に謝って、布で出来

た鳥を頭上に羽ばたかせた。鳥に体重をかけて少し浮いたと思った時、ガクンと足元に重みがかかった。

「待って！僕も連れて行つて。魔法得意じゃないんだ。このままじゃ試験受けられなくなっちゃう！」

見ると、四番弟子のエリックより幼い男の子がリリアンヌの右手足にしがみついていた。

「ちよつとやめてよ！無理だから！それに、見てわかんない？重量オーバーよっ！」

せっかく飛び始めた鳥は、あまりの重さにふらふらと危ない飛行を始めている。このままでは、せっかくかけた魔法がとけてしまう。

「ごめんっ！」

そう叫んで、あいている左足を蹴った。その左足のかかどが、うまい具合に男の子の顔面に入り、痛さに呻きながら男の子は地面に落ちていった。その時、辺りからも痛そうなうめき声が聞こえたが、既にリリアンヌは勢いついた鳥と共に浮上していた。四十二と扉いっばいに書かれた扉の前に近くと、待ってましたとばかりにその扉は勢いよく開いた。

「よっ、と。」

ひらりと中へと滑り込み、体制を正すと部屋には五十人程であるか、若い子供からお年寄りまで、細長い机に同じような細長い椅子にまばらに座っており、みな同じような黒服に身を包んでいる。

「初級をー、受験される方ですね。席についてくださあい。筆記試験がぁ、終わりしだいー番号順にーいお呼びしますからぁ、呼ばれた方だけえ中に入って下さいー。」

入ってきた扉とは、反対の扉の前に立つ全身緑尽くめの青年は、クネクネと身体をくねらせて間延びした声を発していた。

「よく、あんなのが採用されたものね。」

そう毒づく、近くにあった空いてる席へと腰掛ける。腰掛けるとすぐに用紙が配られ、筆記試験が始まった。約二時間に渡るその試験は、かなり苦戦を強いられた内容だったが、彼女は半分以上を勘で埋めてしまった。

「ま、大丈夫よね。」

回収されていく解答用紙を見ながら、小さく呟いた。

「ではぁ、1番からぁ10番までのお方。」

そして、一息つく間もなく実技の方も始まった。暇を持て余していたリリアンヌは、木札をひっくり返して自分の番号を確認した。18と書かれてある。

「ではぁ、11番から20番の方。」

ガタガタと席を立つ音と共に、前にある扉の前へ移動する。

「お一人ずつうー扉を開けてえ中に入って下さあい。入ったら扉を必ずー閉めてくださあいねえ？」

なんてイライラする野郎だと思っていれば、青年はリリアンヌのそばに近づいた際、小さい声で喋りかけてきた。

「入った時から、既に試験は始まってるからな。気をつけろよ。」

「え？」

振り向こうとした時、後ろの人に先を急かされて自分の番になっていた事に気がついた。しかし、どこかで聞いた声だったと思案しながら扉を開け、中に入る。部屋はガランとして、何があるわけでもない。

「試験で何をするのかしら。」

ルビウスに聞いた話によると、実技試験の内容は毎回変わるらしく、魔法師であれどその内容は外部に絶対に漏れないのだそうだ。初級を受ければ、一週間前ほどに課題となる試験の内容が届くらしいが。

「どうしろっての？」

せめて何をすればいいのかぐらい言って欲しいものだ。窓もない部屋には、可笑しなぐらいなものもない。さっき入ってきた扉は既に跡形もなく消え、灰色の壁があるだけ。

「まさか、この部屋から脱出しろとか。」

初級でそんな高度な魔法はないだろうと思った矢先、ひらりと天井から紙切れが舞い降りてきた。そこには、『5分以内に部屋から脱出せよ。』と簡易に書かれた文字のみ。そして、目の前に巨大な

砂時計が出現した。恐らく、5分に設定されている砂時計は既に半分以上落ちている。

「嘘でしょう！移動魔法は教えて貰ってないし。」
どうしろというのか。

焦る気持ちを抑えて、リリアンヌは必死に習った魔法を頭の中に思い浮かべた。

「通り抜けの魔法なら…。」

唯一、今使えそうな魔法を一つ思い出すと、早速脱出を図った。

【我、ここに姿を放棄する者なり。通り抜けの魔法を用い、全ての対象物を無効にされたし。】

ぎゅっと瞼を瞑って呪文を並べ、近くにあった壁へと手をつけた。ひんやりとした感触があるだけで、透明となっている手首はするりと、壁面になんなく食い込んだ。

「やった！」

これ幸いと壁を通り抜け、部屋から出たが…。

「ひっ！何で、床が無いのー！」

出た先は、床がない洞窟のような場所で、床があると思って足をついたりリアンヌは勿論、重力に従って真っ逆さまに墜落していった。

【停止！】

墜落していく途中で、苦し紛れに出た呪文により、落ちるのは止まることが出来たが、周りでは同じような人達が次々と落ちていつている。

「え？ レイル！？ あ、うわっ。」

その中に、レイチェルらしく人物を見つけた。しかし、それは一瞬で、レイチェルが確かめようと体を傾けてしまい、不安定だった停止の魔法はあっさりとはどけて、体は再び凄い速さで落下していつてしまった。

ボスンと鈍い音を立てて落ちた先は、干し草が敷き詰められた洞窟のような場所で、他の落ちていた人達も同じように干し草の山に埋まっている。

「げっほ、落ちるって試験で不吉だ……。あ、レイル！」

干し草の山から腰までを出したりリアンはそんな事を呟き、斜め下に干し草の山に埋まったままで、呆然としているレイチェルの姿を見つけた。

「レイル！ やっぱり、レイルだったんだ。」

干し草を掻き分け、彼女のそばにいけば、レイチェルはやっとリリアンヌに気づいた。

「あ。リリアも落ちたの？」

「う、うん、まあね。レイル、抜けられない？」

「どっかに挟まった。」

「なにやってんの。引っ張ってあげるから、ほら、手をだして。」

「リリアは初めて落ちた？」

「そりゃそうだよ。初めて試験受けたんだから。」

レイチェルの右手を引っ張ってやりながら、呆れたように彼女を見やった。

「私は三回目になった。」

「あつ、そう。…良かったね。ほら、抜けたよ。」

落ちて、何故か嬉しそうなレイチェルに首をすくめた。

「あ、なんか呼んでる。」

そこへ若い女性の声が聞こえ、落ちてきた人々はみなそこへ向かっていた。

「行ってみる？」

レイチェルの手を引き、二人揃って女性の元へと向かった。

「はい、名前と部屋番号、振り分け番号をお願いします。」

そばにいれば、女性は素敵な笑顔で名前を促してきた。

「リリアンヌ・カインド。四十二番の18よ。」

「レイチェル・カインド。四十八番の21。」

それに答えると、女性は帳面に二人の名前を書き連ねていく。

「ねえ、これで試験終わりなの？」

その几帳面な文字を見ながら、リリアンヌは若い女性にきいてみる。

「いいえ？ここから出て終了になります。ほら、あそこに洞穴がありますでしょう。あれの出口が、東の塔の玄関に続いているので。」

「そうなんだ。自力で出ろってことね。ありがとう、お姉さん。」

「お氣をつけて。次の方どうぞー？」

にっこり笑った女性に背を向け、レイチェルと共に洞穴へと向かった。洞穴の中は真っ暗で、一寸先も見えない。時折ちらちらと小さな灯りが見えるので、既に何人もの人が入っているのがわかった。肌寒い風が舞い込んでいることから、出口に続いているのは間違いないだろうが…。

「なんか、不気味だね。…レイル、一緒に行こうか？」

ぴつたりと寄り添って来たレイチェルに声をかけ、お互いに手元に明かりを灯すと、そろりとそろりと踏み出した。

「無事に出れますように。」

そつと祈るように呟いた願いは聞き届けられなかったとリリアンは
は、後から誰と言うわけでもなく恨んだ。

15. 未来の自分（前書き）

随時長くなりました。

15. 未来の自分

洞窟内はかなり広く、古くから存在していたようだった。もろくなっている天然の土壁は、少し触れるだけでパラパラと音を立てて崩れくる。そんな洞窟には、リリアンヌとレイチェルの二人分の足音だけしか響いていない。順調に進む中、真っ暗な天井を住処にする蝙蝠の群れに追いかけられたり、時折レイチェルが地面から突き出た岩に躓くぐらいの程度で、だいぶ出口に近づいたように錯覚する。

「出口ってまだなのかな。」

「…お腹すいた。」

「出口についたら、ルビウスさんに頼んだらいいじゃない。」

不安が募るリリアンヌに対して、レイチェルの腹の虫はさっきから煩く主張してきて、挙げ句の果てにレイチェルはしゃがみこんでしまった。

「もう動けない。」

「えー？そんなこと言われても。」

服が汚れる事も構わず、ぺたんと座り込んだレイチェルに困ったなあと言いながら、辺りを見渡した。

「リリア、ご飯にしよう？」

今いる場所は道のと真ん中だが、危険な動物などは居そうにないの

で、仕方ないとリリアンは手元にあった明かりを頭上に上げて、レイチェルの隣に座り込んだ。

「何か持って来てる？」

「ううん。」

「何も持っていないのにご飯って。」

気が小さいのか図太いのかわからないと思いつつ、魔法でカインド邸から食べ物呼び寄せた。

「…しかし、なんでこうも人に会わないのかな。」

あの場所に落ちていた人数は、かなりいたように思う。時間がたつにつれ、謎ばかりが増える。

「あれ？レイル、お腹空いてるからって、私のサンドイッチまで食べないでよ。」

「食べてない。」

手元にあったサンドイッチは、リリアンが考え事をしている間にすっかり姿を消している。レイチェルは澄まして牛乳を飲みながら、あっさりと否定しているが、二人しかないこの場所に彼女以外に犯人がいるわけがない。

「うそ！それに、レイル意外に誰が食べるって言うのよ。」

あくまで自分ではないと言い張るレイチェルに、とうとうリリアン

又は怒ってしまった。

「お腹は空いたわ、疲れたわ。レイルもここから出る方法を真面目に考えてよね！」

「考えてる。」

「考えてない！我が俤ばかりだもの。私、レイルのお守り係りじゃないんだからね！もう、レイルなんて知らない！」

まだ一口も食べていなかったサンドイッチは、リリアンヌの怒りに拍車をかけた。まだ座り込んでいるレイチェルをおいて、スタスタと一人先へと進み始めた。

「リリア。」

知らないものは知らない。

少し反省すればいい。

後ろからレイチェルの半泣きの声が追ってくるが、構わず突き進む。真っ暗な中進むのはなかなか困難であったので、リリアンヌは少し進んだところにあった曲がり角に身を隠した。

「リリアあゝ。」

泣きながら後を追ってきたレイチェルは、キョロキョロとリリアンヌの姿を探してすすり泣いている。その姿を見て、少し可哀想になり、仕方なしに出て行こうとしたときだった。

「ひゃあっ。」

左の頬を何かの動物に舐められた感触があり、左手で頬についた粘り気のある液体を拭った。

「何…。気持ち悪い。」

明かりをつけて液体を確かめると、どうやら唾液のようだ。そろりと明かりを上、左側を照らすとそこには、口から唾液をだらだらと零したコブラの群がこちらを伺っていた。

「ぎっ、ぎゃっあ！」

「リリア…？」

「レイル、は、走るよっ。」

リリアンヌは叫び声をあげて、その声に顔を出したレイチェルを引っ張り全速力で走り出した。

「なんで？」

「こ、こぶらが。ここの洞窟コブラが住んでるんだよ。」

「コブラ？ここらへんでは見かけない。南の方だといっぱいた。」

「とにかく逃げなきゃ。食べられちゃうよっ。」

「コブラは肉食？」

「そんなの知らないっ。帰ってから調べなよ！ひっ、追ってきた。」

「そうしよう。」

なんともマイペースなレイチェルは、コブラの群れをちらりと見ていった。

「コブラ意外に速い。リリア、魔法を使おうか。」

「そだね。出来ればやり合いたくないし。逃げるが先だよ。」

お互い頷くと、各々履くブーツに加速の魔法をかけた。上質な皮で出来ているこの長靴は、簡単な魔法でもかかりやすく出来ている。小さく踏み出せば、数歩先、大きく一步踏み出せば、何キロも先にあつという間に足を加速させて移動出来る加速魔法は便利ではあるが、少々使い勝手が悪い部分もある。

「レイル、どこまで行くのっ。ああ、もう！ 苛々するわ、この靴。」

靴を履き始めた当初よりも足に馴染んではいるものの、あまり使わない魔法の調節に四苦八苦し、レイチェルはうっかり躓いて急速に何十キロも先に飛んでいってしまった。リリアンヌもレイチェルを追って足の幅を調節すると、たどり着いた先はどこかの煙突の上だった。

「外には出れた。」

「出れたけど、会場の出口から出ないといけないよ。勝手に他国に来てるってバレる前に、早く戻らなきゃ。」

灰色の霧がかかったこの場所は見晴らしが悪く、肌寒いため春が来

ているリヴェンデルではない。二人がいるのは山頂のようで、空気がとても薄く吐く息は白く色をついている。

「戻ろう、レイル。いっせのせで右足を大きくだすよ。いい？ いっせのーせ。」

方向転換をして二人仲良く飛んだ先は、コブラの目の前。

「「わあー!!」」

大きな口から慌ててのがれ、上手く使えるようになった加速魔法をリリアンヌは二人分解いた。

「これは、やめところ。ひー、疲れた。」

「リリア、あれ出口？」

まるで、ずっと走り続けていたかのように足がパンパンになった二人は、ドサツと道にしゃがんだ。その時、ふわりと暖かな風が頬を撫でて、陽の光がもれる場所へ顔を向けた。

「行こう、レイル。」

ほっとひと息ついて、そちらに向かう。

「…うん？」

しかし、踏み出した足にぶよりとした感触が足元から伝ってきて、リリアンヌは凍りついたようにその場に立ちすくんだ。

「どした？」

「なにかを踏んだような…。」

「踏んだ？」

「…蛇、みたいなの？」

恐る恐る足元を伝って顔を上げれば、かなり怒った表情のコブラの親玉がこちらを見ていた。

「いいーっ！」

【氷結】

声にならない叫びをあげるリリアンヌを援護して、レイチエルはコブラに簡易魔法を放った。しかし、先っぽを凍らせただけで、全く役に立たない。

「レイル、全然効いてないよ！余計怒ってるしっ。」

何やってるんだと叫び、リリアンヌが今度は攻撃に出た。

【気品ありし炎の者達よ。我が元へと集い、邪神ある者を風払いたまえ。】

左手の人差し指をマッチ棒をするかのように地面に擦り、そこから出た血を代価に炎を繰り出すと、瞬く間にごうごうと燃える炎がコブラへと向かった。リリアンヌにしてはまずまずの出来だったその火は、迎え撃ったコブラの火炎で難なく跳ね返させてしまった。

「炎で返された…。コブラって火を噴くの!？」

「変化とまやかしの術で、ドラゴンと一体化されてる。」

帰ってきた炎から慌てて各々に逃げた二人だったが、全く別方向に逃げてしまったので、会話を交わすのがやっとの位置にいる。

【造られたモノよ。本来ありべき姿へと戻れ。】

【風来の起】

先に唱えたりリアンヌの呪文は、破壊の魔法の次に危険とされている解連かいれんの魔法である。絡まった魔法同士を解く際に使われるが、解かれた各々の魔法が拡散されるため、その反動で様々な障害が生まれるという。一方、レイチェルが起こしたのは、調節を間違えれば竜巻を起こすほどの風を用いた魔法であった。この2つ、大変相性が悪く、同時に同じ場所で絶対使ってはいけないと言われているものだった。しまったと思ったときにはすでに遅く、レイチェルの竜巻でリアンヌの魔法は、己の元へと跳ね返って来てしまった。その魔法の力で吹っ飛ばされたリアンヌは、固い物体に頭をぶつけて気を失ってしまったようだった。

「ちょっと、早く起きなさい！」

「うーん。」

ガンガンと痛む頭に、さらにゆさゆさと揺さぶられてうっすらと目

を開けると、どこかで会ったことがある女性の姿がある。

「ああ、今日の事だった！すっかり忘れてた。とにかく、伸びてないで早く起きて！」

だんだん覚めてきた頭をあげると、今度は女性の姿がはっきりと映る。ぱっちりとした目に映ってきたのは、なんと少し大人びた自分の姿だった。

「ええっ！？私っ！」

銀の髪は、肩より少し伸びていて、深緋の瞳を持つ顔はしかめっ面をしているために、不機嫌そうに見える。しかし、見間違えるはずはない。正真正銘、少し大人になった自分だった。

「そう、私はもう直ぐ16になるリリアンヌ。いろいろ説明してあげたいけど、ここは人道りが多いし、とりあえず場所を移動しないと。」

早く立ってと急かされる未来の自分に、困惑しながらも立ち上がった。辺りを見渡すと、随分高そうな藍色の絨毯が敷かれた、どこかの広い屋敷の廊下のようなのだ。

「こっち！」

少し古びた壁をキョロキョロと眺めるリリアンヌを未来の彼女は、苛々したように手招いた。慌てて後を追う中、どこからか話し声が聞こえてくる。

「ああ、もう！ちよつとここに隠れて。いい、絶対に声出したり、

顔だしたりしないでね？」

近くにあった大きな石像の隙間に押し込められ、その埃っぽさにくしゃみが出そうになる。

「リリア、こんなところでどうした？」

必死にくしゃみを抑え込めている時、石像の向こう側から大人びた男性の声がかかった。幾分低い声だが、それは聞き間違えようもない、兄弟子。フレドリッヒである。

「試験まで時間があるから、ちょっとこの建物を見て回ってるの。フレッド兄さんこそどうしたの？」

「いや、シエルダ侯爵に呼ばれて。過去からの侵入者がいるらしい。建物の内部にいるようだし、リリアも気をつけるよう。」

「ふーん、侵入者ね。」

そろりと会話の途中で、好奇心から石像の後ろより顔をだした。六年経ったフレドリッヒは、青年の面影をバツサリと切り捨てて、すっかりと大人の男性としてその場に佇んでいる。26歳にもなれば、当然だろう。彼は、リリアンヌに気がつかず、未来のリリアンヌに試験頑張るように言って去って行った。

「今のってフレッド兄さんだよね。へえ、男前になってる。」

フレドリッヒが完全に見えなくなってから、石像の後ろから這い出て未来の自分を見上げた。

「そんなにみたいなら、六年後に好きなだけ見えるわよ。まさか、

六年後のみんなを見てみたいなんて言わないでよ？」

「あ、バレた？それより過去からの侵入者ってもしかして、私のことだったりして。」

「そういうこと。時空渡り（ときわたり）は禁忌の魔法なのに、許可もなく使ってさらには魔法省の本部に侵入。未来（過去）の自分に会ったなんて、見つかったら私も、あなたもただじゃ済まないのはわかるでしょ。」

先を促して、六年後のリリアンヌは石像の脇にある階段を登り始めた。その後を追いかけているが、憤慨して言い返す。

「あら、わざとじゃないわ。」

「知ってる。レイルとの魔法が被って運が悪かった、って言いたいんでしょう？」

にっと笑う自分にぷうと頬を膨らませた。

「まっ、とにかくこの部屋に入ってこれからの事を考えよ。」

「ここは？」

通された先は、書類が山積もる立派な机を始め、低い机を挟んで向かい合う長椅子と本棚が並ぶ。部屋を見渡して訪ねれば、未来の自分は扉を閉めながら悪戯っぽく笑った。

「魔法大臣の執務室。」

「まさか…、ルビウスさんの？」

「そうよ。侵入者がまさか魔法大臣の部屋に行くなんて誰も考えないでしょ。」

いや、それにしてもさすがに不味いのではないか。

そわそわとしだしたリリアンヌを見て、未来の彼女はぷっと吹き出して笑った。そんな彼女を怪訝そうに見やったりリリアンヌの視線に気づいたようで、彼女は小さく首をすくめた。

「面白いなと思って。」

「何が？」

「こう、昔の自分を見たら、まだまだ子供だったんだなって。」

そんな時は意地張って背伸びしてたのにね。

机の向かい側にある窓を覗いた彼女は、そう言って笑った。

「意地なんて張ってないもの。」

「ほら、そんなところが素直じゃないじゃない。」

違うと言う彼女はリリアンヌを笑って、窓枠に腰掛けた。

「私、16になるっていったじゃない？今日は卒業試験、あなたも試験だったんでしょ。」

「そう、初めての試験。」

「私達の試験日って災難だわ。」

呪われるかもと笑う自分につられ、リリアンヌも自然と笑いが零れる。

「しかし、今日まで六年後の自分に会ったこと忘れてた。でも、ぶらぶら歩いててなんか吹っ飛んできたなって思ったら、昔の自分が目の前に伸びてるだもん。ああ、いつかやると思ってた！って思ったね。」

けたけた笑う、自分にむっとして言い返す。

「ちょっと、失礼じゃない？それに、そんなこと言ってるけど自分のことでもあるんだから。」

「そっか、そうか。」

ごめんごめんとちつとも悪気はないように謝る彼女は、その先を続けて言った。

「でも、このまま10歳の私がここにいるのはやばいから、早く帰る方法を考えなきゃ。」

「えっ！」

「え？」

「時空渡り出来ないの？卒業試験間近なのに？」

「あのねえ、卒業試験受けるからって、何でも魔法が使えるってわ

けじゃないだから。」

「そ、そなの？」

あからさまに落胆したリリアンは、ぼすんと長椅子に沈み込んだ。

「なに、そのあからさまな落胆は。そりゃ禁止されている魔法や術ぐらいあるでしょが。」

バカじゃないのと呟く未来の自分に、リリアンはガバリと顔を上げて叫んだ。

「じゃ、どうやって帰るのよ！」

「しいー、声がでかい！だから、今から探そうとしてるじゃない。」

あんたも探してと遠慮なく辺りを物色し始めた彼女に、リリアンヌもとりあえず始めた。

「ね、こんなところにほんとに帰る方法があるの？これじゃ、ルビウスさんに直接頼んだ方が早いんじゃない？」

早速探すのに飽きたリリアンヌは、16になる自分にそう聞いた。

「うーん、確かここまで来たのは覚えてるんだけど。」

「どうやって帰ったの？」

「それが、良く覚えてないんだよね。」

「ええー。じゃあ、私帰れないの？あ、でも六年後の私がいるってことは、無事帰れたんでしょ。まっ、気長に行こうよ。」

「そうは行かないでしょ。私はこれから試験だし、それまでに帰って貰わないと。それに、その時に一人しかいない人物がずっと未来にいと、元にいたとこに帰るのが困難になるんだから。」

「なんで？帰る時間はいつでも一緒なんだから、いつまでもいてもいいんじゃないの？」

「人それぞれその時に歩まなければいけない場所があるんだから。それに、よく考えてみなさいよ。ここでの生活が良くなって、ずっといるとするでしょ？過去の自分がここに来たなら、未来の自分が歩む者事態がいなくなって、未来に来てる過去の自分もそこにいる未来の自分も、消えてしまうんだから。」

「ふーん。でも、気をつけたら自分だけの犠牲で済むんじゃない？」

「自分だけの人生を狂わすなら、いいかもしれないけど。何も巻き込まない訳ないでしょうが。興味本位に過去の歴史をひっくり返したり、死ぬはずの人間が生きていたりするかもしれない。人類の全てを狂わす時空渡りだから、昔に禁止になったって。まあ、それまでは渡った先に干渉しないって条件で使われてたみたいだけど。習わなかった？」

まだ習ってない。

短く答えたりリアンは、これからどうなるのかと憂鬱な気分となった。

「確かね、ここで二人で話してたような…。」

じっと考えに浸る未来の自分を興味本位でじろじろと眺める。その視線に気がついたのか、彼女の視線とふっとかち合う。

「なに？」

「別に。私も年頃になったら、それなりの容姿になるんだと思って。」

16になるといっても化粧一つしない自分は、お世辞にも綺麗とは言い難いが、一度だけみた母譲りの髪と父譲りであろう深緋の瞳があるために、見栄えはなかなかあるだろう。

「ね、レイチェルは試験受かった？ ヴィア姉さんは彼氏とか出来る？ ジョーンに兄さんはどんな仕事についてるのかしら？ あ、後ルビウスさん、結婚してたりして。」

次々に出てくる質問を交わして、六年後の自分はぶいと顔を背けて拒否した。

「駄目。教えられない。」

「ちえっ。ケチ。」

「ケチってなによ。未来の自分と会って話してることさえ、今は禁止なんだから。」

「つまんないわ。」

オリヴィアに似たのか、未来の自分は大人になってちっとも面白く

ない。

「今の状況を説明してくれるって言ったのに。」

「あら、説明したじゃない？今は六年後の卒業試験の当日で、そんな私に会ってしまった。時空渡りをするつもりはなくても、レイルとの魔法反発が起こって未来に吹っ飛んできた自分をわざわざ面倒みてあげてるんじゃない。時空渡りは禁忌だから、見つかる前に帰って頂戴って話。」

「それって説明？それに、せっかく来たんだから、色々教えてくれたっていいじゃない。」

「わざわざ来たんじゃないくて、たまたま吹っ飛んできたの間違いのくせに。」

うっと言葉に詰まるうちに、はあとため息をつかれてしまった。

「もうちょっと危機感を持ってよね？」

「そうだね、リリアンヌは昔から危機感が薄い。」

突如割って入ってきた声に、お互いびっくりしたように扉に目を向けた。

「やあ、六年前のリリアンヌ。会えて光栄だよ。」

にこやかにそう笑う人物は、少し年を増したものの、それが逆に立派な男性、紳士となってリリアンヌには全く別の人物に思えた。

目の前に、27になったルビウスがいた。

「いつの頃まで時空渡りをしに行ったのか、六年前のリリアンヌは結局言わなかったから、見つけるのに少し時間がかかってしまったよ。」

ぼーっと見つめる10歳のリリアンヌから、ふてくされている未来のリリアンヌに目を移したルビウスは、困ったように眉を潜めながら続けた。

「で、なんで僕にすぐ言わなかったんだい？」

「試験で忙しいって言ってたじゃない。それに、自分の事は自分で片付けようとしただけよ。」

ずっとそっぽを向いた六年後のリリアンヌに、困ったようにはあとため息をついてルビウスは、腰をかがめて顔を覗き込んだ。

「確かに、試験官として忙しいけれど、一言言ってくれても良かったんじゃないか？」

「私だってさっきまで忘れてたのよ！」

かばっと立ち上がった自分を眺めて、何かおかしいとリリアンヌは口から言葉が自然と出ていた。

「もしかして、二人喧嘩してるの？それに、何か…。」

違和感がある。それがなにかわからないが、眉をしかめて二人を見つめた。

「ああ、まあそんなところかな？とにかく、試験もあるのだから10歳のリリアンヌを帰して話そう、いいね？」

「考えは変わらないわ。」

「それでもいい。けれど、僕によくよく説明して欲しい。」

そう言って10歳のリリアンヌを帰す為の準備をしに、隣接する部屋にルビウスは消えていった。いまいち状況が飲み込めない中、未来の自分に説明を促すように見上げた。

彼女は首をすくめて、小さな声で少しだけ話してくれた。

「私、卒業試験に受かったら成人でしょう？だから、カインド邸を出ようと思って。自立したいのよ。」

「それをルビウスさんは反対してるの？」

「まあ、そんなところ。」

ルビウスが準備が出来たからと二人を呼ぶ声で、話は中断され、大人しく二人は揃って隣の部屋へと足を踏み入れた。そこには、白いチョークで描かれたさほど大きくない魔法陣が一つと、天井にも同じ魔法陣があった。

「君は時空渡りが始めてだし、魔術で少し反動を抑えてあるんだ。」
もの珍しそうに眺めるリリアンヌに、ルビウスはそう説明してくれた。

「もう帰されちゃうの？」

さあと促されて円に入ろうとした時、ふとルビウスを見上げてそう聞いた。せつかく来たのに、あまりに帰るのが早くはないか。

「あまりこちら側の者に知られない内に、帰った方がいいからね。」

そんなリリアンヌの考えていることを読んだかのように、ルビウスは苦笑して言った。

「じゃっ、私に一言言いたいことあるんだけど。」

最後に一言いいでしょう？そう付け加え、ルビウスの許可を取って魔法陣から少し離れた所にいる自分にパタパタとかけて、小さく耳打ちした。

「私、家出て自立するの良いと思うわ。」

応援してると肩を叩いたら、少し嬉しそうに笑った。

「ありがとう、流石私だわ。」

でしょう？と得意気に笑うリリアンヌに、六年後の彼女はお礼に良いことを教えてあげる、と耳うちしてきた。

「それって、良いこと？」

耳打ちされた内容に、怪訝そうに顔をしかめたリリアンヌは、未来の自分に背中を促した。

「良いことよ。」

何が良いことか。

少しムスツとしてルビウスの元へ戻ると、彼はもういいかい？と声をかけてきた。

「ええ、ルビウスさんは私にお説教はないわけ？」

「ああ、六年前の僕がこっそりお説教をするはずだから。」

げっ。と声をあげるリリアンヌにふふと笑い、頭を撫でた。

「気をつけておかえり。」

「ええ。六年後もなかなか格好いいわって、今のルビウスさんに言っ
つといてあげる。」

「それは光栄だ。」

嬉しそうに笑うルビウスと、六年後の自分にじゃあねと言って陣の中へ。完全に魔法陣の中へ足を踏み入れた時、後ろからルビウスの唱える呪文をが聞こえたのを最後に、リリアンヌは眩しい光の中へ引き込まれた。

その後どうなったのかは、よく覚えていない。

気づけば、顔を蒼白にしたルビウスと泣きじゃくるレイチェルの顔が目の前にあった。

「…私、戻ってきた？」

リリアンヌの声に、幾分ほっとしたルビウスはそうだよと呟き、疲

れたように近くにあった椅子へと腰掛けた。

「現場監督からリリアンヌが、魔法の反発で消えたと聞いたときは、肝が冷えたよ。ああ、レイチェルは掠り傷程度で、大した怪我はなかったよ。具合はどうだい？　ロウ医師を呼んでこよう。」

あの場にいたレイチェルに大きな怪我がないことを知り、ほっとして自分も大した怪我が無いことを確認しすると、席を立つルビウスを慌てて引き止めた。

「もう大丈夫よ。」

「駄目だ、大人しく寝てなさい。すぐに戻る。」

「ロウ医師なら、私が呼んできます。」

脇にいたらしき人物に今気づくと、それは不機嫌な顔をしたアレックスだった。

「いいや、途中爺様の所に寄らなければ行けないから。二人を頼むよ。」

ゆるゆると顔を振ったルビウスは、かなり不機嫌なアレックスとまだ泣き止まないレイチェルを残して慌ただしく部屋をあとにした。気まずい空気が部屋を包む中、なかなか泣き止まないレイチェルを宥めることに集中していたリリアンヌの耳に、ドスが利いた無愛想な声が入る。

「さっさから煩い。さっさと泣き止め。」

「ちょっと、女の子に向かってそんな言い方ないじゃない：ですか。」

ムツとしてキツく言い返して見れば、じろりと睨まれたために小さく言葉をつけたした。

「だから餓鬼と女は嫌なんだ。」

窓際に寄りかかりながら、無愛想に外を眺める彼から呟かれた小さな言葉を聞き取ると、ふっと小さく笑いをこらえて言い返す。

「確かに、子供と女性に人気ありそうには見えないもの。兄弟でも随分違うのね。」

「聞こえてるぞ。」

「あら、失礼しました。」

そんな話をしていれば、ルビウスに連れられて年老いた医師がやってきた。

「ほっほ、まだ幼いのに時空渡りとは。まだ見習いでありながら、無事戻って来れたのは幸運なことじゃ。しかし、あの魔法が禁止されて約、えーと。」

「14年だ、爺。」

「こら、アレックス。口が過ぎるぞ。」

リリアンヌを診察する白髪頭の老師に変わり、答えたのはまだ不機

嫌なアレックスだったが、その言葉使いをルビウスに窘められてしまった。

「構わん、構わん。現に爺なのだから。そうか、14年か。昔は、お前さん方のご両親やセドウィグ殿下が使っておられたもんじゃが。」

さあ、これでよし。と左手に巻かれた包帯を確認して、今度は銀色の髪を分けて頭部を診察した。

「うーん、少し頭を打っておるなあ。今冷やした方がいいんじやが、直ぐにカインド邸に帰るのなら、屋敷に戻ってから大丈夫じゃろ。二、三日冷やして様子を見ようかの。」

後日診察に来ると言い残して帰るロウ医師に、お礼を言って頭をさすっていると、後ろから声がかかった。

「リリアンヌ、怪我をしているところ悪いけれど、診察が終わったら帰る前に、マクセル侯爵という人の元へ出向かなければ行けないんだ。レイチエルも。その人のところを行ったら帰って大丈夫だから。」

「マクセル？」

「うん、…まあ、ちょっと変わった方だけけれど。」

口を濁したようだから、さぞかし怖い人なのだろうか。

「兄上、私も参ります。」

「いや、東の塔の試験会場が少し混乱してるようだから、僕の変わりにそちらに向かって欲しい。」

「しかし…。」

「多分、広間にいらっしゃる義兄上も駆り出されてるだろう。義兄上ばかりに負担をかけてはいけないし。それに、あの人はあまり苦情処理には向いていないから。僕は大丈夫。」

「…わかりました。」

少し迷っていたアレックスも、大人しく引き下がって部屋を出て行った。

「いいかい？ 君達は黙って頭を下げればいいからね。」

そう言って、ルビウスは念を押した。彼女達がやってきたのは、人通りが少ない廊下の先にある部屋の前。アレックスが出て行った後、ルビウスは試験の総監督であるマクセルという女侯爵の元に、今回の騒動を謝りにいくという。

身なりを整え、扉を叩く。

中からは、少し年を召した女性の声が聞こえて、ルビウスに続いて部屋へと入った。

「約束通り、謝りにきたのねえ。」

薄暗い室内は、あちらこちらにガラクタらしき荷物が置かれ視界が悪く、煙草の匂いと甘ったるしい匂いが混ざって酷く不愉快だ。

そんな中、ガラクタの山の向こうから現れたのは、長い煙管キセルで煙草を吹かした中年の女性。魔法師が着用する黒い法衣を着崩して、ふ

くよかな胸を際どい所まで見せている。同じ女であるリリアンヌでも、思わず白いその胸に目がいつてしまうほどだ。右隣では、レイチェルが自分の胸と見比べていた。

「弟子がご迷惑をおかけしたので。謝罪が終われば、すぐにお暇致します。」

「まあまあ、連れない事を言わないで。そんな所で立っていないで、こちらにいらっしゃいな。お弟子さんも一緒に。」

女性独自の少し高めの声に、眉を寄せると、すぐそばにいるルビウスを仰ぎ見た。彼は、リリアンヌを見ずに小さくため息を吐くと、渋々ガラクタをよけて近づいていった。リリアンヌ達も嫌々後に続く。

「ごめんなさいね、汚い所で。」

琥珀色の長い髪をピンでまとめて、マクセル侯爵は苦笑すると自身の執務机に浅く腰掛けた。脚を組んだ際に、法衣に深く入った切れ目から白く美しい脚が覗いた。

あまりに際どい服装に、リリアンヌは目の置き場所に困り、下を向いた。その姿にルビウスも困ったからか、はたまた気分が悪そうなりリアンヌ達を思ってか右側にある窓を見ながら、侯爵に問いかけた。

「窓を開けても？」

「ああ、窓は開けないで。虫が入ってくるの。で、えーと。試験での違法魔法のことでよかったかしら。」

「ええ。」

あっさり却下され、話が変わえられたことになりながら、リリアンヌはとにかく早くここから出たいと願った。

「解連の魔法と風来ね。出来はまずまずだったみたいだけど、選ぶのがいけなかったわねえ。この2つ、相性が悪いと言うのは知っています?」

いきなり聞かれたことに驚いていると、さり気なく横からルビウスが答えた。

「まさか解連の魔法を使うとは思わなかったので、風来との相性は詳しく教えていませんでした。」

「ふーん、そう。」

嘘ではないが、本当のことではないルビウスの答えに、マクセル侯爵は負に落ちないような返事をした。淡い緑の瞳が、じろじろと彼女達を見つめる。

「気に食わないわ。」

ひゅんと風を斬る音と共に、リリアンヌとレイチェルは一瞬にしてガラクタの山に吹っ飛ばされた。

「マクセル侯爵、何をなさるのですか!?!」

「ルビウス、あなたお弟子さん達に魔法をかけていらっしゃるわね。私を随分とコケにしてらっしゃるんだこと。」

「いいえ、そのような事は。」

リリアンヌ達が自力でガラクタの山から立ち上がるのを横目で見ながら、ルビウスは素っ気なく答えた。それが逆に侯爵の気に障ったようで。

「連れない子。ねえ、もっとお顔をよく見せておくれ。ああ益々、父君に似てらっしゃること。でも…。」

真っ黒な長い爪を持つ手で、ルビウスの顎を固定していた侯爵は、ふーっと煙草の煙りをルビウスに吹きかけて言った。

「あの憎らしい魔女にもそっくりだ。」

僅かに顔をしかめて煙りから顔を背けたルビウスの元を離れ、高い踵がある靴音を鳴らしてリリアンヌ達の元へ近づいてきた。

「今日は可愛いアレックスは、来ていないんだね。」

「仕事がありますから…。」

「仕事、ねえ。」

じろりと品定めするような視線に、きつと睨みを利かせると、侯爵はぴつとゴミを弾くように、レイチエルを壁に貼り付けにした。

「レイチエル!」

「何するのよ!?!」

怒りに声を上げた二人に、侯爵はさっと魔法で窓掛けを閉めると、機嫌良くルビウスの元へと煙管を吹かしながら近づいていった。

「人魚族と古代魔女なんて、ルビウスには似合わないよ。私がいい子を選んであげるさ。」

「お断り致します。」

「おやま、可愛くないこと。そうそう、リリアンヌ・カインド、レイチェル・カインド。両名を違法魔法使用容疑で、魔力を剥奪しようか。今後、魔法に関わることも禁ずる。」

「あなたにそのような権利がおりで？」

「古来からこの国の審判を任されている、マクセルの血をなめるもんじゃないさ。」

ルビウスの静かに怒る声に、ビクツと肩を震わしたりリリアンヌとは別に、侯爵はいかにも楽しそうだ。

「おっと、動くんじゃないよ。私はレイチェル・カインドの命を握ってるんだからね。まあ、ここは私の城だから、下手なことは出来ないだろうが。」

「…何が目的ですか。」

僅かに身動きをしただけで、厳しく諭されたルビウスは、眉を寄せマクセルを睨んだ。

「いやだね、何も脅しているわけじゃないんだよ。ほんの少し、私の相手をしてくれたらいいだけで。」

舐めるようにルビウスを眺めるマクセルを、リリアンヌは反吐が出そうな気分で見つめていた。

あんな魔女に眺められているルビウスには悪いが、レイチェルを助ける方が先だ。

きよろきよろと辺りを詮索するリリアンヌを放って、二人の話は平行線を進んでいる。

「悪いですが、生憎そういう趣味はないので。」

「まあ、そうかい。クロムウエルの若い頃の面影があるのに、そういう人に屈しない所はあの魔女の血を受け継いでいるのか。しかし、いつまでそんな生意気なことを言ってられるのかね。」

「うっ!」

壁に貼り付けにされているレイチェルに、そろりそろりと近付いていたりリアンヌは、どさりと倒れた物音に振り返った。苦しそうに顔を歪めたルビウスの体の上に、マクセル侯爵が長椅子に乗るように乗っかっている。

非常にいや、かなりやばそうだ。

ルビウスが何とかしてくれるだろうと高をくくっていたが、この様子ではみな、無事ではすまないのではないか。

「まあまあ、子供がみるようなもんじゃないよ。ああ、それか…。」

何も考えられなくなった頭に、かあっと血が上ると同時にひゅんと顔の左側に何か突き刺さる音が聞こえた。

「そんな風になりたいのかね。」

ちらりと視線だけで確認するとそれは、ルビウスの真っ黒なトンがり帽子で、マクセル侯爵の煙管でくし刺しに刺さっていた。

16. 小さなきっかけ

知らない女性に押し倒されているルビウスを見るのは、酷く不愉快だ。

「まあ、赤くなっちゃって。初なこと。」

顔が熱を持っているのは、他人に言われなくてもわかる。

唇を噛み締め、ルビウスの体の上に優雅に座る相手を睨みつけて、壁に刺さった煙管を右手で勢いよく引き抜いた。熱をもつその煙管の部分は、リリアンヌの右手を遠慮なく焼き尽くすが、彼女にとってそんなことはどうでもよかった。

侯爵の趣味がどんなものか、わざわざ知りたいなどということは全くなく、出るに出られずに仕方なくこの部屋にいるのだ。

「あなたの趣味に興味なんかありませんけど。ルビウスさんの上から退いてくれませんか？」

「何故、あなたに命令されなくてはいけないのかしら。」

「その人は私たちの師匠です。目の前でコケにされているのを見るのが嫌なので。」

そう、煙草の甘ったるしい匂いに苛々して、師匠がコケにされている姿が不愉快なだけ。

そう自分に言い聞かせて、煙管の吸い口をマクセル侯爵に向けた。

「私が罰を受けるのは当然だけど、ルビウスさんは関係ないでしょう。」

「師匠としての責任があるでしょ？でも、まあ。」

そんなに罰を受けたいなら。と侯爵は自身の黒く、長い爪の人差し指を煙管に向けて、小さく呪文を唱えた。すると、煙管は生き物のように右手首へと音を立てて絡みついてきた。

「右手を引きちぎってあげましょうか。それがあなたの罰に。」

みるみる内に手首を締め上げる煙管の痛さに、リリアンヌはたまらず悲鳴を上げた。

「リリアンヌ…。」

小さくルビウスが呼ぶ声が聞こえたその後、今度はマクセル侯爵の小さな悲鳴があがった。生理的に涙が浮かぶ視線でそちらに向ければ、膝について起き上がったルビウスが、左手で侯爵の首を掴んで押さえ込んでいた。空いた右手には、キラリと光る刃物が握られている。

「…お戯れが過ぎるのでは？いつまでも、やられているとお思いでしたか。命が惜しければ二人を解放してください。」

その言葉に反応するかのように、煙管はより一層手首を締め付け、次の瞬間にはバキッと骨が折れる音が室内に響きわたった。

リリアンヌは痛さのあまり立って居られず、カクンと右手首を庇うように崩れ落ちた。丈夫に作られているパイプ型の煙管は、右手首の肉に食い込み、血が溢れて床へと滴り落ちている。

右手の感覚が麻痺して、これはもう駄目かも知れないと思った時、部屋の窓硝子が全て割れるほどの衝撃で扉が開かれた。

「マクセル侯爵!!」

飛び込んできた男性は、怒りで真っ赤になったルビウスの祖父・シリウスと、今にも倒れそうな真っ青な顔をした男性陣であった。皆揃いの黒い法衣を身につけているからにして、魔法師であろう。そのシリウスの怒りは後々、あれほど怒った顔をしたシリウスを見たのは初めてだったと、ルビウスが語った程だった。

「何という！マイク、早くレイチェルを下ろしてやりなさい。ルビウス、後はアーサーに…。誰か、ロウ医師を呼んで来てくれ！大至急だ。」

若い少年が、シリウスの血相にわたわたと部屋を出て行ったのを片隅に見つめていたリリアンは、右手首をそっと触られて痛さに顔をしかめた。

「いっ！」

「ああ、すまない。ロウ医師が来るまで、痛みを取り除いておこなくては。辛いだろう…。」

知らぬ間にそばに来ていたルビウスが、そっと痛々しい右手首を包み込んで癒やしの呪文をほどこしてくれた。

「ありがとう。大丈夫…。だから、ルビウスさん。そんな顔をしないで?。」

決して大丈夫なわけではないけれど、怪我をしている当人よりも酷く辛そうに顔を歪めているルビウスに、泣き言は言えないと思った。慌ただしく辺りが動く、そんな中、ルビウスの右手が僅かに震えていることに気づいた。

「ルビウスさん、具合悪いの？それか寒いとか。」

あの気味が悪い魔女に眺められていたのだ。

いくら解放されて空気が変わったといっても、まだ不愉快な匂いは残っている。

場所を変えた方がいいのではないかなどと考える中、ルビウスはリアンヌをそっと引き寄せてすっぽりと腕の中に囲った。

「…ルビウスさん？」

戸惑い気味に問いかけたその答えは、消えそうでか細い声だった。

「…君に、また怪我をさせて。」

「ルビウスさんのせいじゃないわ。レイルだって…。」

「右手を失う所だった。」

それはそうだが。

「…すまない。本当に、すまない。」

黙っているリアンヌをぎゅっと抱きしめて謝るルビウスは、小さな子供のようで、そんな彼の背中そつとを撫でてやりながら、リリ

アンヌはしばらくその身を預けた。

そんな二人の姿を優しく見守る外野の中を縫って現れた空気の読めない老師は、ルビウスから一番重傷であるリリアンヌを慌てて引き離した。

息を切らして駆けつけたロウ医師に診察されながら、リリアンヌは非常に恥ずかしい思いだった。

そして驚いたことに、部屋にいる魔法師達の中で良く知った人物の顔を見つけた。三番弟子のジョナサンである。彼は、心配だと言っていたオリヴィアに頼まれて、試験場に潜り込んでいたらしい。（リリアンヌの筆記試験会場でいた変な青年も、ロウ医師を呼びに行ったのも彼だった。）気の毒なことに、彼はシリウスやルビウスの義兄、マイケルにもこっそり怒られていた。

リリアンヌに応急手当を施したロウ医師は、ルビウスが肋を二本折っていたということに驚愕し、忙しい身でありながらしばらく寝室から出ることを禁じられてしまった。

「六番目のお弟子さん。爆睡しておるわい。」

床で伸びているレイチェルに駆け寄った医師の言葉で、ルビウスはなんとも言えなさそうな顔を見ると、誰に言うでもなく呟いた。

「実技試験でも、それぐらいの度胸は欲しいものだね。」

いや、充分すぎるほどあると思うが。

声に出さずにそう思ったのは、彼には秘密である。

時は過ぎ、酷かった右手首の傷も、幾分いえた頃。怪我の為にカインド本邸で傷を癒やしていたルビウスに、マクセル侯爵があの後ど

うなったのか尋ねた。

「僕も爺様に聞いたけれど、詳しく教えてくれないんだ。」

「どうして？」

もう随分怪我は良いのに、周りから寝台に縛り付けられている彼は、上半身だけを起こしていて、さあ？と首をすくめた。

「よく知らないけど。どうしても知りたいなら、他の人に聞いてごらん。」

「そうするわ。ねえ？審判ってなんのことなの？」

あの侯爵が言ってたじゃない。そう繋げたりリアンヌの言葉に、ああと言ってルビウスは答えてくれた。

「罪人を裁く人の事で、マクセル侯爵の家系は昔から持つ能力の為に、それを特別に古くから委ねられてきたんだ。」

「ふーん、偉い人なんだ。」

なるほどと返したりリアンヌは、用は済んだとばかり部屋を去ろうとして立ち止まり、そうだと振り返って付け加えた。

怪我をした頃から、こうして二人きりで話すのはどこか照れくさくなって、面と向き直って話すのは久しぶりのことだ。

「未来のルビウスさんに会ったけど、なかなか格好よかったよ。」

時空渡りという、未来や過去に生身で渡る魔法を故意でなくとも使ってしまったことに、ルビウスやシリウスからレイチェルと共に随分怒られたが、そのことはまだ言っていなかった。

「喜んでいのかな？」

「いいんじゃない？あと…。」

「うん？」

「その、マクセル侯爵のことだけど…。」

「なんだい？」

齒切れが悪いリリアンヌに、彼はにこやかに微笑んでいる。その微笑みに向かって叫んだ。

「あの人、ルビウスのこと好きなのね！とってもお似合いだと思うわ。」

自分で言っておいて、言ってしまったから何を言ってるんだと慌てて言葉を足した。

「いや、だから。ルビウスさんも、その…、ああいう人が好きなのかなと思っただけ！」

更に墓穴を掘ったような慌て振りのリリアンヌを見て、ふっと笑ったルビウスは、寝台に寄りかかったまま答えた。

「なんとも微妙だね。確かに向こうは、好意を抱いてくれているみ

ただいけど、それは僕が父の子供だからだよ。現に、弟のアレックスも好んでいるし。まあ、祖父と母親似の彼より、若い頃の面影に似ている僕の方が良いらしいけれど。あのマクセル侯爵は、小さい時から父にぞっこんだったらしいよ。僕にしては、母親並みの年である女性は、悪いけれど好みではないね。」

そう言って苦笑しながら、答えた。

「へえ。」

「リリアンヌは、僕の女性のタイプを聞かないの？」

「なっ！私はあなたの女性のタイプなんて興味ないもの！」

少しからかい気味に聞かれた質問に、少々むきになって言い返せば、彼に愉快そうに笑われただけだった。

「もう！」

ボタンと盛大に音を立てて閉めた扉をしばらく廊下で眺めていたリリアンヌだったが、しばらくたって鼻歌を歌うほど上機嫌でその場を去ったのだった。

「誰に聞こうかな。」

上機嫌で本館に戻ったリリアンヌは、ウロウロと邸の中を巡り、侯爵がどうなったのか教えてくれそうな人を探していた。途中、ルビウスの見舞いに来たであろうアレックスを見かけたが、相性が悪い彼には聞きたくない。そう思ってきつと道筋を変え、厨房にいたキヤサリンや、食堂にいたジョルジオに聞くが、知らないと言われて

しまった。

やはりシリウスに聞くしかないのか、と思案していたとき、運良く邸に来ていたルビウスの一弟子、フレドリッヒに出会った。彼もルビウスの見舞いだろうか。

「フレッド兄さん。」

「ああ、リリアか。」

「何、そのどうでもよさそうな返事。」

久しぶりに妹弟子に会ったならば、もうちょっと言い方があるのではないか。そう口を尖らすリリアンヌに、フレドリッヒは渋い顔で話してきた。

「先生も怪我をされて、おまけにリリアも学校と仕事、共に遅れていると言うし。更には、レイルと一緒に謹慎処分。ヴィアもジョーンもしばらく魔法を使用禁止。その間の仕事をリアンとリックで回すなんて、出来るはずがないのに。」

はあー。と長いため息をついたフレドリッヒは、見下げるようにリリアンヌを見ている。

痩せた体系で、けれど背は割とあるために、上から見下げられるとかなりの迫力がある。

「リリア、弟子になったら仕事を手伝ってくれるはずだな？」

「…そんなことも言ったっけな？ あっ、でもちゃんと仕事してるよ！」

ルビウスの弟子になる際に、渋る師匠を折ることを手伝ってくれたフレドリッヒ。その時、リアンヌは怠け者のオリヴィアの分も、仕事を手伝うからと掛け合っていた。しかし、弟子となってもうすぐ二年。ルビウスから言われている仕事は文句を言わずに手伝っているし、勿論、その分の報酬もちゃんともらっている。約束は破っていない……はずだ。

なのに何故、彼は怒っているのだろうか。

水晶玉のような美しい水色の瞳は、静かに怒りが籠もっている。男性でありながら、綺麗な容姿をもつフレドリッヒは、怒り方もそれはそれは恐ろしく、兄弟弟子の中で一番怒らせたくない人物である。

「片付けても片付けても、リア、君が仕事を増やす。」

「……、ごめんなさい。」

おどおどと謝るリアンヌに、フレドリッヒはやれやれと首を振って小さく呟いた。

「……全く、先生はリアに甘すぎる。」

「うん？」

「いいや、何でもない。」

「ふーん。あ、そうだ。フレッド兄さん、マクセル侯爵がどうなったのか知らない？」

「マクセル？ ああ、あの魔女のことか。シリウス様が、偉く怒ってらっしゃったから。当分牢からは出て来れないだろう。……そうだ、

忘れるところだったけど。これ、リリアに。用がそれだけなら、私はもう行くよ。」

懷から茶色い封筒を取り出した彼は、それをリリアンヌに手渡すとルビウスの寢室へと向かってさっさと歩いて行く。

「ねえ！私にはお見舞いないの？」

そんな彼の後ろ姿にそう叫んでみれば、彼は顔だけ振り返って左側のポケットを軽くだたいて答えた。そのまま何も言わずに去ったフレドリッヒを見送って、リリアンヌは自分のスカートの左側に手を突っ込んでみる。先程まで空っぽだったそのポケットからは、綺麗な蜷局をまいた棒付きの飴が、一つ現れた。

「…飴、一つって。」

小さな子供じゃないんだから。

ちょっと期待したのを裏切られた気分である。

貰った手紙を見るため、（裏面を見れば、魔法省と書かれてある）静かな図書室にやってきたリリアンヌは、お気に入りの階段のそばで腰を落ち着け、手紙の封を破った。

今の季節、雨降りの雨期が過ぎ去って、学校では夏休みを間近に控えてはいるものの、怪我をしてほとんど邸を出ない生活をしている彼女にとっては、夏休みが一足早く来た気分である。そんな彼女の最近の楽しみは、うるさい兄弟に邪魔されないこの静かな図書室に通うことであった。本を見つけるのもお手のものとなって、あちこちから引っ張り出して階段で読みあさっている。さて、薄い手紙の封を破ったりリアンヌ。折りたたんである丈夫なカードを取り出し

て、内容を読んで落胆した。カードに書かれていたのは、『不合格』の文字。

「…やっぱりなあ。」

「何がやっぱり？」

「あ、また来たんだ。」

数段上の階段から声をかけてきたのは、リリアンヌの実の父にあたるセドウィグ殿下。リリアンヌが図書室に通いつめているのは、どこからともなく現れる彼に会うためでもあった。いつも音を立てずに現れてはやってきて、家主であるルビウスに見つかる前に去るのに、突如現れても驚かなくなった。

「あの家は居心地は良いけれど、話し相手もいなければ、外に出れないから不便だよ。」

そう呟いて、彼はリリアンヌが手元に持つカードを覗き込んだ。

「魔法省から、試験の結果が送られてきたの。でも、駄目だったわ。」

「そうか、残念だったね。」

「うん、でも結果はわかってたもの。ほら、時空渡りをしたとき。六年たった私がそう言ってたのよ。」

そう、カインド邸を出るという六年後の彼女に応援するといった時、彼女はお礼に初めての試験の結果を教えてくれたのだった。全く良

い（よい）ことではなかったが。

「まあ、次があるよ。」

「そうね。もうすぐ夏休みで、ポータリサに行くから、ルビウスさんに教えてもらえるし。」

「そうか、夏休みか。寂しくなるね。」

あからさまにがっかりしたセドウィグを見上げて、リリアンヌは乾いた笑い声を上げた。

「たった数ヶ月のことでしょう？ 帰って来たら、またここに来てあげるから。」

そう言ったが、セドウィグはただ寂しそうに笑っただけだった。

「あ、レイルは結果どうだったんだろ。今回試験落ちたら、実家に帰らなくちゃいけないだって。」

そんなセドウィグを放って、リリアンヌはぱたぱたと図書室を飛び出した。

あの日起こった出来事は、リリアンヌとルビウス、二人のほんの小さなきっかけの一つとなったのは言うまでもない。しかし、どんなきっかけかは、残念ながらもつと後のお話になりそうであるが。

第三章 過ぎ行きた時（前書き）

短いですが。三章スタートです。

第三章 過ぎ行きた時

誰であれでも、それぞれ人は生きている間に、後悔というものを学ぶものだろう。過ぎ去った時間ときを思っては、選ばなかった道を悔やむ。人間とは全く、愚かで弱い生き物だ。

そんな風に言ったのは、実の父だというセドウィグ。

後悔なんてしないもの。

勝ち気で頑固者。誰に似たのか、そんな性格で年頃の可愛さが全くない自分は、そう言い返したような気がする。あの時は、今まで選んで来た道のりで後悔をしたことが無かったから。そして自分がこれから歩む道に、後悔など有り得ないと思い込んでいた。

そんな誤った考えをどこかで身につけて、歩いてきてしまった。

初めてぶつかった壁の前に、そんな甘い考えを持っていた自分を恨んで、立ち止まってしまった。

けれど、後悔は悪いことだけではないかもしれない。それから学ぶことも同じようにあるから。出会った人と学んだ日々。それが宝となって成長する。人は素晴らしい生き物だよ。

対照的にそう言った人物のように、自分もそう思える日がくるだろうか。すぐには無理でも、少しずつ。ほんの一步ずつ。そう思えるようになればいい。

1. 50通目の恋文（前書き）

ちよつと長めになりました。サブタイトルは、50通目の恋文^{ラブレター}です。

1. 50通目の恋文

10歳の時、右手首に酷い怪我を負ったのをルビウスはずっと気に掛け、終いには本人にしつこいと怒られる程だった。そんな当人には、気になることがあった。

10歳からは中等部、13歳からは高等部となるリリアンヌの学校は、新学期を迎えていた。

「ねえ、今日もカインド公爵いらしてるわ。」

一人のクラスメイトの言葉に、廊下から顔を出せば、カインド公爵の馬車が学校の門のすぐ脇に止まっている。

「また迎えに来てる…。」

そう、今までほとんど放任主義だったルビウスが、弟子達の送り迎えをかって出ているのだ。リリアンヌが13歳になった今もそれは続き、学校では注目の的となっている。

「先生、また？」

隣から顔を出したのは、六番弟子のレイチェル。三年前の試験にリリアンヌ共々落ち、実家に連れ戻されるところだったが、当人の意志を尊重して師匠であるルビウスが、彼女の母親に掛け合ってくれた。そんなわけで、変わらず仲良く弟子修行に励んでいる。

「うん、ほんと迷惑だわ。」

あまりに目立つ彼の送り迎えは、思春期を迎え始めた年頃の女の子

にとっては迷惑以外の何物でもない。

「勝手に帰ると怒られる。」

「わかってる。」

前に一度、今は独り立ちした三番弟子のジョナサンに、裏道を教え
て貰って勝手に帰った事があった。そのときのルビウスの不機嫌さ
といったら、長年カインド邸に仕えているジョルジオさえも、容易
に喋りかけられないほどであり、リリアンヌとレイチェルは散々説
教を食らった。

「ああ、憂鬱。」

いきなり過保護になり始めた師に、リリアンヌの反抗は目に見えて
酷くなっている。

「レイル、今日は授業がもうないってルビウスは知ってるみたいだ
から、諦めてリアン兄さんと呼びに行こう。」

普段ならまだ授業がある時間帯であるが、教科担当の都合で休講と
なっていた。

「リアン兄さん。」

丁度教室から出てきたジュリアンに声をかけ、3人揃って門へ向か
う。四番弟子のエリックも同じ学校に通うが、弟子を卒業したため
か、最近ではめっきりカインド邸に寄りつかなくなっている。

「リリアンヌ・カインドってあなた？」

憂鬱気味に門へと向かっていたところへ後ろから声をかけてきたのは、ヘレン・ナンシーという公爵令嬢。国で有数の金持ちだとジュリアンが耳打ちしてくれた。

「そうだけど？」

「ああ、やっぱり。その髪と瞳ですぐにわかったわ。あなた、カインド公爵のお弟子さんでしょう？ ちょっと頼まれて欲しいの。」

そう言って渡されたのは、可愛らしい花の柄が書かれた封筒。それを見て、リリアンヌは怪訝そうに眉をひそめた。

「これをルビウス様に渡してください？」

いわゆる恋文というやつを彼に渡して欲しいらしい。ますます顔を険しくしたリリアンヌを横目で眺めていたジュリアンは、冷たく茶髪 of 彼女に言い放った。

「そんなの人に頼むなよ。」

「あーら、弟子でも同じ邸に一緒に住んでいるなら、それぐらい頼まれも良いんじゃないかって？」

リリアンヌよりも年上であろう彼女は、複数の取り巻きを従えて堂々と言い放った。

「私、あの人に恋文を渡すっていう仕事はしてないの。自分で手渡すか、郵便屋に頼むのが普通でしょう？」

「まあ！古代魔女の分際で生意気なっ。いいこと、この手紙必ずルビウス様に渡すのよ。古代魔女でもそのぐらい出きるでしょう？渡さなかったらどうなるか、わかってるでしょうね？」

つんと言い返したりリアンヌに、無理やり恋文を押し付けると沢山の取り巻きを従えて去って行った。

「つたく、言い迷惑だぜ。」

それを言いたいの、リアンヌの方で、実は今日既におなじような手紙を無理やり押し付けられていた。今日いきなり始まったことではないが、なぜか今日に限って多く、受けとった手紙は本日50通目の恋文である。

仕方ないので、既に女の子達の恋文でパンパンに膨らんだ鞆に、無理やり手元にある手紙をねじ込んで、ドスドスと足音高く馬車へと近付いていく。

「うひょー、すげえ量。」

後から追ってきたジュリアンは、おっかなびっくりな様子で呟いた。そんな彼を放って、馬車の扉を開け放つと中で待つ本人に、文句の一つでも言ってやろうと口を開いた。が、中にいたのはルビウスではなく、執事長であるジョルジオだった。

「なんで？」

「ルビウス様は、リド・シエルダ公の元へ一足早く向かっておいでです。お三方も学校が終わり次第、そちらへ向かうようにと。」

予想外の人物の登場で、リリアンヌの苛々は向かう先をさまよい、結局鞆の中にある手紙へと落ち着いた。馬車の中へと投げつけた鞆に続き、リリアンヌ、レイチェル、ジュリアンも馬車に乗り込み、馬車はルビウスが待つシエルダ本邸へと向かった。さほど時間もかからず、シエルダ本邸へと到着し、ひとの出入りが多い屋敷の中へと案内された。

「ああ、やっと来たね。」

応接室でくつろいでいたルビウスに出迎えられ、忘れかけていた怒りがまた蘇って来る前に、リリアンヌはルビウスの向かいに座る人物に目を奪われた。

「紹介しよう。こちら、シエルダ公爵の現当主、アーサー||リド・シエルダ公爵だ。僕の叔父にあたる人だよ。」

窓から差し込む光で、彼の癖付いた黄金色の髪は美しく輝いている。そんな一瞬奪われた視線は、こちらを見つめる冷たい鳶色の瞳に打ち切られた。

「叔父上、左から五番弟子、ジュリアン・ハイディリア、六番弟子のレイチェル・ディオム、七番弟子のリリアンヌです。」

それぞれ公爵に挨拶をしたが、座ったままの彼はちらりと弟子達を見やっただけで、何も言わなかった。

「今日君たちにこっちに来て貰ったのは、大事な話があったからなんだ。」

「話って?」

大して興味もないと視線を外したシエルダ公爵から、ルビウスに視線を戻すと、リリアンヌは面倒くさそうに聞いた。

「今、あちこちで事件が多発しているらしくて、僕はしばらくそちらにかかりきりになる。邸にもほとんど帰れないと思う。その間、学校に行く以外はあまり外出しないように。もし何かあれば、シエルダ公爵に言うように。」

「私達は手伝わなくていいの？」

「まだ見習いの君たちには、今回の仕事は危険だから。」

「なんの仕事なの？」

君たちは知らなくていい。そう一点張りのルビウスに、リリアンヌはどうとう怒った。

「あれも駄目、これも駄目。規制ばかり作って、肝心なことは教えてくれないのね！」

いつまでも経っても子供扱いだ。それならば。

「ルビウスさんの言うこと、わざわざ守ってるなんて馬鹿みたい。」

「リリアンヌ？」

手元にあった鞆の中身、大量の手紙をルビウスに怒り任せでぶちまけた。

「何だろうか、これは。」

「あなたに渡せて。私はあなたへの恋文の配達人じゃないんだから！でも良かったじゃない、女の子にモテモテで。女性に苦勞することないんですよ。」

手紙に埋もれたルビウスは、しかめっ面で手紙を見やると、それをすべて払い落とした。

「丁度いい、この中から将来の伴侶を選べ、ルビウス。」

「叔父上、今は悠長にそんなことを言ってる場合じゃないでしょう！」

床に散らばった一通の手紙を広い上げたシエルダ公爵は、怒るルビウスを放って平然と続けた。

「お前がいつも仕事だと言って、結婚をないがしろにしているからではないか。このナンシー家など妥当だろう。今かかりきりの仕事が終われば、婚約すればいい。」

「ないがしろなどしていません。私には将来を決めた女性が…。」

「じゃあ、さっさと結婚したら良いじゃない。」

はっと、リリアンヌを見やったが彼女は目を合わせず兄弟弟子に平然と言った。

「リアン兄さん、レイル。そろそろ帰ろう。私達には関係ないらしいし。」

くると背を向けて駆け出したリリアンヌに、ジュリアンとレイチエルは慌てて後を追った。ジョルジオが待つ馬車に乗り込んだリリアンヌは、ルビウスが追いかけてくれるのではないかと少し期待した。けれど、彼は追って来なかった。

「…なんで、私こんなに苛々してるんだろ。」

ジュリアンとレイチエルが乗り込み走り出した馬車の中で、リリアンヌは小さく呟いた。

「手紙、渡してくれました?」

数日後、うっかりあのお嬢様に学校内で会ってしまったリリアンヌは、渋い顔を渡したと答えた。

「あら、では私との婚約が発表されるのも時間の問題ね! ルビウス様、あのお歳で婚約者のお一人もおられないから、いろいろなお噂が立っていたけれど…。」

じつとリリアンヌを見やって、彼女は勝ち誇ったように言い放った。

「お弟子さんの一人に、熱をあげてるなんて噂。…あなたじゃ年齢的にも、身分も容姿も不釣り合いですもの。」

ありえない。そう笑い声を上げて去るお嬢様の後ろ姿をリリアンヌは静かに見送っていた。

邸に戻って、真っ先に向かった図書室で、リリアンヌはいつもの姿

を探した。

「…お父さん。」

寂しそうに呟いた声に、応えてくれる優しい声はなく、いつも会いに行けば優しく笑って話を聞いてくれる人は、いくら読んでも姿を表さなかった。

三年前のあの日から、セドウィグはふらりと姿を見せなくなった。最初は、こちらに來ているのがバレたのだろうと思っていた。また、ふらりと遊びに來てくれると待っていたのに、彼はずっと会いに來てくれない。

知ってしまった家族の温かさを恋しく思う自分に、苦笑する。昔は、一人でいるのが当たり前で、優しそうな両親を持つ同じぐらいの子を見ては、自分には縁遠い世界だと思っていたのに。いつしか人の温かさに浸って、忘れていたのだろう。

「最初から、そんないい加減な同情なんかいらなかった。」

そんな言葉を残して、リリアヌは図書室を後にした。

それから学校にも行かなければ、邸の者とも避けるようになったリリアヌを心配して、二番弟子のオリヴィアがカインド邸にやってきました。

「リリア、どうしたっていうのよ。」

魔法書に限りつくリリアヌの背後から、そう声をかけた。

「別に。ヴィア姉さんが心配して來るほどでもないよ。」

「そんな事ないでしょうが。学校にも行っていない、ご飯も少ししか食べないってみんな心配してるんだから。」

リリアンヌが調べていた魔法書を取り上げて、オリヴィアは促した。

「何があつたのよ。言つてごらん。」

言わないと返さない。

いつまでも居座りそうなオリヴィアに、リリアンヌは仕方なく折れたのだった。

「ふーん。なるほどねえ。」

いつも会いに来てくれたセドウィグが、三年も経っても会いに来てくれなくなったこと、ルビウスの一方的な命令。他の人と距離を開けて、魔法の勉強ばかりしている理由をオリヴィアに話した。寝台に並んで座りながら、彼女はなるほどと呟いている。

「で、先生にまだなにかあるんでしょ。」

言つてしまいなさい。

オリヴィアの勢いにおされて、つい口を滑らしてしまった。

「学校からの女の子達から、恋文を渡してくれて頻繁に頼まれて。なんで、私が渡さなきゃ行けないの？すごく苛々する。それにルビウスさん、好きな人いるって言つてたけど、ナンシーっていう所と婚約するらしい。」

「リリアにも、一足早い思春期が来たって訳か。」

少しニヤニヤと笑うオリヴィアは、リリアに向き直って言い聞かせた。

「先生のことは、私は口を出さないわ。もうちょっと時間が必要だと思うから。で、セドウィグ殿下の事だけねど。」

突然、声をひそめたオリヴィアはそっとリリアンヌに耳打ちした。

―後日―

「リアン兄さん、レイル。早く、早く！」

すっかり秋に染まった華やかな王都の街をこそそと隠れるように走る人影がある。学校を抜け出した、リリアンヌとレイチェル、ジュリアンの三人である。

「おい、先生に見つかったらマジでやばいぞ。」

仕切りにおどおどと見やるジュリアンをリリアンヌは、大丈夫だと何度口にしたことか。彼をここまで連れてくるのに、かなり骨が折れた。

「そんなに周りばっか見てたら目立つから！」

「まったく、不登校で部屋に引きこもってるかと思えば、いきなりジョーン兄さんの場所に連れて行って言うんだもんなあ。」

堂々と歩いてとトロいレイチェルの背中を押すリリアンヌを見ながら、ジュリアンはブツブツ文句を繰り返している。

今、三人は王都に住むジョナサンの家に向かっている。

『森の住民が噂していたんだけど、今まで幽閉うちされていたセドウィグ殿下の処分についての会議が、王都で始まってるらしいのよ。だけど、肝心の殿下が行方知れずらしくって。：今はいろいろと物騒な世の中になって来たわよね。』

恐らくは、死刑になるのではないか。森ではそんな噂が絶えないという。

王都から離れたポータリサの町だから、本当かどうかもわからない。あまり森を離れられないオリヴィアは、ルビウスが掴まらない今、王都に詳しいジョナサンに相談したらどうだと言っていた。彼は、王都を庭のように知っており、抜け道、裏道からそれぞれ立つ屋敷の名前まで知っている。がき大将を務めた頃に覚えたのだとか。そんな彼は今、街で自らの店を開いている。

「勝手に教えたって知ったら、怒られるだろうなあ。」

人に教えるなど念を押されていたらしく、今もリリアンヌを連れて行くのを渋っている。細い脇道に入り込んだ三人は、所狭しと並んだ店に呆気にとられた。

「リリア、何か買っていこう。」

「駄目、ジョーン兄さんの店についてから。」

勝手についてきたレイチェルを引っ張りながら、早足に元気のよい

店先を通り過ぎた。

「ここだ。」

その先に表れたのは、質素な造りの酒場だった。閉店と書かれた看板がかかった扉をジュリアンは、平然と開けて中へと入って行く。

「ジョーン兄さん？」

「なんだ、リアンか。」

リアンヌ達が後に続いた先は、昼間だというのに薄暗い店内。奥の階段から降りて来たのは、今起きたばかりという姿の久しぶりに会うジョナサンがいた。

「おい、リリアとレイルに何勝手に教えてるんだよ。」

「リリアがどうしてもってしつこいんだ。」

酒を飲んでいるのか、かすれた声に、いかつい体格となったジョナサンは、ちよつと柄が悪く見える。

「久しぶり、ジョーン兄さん。」

「ったくよお。」

ブツブツ文句を言いながら、カウンターの中へ移動したジョナサンはそんな外見だが、実は優しいところがあるのだと一緒に育ったリアンヌ達は知っている。

リアンに教えなきゃ良かったぜと呟くジョナサンを変わらないなと

少し笑って、リリアンはレイチェルと共に狭い店内を歩いていて、カウンターの腰掛けた。

「ジョナサン兄さん、お酒なんて好きだった？」

「いや、ここはただ飾りもんだ。ほんとは情報屋をやってる。」

夜は本当に営業しているというが、今は昼間なので休みなのだそう
だ。

「で、俺に何か用か？」

水をコップに入れながら、そう聞いてきたジョナサンを見ながら、
やっぱりここに来て正解だとリリアンは確信していた。

「頼みがあるの。」

「頼みだ？」

「そう、今日城で魔法省の会議がこれからあるでしょう？そこに潜
り込みたいの。ジョーン兄さんなら出来るでしょ？」

そう言ったりリアンの言葉に、ジョナサンは飲んでいた水を盛大
に吹き出してむせた。

「嫌だ、ジョーン兄さん汚いよ。」

「おまっ、けほ。リリア、お前自分が言ってることわかってんのか
！」

「勿論よ。」

口元を拭くジョナサンを見つめて、リリアンヌははっきりと答えた。

「最近のリリアは何考えてるのか、わかんないよ。今日だって、学校を抜け出してきたんだ。先生に見つかったらただじゃすまないよ。」

「勿論、ただでとは言わないから。」

横から口出してきたジュリアンをちらりと睨んで、思案しているジョナサンに掛け合った。

「潜り込んでどーすんだ？」

「セドウィグ殿下の処分について会議するらしいの。それを知りたいだけ。ルビウスさんとか忙しいらしくて相手にしてくれないものね、お願い。城に潜り込む道だけ教えて。」

黙り込んでしまったジョナサンに、リリアンヌは必死に頼み込む。

「城に潜り込むのは簡単だ。けど、城の敷地内にある魔法省の建物はそうは簡単にはいかない。魔法師がうろうろしてやがるからな。」

「…そっか。」

あからさまに落胆したりリアンヌを見ながら、何やら考えていたジョナサンは、一人呟いている。

「会議の内容が聞ければいいんだろ？何も建物の中に入らなくても

言い訳だ。よし、しゃーねえな。一緒に行ってやるから、ちょっと待ってろ。」

「え、いいのっ?」

「ただし、依頼料は高くつくぞ?」

「ありがとう! ジョーン兄さん。」

「まじかよ…。」

喜ぶリリアンヌの脇で、ジュリアンは信じられないと呟いた。

「だから、なんでお前らまでついてくんだよ。」

支度をしたジョナサンに連れられてやってきたのは、城の後ろ側にあたる外門の草むら。瞬間移動魔法で飛んだのだが、何故かジュリアンとレイチェルまでついてきた。

「ここで、帰ったら男が廢る。」

というジュリアンは放っておいて、レイチェルは単にリリアンヌと一緒に居たいだけらしい。

「足手まといになんじゃねえーぞ。」

そう言っ、彼は道なき道を進み始めた。古くに避難経路として使われていたらしきその道は、今では蜘蛛の巣が張り雑草が元気よく生えていたりして、全く使われていないようだ。

「ねえ、まだ着かないの？」

城の隅にあった隙間から、腹這いになってしばらく進んだあと、地下路を歩き始めてかなり経った。そんな頃、ぐったりした姿でリリアンは同じようにぐったりした姿のジョナサンに聞いた。避難経路は、城敷地内で災害が遭ったときの為に造られたもので、人々が早く避難できるようにつくられている。地上を歩くより短時間でつくように計算されているので、城内につくのも早いはずだという。

「もう、この上が魔法省の本部の建物の筈だ。地上に出てみるか。」
すぐ真上にあった天井を持ち上げて、よじ登れば広い敷地にそびえ建つ、魔法省の建物が姿を表した。

「ここが魔法省本部だ。で、この最上階で会議は開かれる。」
紅い煉瓦造りその建物は空まで届きそうな程高く、黒縁の窓が不規則に並ぶ。急な傾斜を描く屋根は不気味なぐらい真っ黒である。
首が痛くなるほど建物を見上げていたりリアンは、首を揉みながら側に立つジョナサンを見上げた。男性はとも背の高い人達ばかりで、首が凝る。

「ねえ、上までどうやって行くの？」

「…登るしかないな。」

「ええっ、これを登るの!？」

「しゃーねえだろ？中に入ったら誰に見つかるかかわかんねえし、魔法を使ったら一発でわかつちまう。嫌ならやめるか？」

「誰もやめるなんて言っていない。行くわ!」

…というわけで。

「おい、リリア。ヤバいって、落ちたら死ぬって!」

「言われなくてもわかってるわよ! だから、下で待ってたらって言ったじゃないっ!」

地上から遙か離れた空の上。へっぴり腰でついて来たジュリアンは、さっきから先に進んで登るリリアンヌに叫んでいる。リリアンヌも、少し風が出てきたために怒鳴り返し、終始怒鳴り合いの会話が繰り返されている。

「喋ってたら落ちるぞ!」

下の方から、レイチェルを手伝ってやりながら登ってくるジョナサンに怒られ、リリアンヌは会話を切り上げて、さらに上を目指す。何階建てなのか想像もつかないが、気が遠くなりそうなこの建物は、幸いなことにあちこち出張っていて、楽々と登れることが出来た。避難経路共に古くに造られたそうで、所々雑な設計である。

途中、拓けた手すり付きの場所で休憩を挟んだ後、随時と上の方まで来たと実感した。

「あ、リックがいる。」

「あいつ学校サボってやがる。」

レイチェルの声に、同じ場所の窓を覗き込んでいたジュリアンが、

羨まそうに共に声を上げた。

少し離れた場所の窓から、リリアンヌも同じように張り付いて中を覗き込んだ。弟子は卒業したが、まだ10歳の彼は義務教育が終わるまで、学校に通わなくては行けないはずだ。見れば、沢山の書類を抱えたエリックが忙しそうに廊下を駆けて行く所だった。

「何してんだろ。」

そう言えば、将来は魔法省で働きたいと言っていたななどと思いながら、ジョナサンに急かされて先を急いだ。てっぺんの会議室についたのは、すっかり日も暮れた頃。

「会議、終わってんじゃないか？」

まだ壁に張り付いたままのジュリアンは、近くにあった大きい窓に体重をかけてのぞきこんでいる。

「おわっ！」

「り、リリアン兄さん!？」

鍵が掛かっていなかったのか、彼の背ほどある大きな窓は、簡単に開き、ジュリアンは部屋へと転がり込んだ。

「いててて。」

「リリアン兄さん、大丈夫？」

ジュリアンに続いてリリアンヌも部屋へと入ると、そこは会議室ではなく、長椅子がいくつもあり、背が低い長い机が一つあるだけの

殺風景な部屋だった。

「ここは控えの間だな。会議室は隣の部屋：おい、別行動をするなつ。レイルつ。」

後からレイチエルと共に部屋へと入ってきたジョナサンは、ふらりと廊下に出て行った妹弟子を追いかけて行った。部屋に残された二人も後を追おうと扉に手を掛けたが、向こう側から重々しい会話が聞こえてきてはたと立ち止まった。ジョナサン達が帰って来たかと思ったが、二人以上の足音と重々しい会話から、どうやら二人ではなさそうだ。

「やべっ。魔法師の誰かじゃないか！？早くどっかに隠れないとつ、リリアっ！」

「ええっ！」

わたわたと隠れる場所を探した二人は、部屋の隅にあった小さな机にかかっていた白く大きな布の中へと潜り込んだ。潜り込むと同時に扉が開かれ、かなりの人が部屋に入ってきた。

「おい、資料はすべて揃っているだろうな？」

「なに、リド様は欠席？つたく、良い身分だよな、公爵様は。」

「しっ、誰かに聞かれたらどうするんだよ。」

「おい、もうすぐ会議が始まるってよ。」

「本部会議なんかしねーで、さっさと死刑にしちまえばいいのによ。」

「

そんな会話が過ぎ去るとともに、静かな静寂が部屋へと舞い戻ってきた。大勢の人達は、隣の会議室へと消え、ジュリアンとリリアンの吐く息だけがやけに響いて耳に届いていた。

「：ジョーン兄さん達遅いな。」

「しっ。誰かまた来た。」

そんな静寂に耐えきれなく、先に口を開いたジュリアンを黙らして、耳をすました。

「アレックス、皆はもう全員揃っているんだな？」

「はい、すぐに会議を始められます。」

扉の開閉音の後に聞こえて聞こえてのは、久しぶりに聞くルビウスの声とそれに答えるアレックスの声だった。

「：では行こうか。」

扉の向こうに消えた二人を追って、リリアンヌも急いで布から這い出ると、会議室の扉にへばりついた。

「ジョーン兄さん達どこ行ってんだ？」

あまりに遅い彼らを心配して、ジュリアンは廊下側の扉を覗いている。

「ちっとも声、聞こえないわ。」

そんなジュリアンを放って、リリアンは再び、開けっ放しの窓から外へと身を乗り出した。

「リリア、何やってんだよ。」

「外からなら聞こえるかもしれないから、ちょっと行ってくるわ。リリアン兄さんはここにいたら？」

「お、おい…。」

足場の悪い壁を慎重に進み、会議室の窓の場で、リリアンはそつと耳をそばだてる。

『セドリック殿下の処遇ですが――。王からは――が妥当ではないかとのことで。』

『それではあまりも…。』

『しかし――。』

強まる風の音と、はためく法衣の音がうるさくて、断片的にしか会話が聞き取れない。

「リリア、どうだ？」

すぐ背後で尋ねられた言葉に、焦って背後を振り返ると、同じように壁に張り付いたジュリアンがいつの間にかそばにいた。

「…びっくりしたっ。いきなり背後に来ないでよ。」

「悪い。だけど、ジョーン兄さんもレイルも帰って来ないし、一人で部屋に居たくなかったんだよ。」

「だからって。」

こうも側に来られれば、身動きが取れないではないか。

『大臣はどうお考えですか？』

不服を口にしようとした時、おそらくベクトルの声だろうか、ルビウスに意見求める男性の声が届いて隙間に耳を近づけた。

『死刑などと、物騒な考えを仰る陛下の意見には、賛同出来かねますね。』

その意見に否を唱える者、賛成を促す者、一斉に騒がしくなった室内で、ルビウスの凜とした声が響く。

『彼は、リヴェンデル王族のれっきとした王家の嫡子です。それを勝手に部外者が絶っては、王家の存続の危機になりましょう。』

ざわざわと騒がしい中、少ししゃがれた男性の声が響いた。

『レオ殿は、確かセドリック殿下と親しい間柄ではなかったか？』

『そうだとしたらなんだ。レオ殿は、王家の血筋を引いてらっしゃる。親戚にあたる殿下を庇うのは当然だ。』

『ならば、今おられないジウ様もそこにいるロイ様も、あなたと親

しいチェスター公爵もサリア公爵も否を唱えるだろう。今、肯定されないリド様は欠席。セドリック殿下の死刑が、否決されるのは当たり前なのです！」

その言葉で、納得出来ない多くの者が講義の声をあげている。

『静まれっ！おい！』

『叔父上は単に会議に興味無いだけだけど。では、こうしよう。』

アレックスの怒声で静まらなかった声を静めたのは、しばらく黙っていたルビウスの声だった。

『とりあえず、今日はこれまでとして。後日、魔法省で魔法師を対象とした大型会議を開こう。どんな理由であれども、基本的に欠席は無し。それなら、割と公平な意見が聞けるんじゃないかな？』

ルビウスの意見に、しばらく渋っていた人達は渋々それで納得したらしく、部屋を出て行く足音が聞こえた。

「お、終わったのか？」

長い間冷たい風に打たれていたジュリアンは、体力の限界を迎えていたようだった。それは、同じように外でへばりついていたりリアンヌも同じで、会議室に誰もいないことを確認すると窓を無理やり外して、転がり込んだ。

「な、なにやってんだ？誰か戻ってきたら…。」

「あら、その間は優しいリアン兄さんが見張ってくれるんじゃない

の？」

「調子いいよ、まったく。」

まだ壁から部屋に入り込めないジュリアンは、文句を言いながら必死に身体をねじ込んでいる。どうやら身長も体つきも大きくなった彼は、リリアンヌの外した窓では部屋に潜り込むのは少し無理があるようだ。

隣の控えの間からこればいいのにと頭の片隅で思いながら、何か会議の資料がないだろうか、大きな真ん中が抜けた長方形の机の上を見て回っていた。ほとんど魔法師達が持って出ってしまったのか、まったくといっていいほど参考になる資料は残っていなかった。

「…これじゃ会議の内容がわかんないじゃない。」

早くしなければ、あの人が死刑になってしまうかもしれない。

焦る気持ちを抑えて、今度は机の下を詮索し始める。

「…あ。」

「なんだ？なんか見つけたのか。」

いまだ窓と格闘するジュリアンが、リリアンヌの小さな呟きに反応して尋ねた。

「これ…。」

【第5回 本部会議資料】と表紙に書かれた紙の下で見つけたのは、

ルビウスに渡したあの可愛いらしい花柄の恋文。

「なんだよ、何を見つけたんだ？」

窓枠に挟まったまま叫ぶ彼は無視しておいて、リリアンヌは少し迷ったがその手紙を広いあげた。可愛いらしい丸っこい字で、ルビウス・カインド様と書かれた面をひっくり返せば、ヘレン・ナンシーと書かれた送り主の名がある。封が開いている所を見ると、彼はこの手紙を読んだのだろう。

なんて書かれてあるのだろう…。

人の恋文など興味がない。けれど、それは関係がない人であつたらの話で、これはルビウスに宛てた手紙だ。封は開いているのだし、少しだけ見るだけならバレない筈。

そろそろと分厚い手紙の中を抜き出したリリアンヌは、そっと開けて中の文に目を通そうとした。

「げっ。」

「人の手紙を盗み見るなんて、関心しないね。」

ジュリアンの悲鳴に続いて、冷ややかな声が背後からかかった。手元にあった手紙は、その声に呼び寄せられるようにリリアンヌの元をスルリとすり抜けていった。その手紙の行く末を追うように恐る恐る振り返れば、控えの間に続く扉に寄りかかり、微笑むルビウスの姿があつた。

「さて、何から言えればいいかな。」

漂ってきた手紙を右手に収めながら、漆黒の瞳はリリアンを静かに見やっていた。

2. 消えた人々

「あ、いやこれには訳が。」

じりじりとジュリアンが挟まる窓側へと避難するリリアンヌをルビウスは、じっと動かずに見つめている。

「訳？盗み聞きと人の手紙を見るのに、理由があるのかい。では、是非その理由を聞かせてもらおうか。」

ルビウスの手元にあった手紙は、その言葉と共に炎に包まれ、灰となって瞬く間に消えてしまった。

「ど、どうして燃やすのっ!？」

「どうして？元々必要無いものだからだよ。」

「だって、女の人達が一生懸命書いたのよ！それを燃やすなんて酷いわ。」

カンカンになって怒るリリアンヌに、ルビウスは少し呆れたように言い返した。

「リリアンヌ、怒っているのはこっちなんだけれど？」

そうだったと思い出すと同時に、リリアンヌはジュリアンが挟まる窓の横の隙間から、身を乗り出して足をかけた。

「あ、お邪魔しました。」

「危ないから、二人共とりあえず窓から離れて、こっちにおいで。」

「大丈夫、私達こっから来たんだから。ねっ、リアン兄さん。」

「どんな所から来てんだよ。」

「先生、挟まって身動きが取れません。」

ルビウスの後ろから、そんなあきれた声を出すアレックスの言葉を挟んで、各々の話したい事を口にする二人の弟子に、ルビウスは溜め息について振り返った。

「アレックス、ジュリアンを助けてやってくれ。」

そう言った後に、こちらへと足を進めたルビウスに、リアンヌは思い切り叫んでやった。

「嫌っ！こっち来ないで。来たら飛び降りてやるんだから！」

「リアンヌ、危ないから暴れるんじゃない。」

「うわっ。」

シッシッと暴れるリアンヌをルビウスは慌てて保護をしようとしたが、その手を逃れようとバランスを崩したリアンヌは、遥か高く宙に身を投げ出してしまった。

「————っ。」

覚悟を決めて目を瞑ったりリアンヌだったが、身体はいつまでたっても落下せずに宙に浮いている。

「だから動くなと。」

「…ごめんなさい。」

「ほら、早くそちらの手も寄越しなさい。」

ルビウスが間一髪リアンヌを捕まえた事で、落ちる事は免れたのだった。

「魔法省でも魔法規制がしかれていて、魔法省に登録されていない魔法師が魔法を使うと不法侵入者と見なされてしまうから。」

浮遊の魔法を使って、リアンヌを部屋に引き入れたルビウスは、はあっと溜め息をついて彼女を見やった。

「ああ、びっくりした。」

「それはこっちの台詞だよ。」
セリフ

ジュリアンがアレックスに助け出されたのを確認して、彼は再びリアンヌに向き直って尋ねた。

「で？何故、普通なら学校に行ってる筈の君達がここにいるのかな。」
「

…その。ジョーン兄さんに頼んで、連れてきてもらったの。」

「学校を抜け出して？」

「だって、ヴィア姉さんがセドウィグ殿下は死刑になるかもって言うってたんだもの。ルビウスさんに聞こうにも、仕事だってほとんど屋敷に居なくて。魔法省で会議があるから、ジョーン兄さんに頼んで連れて行ってもらったらって。そのほうが、ルビウスさんを捕まえるより早いかもって。」

「オリヴィアは一体、何を吹き込んだんだ？」

頭が痛い額に手をやったルビウスは、言い聞かせるように言葉を繋げた。

「リリアンヌ、僕は確か『何かあれば叔父上に言うように』そう言わなかったかい？」

「言ったわ。でも…。」

あの人苦手なんだもの。

拗ねるように小さく呟いた声に、わからなくもないと同情の色を浮かべたが、さらりと流して先を進めた。

「とにかく、魔法省に潜り込んで、会議を盗み聞きしたことは後日3人とも時間を作った時に。いいね？これから残念ながら、レイヘルトンに向かわなければ行けないから。アレックス、レイチェルとジュリアンをカインド邸に送り届けてやってくれ。風蘭。」

アレックスに引っ張られ、戸口に隠れるように立つレイチェルと、

腰が抜けて動けないジュリアンを嫌そうにアレックスは荷物のように担いで、移動魔法の光と共に消えた。

《何故、主でないルビウスに呼ばなければいけないのですか。》

変わりに現れたのは、ムスツと睨みを効かせて舞い降りてきた神隠しの神・風蘭。

「あ、風蘭！」

《お久しゅうございます、リリアンヌ様。久しく呼びが掛からず、この私め、寂しゅうございました。》

「ごめんね、初級を取るのに必死で。」

《私めなどに謝罪など必要ありません。リリアンヌ様が、学問に励まれているのは存じておりました故。誠にようございました。》

ありがとうと和やかに再会を喜ぶ中、ルビウスがその会話を割って入った。

「風蘭、リリアンヌをシエルダ公爵の本邸に送り届けて欲しい。」

《それ程のこと、私めにわざわざ言いつけなくとも、あなたが送れば良いのでは？まあ、リリアンヌ様の為とあれば、お安いご用です。》

「リリアンヌはまだ移動魔法が出来ないし、飛行魔法を使えば目立ってしまう。僕はすぐにレイヘルトンに飛ばなければ行けないから。」

《相変わらず、落ち着きがないことで。まだ若いのに、そんなに仕事ばかり根詰めているとろくなことはありませんぞ。》

「魔法師を甘く見るもんじゃないさ。心配は無用さ。」

「ねえ、ところでジョーン兄さんは？レイチェルを追いかけて行った筈だけど。」

レイチェルと共にアレックスに連れられて来ては居らず、姿が見えない。

「ジョナサン？いや、レイチェルは廊下を歩いていたところをアレックスの弟子に保護されたと聞いたけれど、ジョナサンのことは何も聞いていないな。」

「どこに行ったんだろ。もしかして、自分だけさっさと逃げたとか？」

有り得なくもない。と顰めっ面を作るリリアンヌに、ルビウスは軽く笑ってそれを否定した。

「そんなことはないだろう。ジョナサンもなんだかんだ言って、優しい所があるのを知っているだろう？」

「そうだけど。」

《リリアンヌ様、此処にいても仕方ありませんし、シエルダ邸に向かいませぬか？》

「もしかしたら、魔法省にいる知り合いに会って話をしてるだけかも。リリアンヌは叔父上のところに行っておいで。素敵な人に会えるかもしれないよ?」

「素敵な人?」

「うん、それは会ってからの楽しみだけど。風蘭、じゃ頼んだよ。」

《あなたに言われずとも、ちゃんと送り届けますとも。》

「ああ、そうだ。リリアンヌちよっとおいで。」

そばによったリリアンヌに、ルビウスはそつと口を彼女の耳に近づけて話した。

「あのナンシー家との婚約の話、叔父上にはきっぱり断っておいてもらったよ。それを君に教えておこうと思って。」

「な、なんで私にそんなこと! 私、別にルビウスの婚約はどうでもいいんだからっ。たまたま手紙が落ちてて、封が開いてたから中を見てみたくなっただけよ! ちゃんと貰った手紙ぐらい管理しときなさいよね。」

「いや、ちゃんとしまっておいたはずなんだけど。…さあ、なんで君に話してるのかな。リリアンヌは、僕に手紙を書いてはくれないの?」

「誰があんたなんか書いてやるものですか。手紙を渡す人の気が知れないわね。風蘭、行こう!」

少し笑っていたような風蘭に、慌ててそう伝えてリリアンは背を向けた。

ひゅんと柔らかな風に包まれて、辺りの景色が変わった時にはルビウスの姿は無く、どっしりと構える古びた錆色の屋敷が目の前に現れた。年季が入った建物で、公爵ほどの地位の者が住むとは思えない。

《申し訳ありませんが、私めはここで失礼致します。あの者に、あまり会いたくないもので。》

そう言っで一礼して去った風蘭を名残惜しそうに見つめていたが、気を取り直して大きな玄関の扉に向き直った。

「とにかく、シエルダ公爵に会えばいいのよね。」

風蘭さえも会いたくない人物に、一人で会わなくてはいけない憂鬱に負けそうになるものの、それを振り切るかのように重い鐘を鳴らした。しばらく経って、執事らしき人物が扉をあけてくれ、シエルダ公爵に会いたいと伝えた。しかし、現在当人は出掛けていて留守であるという。

「…困ったなあ。」

そう言ったリリアンヌに、カインドの弟子であるからか、邸の中で待つよう勧められたが、どうしようかなかなか決められないでいた。

「何事だ？」

「あ、旦那様。カインド公爵の七番弟子でらっしゃいます、リリア

ンヌ様が旦那様にお会いしたいとのことだ。」

「その辺の部屋に通しておけばいいだろう。玄関に突っ立て居られ
たら、邪魔でしかたがない。」

本人の帰宅であった。振り向いた先には、全身黒づくめの背が低い
男性が一人立っている。魔法師の象徴のトンがり帽子はへなりと曲
がり、少し色あせているように思う。その姿があまりに可愛らしい
かったために、ぷつと吹き出したリリアンヌに、鳶色の冷たい視線
が刺さった。

「何が面白い。」

「あつ、ごめんなさい。だって、建物もトンがり帽子も年季が入っ
てて、怖いって有名なシエルダ公爵には不似合いで可愛らしいなっ
て。」

「かつ可愛らしいっ。」

シエルダ公爵よりも幾分若い執事は、リリアンヌのその言葉にたま
らず吹き出した。けたけた笑う執事を特に窘めることもせず、リ
リアンヌを軽く押しのけて執事に帽子と体を包んでいた外套を押し
付けると、ちらりともリリアンヌを振り返らずに颯爽と先に進んで
行く。

「ついて来ぬのか？あやつに会いに来たのだろう。」

執事はゲラゲラ笑っていて、全く役に立たないと睨んでいたリリア
ンヌに、家主からの入館の許可が下りた。魔法師の館には大抵結界
が張られ、そこに住む者に許可されねば、その結界に弾かれてしま
うのはここ数年で学んだことだ。

「しかし、随分あれから時間がかかったな。ルビウスがわざわざ、おぬしをここに連れてきて手掛かりも教えていたというのに。本部の会議を盗み聞きしに行きにぐらい間抜けだったとはな。」

「そんなの誰だってそうするわ。」

数歩先を歩くシエルダ公爵の後を必死について行きながら、たまらず反論する。

「でかいのは態度と言葉だけか。リヴェンデルの血を引くだけあるな。まあ、ルビウスも弟子の教育は、かなり手を抜いているらしいからな。」

なんて失礼な人だろうか。

頭に血が登ったりリアンヌは、皮肉を込めて言い返してやった。

「この性格は生まれつきなんです。でも、ルビウスさんの叔父様っていうあなたも、人を見下してるところはルビウスさんとかと良く似てるって思うわ。さすが、有名な冷徹人間ですね。」

ピタリと薄暗い廊下で立ち止まったシエルダ公爵に、自分はなんて事を言ってしまったのかと真っ青になった。しかし、シエルダ公爵は目の前の壁を真っ直ぐ見つめるだけで、何も言わない。

怒らしてしまっただろうか。

急に不安になってきた頃に、シエルダ公爵は手を伸ばして、そっと壁に触れた。真っ白な壁だったそこは、公爵の手から外側へと円を

描くように真っ黒な扉が姿を表した。

「怖いもの知らずなところは、父親譲りか。」

「…え？」

ガチャリと大きな音を立てた扉のせいで、シエルダ公爵がなんと言ったのか聞き逃した。無言で扉を開けたまま、先を促す公爵に押されて、そろりと真っ暗な扉の向こうに足を踏み出す。

「ぎゃっ。」

少し進んだ時に、真っ暗な中で階段になっているなど分からず、当然のように足を踏み外してドスンドスンとしばし階段を転がり落ちることになった。

「あいた〜。まったく、階段になってるとか言ってよね。」

体をさすりながら、小さくぼやいたのが聞こえたのか、背後の天井から下に向かって一気にランプが灯った。

「灯りつくなら、最初からつけてよっ!!」

たまらず上にいる公爵に怒鳴って、狭く急な階段を降りていく。先ほどから漏れていた光にたどり着くと、そっと中を窺った。

「わっ、ちよつとそれはたんま!」

《これこれ、往生際が悪いですぞ。》

《そうだよお、セドウィグはさつきからそればっか。》

《あっさり負けちゃいなよ。》

「うーん。いやいや、ここは負けられないさ。」

まるで外の日の暖かい光が差し込んでいるような、明るい小さな部屋に、溢れんばかりの神神々がいた。チェスを楽しんでいるのか、1人用の革の椅子に足を乗り上げて考えに浸る黒髪の男性を囲むように、神々が覗きこんでいる。

《あ、来た来た！来たよ。セドウィグ！》

《それでは我々の相手は、ここまでですな。》

相手をしていた年老いたしわしわの老人の声で、隣で小さな背を精一杯伸ばして勝利の行方を見つめていた幼い男の子も、棚の上から覗き込んでいた白銀の青年も小さな竜巻と共に消えてしまった。カカカタと物が揺れる音を小耳に挟んで、しばらくまだ考えていた一つくりに結んだ黒髪の背中が、ゆっくり振り返ってリリアンヌに笑いかけた。

「やあ、私の可愛いリリアンヌ。良く来たね。」

「な、なんでここに？」

「あれ、僕がここにいるから来たのではないの？」

行儀悪くチェスをなぎ倒して机に脚をのせて組むと、再び背を向けた彼は、わからんというように首を傾げた。

「お前の娘は、お前に良く似てやることが普通ではないな。ルビウスがわざわざ教えてやった事が理解出来ないとは、相当な間抜けだ。」

入ってすぐ右脇にある小さな台所から、薬缶片手^{やかん}に現れたのは、無表情なシエルダ公爵。

「薬缶を掛けっぱなしとは何事だ。中身が空っぽではないか。チェスに夢中になって、火事を起こすつもりか。」

怒りはしていないようだが、彼は言いたいことだけ言って、台所に再び引っ込んでしまった。

「ああ、忘れてたよ。大丈夫、火事なんて起こしやしないさ。しかし、他人^{ひと}の娘を間抜け呼ばわりとは酷いね。」

カツンと靴音を鳴らしてやってきたセドウィグを呆然と見上げていたりリアンヌに、彼は目を細めて優しく頭を撫でくれた。

「…大きくなった。ますますマリーに似てきたんじゃないか？」

「…お母さんは、こんなに気が強くなかったんじゃない？」

「いいや、小さい頃の彼女も気が強かったよ。おいで。」

大きく開かれた腕の中に、リアンヌは戸惑いながら飛び込んだ。

「…心配して損した。」

「そんなことを言うのかい？」

「…だって。」

「セドウィグ！茶の葉をどこにやったんだ？」

台所からかけられた叫び声に、セドウィグは首をすくめて困ったように呟いた。

「やれやれ、ちょっとは気を効かせるということが、彼には出来ないのかね。ゆっくり話もさせてくれないなんて。せっかくの感動的な再会が台無しだ。」

「おい、聞いているのか？」

「今行くよ、アーサー。ちょっと座って待っておいで。」

台所にすっこんだままのシエルダ公爵に叫び返して、そちらに彼は消えた。しばらくして、三人分のカップを持って戻ってきた二人は、リリアンヌが待つ机にそれぞれ座って腰を落ち着けた。

「で、アーサー。君は今まで彼女に、一言も僕がここにいると言っ
てはくれなかったのかい？」

「何故、私がわざわざ言わねばならない？」

「親切心というものがないのか？」

暖かい茶を啜りながら、平然を言うシエルダ公爵に呆れたように言
って、セドウィグは続けた。

「ルビウスも同罪だな。彼は仕事にかかりきりだ。」

「ねえ、話が全然見えないんだけど。ちゃんと説明して頂戴。」

口尖らして話に割って入ったりリアンヌに、ごめんごめんと謝って
から、セドウィグは頭を整理するように話し始めた。

「えーっと、何から話せばいいんだろうか。僕が駆け落ちでマリ―
と国を出たというのは、ルビウスから聞いたかい？」

「ええ、少しだけ。」

「それが一番上の兄、今の現国王の機嫌を損ねたのか、あの馬鹿な
長兄上^{あにうえ}は、戦争を始めて……。けれど、あの原因は僕のせいではある
ね。」

「それで幽閉されいて、なんで今頃死刑なの？」

「最初は古代魔女と関係を持って、国を守るはずの者が国を出たか
らだったかな。確か、その罪で幽閉ということになったんだ。だけ
ど長兄上は、僕を都合の良い人形にしか思ってたから、僕が
反発したことに怒ったのかな。それに、古代魔女との結婚は法律で
禁止されていたから。」

「禁止？」

「古代魔女に関わることも、関係を持つことさえもこの国では厳禁
なんだ。理由は知らないけれど。まあ、くだらない理由じゃないか
な。長兄上がりリアンヌを殺そうとしたのも、そんな理由かな。他

にも理由はあると思うけど。」

「じゃあ、お母さんと結婚したから？」

「ルビウスが前に言っていたけれど、籍は入れていないんだよ、僕達は。だから、君のことも僕の子供もとして認知されていない。：ごめんよ。」

すまなそうに言うセドウィグを見つめて、リリアンはふっと微笑んだ。

「なんで謝るの？ただ紙切れ上は他人ってだけでしょう？それでもあなたが私のことを娘だって、そう思ってくれてるならそれでいいよ。」

「リリ：。」

「でも、幽閉されて時間はかなり経ってたんじゃない？今更処分を決めるって遅すぎじゃない？」

「当時は、十年間の幽閉となってたんだ。で、君が10歳の時に長兄上（兄上）からまた国に尽くすと誓うなら、条件付きで刑を軽くしてやるって言ってきた。それが、長期休暇で君達がポータリサに避暑に行く、少し前のこと。だけど、それを断ってしまったから、死刑になるのは確定って訳かな。」

「何も死刑にしくたって：。」

「大人しく言いなりにならない者は邪魔になるだけで、始末した方が早いからね。まあ、僕もまだ死にたくはないから、アーサーの家

に世話になってるわけだけど。リリアンヌの冬季の試験が終わった辺りに、適当な時期に話してくれてアーサーに言ったはずだけだ。」

「そんなこと言っていたか？」

「これだもんなあ。」

チロリと見やった視線をかわしたアーサーを、セドウィグはやれやれと首を振った。

「二人は知り合い？」

仲良く会話する二人を交互に見ていたリリアンヌは、首を傾げて尋ねた。

「知り合いというより、兄弟みたいなものかな。親戚同士ってのもあるし。ルビウスの父親、クロムウェルとは小さい頃からよくお互い家を行き来したけど。」

「ふーん。だから、この家に来てたの？でもどうせなら、カインドの邸にこればよかったんじゃない？」

「ルビウスの家には、長兄上に見つかりやすいからね。」

「だからといって、ここに居座られるのも困る。ただえさえやかましいというのに。」

「良いじゃないか、君は殆ど家にいないんだから。安心して居れる場所も少ない僕に、つれないことを言わないでくれ。」

「国を出ればいいものを。」

「簡単なことを言うもんじゃないさ。あの人が生きている限り、僕の自由なんてありはしないんだ。勿論、ルビウスもね。」

「これからどうするの？」

国から出ず、逃げ隠れるのは彼の性分ではないようだ。

「この腐った世を終わらさなければならぬね。」

彼はそう言っただけで、笑みを湛えながら茶を啜った。

「何か策でもあるの？」

興味深く聞くリリアンヌに視線を戻して、静かなその瞳で語ってくれた。

「まだ計画を立て始めたところでね。何とも言えない。けれど、これだけは言えることがある。いいかい？君が生まれる少し前に起こった歴史上最悪の戦、ウルーエッド戦のようなことが今また起ころうとしている。今度は、ここいら全ての国を巻き込んで。今あちこちで、魔法師が消えて悪魔達が増えて来ていると聞いた。国民にも悪魔達の影響が出てるらしく、魔法省は混乱していると。それに、今まで戦に無縁だった村外れでも、厳しい王政に反発する村民との紛争が起こってる。全てマリエダを筆頭にした小汚い鼠の群れの仕業だろうがね。」

「何が目的でそんなことを？」

「あの人は、この世の全ては自らの玩具だと思ってる。人の弱みや隙については、自らに服従させているんだ。器が手に入れたあとは、この国を手に入れる為に革命を起こすのかな？」

「革命って。」

「うん、そんな良い響きなもんじゃないね。まあ、こちらもちあらが派手にやってくれていれば、やりやすいつてもんさ。アーサー。」

そこまで話すとセドウィグは、茶をカップに注いでいるシエルダ公爵に向き直って声をかけた。

「なんだ。」

「魔法省に消えた魔法師の名簿を報告するのだろうか？そこに僕の名前を入れておいて。魔法省からの信用がある君なら、簡単なことだろう？この機に便乗して、使わせてもらわないと。それと、リリアンヌ。」

殿下が消えたなどと知られれば、大変な騒ぎになるだろうな。

どこか他人事のように考えていたところに、再び視線を戻したセドウィグに話掛けられて驚いた。

「えっ、なに？」

「ルビウスはいろいろ忙しいみたいだけど、あまり彼を困らさないようにね。君は一樣狙われてる身だから。」

「困らしてなんかないわ。」

「どうだか。」

ふんと胸を張って言った言葉は、セドウィグに軽く笑ってあしらわれた。そんな二人の父娘を全く気にせず、この邸の主は懷から取り出した紙をチェスの駒が散乱した机に広げている。

「なあに、それ。」

丸めてあった紙が机に広げられると、リリアンヌは覗きこむように彼の向かい側から乗り出した。

「仙里眼だ。^{せんりがん}魔法省に出す報告書に使われている。」

「古来からある魔法紙だね。精霊や神をこれと契約させて、複数の者を監視、搜索出来るのだけれど、これは……。蒼^{あお}の神ヘクトルか。」

「蒼の神？」

驚いたように紙を見やるセドウィグに、オウム返しのように問いかけた。

「12人姉弟の神だね。ほら、ルビウスが黒の神を従えてるだろう？ あれの姉弟だよ。破壊的な力を持つ黒の神に比べて、蒼の神は比較的穏やかだけれど、少々気難しくて。なるほど、余計なことを言わないアーサーとは気が合うわけか。」

一人納得するセドウィグの脇で、リリアンヌは黒の神と言う名を必死に思い出そうと頭を捻った。どこかで耳にした名前だが、どうも

思い出せない。

そんなことをしている内に、小ぶりの机に余るほどだった魔法紙は、青白い光と共にどんどん大きく変化していく。紙の縁から更に新しい紙を再生しているようで、一気に机からはみ出た。机から出たならば、重力に従って垂れるはずだが、紙はなんてことはないかのうに、ふわりと浮き上がっている。

「アーサー。」

少し非難がましいセドウィグの声に、用紙の上に乗り上げていたりリアンヌは体を起こして上を見上げた。座っていた椅子と共に空中に浮く彼は、胡座をかいて魔法紙を眺めている。

「何故こんな狭い部屋で、彼を取り出したんだ。」

「お前が、己の名を書き加えろと言ったからだろう。」

セドウィグの向かいに、同じく空中に浮くシエルダ公爵がいた。黒い外套を穩やかに**マント**はためかせる彼は、突っ立ったまま何やら呪文を口にして魔法紙の上に静かに降り立った。

まるで呼吸するかのように、穩やかに上下を繰り返している魔法紙は、リアンヌの手から温かい熱を送って来ている。

「…生きてるみたい。」

リアンヌのその言葉に小刻みに笑った魔法紙は、大きくその身を波立たせた。あやうく振り落とされるのではないかと言うほどの勢いに、紙に必死にしがみついていたリアンヌは、向かいに紺青色の小さな竜が座っているのを見つけた。

「…あなたが蒼の神？」

ちっちゃな二本の角、飛べるかもわからない蝙蝠の翼を含めて、手のひらに乗るほどの幼い竜であるが、彼の持つ貫禄は神と呼べるほどのものであった。幼い竜は、その問いには答えず、藍白の瞳を細めて整った鋭い歯を見せた。まるで微笑んでいるようなその姿に、リリアンヌも同じく微笑んでみせた。

その姿に一人満足した様子の蒼の神は、その小さな口からふうつと青白い炎の息を吹き出した。その炎はしばらくもやもやと空中を漂っていたが、やがて決心したように一つ一つ細かい文字に変化して、紙の上に並んでいった。しまいには、小さな竜自身も青白い炎に変化して紙の上に文字を作っていく。

「うわぁ、綺麗。」

竜の光に魅入っているリリアンヌのそばで、シエルダ公爵は全く興味なさそうに次々と書かれる文字を眺めている。その姿に、リリアンヌも紙の上の文字に目を向けた。紙の上には、次々と青い文字で人の名が書かれている。

「これが今、行方不明の人の名前？」

「そうだ。ヘクトル、セドウィグの名前も加えておけ。」

すると、紙の隅に座るリリアンヌの近くで、新しくセドリック・フアム・リヴェンデルと名前が追加された。

「これはリヴェンデルだけの魔法師？」

「いいや、レイヘルトンとサンリーチも含めてだ。さっきより随分

と増えたな。」

シエルダ公爵の近くに這って行ったりリアヌは、ふと目にした文字に呆然となった。

「…なんで？」

「うん？どうしたんだい。」

近くにやってきたセドウィグに、そこから目を離さず指で指した。

「…ジョーン兄さんの名前がある。」

「ジョーンって、ルビウスの三番弟子だった、ジョナサンⅡヘル・ハイデイリアのこと？」

そう、青い文字が並ぶその中に、つい先ほどまで一緒だった兄弟子の名があった。

3. 灰色の鼠

信じられないというように文字を見つめていたリリアンヌは、シエルダ公爵にすがりついた。

「ねえ！ここに書かれている名前の人は、行方不明って言ったけど、ジョーン兄さんはさっきまで魔法省で私達と一緒にだったのよ。」

「この場所に名を連なっている者は、ヘクトルが魔力を感じ無い者ばかりだ。魔力を奪われているか、既に死んでいるか…。」

「そんなはずないわっ！」

「リリアンヌ！」

セドウィグの制止する声を背に聞きながら、リリアンヌはシエルダの邸を飛び出した。

つい先ほども一緒にあったジョナサン。そんな彼が数刻も経たないうちに死んだなどと、リリアンヌは信じたくなかった。テイルーズ（渡り鳥の精霊）を召喚して、先ほど教えてもらった彼の店に真っ先に飛んだ。そろそろ日が暮れ始めた頃に店先についたものの、彼の店は閉まったままで、呼び掛けても返事はなかった。仕方なく、カインドの邸に帰途につくことにした。

「ジョルジオっ！」

出迎えてくれた執事のジョルジオをひつつかまえ、食い付かんばかりに問いただそうと構えた。

「お帰りなさいませ、リリアンヌ様。」

「ねえ、ジョーン兄さんが…。」

「兄さんがどこかしたのか？」

そこへ現れたのは、菓子を頬張りながら廊下を歩いてきたジュリアン。

「あ、ううん。なんでもないの。」

不思議そうに首を傾げる二人を置いて、リリアンヌは軽く笑ってその場を離れた。

実の弟であるジュリアンに聞こうかとも考えたが、知っていれば呑気に菓子を頬張っているはずもない。すっかり混乱したリリアンヌは、まだ外に留まっていた小型の赤鳥テイルルーズに使いを頼んだ。レイヘルトンに向かうと言っていたルビウスに手紙を送ったのだ。

「リリア、ご飯食べよう。」

もし、ジョナサンが魔力を消して行方不明ならば、ルビウスはすぐに帰って来るはずだ。

そんな考えに浸っていたリリアンヌの背後から、レイチェルが玄関の扉から顔を出して声を掛けてきた。

「うん、今行く。」

呑気にご飯を食べる気にはならないが、腹が減ってはなんとやら。もう随分と遠くに去った渡り鳥をちらりと見やって思った。帰って来たルビウスに問い詰めれば、何か教えてくれるだろう。そんな安

易な考えを胸に、邸の中へと戻った。

しかし、一週間。さらには1ヶ月になってもルビウスからの返事はなく、彼自身も王都には帰って来ない。しびれを切らしたリリアンヌは、シエルダ公爵を再び訪ねたが生憎、彼は留守だった。当然、邸にいないはずのセドウイグにも会えず、手掛かりの一つも掴めずに、無情にも3ヶ月の月日が経っていた。そんなある日…。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた。ハーバー男爵のお弟子さんの話でしょ？」

「怖いよねえ。噂では、見つかった時、灰色の鼠が群がってたんだって！」

「うそお！いやだ、私弟子なんかやってなくて良かったあ。」

冬休みを間近に控えた学校のあちこちで、ひそひそとそんな噂が立ち始めていた。

「なんの噂だろ？」

「さあ？」

鞆に教材を仕舞っているレイチエルに、隣に座っていたリリアンヌが尋ねた。しかし、噂話などに興味がないレイチエルは、さらりと流して席を立った。リリアンヌも彼女に続いて席を立ったが、教室の隅で話すその内容が気になって彼女達に声を掛けた。

「ねえ、なんの話をしてるの？」

「えっ？」

「あっ。」

ぱっところちらを向いた二人は、リリアンヌの姿を見ると途端気まずそうにお互いを見やった。

「大した話じゃ…。ねえ？」

「う、うん。カインド公爵のお弟子さんなら知ってる噂だし。」

ちらりと黒い上着を着るリリアンヌを見たおさげの女子生徒は、もごもごと言いくそうに隣の茶色の長い髪をした友達を見やった。

「私、聞いたことないの。良かったら、話してくれない？」

渋る二人を説得するのはかなり骨が折れたが、必死に頼み込んだことで、どうにかその思い口を開かせることに成功した。

「従兄から聞いたんだけど…。」

同じ学校に在籍する茶髪の少女の従兄に、魔法使いの家系であるクラスメイトがいるという。

「従兄のクラスメイトは、ハーバー男爵のお弟子さんをしてらしたらしいの。でも、最近になって学校をよく休んでいたらしくて。それである時、従兄のところにハーバー男爵がいらして、そのお弟子さんを知らないかって。」

「知らないか？師匠も弟子の行方を知らなかったの？」

「そう、従兄も知らないからその日は、王都の外れにある屋敷に帰られたらしんだけど…。」

いつもは使っていない離れの屋敷の扉が開いていて、その中にすっかりやせ細って亡くなっている弟子を見つけたという。

「お弟子さんの姿が見えなくなったのは、ほんの数日だったのに、その遺体は骨の皮だけだったって。それで、その子の身体には無数の鼠が群がっていたらしいの。」

「鼠…。」

「リリア。」

すっかり考えに浸っていたリリアンは、はっと自分を呼ぶ声に顔を上げた。

「どうしたの。」

不思議そうにこちらを覗き込んでいるレイチェルに、にっと笑って頭を振った。話しているうちに顔色が悪くなった彼女に礼を言って、教室を移動した後ずっと考えに浸っているリリアンをレイチェルはずっと不思議に気にしていた。

「なんでもないよ。どうかした？」

「風蘭が来てる。」

話題を変えるために尋ねた言葉は、思いも寄らぬ名前を含んで帰って来た。

レイチェルが指し示す校庭を見れば、ぽつんと佇む風蘭がいた。真っ赤（猩々緋色と呼ぶのが相応しい）異国の衣を纏う彼は、殺風景な校庭にやけに目立って見える。

「珍しい。どうしたんだろ？」

リリアンヌとレイチェルが窓から眺めているのに気がついたらしく、注目されている彼は両腕を交互に袖に突っ込んで、ぴよこんといったものの挨拶をした。学校に現れるなど、今まで一度もなかったためにリリアンヌはガタンと席を立て、教室を飛び出した。

「あれ？リリアンヌ、もうすぐ授業始まるよ。」

「レイルもどこいくの―？」

「ちょっと。」

なぜかついてきたレイチェルと共に、クラスメイトの間をぬって校庭へと向かった。

「風蘭！」

《リリアンヌ様、学校まで押し掛け、誠に申し訳ありませぬ。》

「それはいいの。それよりどうしたの？」

《私め、リリアンヌ様がお困りでらっしゃると聞きました。リリアンヌ様がお待ちでらっしゃるのにも関わらず、返事も寄越さないと

は些か許せませぬ！ですので、あやつを連れて参りました。》

「へ？」

自信気に胸を張る彼は、ぴっと左手の人差し指を立て、空を見上げている。風蘭に習って、二人もすっかり冬となった曇った空を見上げた。見上げる三人の頭上の遥か上から、何やら黒い物体が凄まじい速さで向かってくる。何やら身の危険を感じるリリアンヌだが、だんだん大きくなってくる物体の正体を見つめて驚いた。

黒い物体は三人の頭上、少し上で速度を緩めてふんわりと足元から着地した。大した衝撃はなく、緩やかな風が舞っただけの中で、リリアンヌは久しぶりに見るその人物に少しだけ笑いかけた。

「全く、満足に仕事さえさせてくれないとは。」

舞い降りて来た当人は、黒い外套マントに積もる雪を叩き落としながら、実に不機嫌そうだ。

《おぬしが、リリアンヌ様の手紙にも返事をしないからではないか。

》

「仕方ないだろう？ 珍しく向こうで、大吹雪になってしまったんだから。」

《そんな時こそ魔法を使えばよいではないので？ 本当に魔法使いだからわかりませぬ。》

「失礼だな。こっちにだって、やらなくてはいけない仕事があるんだよ。神隠しなんか使って。ああ、後でアレックスに散々怒られる

な。」

とんがり帽子を頭から取って風蘭を睨んでいたルビウスは、ふっと表情を和らげて言った。

「ただいま。リリアンヌ、レイチェル。」

「お帰りなさい。」

素直に師を出迎えたレイチェルとは反対に、リリアンヌは笑っていた顔を引っ込めて口を一文字に結んだ。

「リリアンヌは、お帰りとは言ってくれないのかな？」

「またすぐに出掛けるんですよ。」

ふーんとそっぽを向くリリアンヌに少し苦笑しながら、ルビウスは弁解するように彼女を見て言った。

「向こうの仕事は中途半端だけど、多分アレックスがやってくれるだろうし。しばらくはこっちにいるよ。来客が来るかもしれないしね。それに、ジョナサンのこともあるから。」

「どうだか。」

ちろりと白い目を向けるリリアンヌに構わず、彼は仕方ないと言葉を続けた。

「うちの小さな魔女さんは、ご機嫌がよろしくないようだね。せっかく、ジョナサンの詳しい情報を聞こうかなと思っていただけ。また今度かな。」

「い、言わないなんて言ってない！」

くるりと後ろを向いたルビウスの腰にしがみついて叫んだリリアンヌは、瞬時にぱっと離れて距離を取った。

「じゃあ、授業が終わるまで邸で待ってるとしよう。」

「その必要はないわ。早退してくるから。ね、レイル。」

こくんと頷くレイチェルを連れて、建物に戻ろうとするリリアンヌをルビウスはちよつと待ったと引き留めようとした。

「いや、それは…。」

「風蘭、ルビウスさんがどこにも行かないように見張っててね。すぐ戻ってくるから！」

「こら！リリアンヌ、レイチェル！」

《承知しました。》

あっさり無視をされて、風蘭と二人、取り残されてしまった。

「蒼の神っていうのと契約してる魔法紙に確かに、ジョーン兄さんの名前があったの。」

カインド邸に向かう馬車の中、リリアンヌはルビウスにシエルダ公爵とセドウィグ殿下に会った事、行方不明者の報告書（魔法紙）に

ジヨナサンの名前が書かれていた事を伝えた。

「違う日に、シエルダ公爵を訪ねても居ないって言われて……。」

「叔父上は、ほとんどあの邸にはいらっしやらないよ。大抵東にある別荘にいらっしやるから。用がなければ、めったに王都に顔を出されない。だから、あの邸を訪ねても居ない方が多いね。セドウィグ殿下は、冥界に遊びに行ってるんじゃないかな。」

しばらく黙ってリリアンヌの話を聞いていたルビウスは、そう言葉を口にした。

そう言えば、風蘭が客が来ているから冥界に戻ると言っていた。あれは、セドウィグのことだったのかと遅くながら納得した。

「……灰色の鼠、ね。」

「それ、殿下も言ってた。」

「なるほどね、向こうが先手を打って来たか。」

「灰色の鼠って何か意味があるの？」

「魔法師の間では、マリエダ・コウリースのことを灰色の鼠と呼んでいるんだ。つまり、小汚くてずる賢い鼠の群。本人もそう呼ばれてるのを知ってか、昔は灰色の外套を来たり、鼠を僕しもべにした時期もあったからね。」

「へえ。」

うとうとしだしたレイチェルに肩を貸してやりながら、そっとリリアンヌもレイチェルにもたれかかった。

「リリアンヌも眠いのかい？」

「…ううん。」

「いいよ、眠ってても。ついたら起こしてあげるから。」

その穏やかな声に、今まで張っていた気がふっと緩んで、睡魔が襲ってくる。ルビウスの言葉に、確か何かを返したような気がするが、何を返したかは覚えていない。けれど、何故こうも彼のそばにいると安心感に満たされるのか、不思議に思ったのは最後に覚えている。

ずっと睡魔に誘われていったリリアンヌを穏やかに見つめていたルビウスは、窓枠に肘をついたまま目を閉じるとしばらく経って、鋭い目つきで馬車の車輪を睨んだ。彼が見やる先には、灰色がかった汚れた鼠が一匹、回る車輪にしがみついている。ルビウスが見やると同時に、鼠は悲痛な叫び声を上げて燃え落ちた。

「…小汚い鼠が。」

そう冷たく呟いた言葉も、穏やかな寝息を立て始めたリリアンヌには、聞こえるはずもなく。

そんな彼女をしばらく眺めていたルビウスは、そっと自らの外套を寄り添って眠る弟子達に掛けてやった。

「本格的に、鼠取りを始めないといけないな。」

リリアンヌの頭の少し上に右手をつきながら、声になるかならないかの囁きを残して、微笑を浮かべた。その彼の顔は、実に美しく、恐ろしいほどだった。そんな笑みで、リリアンヌを眺めていた彼は、不意に彼女の頬に唇を近づけた。が、頬に唇がつく、ほんの少し手前で止まって、閉じていた瞼をうつすらと開けた。その漆黒の瞳に、穏やかに眠る彼女を映すと小さく笑って、彼は頬ではなく額に軽くキスを送った。静かに走る馬車の中で、何が起こったかは彼しか知らない。

4. ハイディリアの息子？（前書き）

少し長くなったので、2つに分けました。

4. ハイディリアの息子？

「リリアンヌ、レイチェル着いたよ。」

「んー？」

「二人ともよく寝ていたね。」

よく耳に届く声に起こされて目を開ければ、目の前にはにこやかに笑うルビウスの顔があった。驚いて起き上がって、辺りを見渡す。いつの間にか馬車はカインドの邸の前へと到着していた。

「え、寝てた？」

まだ、夢の世界から醒めないレイチェルを置いて、馬車の外に降り立つと出迎えるジョルジオとは別に、中年の女性の声が邸に響いてきて驚いた。

「まあ！ルビウスっ、この子がそうなのね！」

「あっ、公爵…。」

「ぐえっ。」

お帰りなさいませと頭を下げるジョルジオの背後から、一瞬にして現れた女性に逃げる隙さえなく、抱きしめられてしまった。

「加減をしていただきませんと、リリアンヌが潰れてしまいます。」

そこへ呆れた様子のルビウスに救出されて、ほっと息つきながら、その女性を見上げた。

「あらあら、ごめんなさい。悪気は無かったのよ。」

「ええ、わかっています。しかし、わざわざ出迎えなどしていただくなくても。チェスター公爵は、お客様なのですから。といっても、お客様をお待たせしてしまったようですが。」

少し申し訳なさそうに言うルビウスに、チェスター公爵と呼ばれた枯色の髪を緩く編み上げた女性は、気にした様子もなくリリアンヌに桃色の瞳を向けた。

「リリアンヌ、こちらベラ・ヒュンリ・チェスター女公爵。私の母の友人だよ。公爵、リリアンヌです。」

そう紹介された彼女は、ニコツと笑い、そっと右手を差し出しながら言った。

「はじめまして、ね。あなたとは。私、あなたのご両親の駆け落ちに一役買わせていただいたの。お会い出来て光栄だわ。リリアと呼んでも？」

「それは両親がお世話になりました。こちらこそ光栄です。ええ、お好きなように呼んで下さい。」

女公爵の手を取って、握手を交わしたりリアンヌはぎこちない笑顔を見せた。

「六番弟子のレイチェル？寝ているのね、挨拶したかったけれど。」

残念、また今度ね。」

そつと覗いた先に、また馬車の中で眠り始めたレイチェルを眺めていた女公爵は、残念そうにルビウスに言った。

「ええ、先ほど起こしたのですが。ジョルジオ、悪いがレイチェルを部屋へ運んでやってくれないか。公爵、外は冷えます。邸の中へ。」

ジョルジオにそう伝えたルビウスは、女公爵を連れて邸に戻ろうと足を向けた。

「リリアンヌ？君もおいで。」

ジョルジオを手伝おうと馬車の側に佇んでいたリリアンヌに、ルビウスは立ち止まってそう言うと言いつつ再び邸に足を向けた。言われたリリアンヌは、少し迷っていたが、やがて決心したように二人の後を追った。

「本当に、何年経ってもこの邸は変わらないわね。」

応接室に通された女公爵と共に、リリアンヌはやけに落ち着きなくルビウスを待っている。

「うふ、ローズマリーにそっくりなこと。あの子だったら、殿下に求婚されたときどうしたらいいのか、オロオロして。」

「…お母さんが？」

「そうよ。私の所に来て、オロオロと。一回は、その求婚を断って、

でも殿下の方が一枚上手だったわね。」

「上手ではなく、あれは一種の脅迫では？」

うーん、と立ったまま考えていた女公爵の背後の扉から、外出着から少しゆとりのある服へと着替えたルビウスが現れた。

「あら、あれは立派な求婚ではない？」

「かなり強引な、ですがね。」

「そうかしら。」

リリアンヌの隣に腰掛けたルビウスに従って、女公爵も向かいに大人しく腰掛けた。

「で、わざわざ公爵自らおいで頂くほどですから、何か重要な内容なのですか。」

レミカソラ（ルビウスに聞けば、ソラだったらしい）にお茶を出してもらって一息ついた頃、ルビウスが女公爵に話を切り出した。

「ええ、まあ。」

カチャリとカップを机に置いた彼女は、少し困ったようにその可愛らしい顔に眉を寄せた。

「チェスター公爵家は、代々ウルーエッドを治めているでしょう？公爵を継ぐために婿として主人が生きてた頃は、あんまり考えなかったの。けれど、ほら。ウルーエッド戦があった時は、三つ子の息

子達の一番下の子を身ごもって、私は北の実家に帰っていたから。それで、主人が戦で亡くなってしばらく経ってから、おかしいことが起こってどうしようかと。」

「それは、どのような事で？」

「五年ほど前に、変な流行り病がウルエッドのあちこちで流行って。それで、末の子と長女は亡くなったのよ？それからよ、野菜がどれも変色したり。最近では、魔法師達や弟子が行方不明で、私の三つ子の内の真ん中の子も弟子も行方不明なの。王都でもそうだと聞いたわ。」

自分の息子達が行方不明だというのに、困ったわと呑気に首を傾げている女公爵を、リリアンヌは信じられない思いで見つめた。

「それでも心配しているのよ？」

「あ、ごめんなさい。」

顔にでも出ていたのだろうか。思っていた事を女公爵に言われて、リリアンヌは素直に謝った。気にしていないようだが。

「王都の外れのハーバー男爵の所からは、死人が出たと聞きました。」

そんなリリアンヌの隣で、険しい顔で考えているルビウスはそう呟いた。

「ええ、これから。山のように死人が出るでしょうね。」

「魔法師の？」

「いいえ、今では誰でも所構わずね。それで、あなたの所も三番弟子だった子が、行方不明だと聞いたから。ハイディリア家の息子さんでしょう？」

リリアンヌに優しい答えた公爵は、ルビウスに視線を戻した。

「ジョナサンです。三男はジュリアンといいます。私も先ほどレイヘルトンから戻らされたばかりで、リリアンヌから話をついさっき聞いただけです。」

「そう、ジョナサンね。レイヘルトンから？じゃあ、あの孤児院に行って来たのね。」

「孤児院？」

「そうだよ。リリアンヌ、君が居た孤児院だ。」

「あなたが居た孤児院が、何者かに襲われたと聞いたの。」

「それ、で…？」

恐る恐る聞くりリアンヌに、ルビウスは無情にも言い放った。

「全員、骨となって見つかったよ。」

「ルビウス、もう少し言い方ってものが…。」

「どう言い方が？彼女に、生半端な伝え方をすれば、また自分から

首を突っ込んで行きます。自分がどのような状況に置かれているか、知る必要がありますから。」

窘める女公爵にルビウスは、しっかりとリリアンヌを見つめて言葉を繋いでいる。

「私のせい？私があそこにいたから？ジョーン兄さんも…。」

「ジョナサンのことは、まだわからない。だけど、あいつらは君の逃げ道を塞いでいるつもりなんだよ。今じゃ誰であっても殺して、自分の力を蓄えている。肉体や血液、魂からも魔力は吸い取れるから。頼むから、勝手に行動するのはよしてくれ。いいね？公爵、ハイディリアについて、何か情報が？」

ルビウスには、何度か注意を受けたことがある。けれど、この時の彼は、どこか寂しげで、焦っているようだった。

何故だろうか。

そんな風に考えるリリアンヌから視線を外したルビウスは、いつの間にかいつものように、落ち着いた様子を身につけている。

「殿下から、ハイディリアについて調べて欲しいと連絡を頂いたものだから、息子に調べさせたの。そして、長男…えっと、エイドリアンだったかしら？5年ほど前から王都に行ってから、行方不明なんですって。あなたの弟子であるハイディリア家の子については、何も言っていなかったらしいけれど。それを伝えたくて。」

何か言いたそうだった公爵であったが、ルビウスに促されて口をひらいた。

「そうですか、エイドリアンなら家に一度来ましたが。5年前から、向こうにいたということですか。もしかしたら、ジョナサンと何らか関わってるかもしれませんね。貴重な情報をありがとうございます。」

「いいのよ、ちょうどこちらに用事があったものだから。」

さて、そろそろお暇しようかしらと腰を上げた女公爵に続いて、ルビウスとリリアンヌも見送りをするために腰を上げた。

「昔から王都は物騒だったけれど、今じゃどこも一緒ね。」

「ええ、そうですね。公爵もお気をつけてお帰り下さい。良かったら、お送りしましょうか？」

「せっかくだけれど、遠慮しておくわ。明後日の合同会議に出席するから、しばらく王都にいるのよ。」

嫌だわあと呟く公爵は、リリアンヌに視線を向けて、人懐っこい笑みを浮かべた。

「今日は会え良かったわ、リリア。また機会が会ったらお会いしましょう？」

「はい、ありがとうございます。」

玄関まで送ると申し出たルビウスと話しながら、部屋を去っていった。

取り残されたリリアンヌは、ぺたんと再び椅子に座って、呆然を宙を見つめた。

ほとんど目が見えないけれど、子供達を見つめる瞳はいつも優しくった院長。生意気で、憎らしかった同じ孤児院の彼らも。けっして裕福や、居心地がよいとは言えない孤児院だったが、あの頃のリリアンヌにとって唯一の居場所だった。

「みんな。…殺された？」

本来ならば、自分を狙ってのはず。

『古代魔女は不幸を呼ぶんだろ？』

『ちげーよ、死を呼ぶだって。』

『リリアンヌの側にいたら、死神が来るぞー。』

『古代魔女なんか生きてちゃ、いけないんだあ。』

『こっちにくるな！化け物がっ。』

言葉を覚え始めたばかりの子供達にとって、大人達の話の先々に含まれる棘のある言葉を真似して、相手を傷つけることは遊びの一つであった。しかし、それは間違いなく幼いリリアンヌの心に影を作ったことであろう。

膝を抱えて、うずくまっていたリリアンヌにふと、隣に座る人の気配があった。

「どうしたの、リリアンヌ。」

「…なんでもない。」

「こんな薄暗い部屋で、一人うずくまっていて、なんでもない？」

両膝に顔をうずめているリリアンヌには、ルビウスの表情は見えないが、言葉使いからして彼は確かに顔をしかめただろう。

「ほっておいて。…あっちにいてよ。」

「やれやれ、思春期のお嬢さんの相手は大変だね。世のお父さん方に同情するよ。」

いつの間にか夕暮れを過ぎた部屋は、薄暗い闇に包まれている。チェスター公爵が出て行ってから、どれくらいふさぎ込んでいたのかはわからないが、ルビウスが心配して様子を見るに来るぐらいいは経っているようだ。隣に座るルビウスは、いくら経っても立ち去る気配は見せず、静かな静寂がしばし部屋を漂っている。

「なんか用なの？」

できれば一人にしてほしい気分だが、こんなところでずっといた自分がいけなかった。

ため息をつきたい気分で、ルビウスに問えば、彼は静かに言葉を返してきた。

「いいや、特には。だけど、孤児院のことで落ち込んでいるかと思っ
ってね。」

わかっているなら、どうして一人にしてくれないのか。

「リリアンヌ。…こつちを向いて。」

「触らないでっ！」

いまだに目を合わさないリリアンヌに、そつとこちらを向かそうとルビウスが触れた。しかし、リリアンヌはその手を振り払おうと右手を上げた。

「リリアンヌ！」

振り払おうと上げた手は、逆にルビウスに掴まれ、引き寄せられた。

「は、離してっ！」

手を掴まれ必死に抵抗しても、所詮はまだ身体が成り上がっていない少女と、成人した男。その力の差は歴然としている。

抵抗しているうちに、後ろに傾いたリリアンヌにルビウスも自らの体重を掛けて倒れ込んだ。

「…孤児院の人達が死んだのは、リリアンヌのせいだとは一概には言えない。けれど、君が古代魔女だったから。そのせいで死んだのではないのだよ。だから、一人で思い悩むことはないだ。」

「…思い悩んでなんか。」

両手を顔の脇に痛いほど抑え込まれて、身動きが取れないためにリリアンヌは睨みをきかけて目の前にある闇を見据えた。

「じゃあ、何を考えていた？」

ジョナサンが消えた。

それは、自分のせいではないか。ここにいれば、他のみんなを巻き込んでしまうかもしれない。

「僕の前からいなくなるなんて、許さないよ。」

まるで、心を見透かされたように。漆黒の闇は、静かにリリアンヌを見つめていた。

「で、でもっ。」

その闇に負けずと強きに出たものの、結局喉の奥から出たのはか弱い泣きそうな声。

「自分で何もかもしようとしないで、僕に頼ればいい。あの孤児院が君の居場所だったように、今、君の居場所はここだよ?」

ふっと表情を和らげて、ルビウスは瞳を閉じて、互いの額をくっつけた。

「巻き込んでしまう?巻き込んだのは僕の方だよ。…リリアンヌは、周りを気にして我慢しすぎている。悲しかったら泣いて、時には我がままになって。人に、そばに居てほしいと甘えたっていいんだ。」

泣くことは、とうの昔に忘れてきた。

そっとひらいた闇と反対に、リリアンヌはそう思いながら瞳を閉じた。

ぼろぼろになって、けれどそれほど不便は感じなくて。

質素ではあっても、子供達の分は必ず朝晩食べる物を与えてくれた。同じ孤児院達に酷い言葉を投げかけられても、見ず知らずの人に投げかけられる言葉よりは我慢できた。

雨漏りが酷く、隙間風も酷かったが、何より院長の暖かさがあった。じんわりと目尻に浮かぶ涙に、ルビウスは黙ってリリアンヌの瞼にキスをした。それに促されるように目を開けたリリアンヌの瞳からは、静かに涙がこぼれ落ちた。

もう時刻は、昼に近い。

窓から差し込む冬の光に起こされて、リリアンヌは目を開けた。

あの後、涙が止まらなくなったリリアンヌを抱きしめて、彼は涙がとまるまで宥めてくれた。結局、涙が止まってから部屋に送ってもらったのは覚えているが、馬車の中で眠ったにも関わらず、その後すぐに眠ってしまったのだった。

「…恥ずかしい。」

すっきりとした気分ではあるが、今考えると実に恥ずかしい限りである。

「会いたくないなあ。」

同じ家に住んでいれば、嫌でも顔を合わす。ノロノロと寝台から起き上がったリリアンヌは、気が重いながら着替えを始めた。しかし、なにやら邸の中が騒がしい。

「お客さんでも来てるのかな。」

着ていた寝着を寝台に放り投げて、慌ただしい邸の中へと向かった。

「帰れよっ！」

「なんだとっ！誰に向かって口を聞いているんだ。」

身なりを整えて騒々しい玄関先に降り立てば、淡い栗色の髪を逆立てて来客に吠えているジュリアンがいた。

「なに？リアン兄さん、どしたの。」

開かれた玄関扉には、一人の青年。灰色の髪に、茶褐色の瞳のその姿は…。

「あ…、ジョーン兄さんとリアン兄さんの兄貴？」

「「兄貴なんかじゃねえ！！」」

若干からかいを含んだ言葉に、見事に息のあった反論をかえされた事に苦笑しながら、ジュリアンの脇に佇んだ。

「何の用なんだよ。」

「お前に用はないと言ってるだが。腰抜けがっ。」

「ああ？お前に言われたくないね。」

「まあまあ、リアン兄さん。」

兄弟喧嘩の真っ最中であるようだ。小さな犬が吠え立てるような兄

弟子をどうと抑えながら、あの見下した視線を真正面から捉えた。

「カインドの御当主は？」

「いないよ。」

ふんと鼻を鳴らしてリリアンヌから視線を逸らしたエイドリアンは、ジュリアンにそう返されて顔をしかめた。

「くそっ、仕方ないな。これを帰って来たら渡せ。」

彼は、分厚い背広のポケットから取り出した一通の手紙をジュリアンに渡すと、くると背を向けて用は済んだとばかりにさっさと去っていつてしまった。

「二度と来んなっ！」

その背中に若干遅れて叫んだジュリアンを横目に、リリアンヌはあまりの寒さに我慢出来ず、一足先に邸の中へと腕をさすって逃げ込んだ。

「何の手紙なんだろうね。」

乱暴に玄関扉を閉めたジュリアンに、振り返って聞いた。

「さあな。ろくな用事じゃねえだろ。」

しかめっ面で真っ黒な封筒を眺めて、ジュリアンは一拍おいてから封を盛大に開けた。

「なにしてっ！？怒られても知らないからね。」

ジュリアンの信じられない行動に、リリアンヌは目を剥いて叫んだ。

「馬鹿、よく見て見ろよ。宛名。」

中身に目を通してながら、差し出した封筒をリリアンヌは疑問に思いながら、その銀色に光るその文字を読み上げた。

「ルビウス・カインド様とお弟子様へ：？」

「つまり、先生に宛ててあるけど、俺達にも関係するって事。ほら、見てみるよ。」

恐る恐るジュリアンから受け取った真っ白な便箋を見れば、真っ先に飛び込んで来たのは真っ赤な色で綴られた文字達。その文字に目を向けて読み上げた。

「親愛なるルビウス様、そのお弟子様。すっかり雪空となったこの頃、いかがお過ごしでしょうか？今回、お手紙を差し上げたのは、カインドのお弟子様であるジョナサン・ハイディリア殿についてでございます。」

つきましては、明日、夕暮れ時に静寂の森でお待ちしております。

：愛を込めて、マリエダ・コウリースより。これって！」

目を見開いてジュリアンに尋ねると、彼は苦々しいそうに小さく呟いた。

「…ジョーン兄さんが捕まった。」

その呟きは辺りの騒ぎを消し去って、リリアンヌの耳にやけに響いて聞こえた。

「そんなっ！」

しばしの間があって、リリアンヌは放心状態であった頭をなんとか働かせて、絶叫に似た叫びを上げた。

「もしかしたら罠かもしれないけど、兄さんが行方不明なんだ。」

ぎりりと唇を噛み締めていたジュリアンは、廊下の奥から姿を現したジョルジオにふらりと近づくと、消え入りそうな声で告げた。

「ジョルジオ、先生に…。」

「リアン兄さん、この手紙私が届けるわ。」

「…リリア？」

そんなジュリアンの背を見つめて宣言したリリアンヌの言葉に、ジュリアンは言葉を切って振り返った。顔には、言ってる意味がわからないと言うように、戸惑いが浮かんでいたが。

「ルビウスさんはどこっ！」

「いけません、リリアンヌ様。」

「リアン兄さん！」

ジョルジオが静かに制する言葉を振り切り、ジュリアンに言葉を促した。

「…ポータリサに、視察に行くって。でも、明日の会議には戻る…
リリアっ！」

その言葉を最後まで待たずに、リリアンは寒い雪空の中へと飛び出した。

5. ハイディリアの息子？（前書き）

リリアンヌ目線です。

殺傷描写がほんの一部、含まれる部分がございます。好まれないという方は、お気をつけください。

描写は薄いですが、念のためクッションを置かせていただきます。

5. ハイディリアの息子？

【古来より仕えし白銀の鷲よ、我の命に応じたまえ】

邸を飛び出して。門をくぐる共に呪文を唱えた。それは、父だと名乗るセドウィグが教えてくれた古きの魔法。

亡き母が、贈ってくれるはずだった古代魔女だけが使う特有の魔法だという。

力強く発したその声を聞きつけ、白銀の光の中から頭上より現れた大きな鷲は、大きな大人が二人は乗れそうなその体を少し旋回させて、ゆっくりと目の前に、茜色の体を落ち着けた。

呼び出すのは初めてだが、受け継いだ古代魔女の血のおかげで、臆することもなく彼女の首元に触れた。まだ雛鳥なのか、ちらほら茜色の毛が抜け掛けている。

毛が抜け切れば、さぞかし綺麗な白銀の毛がその体に輝くことだろう。

「ポータリサに。ルビウスさんがいる場所に連れて行って。急いでね。」

撫でていた手を止めて彼女にそう言うと、慣れた動作で体に乗る、首元に掴まった。茜色の鷲は、声高々に鳴き、成長期のその大きな翼を力強く羽ばたいた。

数回羽ばたいた茜色の鷲は、一気に街中を階下にして、真っ直ぐ東に向かって速度を上げた。

茜色の鷲の長い艶やかな尾が、昼時の太陽に負けじと輝いた。

そんな昼時の太陽がすっかり沈んでしまった頃に、ポータリサの町に降り立った。

初段を受かったといえど、まだ知らない魔法は沢山ある。瞬間移動魔法や変身術などは、ルビウスが危険だからとまだ教えてくれない。そのため、こうして時間と労働をかけなくてはならない。

「…ルビウスさん、どこにいるのかしら。」

茜色の鷲（彼女）が飛び去ると、既に暗くなった町中を見渡した。王都よりも早くも雪がちらほらと積もり、あちこちの家からは光が漏れてきている。その光景に、一あの頃の記憶が被る。

ぎゅっと目を瞑って、被りを降ると真っ黒な外套を胸元で掻き合わせた。冬用の外套だが、橙色のワンピースと白緑の毛織物を羽織るだけの装いは、決して外出するには不似合いであった。

震える体を叱咤して、足を進めて若干俯き加減に町中を進んだ。

「おや、カインド公爵んとこのお弟子さんではないかね？」

少し進んだ、とある小さな家の前で声を掛けてきた唖れた（しゃがれた）声の男性がいた。

驚いて顔を上げると、その優しい薄茶色の瞳を細めて、彼はやっぱりそうだと呟いて続けた。

「夏以外で見かけるのは初めてだなあ。一人で一体どうしたんだい？」

戸締まりの途中だったのか、重そうな木の扉を閉める手を止めて、聞いてきた。

「：ルビウスさんがこちらにいるって。あの、至急の用があるんです。どこにいるか知りませんか？」

夏に避暑にくるルビウスの弟子達は、よく町の菓子屋に買い物に来ていた。時折挨拶を交わしただけの町の人に、突然話しかけられたことに驚いたものの、ルビウスの居場所を聞いてみる。

「ああ、確かガズの所に泊まってらしゃったんじゃないか。ちよつとここで待ってなさい、すぐに聞いてきてやろう。おい、母さん。」

「：なんだい？」

そういえばと言った男性は、家の中に声をかけ、現れた彼の妻であろうすらっとした綺麗な女性に言った。

「カインド公爵のお弟子さんだ。寒そうだから、中にいれて何か温かい飲み物でもやってくれ。わしは、ひとつ走りガズの宿屋まで行ってくるから。」

「あら、ほんとっ！」

断るものの家に押し込まれ、男性はすっかり暗くなった町中に飛び出していった。

奥さんである彼女は、温かい飲み物を出し、入り口からすぐの木椅子に座るよう勧めた。

その強引さに断るのは半ば諦めて、大人しく木椅子に腰掛けた。

「しかし、お弟子さんは大変だねえ。公爵は忙しい人だから、捕まえるのが一苦労だろう？…良い人なんだけどね、今の公爵も。少し変わってるからねえ。この間も家の屋根を魔法で簡単に直してくれ
たし、学校によく顔出しては、校長のお喋りにつかまって…。」

陶器の器に湯気立つ茶を注ぎながら、奥さんは三つ編みに編んだ金髪
の髪を揺らして、一人休まず、先程からずっと喋り続けている。

小さな窓を見れば、外の闇は更に深まって、それと同時に不安を膨
らませた。

「おう！帰ったぞ。」

扉を開ける大きな音と共に、再び姿を現したのは、先程の男性。

「遅かったね。公爵はいらっしゃったんだろ？」

「それが、ついさつき王都に急に戻らなくちゃ行けなくなってたて。
入れ違いになっちまったみたいだな。」

「…そうですか。」

「その変わりっちゃんなんだが、レイチエルを見つけたぞ。」

やあと頭をかく男性の言葉に落胆してから、驚きに目を見開いて男
性の背後に佇む少女を見やった。

「レイルっ!？」

「うー、リリアあゝ。」

家から漏れる灯りで、レイチェルの涙と鼻水でぐちゃぐちゃな顔は、やけに鮮明に見える。

「…一人で？」

「うん、途中までリアン兄さんと一緒だった。」

けど、置いていかれた―。

うわあんと泣き声を上げて、すがりついてくる彼女を宥め、もう遅いから泊まっていきなと勧める夫婦の好意を今度は丁寧断って、レイチェルの手を引いてカインドの別荘に向かった。

おそらく、マーサ小母さんがいるはずだ。ルビウスに連絡を取ってもらえないな。

そんな事を考えながら、少ない街灯が照らす夜道を誰に急かされるでもなく急ぐ。

道中、泣き止んだレイチェルに何故追いかけてきたのかを聞けば、よくわからないというように首を傾げて言った。

「リアン兄さん、リリアが出て行ってからフレッド兄さんに会いに行った。けど、会えなくて。変わりにリックに会ったて。」

どうやら、エリックに何か言われたらしい。

勝手について来たといっても、レイチェルを置いてさっさと行くなど、根は優しい彼らしくもない。

慎重派であろうジュリアンが邸を飛びだすほどだ、エリックに何を

言われたのだろうか。

そんなこと考えていれば、いつの間にか森の入り口にたどり着いている。

森を抜ければすぐ別荘だ。

角灯を持ち合わせていないため、魔法で明かりを灯そうかと話し、レイチェルが青白い光を二人の頭の上に灯した。歩く速度に合わせて、ふわふわと漂う不安定な光は、少々危なっかしくあるが暗い夜道を明るく照らしてくれた。

「あれ？」

「どしたの、レイル。」

別荘まで幾分近付いたと錯覚するほど経った頃、不意にレイチェルが立ち止まって森の方へ顔を向けた。

「水の…音？」

「えっ！レイルっ、ちょっと。」

そう言うなり、森へと駆け出したレイチェルとその明かり。

突如のことに、置いてけぼりをくらった。残された闇と共に啞然と、既に見えなくなった彼女の後ろ姿を見送ることになった。

しばし呆然となっていて、明かりの光も見えなくなった頃、肌寒い冬の寒さと静か過ぎる森の気配を感じて、ぶるりと震えて正気を取り戻した。

梟が鳴く不気味な声に少し怯えて、赤みを帯びた朱色の光を慌てて

つけた。

「…レイチェル？」

灯りをつけて辺りは明るく照らされたが、深い森の木々からどうも見つめられているようで落ち着かない。

呼びかけても戻って来ないであろう、レイチェルを追って渋々真っ暗な森に足を踏み入れた。

「やっぱり、別荘に行つてマーサ小母さんかローベルお爺さんと呼んだ方がよかったかも。」

来た道筋を忘れないように時折後ろを振り返っていたものの、奥へと進むにつれて同じような木々に囲まれてすっかり迷子になってしまった。気づいたときは既に時遅く、時折レイチェルを呼ぶ、自分の声だけが弱々しく聞こえるだけだ。

「変ね、何でこんなに静かなの？」

名の通り静寂であるこの森。

前に一度だけ足を踏み入れたことがあるが、そのときは風蘭がいた。この森に住む姉弟子のオリヴィアも、門番であるアリッサムさえも姿を現さず、生き物の気配が伺えない。

風蘭は、呼んだら来てくれるだろうか。

幽霊が出ても可笑しくない状況で、一人嫌な汗を背中にかいた。風蘭、と言葉を口にしようとしたとき、不意に足元に白い何かが横切った気配がした。

「いやあ！で、でたあーっ。」

すっかり参っていたためか、いつもの勝ち気な性格はどこえやら。大きな叫び声を上げてひっくり返った。

「あいたあ。あれ、…ねずみ？」

しりもちを付いて、未だ足元をうろついている物体をよく見れば、それはまるまると太った白い鼠だった。

キィキィと耳障りな声を上げる醜い鼠は、まるでさらに森の奥へと誘うように、そのどす黒い瞳を向けてから走り出した。

「あっ、待って。」

誘われるかのように、その後を慌てて追う。

鬱蒼と茂る木々の間を抜けて抜けて。

太っている割に走るのが早い鼠の姿は、少し木々が少なくなった荒れ地に辿り着いた途端、その姿を一瞬にして消した。

「…あれ？」

荒くなった息を整えながら、きよろきよると辺りを見渡すが、鼠の姿は見えない。おかしいなと首を傾げた時、背後の草むらがガサッと音を立てて揺れた。

体を硬直させて振り向けば、ぼんやりと佇む…。

「うわっ、びっくりした…。リアン兄さん？驚かさないでよ。」

虚ろな目をしたジュリアンが、すす汚れた服を身につけてそこに佇んでいた。

「…リアン兄さん？どうした、」

「リリア！ジュリアンから離れろっ、今すぐだ！」

話しかけても返事をしないジュリアンに、どこか悪いのかと駆け寄って覗き込むと、切羽詰まったように掛ける声があった。

「ジョーン兄さん！」

近づいてくる気配がある右側を見れば、焦った声のジョナサンが。その後ろにはレイチェルがいる。

「ちっ、くそっ。」

駆け寄ろうとした後ろから、不気味な呪文が飛び出したと気づいた時には、瞬時に移動したジョナサンがレイチェルをかばって木の影へと逃げ込んでいた。呪文があたった木は、悪臭を放ちながらみるみる腐っていった。

「っ！！」

振り向けば、彼は薄気味悪い顔に笑みを湛えていた。

その姿に、目を見開いて小さな悲鳴を上げるとじりじりと後ずさって距離を取った。…そんな時。

「おやおや、もう来ちまったのかい？ 残念だ。今回は僕の出番は無いか。」

すぐ背後の木の上から、しゃがれた少女の声がしたと思えば、あちこちから狼の遠吠えと鳥達の鳴き声が上がった。

「森の者達にも見つかってしまったようだし。新しい駒の働きを早くと見せて貰おうか。ジュリアン、たとと働くんだよ。」

そう言い残して気配は消え、変わりにその隙をついたジュリアンからの攻撃にあった。

「何やってんだっ。」

投げつけられた死の呪文は、間一髪、瞬間移動で飛んできたジョナサンに弾き飛ばされ受けることはなかった。

…変わりに彼から怒声をもらうことになったが。

「ジョーン兄さん、リアン兄さんどうしたっていうの。」

「知らねーよ、とにかくレイルにヴィア姉さん呼びに行かしたから、この暗黙の闇から抜け出すぞ。」

鼠を追いかけて魔法の罠にかかってしまったようで、ジョナサンは来た道に戻ろうと振り向いた。

その背中に、ジュリアンが投げた火の玉が向かい、寸前のところで背を仰け反らして、彼はそれを交わした。

「ジュリアン！ お前っ、誰に向かって…」

振り向いたジョナサンは、怒りのあまり言葉が出ないようで、わなわなと震えていた。

「いやあつ。」

「ジュリアン、あいつ何やってんだ。くそっ、森で火を使うなんてっ。レイル！連水を呼び出せ、リリアは防衛壁を作ってそこにいろっ、動くんじゃねえぞ。」

遠くからレイチェルの悲鳴が上がり、ジュリアンが呟いた呪文により、一瞬にして辺りは火の海と化した。

ジョナサンは、鎮火の雨を口にして新たに木々の脇から出てきた化け物を始末しようとそばを離れていった。

ジョナサンに言われたように防衛壁を作ろうと苦戦するが、元々防衛よりも攻撃派の為か、いくらたってもまともなものがつくれなかった。

空から舞い降りてくる不気味な死神と悪魔達をかわして、攻撃魔法を向けるものの、火の熱さですれすまともな魔法とはならなかった。

「あついつ！リアン兄さん、やめてよ。」

火をよけて雨を呼ぶが、まるで言葉は届かず、ジュリアンは火の能力をさらに上げた。

その顔に不気味な笑みをたたえて。

吹き出す汗を拭ってあちこち逃げ回っていた時、ふらついた足が大きな岩に捕らわれ、体が大きく傾いた。

その瞬間を見逃すジュリアンではない。

『ルビウス・カインド！悪いがお前の七番弟子は貰うぞ！！』

ジュリアンの中にある“何か”が嬉しそうに声を張り上げてこちらに手を伸ばしてくる。死の呪文を口にしながら。

離れた場所にいるジュリアンを見て、まるで目の前にいるかのような錯覚に陥りながら、自身の力を必死に引きだそうと目を瞑った。しかし、慣れないことをするには練習が必要だった。

「動くなって言っただろうが。」

「ジョーン兄さん。」

もうだめかも知れない。そんなことを思った頃、目の前に大きな背が立ちはだかってその人物はちらりとこちらを見やってから、ジュリアンに鋭い一撃を向けた。

ジュリアンから受けた、死の呪文をその身に諸に受けて。

『悪いな、ジュリアン。』と。

それが、ジョナサンの最後の言葉となった。

「ジョーン、兄さん？ジョーン兄さんっ！」

「うああああ、ああ…。」

パタリと倒れ動かなくなったジョナサンを必死に揺さぶって揺り起こそうとするが、彼は一向に返事をしない。

目の端に映るジュリアンは、頭を両手で覆って悲鳴を上げている。

彼の悲鳴のあと、先程まで勢いを増していた豪火は、突如吹いたひんやりと冷える強風で瞬く間に鎮火した。

「森から一匹を逃がすな！」

地が震えるような厳しい声が森に響いたと共に、狼達が角を持つ大型の熊に噛みつき、鳥達が空を飛ぶ悪魔を集団で袋締めになっている。ケンタウロスは逃げ回る鼠を槍で追いかけて回した。

「リリア…、ジョーン兄さんどうしたの？」

そんな光景をジョナサンの傍らで呆然と眺めていたとき、身体をすすだらけにしたレイチェルがやってきた。

「ジョーン兄さん、起きて。先生が来たよ…。」

レイチェルは、ジョナサンを挟むように同じように膝を付き、彼の身体に手をかけた。

「レイル、ジョーン兄さん…。死んじゃった…………。」

そんな姿を捉えながら、独り言のようにその言葉を呟いた。

「う、そだ。…いや、だ、ジョーン兄さんっ、」

その言葉を理解したレイチェルは、目を見開き首を横に振ってその現状を泣き声で必死に否定した。

しまいに大きな声で泣き出したレイチェルをどこか冷静な頭で見てから、動かない兄弟子を見た。目を見開いたまま、石のように動かない彼は、やはり死んでいるのだと知らされた。

森の悲鳴が、遠くに聞こえる。

「ハイディリアの息子が？」

「…ああ、可哀想になあ。弟に殺されたんだと。」

「やっぱり、ウルエッドの呪いがまだ残ってたんじゃないか。しかし、この森に巣を作るなんてっ！あの魔女の顔を見るなんて思わなかった。」

「まったくだよ。」

いつまでそこに座り込んでいたのか。いつの間にか森は静かな静寂に包まれ、木々達のひそひそと話す声が耳に届いた。

「静かに致せ！当主が参られた。」

道を開けよ、道を開けるのだ！」

「リリアンヌ？…レイチェル。」

蹄の音とアリッサムの声の後に、疲れたようなルビウスの声が続いた。

ゆっくりとそちらを向けば、泣き声を上げて駆け寄るレイチェルの姿と戸惑ったようにこちらを向く彼がそこにいた。

「先生！ジョーン兄さんがっ、うっ、ひっぐ。」

一向に泣き止む気配が無いレイチェルを宥めて、同じように疲れた顔をして背後に現れたアレックスに託してこちらにゆっくりと歩を進めてきた。

その姿に唇を噛み締めて目を逸らす。しばらくして、近くで膝を付く気配がして、ルビウスの白い手がそっとジョナサンの首に触れた。そのまま動かなくなったルビウスは、しばらく経って彼の首から手を離すと彼の艶やかな栗毛を撫でてやり、静かに彼の瞳に片手を被せて優しく閉じてやった。

「ジョナサン……」

「当主よ、あのハイディリアの息子がまだ森におるぞ。今すぐひつつかまえよ。これ以上、この森で野放しにするのは許せぬ！」

そうだそうだと口々に叫ぶ木々達に、感傷に浸っていたルビウスは重い腰を上げて背後を振り返った。

「……わかってる。道を開けてくれ。」

木々達が移動するうるさい音に紛れて、ルビウスが何かを召喚する声が聞こえた。

【黒のヘクトル】

その声の木々の影が、まるで心臓が動き出すように波打ち、次々とルビウスの前に集まった。

【捕まえろ。殺すんじゃないぞ。】

真っ黒な黒龍^{ドラゴン}の顔だけを大きくかたどった黒のヘクトルに命令して、手を振った。ルビウスの命令に大人しく従い、凄まじい速さで木々が道を開けたその広い道を黒い影が、その名残を残して去っていった。

「オリヴィア。」

「…はい。」

見えなくなった姿を見つめながら、呼んだ声に反応したのはいつ間にか姿を表したオリヴィア。

少し離れた場所に、狼の姿で大人しく座っていた。

「リリアンヌとレイチェルを森の出口まで連れて行きなさい。マーサが待ってるはずだから。」

「わかりました。ジョーンは…。ジョナサンはどうしますか？」

「…いや、いい。アレックスに頼むから。」

その応えに小さく頭を下げ、オリヴィアはレイチェルの側へ行って体に乗せた。そのまま側に来ると、促すように鼻面を押しつけてきた。ノロノロと立ち上がって、先に行くオリヴィアの後に続いた。

「リリア。」

知らずに、背を向けたままのルビウスと、ジョナサンを立ち止まっ

て振り返っていた。

オリヴィアが優しく促して、出口に導いた。

一人佇む彼の背中をぼんやり眺めて、視界にこちらを伺うアレックスが見えてから、追い立てられるようにその場を立ち去った。

出口にたどり着くと、心配そうに別荘の前で待っていたマーサ小母さんにレイチェルともに抱きしめられ、別荘の中へと促された。

物が喉を通らない食事は別にして、風呂に無理やり入れられ、元はオリヴィアの部屋だった寝台に二人で入り込んだ時には、随分と遅くなっていた。

次の日、まだ日が昇りきらない頃に玄関から物音が聞こえて目が覚めた。

寝台から起き上がり、肌寒い空気を身につけた。

窓から外を覗けば、うっすらと霧が立ちこめている。そっと窓を離れ、まだ熟睡しているレイチェルの足元を音を立てずに通り過ぎた。

部屋を出て階段の踊場に降り立つと、階下から声を抑えたままではあるが、厳しい言い争いの声が踊場まで聞こえてきた。

「…この子は、まだ未成年ではありませんか！…お願いですから、やめてくださいましっ！ルビウス様っ。」

「じゃあ、あの魔女の判断に任せろと言うのか！？あの魔女なら、ジュリアンにどんな仕打ちをするかわかったもんじゃないぞっ！」

柵の間からそっと覗くと、開け放たれた玄関扉の手前で言い争いをしている二人の姿が見える。

マーサ小母さんは、随分と取り乱して黒服に包むルビウスにすがり

ついていた。ルビウスといえば、いつもは見せない苛ついた様子で、マーサ小母さんを怒鳴りつけているではないか。ただ事ではないその様子に、急いで階段を駆け下りた。

「リリア…。」

「…リアン兄さんをどこに連れて行くの？」

階段を駆け下りてきた気配に気づいたルビウスがこちらを向き、僅かに顔を辛そうに歪めると問には答えず、マーサ小母さんに向きなおった。

「マーサ、爺様に連絡を取って会議に僕の変わりに、出席するように伝えてくれ。僕はすぐに戻れないから。」

「ルビウス様っ！」

簡潔にそう伝えて、マーサ小母さんの声も、向けられる視線も。全てを拒否するかのように背を向けて、彼は外套を翻し、乱暴な魔法で扉を音を立てて閉めた。

その後を、閉められた扉に体重をかけて無理やり開いて、外に飛び出した。

「ルビウスさん、待って！」

外では、黒い布で身動きが取れないジュリアンをルビウスがレムの上に乗せていた。

叫んだ声も無視して、近くにいたアレックスに何やら指示をしてレムの逞しい背中に飛び乗った。

そして引き留めようと駆け出したとの同時に、彼はレムに声をかけ

ると瞬く間にまだ明るくなつたばかりの空に駆け上がった。

「やめとけ。」

空を睨んで、自らも追おうと身構えた背後から、冷たい制止の声が掛けられた。

魔法で背後に移動したのか、いつの間にかアレックスがいる。

彼も、苦々しそうに空を睨んでから、こちらを同じように苦々しそうに睨んだ。

「兄上を追うなんてことは、やめとけ。大人しく屋敷の中に入れ。」

「ルビウスさんからの命令？」

「わかってんなら、いちいち聞かずに大人しく言うことを聞け。」

キツく睨むものの、臆することもなく彼は背を向けて屋敷に歩き出している。

戻りたくなって、しばらくその場で渋っていたが、ふと視界の端に一匹の狼の姿を見つけて目を奪われた。

墨色の華奢な狼は、寂しそうにルビウスが去った空を眺めている。

「…ヴィア姉さん？」

声が聞こえたのか、遠くにいる彼女は不意にこちらに琥珀色の瞳を向けてから、静かに腰を上げ、霧立ち込める森へと帰って行った。

「おい。」

なかなか屋敷へ帰らないことに苛立った様子のアレックスが、突然首根っこを掴み、無理やり引っ張った。

「うっ、何するのっ！私、犬じゃないんだからっ。やめてよ。っ」

「嫌だったら自分でさっさと歩け！ったく、世話が妬ける。」

親切丁寧という言葉を知らないのかと言うほど乱暴な連行にあい、その手から逃れようと暴れた。が、結局別荘に投げ込まれてしまい、外出禁止を言い渡された。それに随分反抗したが、到底かなうわけがない。

沈んだ気分で、起きてきたレイチェルと、朝ご飯が出来るまで窓を眺めるが、霧はいくら経っても晴れなかった。

王都に戻っても、その霧は留まり。

五番弟子のジュリアン・ハイディリアが、師・ルビウス・カインドによって殺害されたという話が耳に届いたのと、やっと霧が晴れたのはほぼ同時であった。

6. 月明かりの無い夜（前書き）

前半はリリアンヌ目線、後半ジョルジオ目線です。
一歩手前ですが、まだ大丈夫…。

6. 月明かりの無い夜

邸の者達はどうに寝静まった真夜中に、一人寝台の中でその真っ暗な闇を眺めていた。

月灯りも無い今宵の夜は、不気味な気配が漂う。

そんな事は気にせず暖かい毛布達は、幸せな夢の中へと誘うが、目を閉じててもなかなか睡魔はやってこない。

ルビウスがジュリアンを抱えてどこかへ消えてから、五日目の夜。ジュリアンがルビウスに殺されたという話をどこからともなく聞いた以外は、全く音沙汰はない。邸の皆はどことなくよそよそしいように思えた。

どうして、いつも何も言ってくれないのか。

なぜ、ジュリアンを殺したのか。

自分はここにいてはいけなかったのではないか。

暖かい毛布に丸まって、そんなことを思っていたとき、静かな邸にほんの小さな音が聞こえたように思っ、瞋っていた目を開いて起き上がった。

ルビウスが帰って来た？

そう確信に似た直感を持って、寝着の上にゆったりとした毛糸の羽織物をはおり、靴を履くのもそこそこに寝台から離れた。そつと部

屋の取っ手を回すと、カチャリと音がしたが扉を開けて廊下を伺えば、誰もいない寂しげな暗黙がある。

――静かに。

全神経を尖らして扉を閉めきると、そっと足早に玄関へ向かう。

「…大丈夫だ。しばらく一人にしてくれ。」

「…しかし。」

階段の手前、うつすらと灯る玄関で、声を潜めて話す男性の音が聞こえて、壁に隠れて恐る恐る伺う。どうやら、帰ったばかりのルビウスと出迎えたジョルジオが話をしているようだ。

「ジョルジオ。」

尚も食い下がるジョルジオに、疲れた様子を隠しもせず厳しい声で咎めた。

「…わかりました。後でお水をお持ちします。」

「ありがとう。」

その言葉で勝敗がついたようで、ため息を交えてジョルジオが折れた。ルビウスのほっとしたような穏やかな声を最後に、会話は終わりを告げた。

「リリアンヌ様？どうなされました？」

静かな邸に扉の閉まる音が聞こえてから、ジョルジオのため息だけがその場にいることを告げていた。彼は振り向いた際に、こちらに

気がついて、手元にある灯りを掲げた。

「いや、その。」

夜遅く起きていることに、あまり良い顔をしないジョルジオは、酷く驚いた顔でこちらを見ている。

話をしていた二人に気を抜いて、知らず知らずの内に身を乗り出していたようだ。

「ルビウスさん、帰って来たんだ。」

あまり良い言い訳が思い付かず、仕方なく思った通りのことを口にした。

「ええ、つい先ほどお戻りに。」

「そう…。」

気まずい沈黙が二人の間に訪れ、ごまかすように西館を見やった。丁度、彼の部屋に灯りがついた頃だった。

ジョルジオも玄関から同じように西館を見やっていたようで、しばらく何やら彼は考え込んで、意を決したようにこちらに向き直った。

「リリアンヌ様に、少しお願いしたい事がございます。」

そう切り出されて、数刻後。

一人、並々と注がれた水差しと飲み物用の容器を片方ずつの手に持って、ルビウスの部屋の前に佇んでいた。

暖かった体温は、すっかり冷えてしまっている。

ジョルジオのお願いというのは、精神的に参っているルビウスに水を持って行ってやってほしいというものだった。

あまりお酒に強くないというルビウス。そんな彼が、精神的に辛い時は度を越えて飲むのだという。

ジョルジオが何度言っても聞かず、飲むのも大概にしろと言ってやって欲しいという。

「そんなこと言われてもなあ。」

ジョルジオが言っても聞かないならば、自分が言っても意味が無いのではないか。

そんなことを先ほどから考えて、扉の前で佇んでいる。両手が塞がっていて扉を叩けないというのもあるが。

そうこうしているうちに、何やら扉の向こうから話声が聞こえてきた。ドスンドスンと歩く音の次には、盛大に目の前の扉が開かれた。

《扉の外に客人だっ！お、なんだ？》

「ひっ、だ、誰？」

目の前に現れたのは、茶褐色の肌に燃えるような赤の髪と深い緑の瞳。盛り上がった筋肉を持つ巨人の鬼であった。

寝癖のような赤髪の中からは、真っ黒な二本の角が闘牛よりも立派に生えている。白い尖った歯を見せながら、にっと笑った鬼はしゃ

らんしゃらんと首や手首、手足についた無数の輪を鳴らして背後を振り返って言った。

《可愛いお嬢さんじゃないか！おい、ルビウス。我が食ってもいいか？》

「：煩いぞ、クラウド。ヘクトル、彼奴を連れていけ。」

《なんだ、つれないな！月灯りの無い夜ぐらい一緒に……。こらっ！ヘクトルやめろ、我はまだ帰りたくないんだっ。》

地を這うようなルビウスの声に負けず、大きな声で喚く鬼に、思わず不愉快そうに眉を潜める。

身体に巻きついた無数の影を拒否しながら、クラウドは窓の向こうにある闇に引き込まれていった。

途端に静かになった部屋に戸惑っていると、暖炉の前に置かれた長椅子に座るルビウスが、こちらを見ないままに声を掛けてきた。

「どうしたんだい？こんな夜中に。」

「えっと……。今のは？」

「鬼神のクラウドと黒の神・ヘクトルだよ。」

「へ、へえ。」

「とにかくお入り。廊下においては身体が冷えてしまう。」

そっと背中を見えない手に押され、部屋に足を進めると背後で扉が

静かに閉まった。

しばらく扉を顔だけ後ろに向けて見つめていたが、静かになった部屋へと向き直った。

「さっきの鬼って、人を食べるの？」

「クロウドかい？まあね、正確にいうと死間近の者にある本来の寿命と肉体を主食にしているんだけど。今日は月が出ていないから、腹が満腹にならないんだろうね。彼が取り込んだ寿命と血肉は、魔法師達に均等に分け与えられるんだよ。大切な役割を担っているけれど、死神の父とも呼ばれる彼だから……。その水は？」

「ルビウスさんが飲んでるから、水を持っていつてくれないかって、ジョルジオが。」

「…ふん、ジョルジオめ。」

相変わらずこちらを見ずに暖炉の火を見つめていたルビウスは、右手に持っている透明な硝子の器に入った、透明な液体と氷を揺らして一気に煽った。

「酔ってるの？」

ジョルジオのやつ、クロウドと飲んでるのを知ってるななどと独り言を呟くルビウスに、半分からかいを含んで尋ねた。

「ん、まあね。あまり強くはないから、飲むのは止めるように姉上やジョルジオに言われたのだけれどね。」

ふーっとため息を零し、肘掛けに体を預けて言った。そんな彼を戸

口の近くで眺めてから、しばらくして、ゆっくりと近いていった。歩いている途中に、暖炉から目を離してたどり着いた先は、長椅子の背もたれに無造作に脱ぎ捨てられた黒い外套。それには、大量に血塗られた紅^{あか}があった。

「こっちにお座り。風邪を引いてしまうよ。」

「…ルビウスさん、それ。」

「…リアン兄さんの血なんだよね。」

沢山の酒の瓶と硝子の器と杯がが並ぶ机に、そつと手元に持っていた水差しを置き、未だ暖炉の火から目を離さない疲れきったルビウスの横顔をしっかりと見つめた。

「…そうだとしたら、君は僕を軽蔑する？」

「そんなこと…。」

「しないと言い切れるかな。魔法師の世界じゃ、師が弟子に直々に処罰を下すのは暗黙の了解だ。師として、禁術を使い、己を忘れた弟子を野放しには出来ない。特に、僕は魔法大臣の職についている。知り合いや肉親を手にかけてるなんて、日常茶飯事なんだよ。」

ジュリアン・ハイデイリアの罪は、禁術とされる死の呪文の使用と実兄、ジョナサンの殺人罪、さらにはマリエダ・コウリースの仲間であったと疑惑を掛けられたためであった。

新しく手元の器に琥珀色の酒を注ぎながら、彼は淡々と言葉を繋い

だ。

「…だからって、殺すなんて！」

何も殺すことはないではないか。

抑えられない怒りで思わず、責めるように叫んでしまった。

ルビウスが悲しそうに揺れる漆黒の瞳をこちらに向けてから、後悔に悩まされた。

「…そうだね。」

消え入りそうな声の後に瞳を逸らした彼が、泣きそうだと思ったのは多分気のせいではないと思う。

突如訪れた沈黙に、気まずくなり、仕方がないので静かにルビウスの隣に腰を下ろした。暖かい暖炉の火に、冷え切っていた体が温まった頃、ルビウスが

おもむろに話し出した。

「…あの子達はね。ハイディリアの子達は、呪いによって長くは生きられないんだ。…ウルエッド戦があった時、彼らのご両親は避難されなかった。あのあたりの住民は、命よりも自分達の農作物が大切だと言って、ほとんどの人がね。運良く、ハイディリア家は命を落とすことは無かったけれど、飛び散った呪い返しの魔法の影響で、副作用が出たんだ。だんだん年を増すにつれて、体の自由が利かなくなっって呼吸困難を訴え、日常生活さえ出来なくなる。ジョナサンは、自分達が長くないと最初から知っていた。だから、彼は僕の弟子になるときに言ったんだ。」

一旦言葉を切ったルビウスは、薪が燃える音にしばし耳を傾けてか

ら、再び口を開いた。

「…最期は、僕の手で楽に殺してくれって。」

薪が一層激しく燃えている様子に目を奪われたまま、ゆっくりとルビウスの方を向いて尋ねた。

「リアン兄さんも？」

「いや、あの子は自分がよく怪我をしている理由さえわかっていなかったから。ジョナサンから、ジュリアンのことも頼むと言われていただけだったよ。」

だから、わざわざジュリアンその手で殺したのか。

「…ごめんなさい。」

「どうして謝るの？」

ルビウスの疲れた顔に焦点をあわせてから、目を伏せて謝った。彼は、何度か酒を口に運んで、何故と首を傾げた。

「酷いこと、言った。」

「まだ、可愛いもんだよ。」

少し笑って、ルビウスは背もたれに身を預けて天井を見やった。さりと顔から滑り落ちた黒の前髪から覗く整った顔に、知らず知らず目を奪われた。

「…なに？」

「な、なんでもっ。私も飲んでみようかなって…。」

伏せていた漆黒の瞳が、突如リリアンヌを向いたことに慌てて、見入っていたことをごまかすように酒の瓶を見た。

「ふっ、君はまだ未成年だろう。成人するまで我慢しなさい。」

目の前にあったお酒が、横から現れた腕に捕らわれていった。それを少し拗ねた目で追い、ルビウスを睨んだ。

「ジョルジオがほどほどにしなさいって言ってたわよ。」

本来の目的をようやく切り出したことに、ルビウスは少し苦笑してこちらを見てから、驚いたように数回瞼を瞬いて顔を背けた。組んだ足の上に肘を乗せて手で顔を覆う彼の頬が、何故かほんのり赤い。

「わかってるさ、ああ。まだ大丈夫だ。…しかし、君はどうして。そんな格好なんかで。酒を煽っている男の部屋に来るなんて、まるで襲って下さいって言ってるようなもんだよ。」

首を傾げて何を言っているのかと考えていると、はっと今の自らの服装を思い出して胸元を見た。

「違う、そんなつもりないもの。」

慌てて、白い首筋が見える胸元の桃色の寝着と朱の羽織り物を掻き合わせて、真っ赤になって叫んだ。

「わかったわかった。だから、早く部屋に戻りなさい。」

器片手に背を向けたルビウスは、そう早口に言うが、どうもその背が寂しそうに見え、一人には出来ないと思った。

「…リリアンヌ？」

去る気配が無い背後を不審に思ったルビウスは、机に酒を置いて振り返った。その瞬間、意を決したように彼の頭を抱きかかえた。

「…何を、しているのかな？」

「慰めてあげようと思って。」

長椅子に膝立ちになり頭を抱かえたため、身動きが取れないルビウスは、大人しく身を預けてきた。そんなルビウスを腕に抱いて、何故こんなことをしているのだろうと、羞恥心でいっぱいだった。

もしかしたら、部屋に充満した嗅いだこともない酒の匂いに酔っているのかもしれない。

「…そんな事を言っではいけないよ。」

「え、なん…。」

不意に顔を上げて視線を合わせたルビウスは、暖炉の火に負けないほどの熱い眼差しを向けて、疑問を唇で塞いで遮った。

目の前にルビウスの顔がいっぱいになって、唇に柔らかな感触が離れていっても、しばらくぼんやりと彼を見つめたままだった。

軽く触れた唇から、微かに苦いお酒の味がして独特の匂いが鼻をつ

いから、ようやくキスをされたのだと認識した。

「…ルビウスさん、酔ってるんでしょ。もう、ふざけるのもいい加減に…。」

「ふざける？ 誰が？ 僕はいつだって…。リリアンヌ、君を。」

瞳を必要以上に瞬いて、乾いた笑い声で彼を非難するが、熱い眼差しを送ったままのルビウスは、腰をぐっと抱き寄せて熱の籠もった言葉を返した。

「っん。ゝっル、ルビウスさ、ん。」

先ほどとは比べものにならないほど、深く長いキスを唇に受けて、戸惑ったように抵抗した。その行動が、彼にとって苛立ったように、頭の後頭部を左手で固定してさらに口づけを深くしてきた。息継ぎさえも許さないその口づけに、息苦しさが限界を迎えてために、彼の胸元を思いつき叩いて抗議した。

それによって、少しだけ口を離してくれ、その隙に暖かい空気を思いきっぱり肺に注ぎ込んだ。そんな休憩が何度があって、暖炉の火と唇を重ねる音が部屋に響き、しばし甘い空気が二人を包んだ。そんな空気に酔いしれて、酸欠と熱さでぼんやりしていた頭は、不意に背中にひんやりとした手が触れて我に返った。

「…いやだっ。」

思うように動かない体の力を振り絞って、ルビウスの拘束を解くと一目散に扉に向かって駆け出した。しかし、後から追ってきたルビウスにあっという間に捕まり、扉に押し付けられてしまった。

「リリアンヌ…っ。」

顔の両側に両手を扉に拘束され、初めて彼が怖いと思った。

恐怖で引きつる表情にも気がつかず、ルビウスは熱にうなされたように、瞼に、頬に、耳に、名を呼びながら口づけを落としていく。

「ひゃっ。いやだ、やめてっ。ルビウスさん…。」

唇が首筋に降り、きつく吸われ、胸元に息がかかった所で泣き声に似た声が部屋に響いた。

「…あ。」

はっと我に返ったようで、瞳を見開いて拘束を解くと、苦悩に似た顔が彼の顔に浮かんた。その顔を正面から睨んで、見つめた。次の瞬間—。

パシンと乾いた音が部屋に響き、ルビウスの左頬が紅く染まった。

「…っ最低！」

震える声を張り上げて、手を上げた右手を胸元に持っていくと背を向けて部屋から逃げ出した—。

深夜だということにお構いなしに階段を駆け降り、渡り廊下を駆けて行っている途中、明かりを手に持ったジョルジオとなぜかフレドリッヒが困惑した顔で本館からやってきていた。

「あれ？リリア、どうし…」

涙をこらえるだけで精一杯だったから、フレドリッヒの問いかけにも答えず、俯いてさっと二人の間を駆け抜けた。

本館の扉を開けて、音を立てて閉めると静かな玄関が迎えてくれた。

「うっ、ひっ。」

溢れ出す涙が途端止まらなくなって、その場にしゃがみこんで声を押し殺して泣いた。

嫌では無かった……。ただ。

―そう、ただ怖かったのだ。

普段見たことも無い、ルビウスのあの獣を見るような瞳が。



「フレドリッヒ様、リリアンヌ様のお側にいらしていただけませんか？」

リリアンヌが走り去った、寒さに包まれる渡り廊下で、啞然と佇むフレドリッヒに静かに告げた。

「ああ。」

戸惑ったまま明かりを受け取って、彼は慌てて本館に踵を返した。フレドリッヒを見送ってから、厳しい顔つきで足早にルビウスの部

屋へと向かう。

「ルビウス様。」

静かな、しかし確実に怒りを含んだその声に、ぼんやりと長椅子にもたれて暖炉の火を眺めていたルビウスはこちらを向かずに口を開いた。

「…何を怒っている。」

「何をと仰いますか。」

執事にしては雑な閉め方で扉を閉めると、厳しい目つきで見やる。

「ご自身で仰れないのでしたら、勝手ながら私が申し上げます。まず、新月の夜はクロウド達と晩酌されるのはおやめくださいと私、口を酸っぱくして申し上げておりました。」

「うん、そうだね。」

「それなのに、ルビウス様は。何ですか？こんなに開けて。」

床と机に転がる空の瓶を呆れたような眺めて、最終的に険しい顔で睨んだ。

「悪かったよ。」

全く反省の色が見えない返事に、眉を釣り上げ長椅子の近くに歩いていく。

「お酒類はしばらく没収させていただきますよ。」

「それはほとんど爺様の酒だよ。」

泥酔していても屁理屈を叩く、相変わらずの当主に少しかだけ苦笑してため息をついた。

「無駄口を叩く余裕がありますか。そうですか、ではもう一つ。リリアンヌ様に何をなさったのですか？泣いておいででしたよ。」

シリウスの小さい頃より、つまり先々代の公爵の代から、この邸で働く。勿論、ルビウスの扱いなど慣れたものだ。

びくりと体を硬直させたまだ年若い当主に、さらに厳しく声をかける。

「ルビウス様、こちらを向いて私の目を見てください。」

そろりとこちらを向いて、二つの色の瞳が合わさった。

「…まさか、手を出されたわけではありませんよね？」

そう口にした途端、大人しかった漆黒の瞳がそわそわと視線を逸れてさまよう。

凶星か…。

ああと、暖炉の火で薄暗く照らされた天井を見上げた。

「…どうしようもないシリウス様に、何故そこだけ似てしまわれたのか。」

「聞こえているよ、ジョルジオ。」

嘆かわしいと呟いたら、少しうんざりとしたルビウスの声が聞こえた。

彼の祖父、シリウスは惚れた亡き妻を寝取ってきたのである。しかし、物分かりの良い彼はそんな事をするとは到底思えない。だから、寝着姿の彼女を心身ともに疲れている彼の元に送り出した。

「…とにかく、今日はもうお休みください。」

はあーと自然に出たため息の後に、疲れた声で繋げた。

「お説教は明日かい？ 恐ろしいね。」

クスクスと笑いながら、再び酒の入った手前の杯を手にとった。

「お飲みになるなら、お水になさってください。」

そのきつい匂いの酒を奪い、水の入った硝子の器を押し付けてぴしやりと言い放つ。

普通なら、当主にそんな態度を取るなど有り得ない事だが、この邸の主人達は、そんなことは大して気にしないのである。だから、怒っているとあからさまにわかるよう、眉を釣り上げて両手を腰に当てた。まるで、母親が小さい子供を叱りつけるように。

「隣でお休みになられるよう、準備をしまっています。それまでに、そのお水を全て飲みきって下さいませ。」

少し間を置いてから、うろたえるルビウスに言い、視線をまだ窓に映る闇に向けた。一瞬、闇がびくりと震えたように見え、それから気を取り直して手を振り、その闇から窓掛けを閉めてルビウスを隠した。

すっぱりと闇が見えなくなった時、落胆する声が小さく聞こえたが、聞こえなかった事にしよう。

まだ減らない水を手に、ぼんやりと座る当主を横目に踵を返して、隣にある寝室に足を踏み入れた。

随分と使われていないその部屋は、幾ら使用人が整えていてもやはり本人が寝るには少し寝心地が悪そうに見える。

小さく呪文を唱えると、窓掛けは勝手に閉まり、ひっそりと佇む暖炉に火が灯った。寝台は慌てたように寝具を整え、近くの照明具は優しい灯りを灯した。

出しっぱなしの書と服に眉を潜めると、慌てて元の位置へと戻り、変わりに寝着が飛び出して来た。見えないほどの埃達を追いついてから、仕上げに寝台に入りやすいよう掛け布団をめくってから、部屋を見渡した。

納得する仕上がりになったところで、再び体を反転させて戻った。

「お休みの準備が出来ました。」

寝室と執務室の間の扉の前で頭を下げ告げた。

「…ありがとうございます。もう少ししたら…。」

「いけません。ただえさえ、月夜が無い夜は身体に負担が増えるのですから、夜更かしはよくございません。それに、ルビウス様。あ

あなたは明日、早く起きてリリアンヌ様に謝らなければなりませんでしょう。」

もう少し起きてると言う言葉をあっさりと蹴って、寢室の扉を開けて促す。

「：闇の力が強くなるそんな夜に、彼女を来させた君にも責任があるんじゃない？」

「何か仰いましたか？」

ちろりと瞳を向けると、彼は慌てて少しになった水を煽って席を立った。

「何でもないよ。ああ、わかったわかった。大人しく寝るよ、だからそんな怖い瞳で睨まないでくれ。」

その怒った目が、母上にそっくりなんだよ。

ブツブツ呟く彼の言葉を小耳に挟んで寢室に誘導し、寢着に着替えしている間にさっさと散らばった酒と杯を片付ける。

水飲んだからか、少し頭が冴えたようだ。

本来ならば、今すぐ謝りに行かせたい所だが、致し方ない。

苦笑いを漏らして、粗方片づいた部屋を見渡した。すると、長椅子の背に無造作に掛けられた外套が目に入った。それを手に、綺麗に畳むと寢室へと向かった。

寢室では寢着に着替え終わったルビウスが、丁度宙を見やって眉に

皺を寄せて難しい事を考えいる途中であった。

「先程、エル・ラービン様がいらっしゃいました。恐らく、会議の伝言かと。後日にしていただくようにお伝えしておきます。後、こちらの外套はお召し物と共にお預かりしておきましょう。」

久しく見なかった若い当主の寝着姿に、小さく安堵を漏らして言った。

まだ若いのに、彼はゆっくり身体を休めることをしない。働き過ぎである。

「僕に仕事に行くと言うのかい？」

そう言った言葉に、あからさまに不愉快な顔でこちらに顔を向けて言った。

「いいえ、そうは言っておりません。お召し物も外套も少し使い物にならないかと。色は落ちても、匂いはなかなか消せませんので。そんなお召し物で魔法師の方々とお会いになられても、あまり良い顔はされないと存じます。すぐに変わりの物をご用意致しますので、ご安心を。」

苦笑をこらえてそう言えば、服を一式差し出し、履いていた靴を掲げて不思議な顔をした。

「…靴もか？」

この人は、いつもこうだ。自分のしてきた事に無頓着で、他人で汚した血だらけの服を着ていても大して気にしない。過去に何度か交

わした会話を追いかけて、答えた。

「はい、お預かり致します。本音を言えば、入浴もお勧め致しますのですが、かなりのお酒を飲んでおられるようなので。明日の朝になさってください。」

「わかった。」

大人しく寝台に潜り込んで丸まった主を見、そっと灯りを消した。

「お休みなさいませ。良い夢を。」

軽くお辞儀をして言ったその言葉に返ってくる返事は無く、穏やかな息づかいがしばらく経って聞こえた。

《ジョルジオ、酷いではないか!》

そっと扉を閉めて廊下に出た先に、巨大な鬼が大層ご立腹な様子で立ちはだかっていた。

「どちらが酷いのでしょうか？ 私には、主に酒を進め、勝手に恋路を眺めていた方が酷いと思いますが。」

静かにと山ほどの洗濯物を片手に、右手の人差し指を口に持って行ってクロウドを見た。

《退屈だったのだよ。》

途端、シュンと大人しくなったクロウドに、優しく問いかけた。

「では、一つお願いを申し上げても？」

その言葉にパツと輝かされた顔を向けられ、苦笑しながら続けた。

「ルビウス様はこんな夜は大層夢見が悪く、良くうなされます。あなたに、夢時ゆめじの門番をお願いしたいのです。」

《我は、夢食いではない。》

内容を聞いて、ちよつと不機嫌になったクラウドに、根気よく話しかける。

「今宵だけです。無防備なルビウス様には、隙をついて様々なモノが寄ってきます。あなたもご存知でしょう？もし、門番を受けて下さるなら、今回のことは私だけの胸に留めておくとお約束いたします。お礼には、美味しいお酒をお渡しいたしましょう。」

その甘い言葉に誘惑された鬼神は、あっさりと承知し、嬉しそうに巨大な身体を揺らしてルビウスの寝室へと入って行った。その時に鳴る腕輪などの金属音は、手を上げた瞬間に消え、邸に再び静かな静寂が訪れた。

階段を降りきり、本館と西館を繋ぐ廊下にある扉の前にたどり着くと、二人の少女が見計らったように現れた。

「…明朝、日が昇ってから若様の部屋に冷たいお水を。今夜は途中に起きられる事はないでしょうから。」

深紅の髪と金色の瞳を持つ瓜二つの片方にそう言って、もう一人に向き直った。

「ソラ、あなたはこの洗濯物を。同じように、明朝までに外套と新しい服を用意なさい。」

全く同じ二人は、少しもズレずに綺麗に頭を下げた。どちらがレミでソラかは、普通の人ならわからないだろう。今説明するならば、左側に立つのが姉のレミ。右側に洗濯物を抱えて立つのが妹のソラだ。

そんな二人の脇を通って、扉を開けて廊下に出た。寒さが増した渡り廊下は、年を取った老人には堪える。

《ジョルジオ。》

気持ち足早に、けれど行きよりは緩やかに歩いていると、真っ暗な闇から声があった。

「ああ、ヘクトルですか。」

黒の神、ヘクトル。彼に仕える神の一人だ。

真っ暗な闇の中、姿を現さずこちらを見つめる視線に、臆することなく見つめ返した。

《何故、あの小娘をルビウスの元にやった？まさか、本当に安らぎにでもなると？》

小馬鹿にしたような声に、体に力が入るのがわかったが、長年学んだ落ち着いた声でそれを打ち切る。

「いいえ？今宵に、リリアンヌ様をルビウス様のお部屋に促したのも、私の計算通りです。まあ、ルビウス様が手を出されるまでは計

算外でしたが。リリアンヌ様も、夜にうろつくと言う意味を身をもって知った事でしょう。」

さらりと言いきってやると、闇の主はほおと少し感心したように笑った。

《カインドの執事は恐ろしいな。》

「ほめ言葉と受け取っておきましょうか。」

《食えぬ奴だ。》

目の前の闇が揺らいた次の瞬間には、ギラリと光る鋭い牙を見せた。厳つい大きな龍の顔が出現した。

月が見えない新月。月が満ちる満月の夜は、魔力や魔法が高まり、術や魔法を使うには最適だが、そんな満月の夜と違い、新月（朔）の日は魔力や魔法が低下する。魔法師達は、魔法が満足に使えなく人によっては全く使えなくなることもある。そんな夜は、闇に住む神や悪魔、死神が力を増す。月明かりが無いことをいいことに、あちこちで暴れるのだ。

反対に、闇に好かれるルビウスは例外で魔力を増し、一人でその尻拭いをする羽目になる。

闇の者を多く従えるルビウスにとって、疲労がピークを迎えるのも自然の成り行きだ。

そんな闇の住人の一人。基本無口で、あまり姿を表さないこの神。今日は月明かりが無く、お酒も入って少々お喋りが進むようだ。

《いつまでこちらにいるのだ？おぬしの体はそろそろ限界ではないのか。》

代々、執事を受け持ってきたターナー家。本来ならば、当主の代が代わるごとに執事も代わる。だが、先々代の当主に頼まれ、シリウスまで受け持った。今では孫にあたるルビウスまで受け持ってしまった。

「有り難くも、クロムウェル様からお言葉を頂きましたので。」

嫡男として、カインドの名を継がなくてはいけなかったルビウスの父、クロムウェル。だけでも、病弱だった彼には到底無理だった。子供を授かったのも奇跡なようなもので、二つの闇を持った長男ルビウスには、クロムウェルよりもさらに期待と責任が重くのし掛かった。手元から奪われ、遠く離された我が子の距離。

神隠しの風蘭に頼むも、やはり抱きしめられない温もりに耐えきれずに、両親はよく口論を繰り返していた。

そんなときに、国王から言い渡されたウルエッド戦のお触れ。猛反対する父、シリウスと妻のメアリーを押し切り、クロムウェルは戦地に就くことを決定した。

『命が尽きるその瞬間まで、彼女の側にいることを誓ったから。』

出立する前日、安らかに眠る子ども達を眺めて顔色の悪い彼がそう言った。

『でもね、ジョルジオ。一つ心残りなのは、残して行くこの子達のことなんだ。』

愛しそうに一人一人の髪を撫でながら、彼は泣きそうな声で告げた。

『大丈夫でございます。ルクシア様は、しっかりしておいでです。後数年すれば、ローリング公爵夫人に相応しい方となりましょう。アレックス様は、少々手が掛かりますが、意志をしっかりと持っておられますから、心配する必要はないと思います。ルビウス様は…、賢いお方です。直にご立派な次期公爵とられますでしょう。』

努めて優しく答えると、俯いたままの彼は小さく頷いた。

『…この子達は、僕がメアリーを選んだことを恨むかな？』

広い寝台にごちゃごちゃになって眠る子ども達を見て、ポツリと呟いた。

『いいえ、そんなことはありません。幼い頃は、まだ理解出来ないかもしれませんが。己に愛する人が出来た時には。きっと、分かってくて下さいますでしょう。』

静かに寝台の近くにいる彼は、堪えきれないように涙した。

『本当は、ルクシアが嫁に行くまで。ルシウスが、公爵を継ぐまで。アレックスが、独り立ちするまで。側で、見守ってやりたかった…。』

父になったとき、先が短い自分の命の限り、幸せな日々をこの子達と過ごすのだと。

思いが溢れて、堪えられきれず涙を流す背中に思わず触れた。

『きっと、クロムウェル様のお気持ちは皆様に伝わっていました。』

側に居られない時は、…私が、クロムウェル様に伝えましょう。皆様の日々を私の目を通し、耳を通し。大きく成長される皆様の全てを。』

『…ジョルジオ。』

涙を零すその瞳を膝を折って、視線を合わせた。

『私に、お言葉を下さいませ。シリウス様が公爵の地を退かれれば、私の任は解かれます。すれば、ルビウス様のお近くには居られなくなります。あなた様の瞳の代わりとなって、皆様を見守ることをお約束いたします。』

『…ルクシアが嫁にいつて、アレックスがこの家を出て行っても？ルシウスが、大切な人を手に入れるまで？』

『はい。』

どれだけ願っても、叶えられない願いを気休めでも。せめて、幼い頃の彼を見てきた者として、聞いてやりたかった。

『…ありがとう、ありがとう。ジョルジオ。』

ほんと、顔を緩めた彼を見て、何故か泣きたくなった。

任期を伸ばす術をかけて、ようやく泣き止んだ。

『さあ、明日に備えてもうお休み下さい。メアリー様が心配なさいます。』

そんなクロムウェルをそつと促して寝台から離れた。

翌日、別れを惜しむ人混みの中、馬車の窓から身を乗り出して、彼はくしゃくしゃにした顔で、何度も何度も。懇願するように同じ言葉を繰り返した。

『…頼むよ。頼むよ、ジョルジオ。あの子達を。ルクシアを、ルシウスを、アレックスを。』

愛しい我が子を。

可愛い可愛い僕とメアリーの子を。

まだ幼い子達を残して行く同じ親の心境を察し、努めて涙を堪えらえた。

『おまかせ下さい、クロムウェル様。メアリー様。このジョルジオ、心身共に御子方に尽くします故。…無事にお戻りになれるのを皆様と共に、心より願っております。』

震えそうになる言葉を抑えて、頭を下げるので精一杯で、彼の最後の顔は見れなかった。

年を取ると、どうも涙もろくなってしまう。

昔を思い出して涙ぐむ姿をヘクトルは、首を傾げて眺めていたが、しばらく経って一言口を開いた。

《それが、おぬしの使命か？》

いつか、心から愛する女性とその子供達に囲まれて、幸せを掴んだルビウスを見届けるのが。

「はい、私の使命でございます。」

きっぱりと言い切った事に笑って、さらに続けた。

《大層な使命なことだ。しかし苦勞するな、おぬしも。まだまだ道のりは遠そうではないか。》

「ええ、まだ遠いかもしれませんが、しかし、ここで投げ出すなどでの外。」

ふわふわと漂う龍の顔を眺めて、一人決意を胸にした。

精一杯応援し、彼の恋を成就させるのだと。

《そうか。まあ、面白そうだから、少し様子を見させて貰おうか。》

「ご自由にどうぞ。」

再び闇の中に溶け込んだ黒い龍は、愉快そうに闇を泳いで去っていった。

自身の命がつきる時、それはルビウスに幸せが訪れた時。

その時には、きつと首を長くして今か今かと待っている二人に、彼らの可愛い子供達の話を持って、会いに行こうではないか。

あの世で仲良く微笑みあっているであろう、クロムウェルとメアリ―の我が姪夫婦に。

そんなことをヘクトルの去った後の闇を見つめて思って、再び本館に向けて足を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3109r/>

魔法使いと七番目の弟子

2011年11月25日16時46分発行